

東学思想と大巡思想の 自生的近代性の比較研究

— 天觀(天觀)・地觀(地觀)・人間觀(人間觀)を中心に —

Comparative Study on Indigenous Modernity
of Donghak Thought and Daesoon Thought

Focusing on the Trinity of Heaven, Earth and Man

指導教授 高南植

大真大學校 大學院 大巡宗學科

崔源赫 | 2024年7月

目次 | Table of Contents

I. 序論

Introduction

II. 自生的(自生的)近代性とリミナリティ

Indigenous Modernity and Liminality

III. 東学思想の自生的近代性と作乱(作亂)のリミナリティ

Donghak: Modernity and Liminality of Disorder

IV. 大巡思想の自生的近代性と治乱(治亂)の再活性化

Daesoon: Modernity and Revitalization of Order

V. 東学思想と大巡思想の自生的近代性比較

A Comparison of the Two Thoughts

VI. 結論

Conclusion

研究の背景および必要性

学術的課題

- 東学思想は主に宗教思想としてのみ研究されてきており、「東学(東學)」という名称に内包された東洋の自生的近代性および哲学的思惟方法論としては未だ十分に照明されていない
- 大巡思想もまた「参東学」を主張したにもかかわらず、東洋の哲学的思惟方法論としての研究が不足している

時代的背景

- 西欧的近代性がマテオ・リッチによって西洋に伝播された東洋文明に起源するという事実が最近再照明されている
- 東洋で近代化の障害要素と指摘された儒教が、西欧では近代性の起源であったことが明らかとなった

現代的意義

- 西欧的近代文明がもたらした核兵器環境問題など人類絶滅の危機に対する代案として、自生的近代性が新たに注目されている
- 西欧の脱近代性(post-modernism)論議が東洋に代案を求める状況において、東学思想と大巡思想の再照明が必要

東学思想と大巡思想の現代的再評価

西洋近代性の東洋的起源の再発見

- ウェーバーは近代性の起源をカルヴァンの救済予定説と主張したが、実際にはマテオ・リッチが伝播した中国の儒教文明から始まった
- 朱謙之、フランク、ホブソンなど東西洋の学者たちが西欧啓蒙主義の東洋的起源を再照明する研究を進行中

オンライン資料の開放と学術的再

評価

- IT技術の発達によりGoogleなどオンラインプラットフォームで西欧近代性の黎明期資料が無料開放
- 隠蔽されていた西洋近代性の東洋的起源が記録物を通じて実証的に明らかにされる

東学・大巡思想の新たな位相

- フランソワ・ジュリアンなど脱近代性理論家たちが西欧近代性の代案を東洋に求める研究を進行
- 近代文明の危機と代案的近代性として、早くから宗教的回帰を強調した東学思想と大巡思想の現代的価値が浮上

研究目的



天観(天観)

天に対する認識



地観(地観)

地に対する認識



人間観(人間観)

人間に対する認識

主要研究目的

- 東学関連思想が東洋の哲学的思惟方法を通じて東西洋を融合した世界観を構築したことを究明
- 。相関的思惟とリミナリティの観点から天観地観人間観の自生的近代性の特徴を分析
- 東学思想と大巡思想の比較を通じて、参東学が有する哲学的思惟方法論としての完成度を検証

期待効果

- 東洋の自生的近代性が近代科学哲学と対等な哲学的思惟方法として価値を再発見。現
- 代社会の危機に対する代案的近代性としての可能性の探索

研究の範囲および方法

研究範囲

- 東学思想と大巡思想の天観(天観)、地観(地観)、人間観(人間観)を中心に自生的近代性を考察。初期東学(水雲の4年間の活動期)を中心に、大巡思想の「参東学」と比較研究

理論的枠組み

- リミナリティ(Liminality):宗教的变化を通過儀礼の中間地帯として説明する
- 理論の適用。再活性化(Revitalization):外部の脅威に対応した伝統の活性化過程の分析
- 相関的思惟(correlative thought):東洋の哲学的思惟方式としてのアプローチ

研究方法

- 細部の研究順序:近代性関連の先行研究分析→自生的近代性の条件究明→天観地観人間観中心の比較分析→結論。文献
- 資料:『東経大全』、『龍潭遺詞』(東学)、『典経』(大巡思想)を中心に分析

研究の理論的基盤



相関的思惟(相關的思惟、Correlative Thinking)

- ◆ 万物の全体をまず見て、その脈絡と関係から部分を理解する東洋の思惟体系
- ◆ 西洋の分析的思惟(Analytic Thought)と異なり、全息的でホリスティック(Holistic)な思惟体系。住所を書く際に
- ◆ 最も遠い国名から書くように、全体から部分へと思考する方式



リミナリティ(Liminality) – 変化の機制

- ◆ ターナー(Victor Turner)が提示した通過儀礼の中間地帯の概念
- ◆ 変化以前と以後との間の境界空間で起こる変形の過程を説明。二分法的な西洋思考と異なり、第三の中間地帯を通じて個人的社会的変化を理解



再活性化理論(Revitalization Movements) – 持続機制

- ◆ ウォレス(Anthony F. C. Wallace)が提示した外部の脅威に対する文化的
- ◆ 対応理論。アイデンティティ危機時に伝統の長所を活用して信念体系
- ◆ を再整備する過程。リミナリティが変化の機制を説明するのに対し、

結論および展望

研究の学術的意義

- 東洋哲学の現代的位相の強化および西欧近代性への代案の提示
- 自生的近代性を通じた東洋思想の独自性と普遍性の再発見

文明の融合可能性

- 東西思维体系の相互補完的結合モデルの提示
- 代替的合理性と倫理性の調和を通じた新たな文明方向の模索

現代社会への適用

- 大観・地観・人間観の統合を通じた環境危機克服の方案の提示
- 東洋の相関的思惟と西洋の分析的思惟の統合可能性

今後の研究方

- 向 東学大巡思想の実践哲学的側面の探究の拡
- 本 現代科学技術文明と東洋思维方法論の創造的融合の研究

「東洋の自生的近代性は現代文明の危機を克服する新たな思惟と実践の体系を提供する」

1

研究の背景および必要性

Research Background and Necessity

目次

- ① 東学思想と大巡思想の紹介
- ② 東洋の自生的近代性概念
- ③ 西洋近代性の東洋起源
- ④ 代替的近代性の重要性
- ⑤
- ⑥ 大巡思想の哲学的思惟方法論
- ⑦ 研究の意義および期待効果
- ⑧ 結論

東学思想と大巡思想の紹介

東学思想(東學思想)

- 崔濟愚(水雲)によって1860年に創始された韓国自生の宗教思想
- 「東学(東學)」という名称は西洋の「西学(西學)」に対応する東洋の自生的
- 近代性の追求。物質中心の西洋近代性に対応する倫理的省察と宗教的
- 哲学を提示

哲学的思惟方法論として東西の思想的融合の模索



大巡思想(大巡思想)

姜甌山(1871-1909)によって体系化された「参東学(參東學)」としての思想体系

- 「作乱(作亂)する者は水雲(水雲)であり、治乱(治亂)する者は甌山(甌山)」という観点からの東学の継承および発展。東学が提起した問題意識を解決し完成しようとする哲学的試み
- 自生的近代性の哲学的思惟方法論をさらに体系化
-

東洋の自生的近代性概念

自生的近代性の定義

西欧の外来思想に基づかず、東洋内部の文化的・哲学的基盤から自体的に発展した近代的思惟構造と世界観

東学と大巡思想における自生的近代性

- 東学の「西学(西學)」と対比される「東学(東學)」
- 概念。儒教的伝統から拡張された新たな思惟体系
- 哲学的思惟方法論としての「学(學)」の再定義。
- 大巡思想の「参東学」としての自生的近代性の体系化

西欧的近代性	東洋的自生的近代性
物質中心文明	人本主義と倫理的省察中心
道具的理性の重視	人間と自然の調和の追求
自然と人間の分離	天地人(天地人)合一思想
個人中心的合理性	共同体的相生と後天開闢

“ 自生的近代性の現代的意義

「東学思想と大巡思想が自生的近代性として様々な方面で研究されてきたが、既存の研究では「東学」という名に前提された東洋の哲学的思惟方法論、すなわち東洋的・韓国的哲学思惟方法論に関する研究が不足していた」

西洋近代性の東洋起源

西欧近代性の再発見

マテオ・リッチ(1552-1610)が東洋文明を西洋に伝播



儒教的倫理体系と思考方式が西欧啓蒙主義に影響



IT技術の発達により西欧近代性の東洋的起源が再照明される

主要研究者たち

東洋圏の学者

- ◆ 朱謙之(朱謙之) – 『中国が作ったヨーロッパの近代』 黄泰淵 – 『儒教的近代の一般理論』
- ◆ 趙惠仁、全洪奭、李寧宰、李東熙など

西洋圏の学者

- ◆ フランク(Andre Gunder Frank) – 『リオリエント』
- ◆ ホブソン(John Hobson) – 『西欧文明は東洋から始まった』
- ◆ クリール(Herlee G. Creel)、ライヒヴァイン(Adolf Reichwein)など

「東洋では近代化の障害要素と指摘された儒教が、むしろ西欧では近代性の起源であった」

代替的近代性の重要性

西欧近代文明の危機

- ⚠ 核兵器開発と拡散による人類絶滅の危機。環
- 🌍 境汚染と気候変動による地球的危機。物質中
- 🏢 心の近代性と技術発展の不均衡。共同体意識
- 👥 の弱体化と倫理的省察の不在

「現代の思想家たちは代案的近代性を倫理的省察と宗教的回帰に求めている」

東学大巡思想の代替的近代性

- ⚖ 物質と精神の調和的世界観の提示。人
- ♥ 間と自然が共存する倫理的価値観。東
- 🔄 西洋思想の融合と相互補完的アプロー
- 👤 チ。宗教的省察に基づく近代性の再構
成

「脱近代性の論議によって代案的近代性を準備してきたポストモダニズムの思想家たちもまた、近代性の代案を自生的近代性と同様に倫理的省察と宗教的回帰に求めている」

東学大巡思想の哲学的思惟方法論

東西融合的思惟

- ◆ 東道西器論(東道西器論):東洋の道と西洋の技術の調和。中
- ◆ 体西用論(中體西用論):東洋の価値を中心に西洋の方法を活
- ◆ 用。西学に対応する自生的近代性としての「東学(東學)」

東アジア的論理体系

- ◆ 陰陽五行(陰陽五行)に基づく思惟体系
- ◆ 相関的思惟(correlative thinking)の特性
- ◆ 西洋科学の線形的因果関係と異なる多重因果関係の体系

学(學)の意味の拡張

- ◆ 宗教を「学(學)」として理解する東アジア的特
- ◆ 性。性理学で提示された「学」の総体的思惟体
- ◆ 系の継承。心(心)の問題を論じつつも現実的問
- ◆ 題解決を志向。東学の修養論的側面と韓国的人文学のアイデンティティ

科学哲学的意義

- ◆ バシュラール、ラカン、フーコーなど現代科学哲学との
- ◆ 接点。地水火風(地水火風)のような伝統的科学観の再評
- ◆ 価。認識論的断絶(Epistemological Break)とパラダイム概念。西洋科学観の限界を補完する代案的思惟体系

研究の意義および結論

研究の意義

- 東学大巡思想の哲学的思惟方法論が現代の学問に寄与しうる可能性の発見。
- 西欧中心の近代性を超える代案的近代性模索の土台構築
- 東西洋哲学の対話と相互理解のための方法論的基盤の提供
- 。韓国の人文学と哲学の世界化のための学問的基礎の準備

結論

東学思想と大巡思想に込められた自生的近代性と哲学的思惟方法論は、今日物質中心の西欧近代文明がもたらした地球的危機に対する重要な洞察を提供する。

本研究は哲学的実践的意義を共に照明することで、未来の代案文明構築において韓国思想が寄与しうる可能性を提示する。特に「学(學)」の本来の意味を蘇らせ、現代学問と人類文明の方向性に新たな視角を提供することが期待される。

2

研究の目的と範囲

Research Objectives and Scope

研究目的および背景

- 本研究は「東学」関連思想が東洋の哲学的思惟方法を通じて東西洋を融合した天観・地観・人間観を構築したことを明らかにしようとする
- 東学思想と大巡思想の比較を通じて、相生的(相生的)天界観・地界観・人界観がどのように導出されたかを分析
- 西洋近代性に対する代案としての自生的近代性の樹立過程と特徴を考察
- 東学思想と大巡思想に現れる東洋的思惟体系の哲学的構造と論理的整合性の再評価

核心概念定義

- **相関的思惟(correlative thought)**

万物の全体をまず見て、脈絡と関係から部分を見る東洋のホリスティックな思惟体系

- **リミナリティ (Liminality)**

通過儀礼の中間地帯として、変化以前と以後の間の第三の領域を説明する理論

- **再活性化(Revitalization Movements)**

外部の脅威に対して伝統を活用した対応過程の変化と維持の機制を説明する理論

研究範囲および方法論

- 東西洋思惟体系の比較相関的思惟(相関的 思惟)と分析的思惟(analytic thought)の対比
- 研究範囲:東学思想と大巡思想の天観(天觀)・地観(地觀)・人間観を中心に自生的近代性を追跡
- 研究方法:文献分析および先行研究の考察、リミナリティ(Liminality)と再活性化(Revitalization)理論の適用
- 伝統的な天観・地観・人間観の近代的変化およびその原理を両思想間で相互比較

研究構造概要

- I. 先行研究分析
- I. 近代性と自生的近代性の概念的区分、理論の提示
- I. 東学思想の天観地観人間観の分析
- IV. 大巡思想の天観地観人間観の分析
- V. 両思想の比較および総合
- VI. 結論および研究の意義

東学思想の天観地観人間観

1. 侍天主的(侍天主的)天観

- ・ 東洋の同化的(同化的)天観と西洋の形相的(形相的)天観の融合
- ・ 天を奉る概念で神聖と人間の新たな関係を樹立

2. 造化定(造化定)的地観

- ・ 東洋の凝縮的(凝縮的)地観と西洋の質料的(質料的)地観の統合
- ・ 自然の造化を定める概念を通じた近代的自然観の提示

3. 永世不忘(永世不忘)の人間観

- ・ 東洋の接化的(接化的)人間観と西洋の成長論的人間観の結合
- ・ 永遠に忘れない歴史意識と近代的人間主体の確立

大巡思想の天觀地觀人間觀

- ・ 人身降世の天界觀-上帝が直接人間の身をもって降世されることで天地人三界を統合する観点
- ・ 天地誠敬信の地界觀-天地が天地神明の誠(誠)と敬(敬)と信(信)によって発生し維持されるという世界觀
- ・ 成事在人の人界觀-事の成就是人にかかっているという人間主体性中心の世界觀
- ・ 参東学としての特性-東学思想で提示された用語を根本的に再定義補完し、東洋の哲学的思惟方法論により忠実な体系を構築

研究の意義および展望

- ・ 自生的近代性の確立としての「東学」に対する本質的理解の可能性を提示
- ・ 東西洋思惟方法論の融合を通じた相生的(相生的)世界観構築の意義
- ・ 現代文明の危機解決のための代替的近代性モデルとしての価値の発掘
- ・ 東学思想と大巡思想の天観・地観・人間観に内在する東洋哲学の現代的適用可能性の模索

3

先行研究分析

Analysis of Prior Research

目次

1. 研究概観
2. 研究分野別分析:民衆運動
3. 研究分野別分析:宗教思想
4. 研究分野別分析:哲学的思惟方法
5. 主要研究者別観点(1)
6. 主要研究者別観点(2)
7. 東学思想と大巡思想の比較研究
8. 相関的思惟研究
9. 共時性研究とフラクタル科学
10. 東学思想研究の未進点
11. 総合および議論
12. 結論および今後の課題

研究概観

- 東学思想・大巡思想に関する先行研究は1,000編以上の論文で発展
- 主な議論: 「実学」から「東学」へ、自生的近代性の哲学的・宗教的・社会的含意の探求
- 研究領域: 民衆運動、宗教思想、哲学的思惟方法として区分

民衆運動分野の先行研究

- 東学民衆運動・東学農民革命など実際の社会運動の展開史の分析
- 方法論:社会科学的方法アプローチ、歴史的文脈の強調
- 主要研究の焦点:
 - 民衆の霊性的変化と意識構造の分析
 - 社会構造の変化と歴史的意義の照明
 - 宗教運動から社会運動への拡張過程

宗教思想分野の先行研究

- 東学と大巡の宗教思想比較研究の活性化
- 宗教思想的意義を探索する研究者たち
 - 張秉吉:民衆靈性、天地変化の原理、神明観
 - 鄭鎮弘:テオス(Theos)としての東学、東学を韓国宗教史の流れの中に位置付ける
 - 尹以欽:最高神形態、鄭鑑録の变革的世界観の継承
- 大巡思想の解冤相生:脱近代的代替的近代性として解釈

哲学的思惟方法分野の先行研究

- 過程哲学、相関的思惟、同時性、フラクタル科学など東西融合的分析の登場
- 主要学者:
 - 金敬宰(過程神学)－東学の神観を汎在神論として解釈
 - 金相日(新西学)－ハーツホーン、ジョン・カブの過程神学の適用
 - 朴宰周(周易的分析)－周易思想の過程哲学的分析
- 東学と大巡の哲学的近代性へのアプローチ:東洋伝統思想の思惟方法と現代科学哲学の接点の探索

主要研究者別観点(1)

東学思想と大巡思想を深く解釈した研究者たち

- ・ **張秉吉: 民衆靈性、天地変化論**

- 東学思想と大巡思想は基層民衆の靈性的世界観として理解
- 大巡思想では神明観、人間観、価値観などの総体的変化を伴う

- ・ **鄭鎮弘: 「テオス(Theos)」概念、東学の近代性の強調**

- 韓国宗教史をミメーシス(道教)、ミュートス(仏教)、ロゴス(儒教)、テオス(東学)として整理
- 東学は短い出現期間ではあったが、テオス(Theos)の始まりという重要な意味を持つ

- ・ **尹以欽、崔鍾成鄭鑑録新宗教との関連**

- 尹以欽:東学は『鄭鑑録』の変革的世界観を共有し、以後の新宗教の標本

崔鍾成:東学は「テオプラクシム(Theomachy)」という様式の中にテオス(神)を

主要研究者別観点②

- **姜敦求** 『正易』と韓国新宗教の差別性を強調、特に大巡思想において韓国的特徴を良く表現
- **盧吉明** 脱近代性と現代的現象としての大巡の解冤相生思想の研究、西洋近代性の危機に対する代案的近代性と評価 へ
- **金洪喆** 金山寺と真表律師を中心とする百済弥勒信仰と東学大巡思想の地理的関連性の研究
- **ドン・ベイカー** 韓国人の靈性(靈性)を成す神(神)と道(道)の結合の観点から東学関連思想を解釈
- **柳東植** 風流(風流)神学を提示、韓国民間信仰の三大主流と東学大巡思想の関連性を探求

東学思想と大巡思想の比較研究

- 比較研究の核心的争点および代表的学者
 - 金芝河:政治的近代性(東学)vs 文化的近代性(大巡)
 - 金鐸:用語の比較および人間中心主義的アプローチ

東学思想

→ 政治的近代性、組織的
革命
→ 動世開闢(動世開闢)追
求

大巡思想

→ 文化的近代性、日常的
実践
→ 靖世開闢(靖世開闢)志
向

- 両思想の相關的思惟および自生的/脱近代性の解釈の
試み

相關的思惟研究

- 相關的思惟:東洋傳統思想の核心、東學と大巡の解釈で注目される概念
- 儒教、道教、フラクタル科学にまで連結される広範な解釈枠
- 個別思想研究には適用されたが、両思想の比較研究には不足
- 主要研究者:

金亨孝

李昌一

郭信煥

鄭友鎮

朴正鎮

金氣

白承鍾

李奉浩

金白鉉

共時性研究とフラクタル科学

- 同時性:宗教と科学の統合的アプローチ
 - フラクタル科学、永遠哲学を通じた東西融合近代性の解釈
 - 全体が部分の中に反復されて現れるフラクタルパターンの研究
- 主要研究者:
 - 許薰:「永遠哲学(Perennial Philosophy)」を通じた大巡思想の展望
 - 朴炳訓:東学の降筆(降筆)研究を通じた共時性事例の発掘
- 国際科学と宗教学会(International Society for Science & Religion)を通じた持続的研究の展開

結論および今後の課題

- 東学思想と大巡思想研究の現況総合
 - 自生的近代性、相関的思惟、リミナリティなど主要キーワードの整理
 - パラダイム変化、以降の追加研究および方法論的拡張の必要性を提言
-

研究の方向性

- 東西学問の統合的アプローチによる韓国近代性の再解釈
- 現代の社会問題解決のための実践的含意の導出

Chapter II

自生的(自生的)近代性とリミナリティ

Indigenous Modernity and Liminality

目次

1. 近代性の概念と定義
2. 西欧近代性の特徴
3. 西欧近代性の限界
4. 脱近代性と代替的近代性
5. 多重の近代性と統摄
6. 東洋の自生的近代性
7. 東学思想の自生的近代性
8. 大巡思想の自生的近代性
9. 西欧近代性の東洋的起源
10. 比較:西欧と東洋の近代性
11. リミナリティ概念と思想的含意
- 12. 結論および
示唆点**

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)は理性と科学、資本、国家の結合を通じて登場した新たな生活様式であり、中世以降人類が発見した普遍的価値である。

科学技術を世界認識の土台とし、資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態と規定される。

主要概念

合理化

科学技術

国家主義

資本主義

近代性の語源である「mode」は「今、ここ」を意味し、これは近代と脱近代の意味を同時に内包しうる。

西欧近代性の特徴

ウェーバーは近代性を「全社会の合理化(rationalization)」に圧縮して説明した

ヴェーバーの近代性3要素

- 合理的資本主義(rational capitalism)
- 合理的な法-行政体系 / 法治国家 (rational legal-administrative systems)
- 合理的な社会分化 (rational social differentiation)

西欧近代性の主要な特徴

理性中心主義

合理性の原則

真理の絶対性

科学的世界観

世俗化

デカルトの「我思う、ゆえに我あり(Cogito, ergo sum)」から由来した方法論的懐疑と理性中心主義が西欧近代性の認識論的土台を形成する

西欧近代性の限界

手綱を離れた欲望の結果として、近代は人類を前代未聞の絶滅の危機に直面させ、近代に対する批判理論である脱近代性(post-modernism)理論が大いに流行するようになる

脱近代主義者の批判

- 合理性の問題デカルトの「我思う、ゆえに我あり」に代表される理性中心主義が近代性の核心問題。ナルシシズム
- 的同一者:イデアや神を否定し、我からすべての法則を再定立するナルシシズム的近代性
- 他者の排除合理性の名のもとに他者を排除し疎外させる近代的思考

「他人は地獄である (*L'enfer, c'est les autres*)」

—ジャンポールサルトル(*Jean-Paul Sartre*)

ポストモダニズム登場の背景

1968年5月のフランス学生運動を契機に実存主義と構造主義の論争が始まり、以降ポスト構造主義(post-structuralism)へと発展して今日の現代哲学の巨大な流れを形成

脱近代性と代替的近代性の議論

脱近代性(Post-modernity)は近代性の批判とその限界を克服しようとする多様な代案模索の流れであり、西欧近代性をもたらした問題を認識し解決策を模索する思潮である

省察的近代性

ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)が提示した概念で、近代化の反省と省察を通じた近代性の再構成を主張

液状近代

ジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman)の理論で、現代社会の不確実性と流動性を特徴とする近代性

多重の近代性

アイゼンシュタットらが主張した概念で、地域的・文化的多様性に基づく異なる近代性の共存を認定

代替的近代性

西欧モデルを超えて、東洋の自生的近代性など多様な文明圏の独自の近代化経路に注目

主要特徴

近代性の限界の克服

地域的多様性の認定

省察と自己批判

文化相対主義

多重近代性と統攝理論

多重近代性(multiple modernity)は西欧以外の地域における近代性の発現を認定し、各社会が自体的に発展させた近代性の多様性を強調する概念



代表的学者

アイゼンシュタット(S. N. Eisenstadt)、ウィトロック(B. Wittrock)、アナソン(J. P. Amason)など比較歴史社会学者たち

統攝(統攝)理論

デカルト式合理性中心の西欧近代性に対する代案モデルとして、聖(聖)と俗(俗)の境界と関係の再配置を通じた近代性の説明

統攝1 軸の時代以降、聖(聖)が俗(俗)を統攝

統攝2 近代性は俗(俗)が聖(聖)を統攝する転換

統攝モデルは西欧の近代性(ウェーバーの宗教改革の事例)と東洋の近代性(宋代の性理学)を共に説明できる代案的理論

東洋の自生的近代性

自生的近代性(Autogenous Modernity)は我々の伝統に内在する近代的要素と、西洋の近代性に対応して我々の伝統を活かした独自の近代性を意味する

自生的近代性の主要な特徴

- ① 相関的思惟西洋の二分法的思考と異なり、世界のすべての要素が相互連結された関係の中で調和を成すという思惟方式
- ② リミナリティ聖(聖)と俗(俗)の境界において、省察的にこれを超えようとする試み
- ③ 内在的發展西欧の影響以前にも、東洋社会内部で自体的な近代化の過程が存在していた

東洋的近代性の事例

東学の民族主義

大巡思想の解冤相生

宋代の性理学

日本の京都学
派

中国汪暉の研究

東学と大巡思想は単なる西欧文明への抵抗ではなく、東洋の伝統と西洋の近代性を創造的に統合する独自の近代思想である

東学思想の自生的近代性

東学は壬辰倭乱以降の朝鮮における「全国民両班化」思潮の決定版であり、韓国の国民国家概念が初めて形成された思想的土台である

東学の自生的近代性の特徴

- 内在的思惟「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という東洋思想の内在性の
- 強調。相関的思惟とリミナリティ、聖(聖)と俗(俗)の境界における創造的緊張関係の形成
- 宗教改革との類似性、西欧近代性の嚆矢である宗教改革との構造的類似性の共有

「東学の「再開闢」という表現は西欧近代性に対する東洋的起源を間接的に主張したものである」

東学と国民国家の形成

民族主義運動

民心=天心

万民平等

社会変革

東学は近代国家の出発とともに近代に対する批判的思惟までを同時に提示することで、近代性と脱近代性を包括する独特な自生的近代性の事例を示す

大巡思想が提示した近代性

大巡思想は120数年前の当時、西欧近代性の限界を予見し、東西洋思想を統合した代案的近代性を提示した

解冤相生(解冤相生)

相克(相克)に支配される怨恨関係を解消し、相生(相生)の道(道)を実現する
大巡思想の核心原理

怨恨の解消

相互共存

調和ある関係

東西融合的アップ

ローチ

西欧の合理性と東洋の道徳性を統合し均衡のとれた近代性を追求

合理性と霊性

聖(聖)と俗(俗)の調和

東西思想の統攝

大巡思想が予見した近代性の危機と代案

- 西欧式近代性の物質主義が招来する人類絶滅の危機を予見
- 東西文明の調和ある相生が新たな近代性の代案であることを提示
- 省察的近代性と類似する概念を既に120年余りに提示

「大巡思想が東西洋思想を総合して提示した近代性概念は、今になって現代危機克服の代案として注目され始めている」

西欧近代性の東洋的起源

最近の研究は、西欧近代性が東洋、特に中国の影響を受けたという事実を明らかにしており、マテオ・リッチ以降ヨーロッパの「中国熱風」が西欧啓蒙主義の発展に重要な影響を及ぼした

啓蒙主義思想家たちの東洋思想への影響

ヴォルテール	中国の宗教なき道德性を高く評価し、ヨーロッパの宗教的独断主義批判に活用
アダム・スミス	「見えざる手(<i>invisible hand</i>)」の概念が東洋思想、特に中国の自然秩序の概念からインスピレーションを受けた
ルソー	「天賦人権説(<i>Natural Right</i>)」が中国の文明と人性論(人性論)から着想されて発展

研究学者たち

トマス・メッツガー(Thomas A. Metzger)	フランク(Ande Gunder Frank)	ホブソン(John M. Hobson)	ジュリアン(François Julien)	ウッドサイド(Alexander Woodside)
------------------------------	-------------------------	----------------------	------------------------	----------------------------

主な示唆点

- ヨーロッパ物神主義の克服
- 知識の相互交流
- 隠蔽された歴史の復元
- 多重的近代性の認定

結論および示唆点

自生的近代性の再発見

近代性研究は「今、ここ」で絶えざる省察が必要であり、西欧中心の近代性を超えた代案的視角の拡張が重要である

東洋思想の現代的含意

東学、大巡思想のような東洋の自生的近代性は単純な歴史的遺物ではなく、現代社会の問題に対する省察的代案を提示する

融合と新たなパラダイム

西欧と東洋思想の統攝とリミナリティ概念を通じて、近代性の肯定的側面は維持しつつ限界を克服する新たな社会パラダイムの模索が可能である

「近代性を超えた新たな
近代性へ」

1

近代性と自生的近代性

Modernity and Indigenous Modernity

目次

- 1 近代性の概念と定義
- 2 近代性の成果と限界
- 3 脱近代性の登場
- 4 中世-現代-脱現代の比較表
- 5 多重代替的近代性
- 6 西欧近代性の東洋的起源
- 7 自生的近代性の概念
- 8 東学思想と自生的近代性
- 9 大巡思想と解冤相生
- 10 結論および示唆点

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)は科学技術を世界認識の土台とし、資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態である。

ヴェーバーの合理化理論

ウェーバーは近代性を「全社会の合理化」と定義し、次のように細分化した:

- 合理的資本主義
- 合理的法-行政体系(法治国家)合
- 理的社会分化

近代性の主要な特徴

- 理性と科学が支配する世界観
- 合理性の原則と科学的根拠に基づく
- 人間中心の価値体系の確立
- 真理の絶対性と普遍性の追求

近代性の成果と限界

近代の成果

- 物質的豊かさ: 過去の皇帝のような物質的豊かさの実現
- 寿命延長: 30年から80年まで平均寿命の延長
- 自然克服: 自然と餓死の物質的恐怖からの解放
- 合理的体系: 法治国家、民主主義など合理的制度の定着

「百万年を超える人類進化の歴史の中で、近代は初めて人類を自然と餓死という物質の恐怖から脱却させ...一般市民が過去の皇帝のような物質的豊かさを享受するようになった前無後無の時期であった。」

近代の限界と危機

- 欲望の過剰: 「手綱が解けた欲望」による問題の発生
- グローバル化した危機: 気候変動、核脅威など人類存続の脅威
- 合理性の逆説: 合理性がかえって不合理な状況を招来
- 人間疎外: 科学技術と資本に従属した人間の疎外

「近代は再び人類を前代未聞の絶滅の危機に直面させ、近代に対する批判理論である脱近代性(post-modernism)理論が大いに流行するようになった。」

中世-現代-脱現代の比較

区分	中世	現代(近代)	脱現代(脱近代)
上部構造	神 中心	人間中心	生態論的パラダイム
神聖/権威	神聖の支配	理性と合理性の原則	理性中心主義の解体
真理観	神が真理	真理の絶対性と普遍性	真理の相対性、不可知性
科学	迷信と呪術	科学	科学(的真理)の不確定性
芸術観	善あるいは神が美	芸術の世俗化と自己目的性	芸術の異種性、混種性と解体
主体観	神に従属した自我	主体	相互主体性
世界観	生の空間	現実	シミュレーション
中心	ローマと中国中心主義	ヨーロッパ中心主義	グローバル化と地域化
疎通媒体	中心の文字	国家の文字	イメージ
社会体制	封建体制 前産業社会	資本制 産業社会	後期資本制 脱産業社会

文書<表1>中世現代脱現代の概括内容に基づく

多重近代性と代替的近代性

多重近代性(Multiple Modernity)

- 近代性は西欧だけの産物ではなく、各地域と文明圏ごとに多様な形態で発現
- 1998年学術誌『Daedalus』「early modernities」特集号で体系化
- アイゼンシュタット、ウィットロック、アルナソンなど比較歴史社会学者たちの寄与

重層近代性(Multilayered Modernities)

近代性の発展段階:

- 原型近代性(proto modernity) – 西欧的近代性以前
- 西欧的近代性(Western modernity)
- 植民–被植民近代性(colonizing–colonized modernity)
- 地球近代性(global modernity) – 現在

代替的近代性の特徴

- 文化理論、文芸–政治批評、人類学など多様な領域で提起
- 西欧近代性の合理主義的限界を克服しようとする試み
- 統攝(統攝)モデル–聖(聖)と俗(俗)の境界の転換
- 「統攝1」:聖(聖)が俗(俗)を統攝
- 「統攝2」:俗(俗)が聖(聖)を統攝

「ヨーロッパ物神主義(fetishism of European modernity)は今日代案的近代性の構築に大きな障害となる。」

代替的近代性の事例

- 中国宋の性理学に基づく近代的発展
- 日本の京都学派(京都學派)の近代性理論
- 韓国の東学思想と大巡思想

西欧近代性の東洋的起源

最近の研究によれば、西欧近代性の多くの概念が東洋思想から影響を受けたり借用されたという事実が明らかにされている。

東西交流の核心的人物

マテオ・リッチ(1552-1610)

東洋の文明神と道通神を西洋に移動させた人物として、儒教経典をラテン語に翻訳しヨーロッパに伝播

ヴォルテール(1694-1778)

中国思想に魅了され、儒教的政治体制をヨーロッパのモデルとして提示、儒教の道德哲学を賞賛

近代西欧思想への影響

ルソー(1712-1778)

天賦人權説(Natural Right)が当時中国で研究されていた概念から影響を受けた

アダム・スミス(1723-1790)

「見えざる手(*invisible hand*)」概念もまた、東洋思想から着想して開発されたものとして研究される

東洋が西欧近代性に及ぼした影響

- ・啓蒙主義期のヨーロッパの「中国熱風」－儒教思想が宗教戦争で分裂したヨーロッパに代案を提示
- ・科举制のような能力主義制度－身分ではなく能力中心の社会秩序モデル
- ・世俗化された合理的伝統－宗教なしにも道德的な中国社会がヨーロッパに投じた話題
- ・西洋が東洋を前近代的と評価したのは、植民地支配正当化の過程で始まった

自生的近代性の概念

自生的近代性(Autogenous Modernity)とは、我々の伝統に近代性があり、西洋の近代性に対して我々の伝統を活かした近代性があったという概念である。

自生的近代性の特徴

- 西欧の模倣ではなく伝統内部での発展
- 同時に近代性と脱近代性の特性を含む
- 圧縮的に近代と脱近代を構築
- 相関的思惟とリミナリティの強
- 調 西欧外部の「外の思惟」の活用

自生的近代性の事例

東学思想

「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という内在的超越性思想

大巡思想

東西洋思想を総合した解冤相生の近代性概念、人類絶滅の危機の予見

京都学派と汪暉

日本と中国の自生的近代性の試み

「西洋で求める脱近代性より、西欧以外の地域に現れる自生的近代性が代案的近代性としてより適合しうる。」

東学思想と自生的近代性

東学は朝鮮後期に崔濟愚が創始した思想で、「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という思想に基づく東洋の自生的近代性を代表する。

東学の哲学的意味

- 国民国家概念の初登場
- 東洋内在性思想の実現
- 韓国の自生的近代性の発現
- 単なる抵抗運動ではなく哲学的・文明史的革新

相関的思惟の特徴

- 全体的、生成的論理の重視
- 西洋の分析的思惟との対比
- 集団主義、共感の倫理的基盤
- リミナリティ(境界越え)を通じた変革

東学の近代性の特性

東学は西欧的近代性と異なり、伝統内部から自生的に発生した近代性であり、西欧近代性と脱近代性の特性を同時に有する。これは韓国の歴史的文化的脈絡から形成された独特な近代性モデルを提示する。

結論および示唆点

自生的近代性の現代的意義

西欧中心の近代性がもたらした文明的危機の状況において、東学大巡思想が提示する自生的近代性は韓国思想の独創的寄与であり、地球的問題解決の代案となりうる。

主な示唆点

- 1 近代性概念の再定立
西欧中心の合理性概念を超え、東西洋統合的視角から近代性を再解釈
- 2 相関的思惟の価値
分析的思惟から脱し、全体論的で関係的な思惟方式の復権
- 3 聖(聖)と俗(俗)の統攝
世俗化と宗教化の新たな均衡を通じた社会的文化的解法の提示
- 4 東西文明の融合
東学と大巡思想が提示する東西思想の創意的融合可能性
- 5 解冤相生の実践的価値
葛藤と対立を超えた和解と調和の文明論的ビジョンの提供
- 6 今後の研究課題
自生的近代性の現代的適用方案と世界史的位置の樹立

「東学思想と大巡思想が提示した自生的近代性は、西欧中心の近代性の限界を超え、東西洋思想の長所を統合する代案的文明モデルとして再評価されるべきである。」



近代性と聖・俗の統攝(統攝)

Modernity and the Encompassment of Sacred and Secular

目次

- 1. 近代性の概念と定義
- 2. 近代化・近代性・モダニズムの区分
- 3. 脱近代性理論と批判
- 4. ウェーバーと合理性中心の近代性
- 5. 統攝理論と俗の関係
- 6. 多重的近代性論
- 7. 代替的近代性論
- 8. 自生的近代性と東学思想
- 9. 大巡思想と近代性
- 10. 現代の危機と近代性の再照明
- 11. 結論:東西の融合と統攝
- 12. 参考文献および示唆点

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)とは、人類を暗闇の桎梏から脱出させ理性の力を取り戻させた特性として、東西洋を通じて文明の象徴として崇拝されてきた概念である。

科学技術を世界認識の土台とし、それに資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態を近代性と規定することができる。

近代性は長い人類史の試行錯誤を通じて人類が発見した普遍的価値であり、これにより「近代性」は世界が共通して志向するものとなった。

近代化・近代性・モダニズムの区分

近代化(modernisation)

産業革命およびその影響に関連する一連の技術的・経済的・政治的発展を意味。例: 産業革命、都市化、市場経済の拡大、国民国家の形成

近代性(modernity)

近代化の結果として現れた社会的条件と経験の方式

例: 理性と合理性の重視、個人主義、世俗化、伝統と権威の弱化

モダニズム(modernism)

近代性の特徴を芸術・文学など文化領域で表現した思潮。例:

伝統と形式の解体、実験的芸術技法、自我表現の重視

脱近代性理論と批判

脱近代性(post-modernism)理論は近代性に対する批判理論として、手綱を離れた欲望の結果として人類が前代未聞の絶滅の危機に直面したという認識から出発する。

脱近代論者たちの主要な批判

- デカルト式合理性の還元主義的性格の批判
- 理性中心主義と同一者としての近代性問題
- 他者を排除する近代的思惟方式
- 絶対的真理と普遍性への懐疑

代替的提案

- 他者を受容する相互関係的合理性
- 生成的、過程的、解体的思惟方式
- 真理の相対性と多元性の認定
- ミクロな権力関係および言説分析

主な思想家

ニーチェ (1844-1900)

フーコー (1926-1984)

デリダ (1930-2004)

ウェーバーと合理性中心の近代性

マックス・ウェーバー(Max Weber)は近代性の核心を「全社会の合理化」に圧縮して説明した。

ウェーバーが定義した近代性の3大要素:

- 合理的資本主義(Rational Capitalism)
- 合理的な法-行政体系(Rational Legal-Administrative System)
- 合理的な社会分化(Rational Social Differentiation)

ウェーバーの『宗教社会学論叢』で提示された合理性は近代性の核心概念として位置付けられた。

脱近代論者たちの合理性批判:

- デカルト的理性中心主義の限界の指摘
- 近代性の合理性が他者を排除する同一者中心の世界観を形成。合理性の偏向性
- が現代の危機の原因であると主張

統攝理論聖と俗の関係

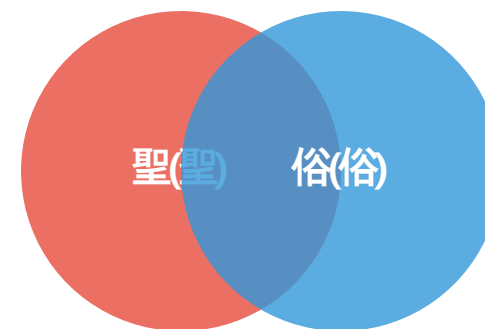
統攝(統攝)は中心が外部を排除せず包含しつつ統制する宗教社会学的近代性モデルである。

統攝1:聖(聖)が俗(俗)を統攝-軸の時代以降

統攝2:俗(俗)が聖(聖)を統攝-近代性の意味

聖(聖)と俗(俗)の再配置を通じた神性(神性)の強化である統攝関係は、人類普遍の現象

。統攝理論は宗教化の裏面の合理化を説明してくれるため、東西洋近代性の多様な様相を理解するのに有用である。



統攝1:聖(聖)が俗(俗)を包含し統制

統攝2:俗(俗)が聖(聖)を包含し統制

近代性は統攝1から統攝2への転換

多重近代性論

多重近代性(multiple modernity)は近代性を西欧のみの現象ではなく、多様な文明と文化に現れる現象として理解する理論である。

-
- 1998年学術誌『Daedalus』「early modernities」特集号で初めて登場
- 代表学者:アイゼンシュタット(S. N. Eisenstadt)、ウィトロック(B. Witterrodt)、アナソン(J. P. Amazon)。西欧中心主義的近代性概念に対する批判的代案

多重近代性の核心主張

今日、近代性は地球近代性(global modernity)として理解すべきであり、これは複数の文明の相互交流による重層的近代性(Multilayered Modernities)である。

- 原型近代性(proto modernity) – 西欧的近代性以前
- 植民-被植民近代性(colonizing-colonized modernity) – 西欧的近代性以降。地球
- 近代性(global modernity) – 現在の重層近代性

7 代替的近代性論

代替的近代性論は西欧的近代性に対する批判的観点から出発し、多様な文化と歴史的脈絡の中で発現する近代性の代替的形態を模索する。

文化理論的アプローチ

西欧中心主義から脱却した多様な文化的文脈における近代性の理解

文芸・政治批評

多様な芸術と政治的文脈に現れる代替的近代性の表現の研究

人類学的観点

非西欧社会の自生的近代化過程と独特な近代性発現方式の探究

グローバル化と地域性

グローバル化の中で地域的特殊性と結合した新たな近代性の形態の提示

区分	多重的近代性論	代替的近代性論
焦点	西欧と異なる文明圏で発現した多様な近代性の類型分析	西欧的近代性への代案模索と実践的変化の可能性
主要研究者	アイゼンシュタット、ウィットロック、アルナソン	アパデュライ (Appadurai)、ギルロイ (Gilroy)、オング (Ong)

自生的近代性と東学思想

自生的近代性(Autogeneous Modernity)とは西欧の近代性を受容するのではなく、我々の伝統の中で近代性を発見し発展させる概念である

。

自生的近代性の特徴

- 西欧と東洋の近代性が圧縮的に共存
- 近代性と脱近代性を同時に包含
- 東洋伝統思想の内在性に基づく

東学思想は朝鮮の社会変化の中に現れた自生的近代性の代表的事例として、「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という東洋の相関的思惟に基づいている。

東学思想と西欧近代性の比較

区分	西欧近代性	東学の自生的近代性
主体	個人の理性	民衆の経験
基盤	啓蒙主義、理性	内在的靈性
目標	個人の自由	輔国安民(保國安民)
方法論	合理的科学	聖俗の統攝

9 大巡思想と近代性

大巡思想は120数年前にすでに近代性に内在した危機を予見し、東西洋思想の融合を通じた代案的近代性を提示した。

大巡思想の近代性理解

西洋の近代性が現代危機の震源となった時、大巡思想が提示した解冤相生(解冤相生)の近代性概念は近代性再定立の新たな解法として注目される。

当時理解されなかった理由

- 西洋の物質文明で華麗に包装された近代性に隠される
- 東西洋思想を総合した大巡思想の深みを理解しがたかった
- 中心的近代化言説の支配的位置

現代的再照明の文脈

- 西洋近代性の限界に対する認識の拡散。
- 新科学から東洋学への関心の転換。西欧
- 統合的世界観の必要性の増大
- 近代性の再定立のための代案の模索

「大巡思想が提示した東西洋が融合された解冤相生の近代性概念は、近代性概念の再定立問題に対する新たな解法として注目される。」

現代の危機と近代性の再照明

近代性が作り出した現代社会の危機が人類全体の生存を脅かす水準に到達

近代性の逆説的結果:

- 環境危機と生態系破壊
- 人間疎外と共同体崩壊
- 科学技術の発展と不確実性の増加
- 物質的豊かさと精神的空虚さの共存

近代性の再解釈の試み:

省察的近代性(ウルリッヒ・

ベック)

近代性自体が自らを省察し危険を認識し、リスク社会に対応する新たな方向性を提示

液体近代性(ジグムント・バウマ

ン)

固定され堅固であった近代が、流動的で不安定な「液体」状態に変化した現代社会の診断

11 結晶東西の融合と統攝

自生的近代性と西欧的近代性の統攝を通じた人類共存の新たなパラダイム

東洋の自生的近代性

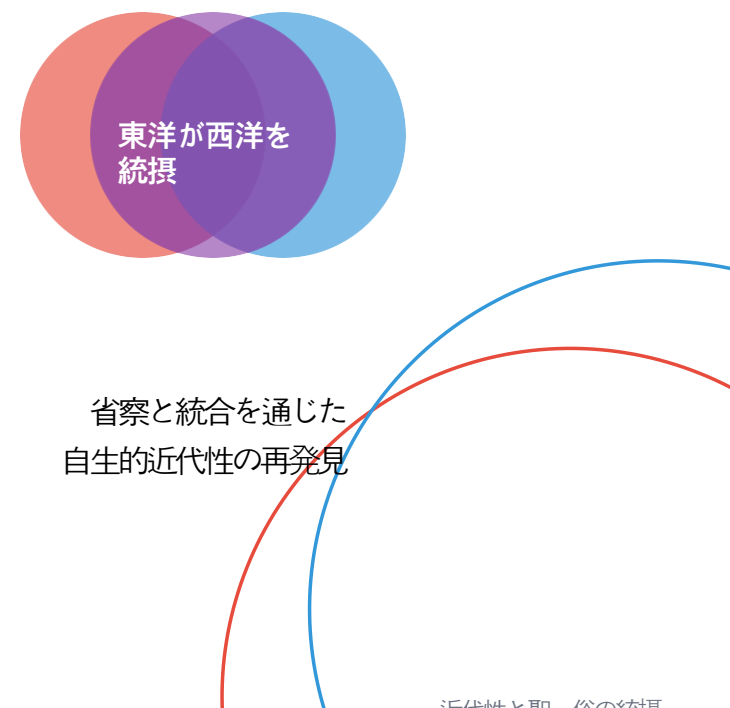
- ◆ 東学思想と大巡思想に込められた内在的近
- ◆ 代性。聖(聖)と俗(俗)の調和を通じた人間理
- ◆ 解

宇宙の原理が身体に具備されているという相関的
思惟

- ◆ 科学的合理性と理性中心の世界観。
- ◆ 近代化を通じた物質的豊かさの達成
- ◆ 人間中心的思惟を通じた自然支配

統攝を通じた新たな近代性

- ◆ 聖(聖)と俗(俗)の境界越えを通じた代案的近代性。解
- ◆ 冤相生(解冤相生)の原理を通じた人類共存方向の提
- ◆ 東西思想の統合的理解を通じた未来社会の志向点



12 参考文献および示唆点

主要参考文献

金相準、『孟子の汗、聖王の血:重層近代と東アジア儒教文明』、ソウル:アカネット、2011。李正雨、『世界哲学史3:近代性のカルトグラフィー』、ソウル:キル、2021。

李正雨、『世界哲学史4:脱近代思惟の地平』、ソウル:キル、2024。ウルリッヒ・ベック、『危険社会:新たな近代(性)に向けて』、ソウル:セムルギョル、1997。ジグムント・バウマン、『液体近代』、ソウル:カン、2009。

マックス・ウェーバー、『プロテスタント倫理と資本主義の精神』、ソウル:キル、2010。アイゼンシュタット、『多重的近代性の探究比較文明的観点』、坡州:ナナム、2009。

研究の示唆点

- ◆ 自生的近代性-韓国と東アジア独自の近代性の理解が可能
- ◆ 統長モデル-西欧合理性モデルの限界を補完する代案的理論の提示
- ◆ 東学と大巡思想-韓国の近代性形成において固有の思想的土台を準備
- ◆ 聖と俗の関係の再照明-現代社会の危機克服のための新たな観点の提示

韓国学研究の発展方向

聖と俗の統長観から韓国の歴史と思想を再解釈することにより、現代韓国社会が直面する問題に対する新たな解決策を模索し、東洋思想の統合的理解を通じてグローバル時代の普遍的価値を創出することができる。



西欧近代性と自生的近代性の東洋的共同起源

Eastern Common Origins of Western and Autogenous Modernity

研究背景および問題提起

- 東アジア3国の経済成長と近代性の再評価

非西欧文明の中で唯一西欧を凌駕する経済成長を遂げた東アジア3国の再評価の必要性が浮上

- 西欧近代性の東洋的起源の研究動向

西欧近代がむしろ東洋の影響を受けたという研究が続出—ジュリアン、フランク、ホブソン、クリール、ウッドサイドなど西欧の学者たちの新たな視角

- 韓国の自生的近代性の再照明の必要性

旧時代の独自の遺産程度としてのみみなされていた近現代韓国の自生的近代性に対する新たな視角と再評価

ヴェーバーの東洋社会論と限界

- 東洋社会を非合理的、前近代的社会と規定
漢字を知らなかったウェーバーは、東洋社会が合理性(rationality)と一貫性を欠くと主張し、家臣官僚体制と指摘
- ヘーゲルの絶対理性(Absolute Geist)と西欧中心的観点を受容
ヘーゲルの弁証法的歴史観を受容し、西欧近代社会を発展の頂点に置き、東洋社会を劣等な発展段階として規定
- カントの影響と合理性一貫性の不在の主張
カント式の一貫性の概念を基準として性理学の理(理)を評価し、論証なき非合理的の体系と誤解
- 今日まで持続する影響力と問題点
100数年が経過した今日でも、西欧と東洋の知識人が東洋社会を見る基本的視角として作用し、自生的近代性論議の最初の障害物

メッツガーの反駁論と東洋的近代性

- 漢字を理解したウェーバー理論の再解釈

トーマス・メッツガー漢字を知り、東洋文化を深く理解し、ウェーバーとは正反対の結論を導出－東洋社会を合理性が不在の社会というウェーバーの主張を反駁

- 東洋の憂患意識と緊張感

ウェーバーがプロテスタント的要素として見た緊張感が、むしろ東洋人において強く現れる－憂患意識を通じた世界に対する東洋人の省察と絶えざる自己修養

- 官僚主義の拡大と歴史発展の解釈

東洋的観点から民主主義は官僚主義の拡大であり、内聖外王(内聖外王)の過程－現代東アジアの独歩的経済発展がこのような東洋的近代性の証拠

- 東洋的近代性の再評価

東学思想の性理学に対する宗教改革的性格と朝鮮社会の市民社会的特性－西欧市民社会よりも強い市民社会的要素を備えた朝鮮社会の特徴

西欧近代性の東洋的起源の証拠

- 啓蒙時代のヨーロッパ知識人たちの中国思想受容
ヴォルテール、ルソー、アダム・スミスなど近代思想の起源をなした学者たちが異口同音に中国思想において自らの主張の根拠を発見－ヨーロッパの「中国熱風」
- マテオ・リッチの中国思想伝播の役割
マテオ・リッチがヨーロッパに伝えた中国思想が西欧近代性の核心概念形成に決定的影響－東学と大巡思想でも言及されるマテオ・リッチの役割
- 歴史的証拠：西欧近代概念の東洋的起源
スミスの「見えざる手」、ルソーの「天賦人權説」が東洋思想から着想－中国の科学制と世俗化された合理的伝統が西欧に及ぼした影響
- 西欧の普遍性概念の形成と東洋思想
西洋のカトリック的「普遍性」概念が東洋文明との接触を通じて再定立－宗教なしにも道徳的な中国社会が、当時宗教戦争に苦しんでいたヨーロッパに与えた衝撃

東学思想と韓国の自生的近代性

- 東学の「再開闢」思想と西欧近代性の東洋的起源
東学に間接的表現として現れた西欧近代性の東洋的起源と、これを通じた東西洋文明の再解釈
- 西学中源論と韓国の徐命膺
西洋学問の起源が中国から始まったという西学中源論の影響と、韓国の徐命膺を通じた発展
- 東学思想の宗教改革的性格
性理学に対する宗教改革の性格を持つ東学－西欧プロテスタンティズムとの類似性と差別点
- 韓国性理学と市民社会的性格
韓国の朝鮮社会が西欧市民社会よりも市民社会的性格が強かったという最近の研究とその意味

共感と省察的近代性

- 共感の東洋的近代性のキーワード
東洋儒教思想の「共感」概念が西欧近代性の核心要素へ転換－西洋道德理論の新たな土台
- 18世紀西欧の儒教「共感」概念の受容
ヒューム、アダム・スミスなどがマテオ・リッチが伝授した孔子の儒教思想を「共感」と解釈し、西欧道德理論に接合
- 省察と結合した近代性の重要性
東洋の近代性には、西洋の近代性より省察を強調する「省察論的近代性」の特性－西洋近代性の起源である共感も、省察と結合される時に真の意義が発生
- 代替的近代性としての価値
西洋近代性の物質主義と人間疎外を克服できる東洋の自生的近代性－ポストモダニズム時代の代案的パラダイムの提示

結論および意義

- ✓ 近代性論争における東洋的起源の重要性
西欧近代性が東洋から影響を受けたという歴史的証拠の発見－マテオ・リッチの影響、啓蒙主義時代の「中国熱風」、儒教思想の共感概念の導入
- ✓ 韓国自生的近代性の再解釈と今日的示唆点
東学思想と韓国性理学の独特な特性が近代性の萌芽として再評価－ウェーバーの限界を超えた自生的近代性の再発見
- ✓ 未来の代替的近代性としての「省察的・共感的」近代性
西欧近代性の物質主義と人間疎外を克服できる東洋の自生的近代性－共感と省察が結合された新たな近代性パラダイムの提示

「文明の危機を解決する新たなパラダイムとして、東西洋文化の統合的近代性を再考察すべき時点」



自生的近代性の形式体系としての「学(學)」

Hak as the Formal System of Autogenous Modernity

研究背景および問題提起

- ◆ 西洋学問の危機と科学哲学的省察
- ◆ 東洋の宗教としての「学(學)」の独自の地位を考察
- ◆ する必要性。東洋宗教における宗教と学(學)の伝統
- ◆ 的關係

近代性における「学」の意味変化が研究問題として登場

「宗教思想としての東学が他の宗教と最も際立って区別される部分は、宗教を「学(學)」という学術的用語で表現するという点である。」

研究目的および方法論

- 研究目的東洋の「学(學)」を宗教現象学的に究明
- 方法論科学哲学宗教現象学宗教人類学の3つのアプローチを立体的に活用。分析対象東学と大巡思想の主要用語と概念の連続性と変化

宗教現象学的研究方法論の適用

構造的アプローチ
パラダイム理論
的の思惟と分析的の思惟

原理的アプローチ
通過儀礼理論
ナリティ(境界状態)

過程的アプローチ
再活性化理論
変容と伝統の再解釈

「本稿は両思想の主要用語に注目しつつ、用語が持つ意味の連続と変化を、構造・原理・過程という三つの観点をすべて用いて立体的に把握しようとする。」

東洋「学」の宗教現象学的意味

- ◆ 宗教を「学(學)」という学術的用語で表現する東アジア的伝統
- ◆ 天文地理などの自然科学的背景と宗教が区分されない総体的属性
- ◆ 。 「学」が世界観として作用する宗教現象学的意味
- ◆ 東洋「学」の特徴「相関的思惟」を固有の規範とする哲学的思惟体系

「伝統的に東洋で宗教が学として表現された理由の一つは、東洋の宗教は天文地理という自然科学的背景を持っており...自然科学と区分されない総体的な属性を持っているためでもある。」

ニニアン・スマートの宗教現象学理論

- ◆ 世界観=Weltklärungssystem (世界説明体系)+Lebensbewältigungssystem (人生問題克服体系)
- ◆ 7つの宗教次元と文化横断的現象学。宗教を
- ◆ システム的現象学的に見る観点
- ◆

ニニアン・スマートの7つの宗教次元

- | | |
|-------------------|---------------------|
| ● 儀礼的次元(Ritual) | ● 経験的次元(Experience) |
| ● 神話的次元(Myth) | ● 教理的次元(Doctrine) |
| ● 倫理的次元(Ethics) | ● 社会的次元(Social) |
| ● 物理的次元(Material) | |

「文化横断的現象学は宗教学的的研究対象としての世界観を大きく二つに区分する

。 」

宗教人類学的アプローチ

- ◆ 問題解決としての宗教原理、構造、過程の3つの観点

原理(Pinciple)

ファン・ヘネップの通過儀礼(rite of passage)とターナーのリミナリティ(Liminality)理論

構造(Structure)

パラダイム(paradigm)としての宗教、東洋の相関的思惟と生成論的方法

過程(Process)

ウォレスの再活性化(revitalization)モデル、文化接変と情意的適応

- ◆ 東学~大巡思想に現れるリミナリティ(境界状態)と儀礼の変化
- ◆ 相関的思惟万物の相互連関性に基づいた東洋特有の思考方式。
- ◆ 生成論的方法と存在論的方法の比較

「相関的思惟は上から下へと生成されていく演繹的原則を持つ東洋の生成論的思惟方法に該当する

。 」

東学と大巡思想の比較分析

- 東学および大巡思想の用語と概念に現れる連続と変化
- 近代性の脈絡における両思想の学(學)概念の適用
- 事例の分析構造・原理・過程という観点を同時に活用

区分	東学	大巡思想
学(學)の意味	東洋的学問体系としての宗教	相関的思惟に基づく自生的近代性
世界観特性	東西方法論の対立構造	統合的リミナリティ段階
核心思惟	生成論的方法	相関的思惟の体系化

「東学思想と大巡思想に現れる伝統の連続と変化は、主に用語と概念上の意味変化として現れる。」

結論および意義

- ◆ 東洋「学(學)」概念の宗教現象学的価値の究明
- ◆ 東学から大巡思想へと繋がる伝統と変化の意味。自生的
- ◆ 近代性研究の拡張可能性および後続研究の提言。東西洋
- ◆ 学問の相互補完的方法論模索のための基礎研究

総合的結論

東学思想における「学」は単なる知識体系ではなく、相関的思惟を通じた世界観的システムとして自生的近代性の形式体系として作動しており、これは現代宗教現象学的研究を通じて東西洋思想の統合的理解を可能にする

研究の意義

宗教現象学と宗教人類学の方法論を統合適用して東洋の「学」概念を体系的に考察することにより、自生的近代性の新たな理解可能性を提示する

後続研究の提

多様な東アジア宗教思想に現れた「学」概念の比較研究および現代的適用可能性を探索する学際的研究が必要



自生的近代性の理論的背景としての東西区分

East-West Distinction as Theoretical Background

目次

- 1 東西洋思惟方法論の差異
- 2 認知心理学的研究結果
- 3 東西洋差異の多様な解釈
- 4 構造主義と内在性概念
- 5 ポスト構造主義の外部の思惟
- 代替的近代性理論
- 大巡思想における東西区分
- 結論および意義

東西洋思惟方法論の差異

東洋的思惟

- ◆ 全体論的思惟(Holistic Thinking)脈絡と
- ◆ 背景に焦点
- ◆ 集団的統制志向
- ◆ 複合的世界観

西洋的思惟

- ◆ 分析的思惟(Analytic Thinking)個別事
- ◆ 物と数量に焦点
- ◆ 個人的統制志向
- ◆ 単純化された世界観

リチャード・ニスベット(Richard Nisbett)の認知心理学の研究

実験結果: 飛ぶ鳥を見て

東洋人 → 背景を記憶

文脈と全体的イメージに集中

西洋人 → 鳥の数を記憶

個別客体と数量に集中

東学および大巡思想における東西区分

東学と西学(西洋学問)の差異は単純な文化的区分ではなく、根本的な思惟体系の差異を反映する。

認知心理学的研究結果

ニスベット(Richard E. Nisbett)の実証的研究

実験心理学を通じて東西人の認知パターンの差異を立証

東洋人の認知

- 世界は複雑で集团的統制の対象
- 背景と文脈に焦点

西洋人の認知

- 世界は単純で個人的統制の対象
- 事物と数量に焦点

馮友蘭(馮友蘭)の解釈

商業と農業文化の差異

- 西洋:商業の発達により本質と実体の区分が必要。東洋:農業中心の環境で直観的認識が重要
- 東洋に認識論がなかった理由:自然との直接的関係に由来

金弼年の解釈

地理環境的要因

- 西洋:多人種共存 → 明確な意思疎通 → 論理の発達。東洋(中国):春秋戦国の政治的問題 → 内面倫理の発展。集団性(東洋)と個人性(西洋)の起源は環境的要因

朴東煥の言語学的モデル

韓国の論理は西洋・中国と異なる虚辞決定の循環的論理学。周辺が中心を決定する方式で新たな理論が融合される特徴

東西の差異は全体と部分の関係として類型化

崔鳳永:個体と共同体を個別的/全体論的観点から見る差異

* ニスベット(1941-現在)、馮友蘭(1894-1990)、金弼年、朴東

東西洋差異の多様な解釈



環境決定論的解釈

馮友蘭(馮友蘭):商業と農業文化の差異－東洋の自然環境が農業基盤の直観的認識を発達。金弼年:集団性と個人性の差異－地理環境の差異に起因(多人種vs単一民族)



言語学的モデル

朴東煥:韓国の論理学は周辺が中心を決定する「虚辞決定の循環的論理学」。
。西洋と中国と異なる韓国の論理は新たな理論を融合する特徴を持つ



文化論的アプローチ

崔鳳永:個体と共同体の関係性－各文明を類型化

- ◆ 西洋:個別者-合体的世界観(近代)、統体-従属者的世界観(伝統)。
- ◆ 中国:統体-部分者的世界観
- ◆ インド:統体-縁起者的世界観

“ 文化の差異は単純な慣習の差異ではなく、思惟体系と世界観の根本的差異として理解しなけ ”

構造主義と内在性概念

レヴィ=ストロースと『野生の

思考』

- ◆ 構造主義人類学原始社会の思惟も西欧的思惟に劣らない構造的原理を保有
- ◆ 「野生の思考(Savage Mind)」:陰陽のような対称的思惟
- ◆ (Symmetrical thinking)で構成
- ◆ 東洋的全体論的思惟が対称的思惟により近い
- ◆ 仏教の空(空)概念:対称性思考の極致であり万物の対称性と一致
- ◆

内在性概念と西洋思惟の限界

- ◆ 内在性(Immanence):特定の文化で共有する暗黙的な規約、外部からのみ認識可能
- ◆ 西洋思惟の内在性:アリストテレスの実体論(substance theory)。マテオ・リッチ:実体論に基づき陰陽五行と理気論を批判
- ◆ 西洋実体論の独断変化を実体(原子、神など)で説明しなければ論理的でないという前提

ドゥルーズ、ジュリアンの内

在性の探求

ドゥルーズ(Gilles Deleuze, 1925–1995)

西洋思想の実体性を批判し、「外部の思惟(Outside Thinking)」を追求

フランソワ・ジュリアン(François Jullien)

東洋の内在性に注目:実体を仮定せずとも対立の統一を志向

- 東洋の相関的思惟独断から脱しつつも、分析哲学が解決できなかった問題に対する代案を提示

* レヴィ=ストロース『野生の思考(La Pensée

ポスト構造主義の外部の思惟

「外の思惟(Outside Thinking)」とは？

ポスト構造主義者たちが西洋思想の内在性(immanence)から脱するために追求した思惟方式。

特にアリストテレスの実体論が持つ独断的性格に対する批判から出発

ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze)

内在性(immanence)概念の提示

西洋哲学の実体性は批判しつつ、東洋に対しては批判しない

ミシェル・フーコー (Michel Foucault)

西欧知識体系の系譜学的批判

西洋思想の核心に内在する権力と独断の関係の分析

ジャック・デリダ (Jacques Derrida)

音声中心主義(Grammatology)批判

。西洋形而上学の二分法的構造の解体

西洋実体論の限界

- ◆ 変化過程には必ず実体(原子、神など)が必要という独断
- ◆ アリストテレスの実体論が西洋思想の独断を招来マテオ
- ◆ リッチが東洋の陰陽五行論批判に実体論を活用

東洋的代案の可能性

- ◆ 実体を仮定しない東洋の内在性
- ◆ 西洋の独断から脱することのできる相関的思惟体系
- ◆ ジュリアン:東洋の内在性から西洋近代思想の道徳的基盤を発見

代替的近代性理論

汪暉(汪暉、1959-現在)

中国思惟に基づく代替的近代性

- ◆ 中国思惟の変換過程における代替的近代性の探索
- ◆ 孔子の「仁(仁)」思想は周代の礼楽の神聖性回復の試み
- ◆ 災異論と理気論もまた崩れた神聖性の回復伝統の回復
- ◆ とともに代案的近代性が可能

黄泰淵(1955-現在)

儒教的合理性と近代性

- ◆ 西欧の合理性はカント的意味ではなく儒教的合理性孔
- ◆ 子孟子の思想が西欧に導入され近代合理性を形成分析
- ◆ 哲学より儒教的合理性が独断から自由「儒教的近代の
- ◆ 一般理論」の提示

代替的近代性の共通点

聖と俗の統攝と変化

東洋伝統から現代的価値の発見

相関的思惟の現代的適用

陰陽論的思考を通じた実体論の克服

*汪暉『近代中国思想の興起』

*黄泰淵『儒教的近代の一般理

大巡思想における東西区分

西洋(西洋)

西洋(西洋)-陽(陽)

- ◆ 崑崙山の西側地域
- ◆ 陽の属性:下から上へ上る原理分析的実体的思惟体系
- ◆ 大巡思想:西洋の各自為心(各自為心)

東洋(東洋)

東洋(東洋)-陰(陰)

- ◆ 崑崙山の東側地域
- ◆ 陰の属性:上から下へ下る原理全体論的属性的思惟体系
- ◆ 東学思想:東洋の神明がとどまる領域

崑崙山

神明界(神明界)の東西区分

「マテオ・リッチ以前、東西洋を固く隔てて神明が互いに往来しなかった。」
- 『典経』 「教運」 1-9

「東洋のすべての道通神を率いて西洋へ震黙大師が渡って行った。」
- 『典経』 「公事」 3-15

大巡思想における東西洋の区分は地理的境界を越え、神明界の構造まで貫通する根本的原理として作用する

結論および意義

東西区分の哲学的含意

東洋の内在性

全体論的属性、脈絡中心、宇宙から自己へ下降する陰(陰)の原理

東学思想と大巡思想の意義

東西洋の区分を陰陽の世界観的基盤として解釈し、近代性に対する自生的理解の枠組みを提供

西洋の内在性

部分子的実体、個体中心、自己から宇宙へ上昇する

陽(陽)の原理

自生的近代性の可能性

東洋的アプローチ

の価値

- ◆ 全体論的思惟の現代的再解釈
- ◆ 孟子の修養論的実存概念 王暉
- ◆ の代案的近代性モデル
- ◆ 陰陽に基づく相関的思惟の現代的適用

統合的観点の必要性

- ◆ 後期構造主義の「外部の思惟」の
- ◆ 追求リミナリティ理論と液体近代
- ◆ 性実体論と属性論の相補的結合フ
- ◆ ラクタル理論と自己組織化理論

現代的意義と示唆点

東西洋の区分は単なる地理的・文化的次元を越え、思惟方式と哲学的内在性の根本的差異として解釈可能である

東西洋の二分法を越え、陰陽調和の原理により現代社会の多様な問題解決のための哲学的基盤を提供

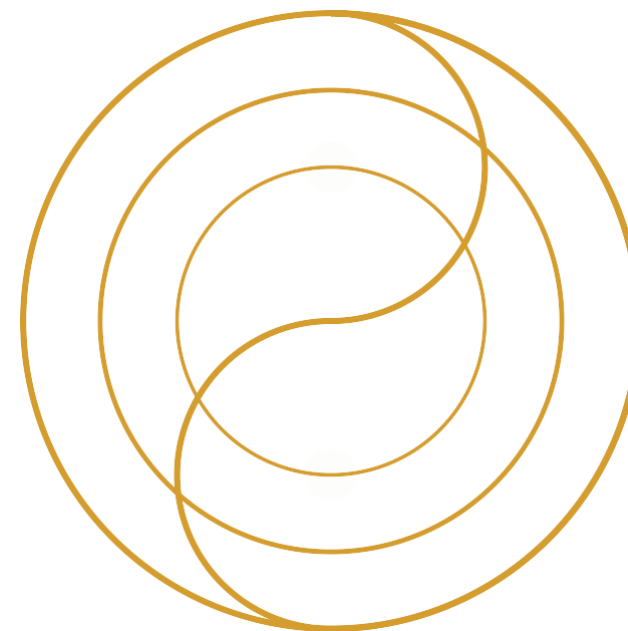


自生的近代性の哲学的方法論としての相関的思惟

Correlative Thought as Philosophical Methodology

目次

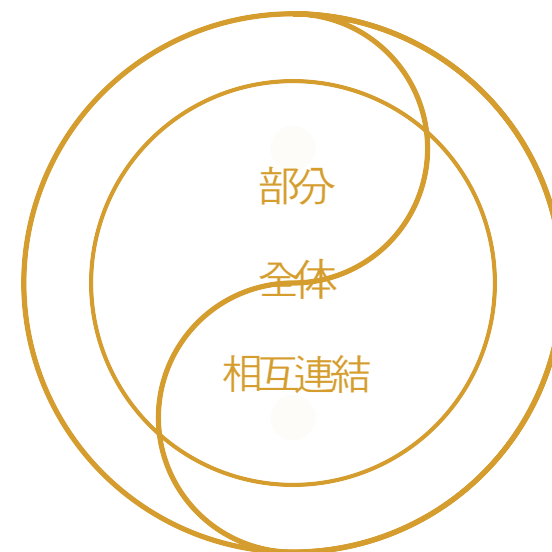
- 1 相関的思惟の概念と定義
- 2 西洋の分析的思惟との比較
- 3 相関的思惟理論の発展史
- 4 ヘンダーソンの4区
分
- 5 認知心理学的実証
- 6 東洋的世界観と伝統
- 7 孔子の一以貫之と共感
- 8 西洋啓蒙主義と経験論に及ぼした影響
- 9 ポストモダニズムとの関
連
- 10 結論および
意義



相関的思惟の概念と定義

「相関的思惟(相関的思惟, correlative thinking)とは、部分と全体が同時に動くという思惟方式である。」

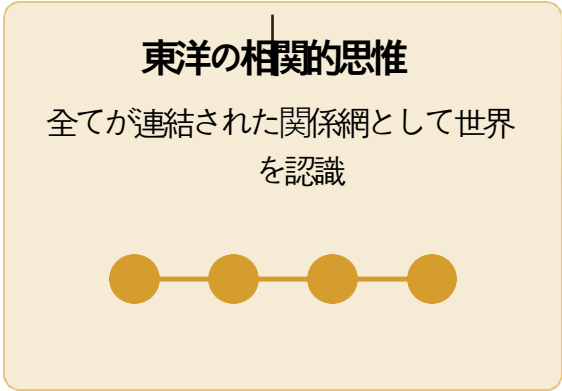
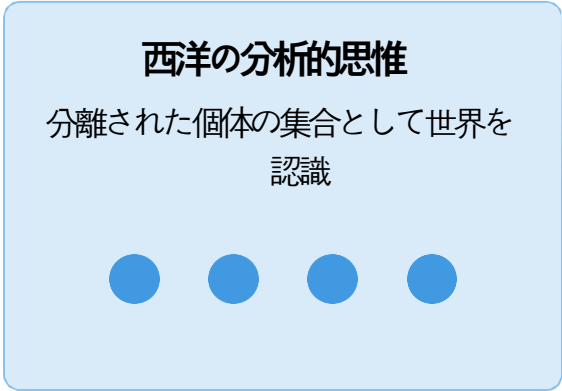
- 部分の中に全体があり万物が互いに相関関係にあるという認識体系
- 西洋を除く大部分の文明はこのような思惟体系を持つ
- 過去には迷信的思考と見なされたが、現代科学により検証されつつ、新たな科学としての可能性が再評価される
- 陰陽理論は代表的な相関的思惟体系として注目されている



西洋の分析的思惟と東洋の相関的思惟の比較

- 分析的思惟万物は独立して動き、粒子(原子分子量子)へ分割できるという西洋の思惟方式
- 相関的思惟万物は互いに連結され分割できず、相関関係として認識する東洋の生成論的思惟方式
- 西洋教育を受けた現代の東洋人も大部分は分析的思惟を採用する

区分	分析的思惟(西洋)	相関的思惟(東洋)
認識論的基盤	個性性、分離性	全体性、連結性
アプローチ方法	分解的・還元主義的	総合的、関係論的
思考方式	線形的、直線的	循環的、関係的



相関的思惟理論の発展史

- 陰陽五行説に対する最初の肯定的評価はグラネ(Granet)から始まる
- グラハム(A. C. Graham, 1919-1991)は構造主義と中国哲学を接合し、東洋の相関的科学性を証明
- エイムズ(Roger T. Ames)、ホール(David L. Hall)、シュワルツ(Benjamin Schwartz)、ニーダム(Joseph Needham)などへ研究が拡張
- 相関的思惟理論は陰陽五行説を最大限客観的に評価し、原始的形態の科学として再解釈
- 西洋はこれを通じて東洋の科学性を理解し始め、東洋は西洋の解釈を通じて自らのアイデンティティを再発見する契機を得た

- 1920-1930年代
マルセル・グラネ 陰陽五行説の初の肯定的評価
- 1950-1970年代
ジョセフ・ニーダム 中国科学技術史研究
- 1970-1990年代
A. C. グレアム 構造主義と中国哲学の接合
- 1990-2000年代
エイムズ、ホール、シュワルツ 相関的思惟の体系化
- 現在
東西洋哲学の統合的アプローチによる研究拡張

ヘンダーソンの4つの相関的思惟分類

John B. Henderson の相関的思惟の分類

体系

1 人間と宇宙の関係

小宇宙(人)と大宇宙(宇宙)の相関関係、人間の身体と宇宙秩序の対応

2 国家アナロジー(ニーダム)

コスモスの領域(天)と地上の領域(王朝/国家官僚体系)の関係、天の秩序が地上政治に反映

3 数秘学的相関体系

五行(五行、金・木・水・火・土)のような数理的・象徴的体系を通じた宇宙現象の説明

4 易経の体系

陰陽の変化法則を通じて宇宙万物の変化を説明する易学(易學)体系



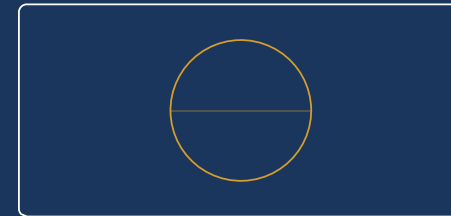
認知心理学的実証

リチャード・ニスベット(Richard E. Nisbett)

「東洋人は相関的思惟によって、世界が西洋人よりも複雑に現れる...実に異なる二つの世界だと言った。」

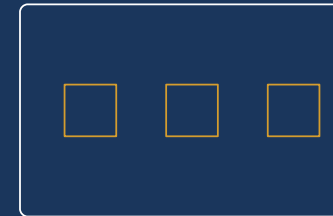
- 東洋人の認知特性: 相関的思惟、脈絡中心、集団的統制の対象
- 西洋人の認知特性: 分析的思惟、客体中心、個人的統制の対象
- 実験結果: 東洋人は背景と関係に注目、西洋人は中心客体に注目
- 国家間の差異はあるが相関的思惟の傾向性は東洋文化圏に共通

東洋的認知



全体的視角
(Holistic View)

西洋的認知

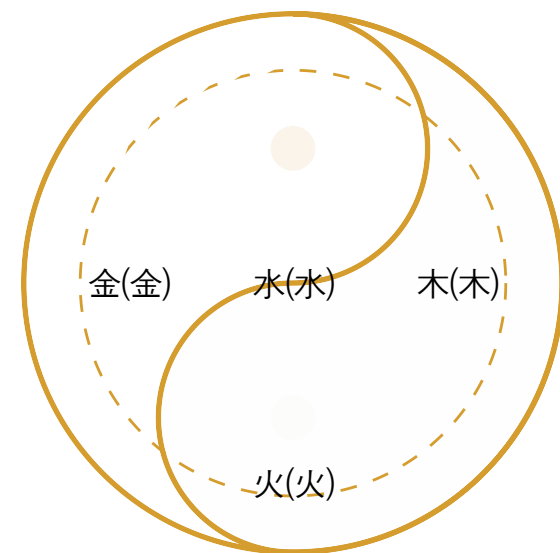


分析的視角
(Analytic V

東洋的世界観と伝統

「**相関的**の**思惟**は東洋的世界観の共通の認識枠組みであるため、**伝統**の**連続**と**変化**においてその原理が**相関的**の**思惟**として現れる。」

- 陰陽五行と太極に代表される東洋的思惟は、**伝統**の**連続**と**変化**を説明
- 東洋文化における**伝統**と**変化**は、陰陽五行と太極概念にどれほど符合するかで評価される
- 東学思想と大巡思想に現れる**伝統**と**連続**の**変化**もまた、陰陽五行と太極概念で解釈可能
- 東洋哲学における陰陽と五行の原理は、宇宙と人間世界を統合的に説明する基本体系

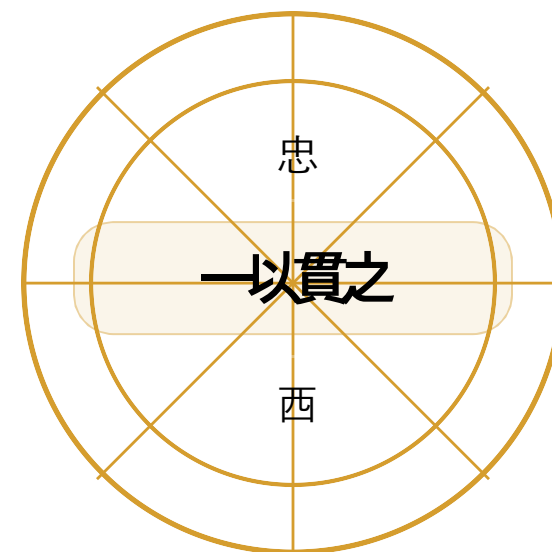


土(土)

孔子の一以貫之と共感

「孔子は自らの理論を忠恕忠恕という共感概念により一以貫之一以貫之した。」

- 一以貫之(一以貫之):一つに貫く一貫性のある原理体系
- 忠恕(忠恕):互いへの誠実と理解 共感の核心概念
- 述而不作(述而不作)創造ではなく古代から伝わる伝統の継承
- 東洋は西洋より内面的一貫性に執着し、共感の一以貫之により東洋思想が客観的一貫性を獲得
- 天地人が互いに共感することを「感応」と表現し、共感后感応の延長線上にある

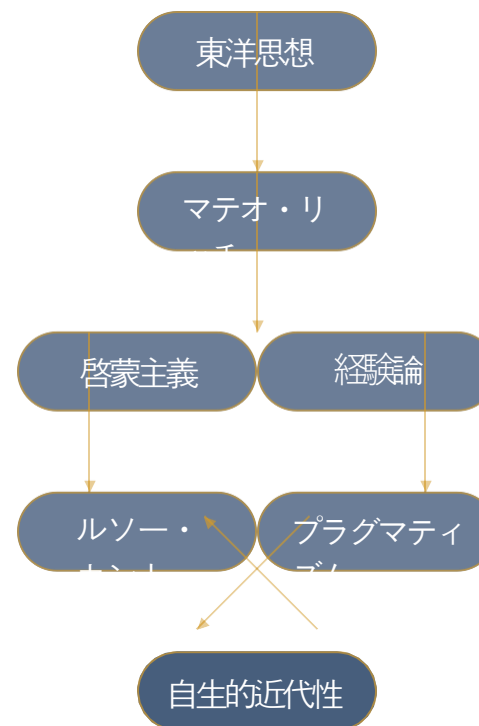


「わが道は一以て之を貫く」
-論語、衛霊公篇

西洋啓蒙主義と経験論に及ぼした影響

「啓蒙主義は西洋にとっては異質な思想であり、西洋は啓蒙主義の異質性を神を代替する
道徳の基礎としてよく発展させ、近代文明を成し得た。」

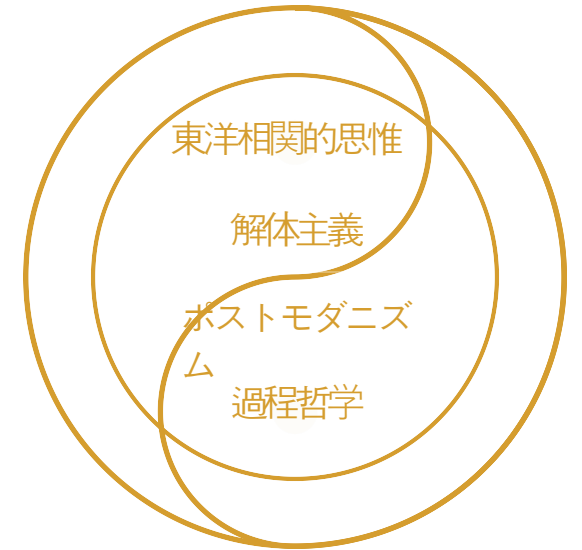
- ジュリアン:孟子と啓蒙哲学者たちの内在性理論、共感の共通点を発見
- ルソー:西洋哲学で見出しがたい東洋の内在性である共感を導入
- 英国経験論:マテオ・リッチの儒教翻訳物を通じた東洋思想の受容
- 進化論と進化人類学へ発展、脳科学のミラーニューロン理論と結合
- デューイのプラグマティズム:孔子思想との類似性、中国に大きな影響



ポストモダニズムとの関連

「東洋の相関的思惟は現代ポストモダニズム哲学と深い関連性を持ち、これを通じて新たな哲学的対話が開かれつつある。」

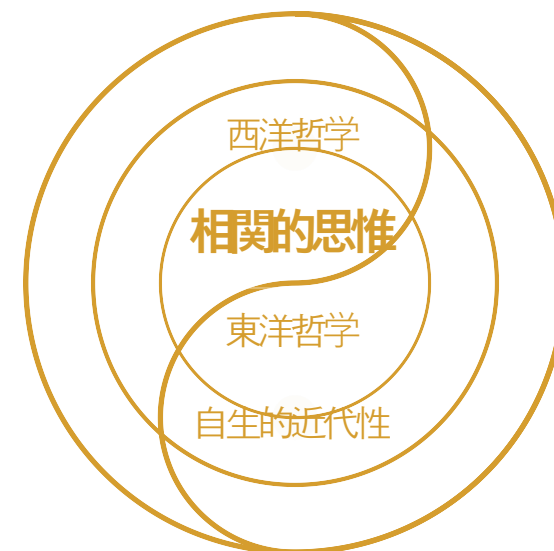
- 金炯孝: 甌山思想とポストモダニズムの連携、デリダ・老荘の読法研究
- 朴貞珍: 宗教学的観点から哲学の贈与、贈与の哲学の研究
- 朴容淑: 文明史的観点から古代シャーマニズムの東西会通の研究
- 大巡思想研究: ヘーゲル、ハイデガー、デリダ、ドゥルーズとの比較研究を通じた東西哲学の融合可能性の模索



結論および意義

相関的思惟は西洋の分析的思考と異なり、自然と人間、宇宙を総体的に理解する東洋哲学の本質的要素であり、現代科学において再照明される哲学方法論である。

- 相関的思惟東洋哲学の精髓として、万物の相互連結性を認識する独自の認識論
- 自生的近代性西洋近代性と異なり、東洋の内在的価値体系から発現した固有の近代化過程
- 現代的意義生態学、量子物理学、複雑系科学など現代学問において再発見される相互連結的世界観
- 哲学的方法論東西洋の哲学的統合、ポストモダニズムとの接合可能性の拡張
- 未来展望相関的思惟を通じた東西洋哲学統合の可能性と新たな学問パラダイムの構築



2

リミナリティと再活性化

Liminality and Revitalization

研究背景と目的

- リミナリティ(境界性)理論と東西思惟の接点
- 東学思想と大巡思想が近代性言説において持つ意
- 味リミナリティ理論の学際的適用背景と研究目標

リミナリティ理論概観

- リミナリティ(Liminality)の定義:境界的状态
 - ◆ ラテン語「Limen」(敷居、threshold)から由来
 - ◆ 既存の構造と新たな構造の間の中間地帯
- 特性:曖昧さ、不確定性、多様な可能性
 - 死、子宮、闇、両性性などに比喻
- 創発性:予想しなかった新たな形態の出現
 - 変化以前の状態を包含しつつ超える「包越」
- 社会・文化的変化の機制としての価値

ファン・ヘネップの通過儀礼理論

- アルノルト・ファン・ヘネップ(Arnold van Gennep, 1873-1957):通過儀礼(Rite of Passage)理論の創始者

1 分離儀礼(Separation): 以前の状態/地位から分離される段階

2 転移/リミナル(Transition/Liminal):境界的状态、過渡期的段階

3 統合儀礼
(Integration): 新たなアイデンティティや地位へ再統合される段階

- リメン(Limen):敷居(Threshold)を意味し、新たな可能性が開かれる境界空間
- 通過儀礼は人類普遍的な現象であり、あらゆる社会に見出される

4

リミナリティと再活性化: 東学思想と大巡思想の自生的近代性

ヴィクター・ターナーのリミナリティとコミュニタス

- リミナリティ概念の拡張: 社会的変化と危機克服の創造的過程
 - ◆ 通過儀礼から社会全般の変化分析のツールへ拡張
- コミュニタス(Communitas): 構造化された社会関係を越えた共同体性
 - ◆ 匿名性、平等性、弱者の逆説的力の特性
- 反構造(Anti-structure): 既存秩序の一時的解体と再構成
 - ◆ 社会的役割と地位の転覆、新たな可能性の創出
- 社会劇(Social Drama): 違反-危機-矯正/治癒-再統合/分裂の弁証法的過程

5

リミナリティと再活性化: 東学思想と大巡思想の自生的近代性

リミナリティ理論の発展過程

- ファン・ヘネップ→ヴィクター・ターナー→エディス・ターナーへと続く学問的進化
- 宗教儀礼から社会変動、公演学、災害対応へと理論が拡張バウマ
- ンの「液体近代」、アイゼンシュタットの「多元的近代性」理論



近代性とリミナリティ

- バウマンの「液体近代」とアイゼンシュタットの「多元的近代性」理論はいずれもリミナリティ概念と関連

◆ ヘーゲルの弁証法が提示できなかった現代社会の問題点を分析する道具として注目される

液体性(Liquidity):近代性の両価性(ambiguity)を内包し、リミナリティの肯定的意味と連結

- リミナリティが近代性言説において持つ意義
 - ◆ 聖と俗の再配置による不確定性と創発的変化永続的リ
 - ◆ ミナリティ状態に置かれた現代社会の特性を反映
- 近代性の危機に対する代替的解釈の提供
 - ◆ 「産湯を捨てるとともに赤子まで捨てる」脱近代性の混乱の解釈

東学思想とリミナリティ

- 東学思想の相関的思惟と危機克服
 - ◆ 陰陽論的世界観とリミナリティの境界性
- 帝国主義時代の危機と通過儀礼的変換
 - ◆ 外部の衝撃に対応する自生的近代性の胎動

「東学思想は帝国主義のアジア支配における人種浄化の危機の中で、危機克服の通過儀礼として発生する。」

- 生命思想・相生の哲学とリミナリティの創発性

大巡思想と再活性化

- 大巡思想が東学の理想世界の実現を継承・発展させる方式
 - 東学の革新性と大巡思想の宗教的実践の連携
- コミュニタスと修行論的特性
 - 共同体的修行と日常における変化の実践
- 伝統の再構成および再活性化
 - 危機的状況で伝統を再解釈する創造的アプローチ
- 再活性化理論との接点
 - 危機克服のための伝統の活用と未来志向的变化

自生的近代性の特徴

- 西欧近代性と区別される東アジア的韓国的近代性

西欧近代性

- ◆ 弁証法的対立と克服
- ◆ 二分法的構造と伝統の断絶

自生的近代性

- ◆ 相関的思惟と統合
- ◆ 伝統の再活性化と連続性

- リミナリティと再活性化、相関的思惟の統合
 - ◆ 危機克服の内部的変化(リミナリティ)と外部適応(再活性化)の結合
 - ◆ 聖(聖)と俗(俗)の境界の変化を通じた新たな価値の創出
- 個体発生と系統発生の反復、身体の変
性
変化過程で蓄積される「身体」の経験と記憶
 - ◆ 加一倍法(加一倍法)と「化(化)」の原理:既存の基盤の上に一手を加える

理論的含意と意義

- リミナリティ・再活性化理論を通じた両思想の解明
 - ◆ 東学と大巡思想危機における変化と伝統の再構成
- 普遍性と特殊性の均衡的視点
 - ◆ 西欧近代性理論と東アジア思想の創造的統合
- 現代韓国社会との連携
 - ◆ 社会変動、共同体性、社会的危機克服の実践的含意

結論および今後の課題

- 要約:リミナリティと再活性化理論が提供する統合的解釈
 - 東学と大巡思想は、危機と転換のリミナリティ過程を通じた自生的近代性のモデル
- 研究の限界と今後の研究課題
 - 実践的側面におけるリミナリティ分析と現代適用事例の必要
- 社会的・学問的拡張可能性
現代社会の危機のなかで共同体的コミュニティ実現のための理論的枠組みを提供



自生的近代性の聖(聖)・俗(俗)変化機制としてのリミナリティ

Liminality as Mechanism of Sacred-Secular Transformation

目次および研究背景

研究内容

- 1 リミナリティ概念と発展過程
- 2 近代性とリミナリティの相関関係
- 3 東学思想と大巡思想の特徴
- 4 自生的近代性とリミナリティの交差点
- 5 現代的適用と示唆点

研究背景

問題提起および研究目的

東西洋の近代性概念の差異と統合可能性の模索。リミナリティ概念を通じた東学思想と大巡思想の自生的近代性分析。

東学大巡思想概要

韓国の代表的自生思想として、西欧近代性と異なる方式で近代的变化を追求した思想体系。聖(聖)と俗(俗)の境界を往来するリミナリティ的特性。

研究の必要性

現代社会の不確実性と両面性の時代における代案的近代性モデルとしての可能性の探索。リミナリティを通じた東西洋思想の新たな統合可能性の提示。

リミナリティ概念の定義

リミナリティ (Liminality) とは境界、敷居を意味するラテン語「Limen」に由来する概念で、人類学者ファン・ヘネップ (Arnold van Gennep) が通過儀礼研究において初めて提示した用語である。

主な特徴

- 境界性(境界性)と転移性: 以前の状態と以後の状態の間の曖昧かつ不確定な中間状態
- 創発性と可能性: 既存秩序から脱し、新たな可能性が開かれる創造的空間
- 両面性(両價性): 危機と機会、死と再生、混沌と秩序が共存する両面性

リミナリティの位置



リミナリティは単なる通過儀礼理論から出発し、社会文化歴史・宗教など幅広い変化を説明する理論へと拡張された。

通過儀礼とリミナリティの3段階

ファン・ヘネップ(Arnod van Gennep)は、世界の通過儀礼が共通して3段階構造を持つと分析した。このうち第二段階である転移過程において「リミナリティ」が核心的役割を果たす。

通過儀礼の構成段階

すべての通過儀礼は次の三段階を経る:

- ◆ 分離儀礼(分離儀禮, rite of separation): 既存世界との断絶
- ◆ **転移/過渡儀礼(轉移/過渡, rite of transition): リミナリティ段階**
- ◆ 統合儀礼(統合儀禮, rite of incorporation): 新たなアイデンティティの獲得と復帰

1 分離儀礼(Separation)

既存の社会的地位・状態・位置から分離される段階。日常と断絶し、以前の地位と役割が解体される。



2 転移儀礼 / リミナリティ (Liminality)

どちらでもない「境界的」状態。既存秩序から脱し、曖昧かつ不確定な状態に置かれる。

i 特徴: 曖昧模糊、創発性、両価性(両價性)、平等、匿名性、脱構造化



3 統合儀礼(Incorporation)

新たなアイデンティティと地位を付与され、社会へ再統合される段階。以前とは異なる新たな社会的存在として生まれ変わる。

リミナリティ理論の発展過程

1

ファン・ヘネップの通過儀礼理論

アルノルド・ファン・ヘネップ(Arnold van Gennep)

主要概念: 通過儀礼(rite of passage)におけるリミナリティの発見、分離-転移-統合の3段階構造化
~20世紀初

意義: 人類学において初めて儀礼の共通属性である「通過」を発見したが、デュルケームの批判により一時的に縮小

2

ヴィクター・ターナーの再発見と拡張 ヴィクター・ターナー(Victor Turner) 1960~80年代

主要概念: リミナリティとコミュニタス、社会劇(Social Drama)理論、構造-反構造-構造の変化モデル

意義: 儀礼論を越え、社会文化・宗教変動の一般原理へと拡張、公演学(Performance Studies)との連携

3

現代社会と近代性分析への拡張

エディス・ターナー、ジグムント・バウマン、シュムエル・アイゼンシュタットなど

1990年代~現在
主要概念: 日常と突難のコミュニタス、液体近代(Liquid Modernity)、多元的近代性(Multiple Modernities)

ヴィクター・ターナーの社会劇理論

社会劇(Social Drama)とは、ヴィクター・ターナーがファン・ヘネップの通過儀礼概念を社会・文化・宗教諸領域へ拡張して提示した概念であり、社会を背景とする「演劇」のようだと見なした。

社会劇の特徴

- 普遍性: 「全世界的に起こる普遍的な社会文化現象」の変化を説明
- 弁証法的過程構造(studue)→反構造(anti-studue)→構造(studue)の循環的变化
- 心理的機能苦痛に満ちた人生の転換過程を円滑に通過できるよう補助

社会劇の四段階

1. 違反(Breach)

既存の社会規範や規則の違反



2. 危機(Crisis)

葛藤の拡散と対立の深化



3. 是正/治癒(Redressive Action)

問題解決のための公式・非公式なメカニズムの作動



4. 再統合/分裂(Reintegration/Schism)

社会の再統合または新たな分裂の始まり

構造と反構造

構造(Structure): 既存社会の階層的・分化された組織形態

反構造(Anti-structure): 平等・連帯感が強調されるコミュニティ形態。既存秩序が一時的に無化される状態

コミュニティと反構造の概念

👥 コミュニタ

ス
ヴィクトア・ターナーが提示した人間の特別な相互関係性を示す概念で、リミナリティ状態において形成される共同体的経験である。

主な特徴

- ✓ 平等性:既存の社会的地位・階級・身分がすべて消滅する平等な関係
- ✓ 連帯感:強い共同体意識と所属感の形成
- ✓ 即興性:構造化されたパターンではなく即時的・直接的な関係の形成

「ンデンプ族の事例:成人式の過程で子どもたちは見知らぬ環境に独りで放り込まれた状況のなか生存するため、強い連帯感と協同心を形成しコミュニティを経験する」

✂ 反構造

既存の社会構造秩序に対比される概念であり、構造化された社会の枠組みを一時的に逸脱ないし逆転させる状態である。

主な特徴

- ✓ 匿名性:儀礼参加者は同一の服装と無所有状態で表象され、個人のアイデンティティが弱体化される
- ✓ 役割逆転:社会的地位・権威が逆転し、弱者が一時的に権威を持つ
- ✓ 社会的構造の中止:既存の社会規範秩序が一時的に中断される現象

関係図:構造(structure) → 反構造(anti-structure) → 新たな構造(new structure)

*ターナーの社会劇理論では危機と変化の核心的メカニズムとして作用

「反構造をなすコミュニティとリミナリティは密接に関連しつつも区分される。リミナリティは存在様相と条件に関するものであり、コミュニティはそうした状態にお

液体近代と多重近代性

ジグムント・バウマンの液体近代論

(Liquid Modernity, 液體近代)

近代性を永続的リミニリティによる極端的流動的変化状態として解釈

- ◆ 封建的価値克服後の代替的価値の樹立に失敗
- ◆ 液体のように不確定的で持続的に変化する状態
- ◆ 近代性の特徴である両面性(両價性, ambiguity)の強調
- ◆ 現代人の意気消沈と不確定性の説明

シュムエル・アイゼンシュタットの多重近代性

(Multiple Modernities, 多重近代性)

聖(聖)と俗(俗)概念の再定義を通じた統一的近代性の提示

- ◆ 単一の西歐的近代性モデルの拒否
- ◆ 多様な文化的文脈で出現する複数の近代性の認定
- ◆ 聖と俗の境界の転換にあるリミニリティを強調
- ◆ 文化的アイデンティティを維持しながら近代化の可能性を提示

リミニリティとの関連性

弁証法を超えた解釈

ヘーゲルの弁証法が提示できなかった現代社会の問題点と不確実性をリミニリティによって説明



両面性と曖昧性

子どもを洗った水を捨てながら子どもまで捨てた結果 – 既存価値転覆の副作用



脱近代性の分析

リミニリティが永続化された現代社会の不安定性と創発性の共存の説明

東西近代性の比較

	東洋(東洋)	西洋(西洋)
思维方式	相関的思惟、陰陽論	弁証法的思惟、二分法
近代性の発生	帝国主義支配と危機の中での自生的発展	中世の危機(モンゴル侵入、ペスト)と他文明との交流
展開方向	宇宙(天)から個人(人)への内面化	個人から宇宙へ拡張
リミナリティ解釈	包越(包越)、加一倍法(加一倍法)、化(化)	通過儀礼、社会劇、コミュニケーション
韓国的特徴	接化(接化)の特性 – 異質な要素の統合と超越	

「西洋と東洋はいずれも天観地観人間観を通じてリミナリティを構築し近代性を実現するが、自己から宇宙へと拡大していく西洋と、宇宙から自己へと拡大していく東洋とは、近代性のリミナリティ形態が異なる。」

リミナリティ適用方式

西洋のリミナリティ

個人合理性から社会へと拡張される方式

個人 → 宇宙/社会

- 通過儀礼を通じた個人の社会編入 弁証法
- 的发展(正-反-合)を通じた進歩 液体近代(バウマン):永久的リミナリティ状態

東洋(韓国)のリミナリティ

宇宙的原理が個人へ内面化される方式

宇宙/天 ← 個人

- 陰陽五行の循環的思惟体系
- 東学の侍天主(侍天主) – 天を我が内に侍る 大
- 巡思想の包越(包越) – 包含しつつ超越する

自生的近代性の特徴

東アジア三国のうち韓国の東学思想と大巡思想は、自生的な三界観(天地人)を通じてリミナリティ的近代性を具現し、接化(接化)の性格により既存要素と新たな要素を統合する

自生的近代性と東学/大巡思想

東学思想とリミナリティ

イ

● 侍天主(侍天主)思想

天を侍るという概念により、人間内面の神性と世俗の境界を往来するリミナリティ的特性を内包

● 生命思想と相関的思惟

金芝河の研究東学思想に見出される生命中心思想は、西洋弁証法と異なる生成的思惟方法として自生的近代性の特徴

● 開闢(開闢)思想

既存秩序と新たな秩序の間の境界に位置するリミナルな轉換期的思想として、近代性の変化機制の役割を果たす

大巡思想とリミナリティ

イ

● 解冤相生(解冤相生)

怨恨を解いて相生する概念であり、李英蘭の研究によれば対立的関係から第三の要素を創出するリミナリティ特性

自生的近代性の特徴

東学思想と大巡思想は西欧の近代性と異なり、相関的思惟と主体性の均衡を通じて韓国的リミナリティモデルを構成

- 聖(聖)と俗(俗)の再配置:宗教的聖性と日常の世俗性を分離せず統合的に接近
- 加一倍法(加一倍法)と接化(接化):既存の基盤の上に新たな要素を加える包越的变化方式でリミナリティを具現
- 内在的超越金益斗の研究において提示された「白い陰の美学」のように、対立を越えた第三の空間を創出

西欧近代性との相違点

西欧近代性	個人→宇宙へ拡張
東学/大巡思想	宇宙→個人へ内面化
変化方式	対立的弁証法vs.相関的リミナリティ

リミナリティの現代的適用

現代社会のリミナリティ適用領域



日常と文化領域

- 祭り、舞台芸術、大衆文化における境界の解消
- ロマンティック・ラブのリミナリティ的特性と現代的解釈
- 労働と余暇の境界の変化と意味の転換



社会政治的領域

- 光州民主化運動など市民抵抗運動のリミナリティ
- デジタル空間におけるアイデンティティと現実の境界の曖昧化
- 社会変動期のコミュニティの形成と新たな秩序の創生

リミナリティの現代的意味

災害と危機的状況における役割

エディス・ターナーは災害状況においてコミュニティが重要な対処メカニズムとして作用することを強調した。COVID-19 パンデミック状況においても社会言論や制度的対応だけでは解決困難な際、宗教的対処とともに自発的共同体形成が危機克服に寄与した。

“「**危機状況**はリミナリティ様相を通じて、**創発的共同体形成の契機**となる」

脱近代性との連結性

リミナリティは弁証法が説明できない現代社会の両面性と不確実性を説明する代案理論であり、特に「永久的リミナリティ」として特徴づけられる液体近代の状況において、東学思想と大巡思想の自生的リミナリティ的接近が代案的近代性モデルとして提示され得る。

現代的意義

リミナリティは単なる通過儀礼理論を越え、現代社会の複雑な変化と混沌のなかで新たな創発の原理を理解する理論的枠組みへと拡張された。

結論および示唆点

研究結論

リミナリティは近代性と脱近代性を連結する統合的概念枠組みとしての価値を持つ。

✓ 近代性解釈の拡張

リミナリティは弁証法の限界を越え、近代性の不確定性と両面性を効果的に説明する。

✓ 自生的近代性の再発見

東学思想と大巡思想は西欧的近代性とは異なる経路の自生的近代性を示す重要な事例である。

✓ リミナリティの普遍性

聖(聖)と俗(俗)の境界変化を通じたリミナリティは、東西洋共通の社会変動機制として作用する。

研究の示唆点

「リミナリティは不確定性の時代に新たな創発性と可能性を開く概念的道具となる。」

💡 理論的示唆

- ◆ 東西洋近代性比較のための新たな理論的枠組みの
- ◆ 提供 弁証法を越える代案的思惟方式としての価値
- ◆ 韓国新宗教思想の学問的再評価の可能性

🌱 実践的示唆

- ◆ 現代社会の不確定性と危機克服のための洞察コミュ
- ◆ ニタス的連帯意識を通じた社会問題解決の可能性文
- ◆ 化的アイデンティティと普遍的価値の調和的統合方
案



自生的近代性の聖(聖)・俗(俗)持続機制としての再活性化

Revitalization as Mechanism of Sacred-Secular Continuity

目次

1

3

5

7

9

11

2

4 ハンサム・レイクとロングハウス運動

6 東学思想の自生的近代性

8 東学vs大巡思想比較

10 自生的近代性の意義

12 参考文献

研究の背景および目的

西欧近代性と非西欧近代性

- 近代性の様相は帝国と植民地により、伝統に対する態度の差異が鮮明に区分される
- 西欧近代性:伝統に対する反作用としてアイデンティティを規定、否定的立場を強調
- 非西欧近代性:西欧への反作用として伝統に肯定的立場を強調

自生的近代性と再活性化

- 非西欧社会では西欧の近代化を単純に模倣せぬ自生的近代性が発現 アイデンティティ
- 危機のなか、リミナリティを通じた内的革新と再活性化により伝統の再構成を追求
- 本研究は東学思想と大巡思想を通じて韓国の自生的近代性の特性と意味を明らかにしようとする

理論的背景リミナリティ理論と再活性化理論

ターナー(Turner)のリミナリティ理論

理論

- 社会的構造と秩序の境界(limen)にある転換的狀態
- 通過儀礼として既存秩序から分離、変化後に再統合される過程
- リミナリティは変化の機制として作動し、危機に対応する変化の中心
- コミュニタス(communitas):リミナリティ状態において形成される平等な共同体

ウォレス(Wallace)の再活性化理論

理論

- 文化的危機状況における持続機制としての伝統の再解釈
- メイズウェイ(Mazeway):社会構成員が持つ精神的イメージ、社会的有機体に適応する方式
- アイデンティティの危機に対する集団的対応としての伝統の再構成と継承
- 文化変化より伝統の連続性に焦点を置く理論

両理論の相互補完性:リミナリティは変化の過程を、再活性化は持続の過程を説明

ウォレスの再活性化理論概観

メイズウェイ(Mazeway)概念

定義

社会構成員が持つ精神的イメージ(mental image)で、個人が社会に適応していく方式

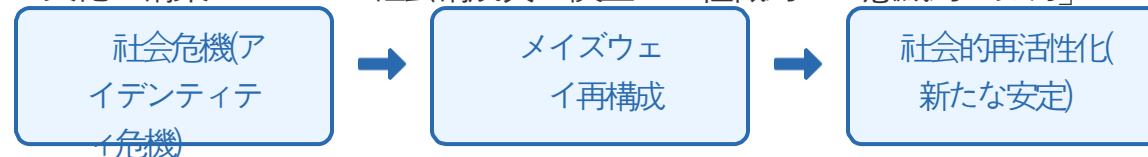
本来の意味:「迷路(maze)」-複雑な社会環境のなかで個人が道を見出す方式

- メイズウェイは社会的環境における物理的客体に対する認識とストレス最小化方式を含む社会危機時にはメイズウェイにも危機が発生し、これは物質的危機よりも大きな脅威として作用

社会有機体論と再活性化

- ウォラスは人間社会を巨大な有機体と見なし、危機時には社会が緊急措置を取る

再活性化とは「より満足のいく文化を構築するための社会構成員の慎重かつ組織的かつ意識的な努力」



再活性化理論は、リミナリティ理論が変化機制に焦点を当てるとすれば、持続機制に焦点を当てる ”

ハンサム・レイクとロングハウス運動

背景:アイデンティ

ティの危機

- 19世紀初め、米国北東部インディアン部族イロコイ族のセネカ族指導者
- 米国の植民政策による伝統的権威の喪失とアイデンティティ危機の経験
- 他のインディアン指導者たちと同様に酒と放縦の生活に陥ったが、神秘体験により人生が変化

再活性化の過程

- **神秘体験**
神霊的存在が現れ、インディアンの再活性化された未来を啓示し、節制された規律ある生活を要請
- **実践および伝播**
自らの経験と教えを直接実践し周囲の人々に伝播
- **ロングハウス運動の誕生**
ハンサム・レイクのいたロングハウスに集い、規律運動に同参する共同体を形成

北米インディアンの他の再活性化

運動

ゴースト・ダンス(Ghost Dance)

踊れば、インディアンのユートピアが速やかに到来するという啓示に従った儀礼的運動

ペヨーテ儀礼(Peyote Ritual)

「ペヨーテ」という薬草を摂取する儀礼を通じた霊的再活性化運動

意義:ウォラスの再活性化理論はハンサム・レイクの事例を研究して定立された → 数多くの再活性化運動の共通段階を発見する土台と

再活性化の5段階

ウォラス(Anthony F. C. Wallace)が提示した再活性化運動の五段階過程

1

正常状態(Steady State)

社会構成員がメイズウェイ(社会的認識体系)を通じて安定した生活を営む状態

2

個人的ストレスの期間(Period of Individual Stress)

外部的要因(植民支配、文化衝撃など)により個人がアイデンティティの混乱とストレスを経験する時期

3

文化的歪曲の時代(Period of Cultural Distortion)

伝統的信念体系が崩れ、外部文化との衝突により社会的混乱が発生する段階

4

活性化期間(Period of Revitalization)

既存の伝統を新たに解釈再構成する核心段階として、次の要素が現れる:

- ◆ メイズウェイ再構
- ◆ 成組織の形成
- ◆ 文化変形
- ◆ 意思疎通と伝播
- ◆ 文化的適応の日
- ◆ 常化

5

新たな安定状態(New Steady State)

東学思想の自生的近代性

東学の登場背景

- 朝鮮のアイデンティティ危機:長きにわたる宗法的秩序が日本と西欧の資本主義的物質文化に脅かされる
- 伝統の崩壊:数千年にわたり続いた伝統が西欧文明により迷信としてタブー視される
- 指導層の危機:尊敬されていた指導者たちが迷信を煽る詐欺師へと転落

「東学」名称の意味

- ① 東洋の認識方法 相關性
- ② 内部変化と成長の追求
- ③ 西学への対応 再解釈案

東学の自生的近代性と運動の方向

- リミナリティ的特性:内部的変化と成長の追求、正心修身(正心修身)の実践
- 再活性化の側面:儒仏仙の統合、伝統の創造的再解釈と専有
- 二重的対応:内聖(内聖)は反封建、外王(外王)は反外勢として対応
- 人間中心主義:人乃天(人乃天)思想を通じた人間価値の近代的再定立
- 自生的近代性:西欧模倣ではなく伝統の連続と変化により独自の近代性を追求

66 東学は、その名称からして西学という外部イデオロギーに対する対応様相が現れており、相關的思惟を通じた自生的近代性の典型的事例である。

大巡思想の自生的近代性

大巡思想の登場と意義

- 大巡真理会は東学関連団体のなかで東洋伝統の宗団名称と教理体系を維持し大宗団へと成長した唯一の団体
- 東学が提示した理想世界の実現にまで東学の範囲を拡大した大巡思想
- 「参東学」という名称により東学の完成を意味し、儒仏仙伝統の統合を志向

リミナリティと再活性化の観点

- リミナリティ様相において成し遂げた変化が持続する唯一のコミュニタスとしての意味
- 大巡思想は無極道から宗団へと発展し、リミナリティより再活性化が適合する段階へ進入
- 巡思想の「会(會)」はコミュニタスに対応し、パトリック・ロードはこれを東洋の近代性として解釈

東学と大巡思想の自生的近代性の相違点

東学が初期のアイデンティティ危機に対するリミナリティ的対応であったならば、大巡思想は東学の再活性化に失敗した地点で伝統を新たに解釈し持続させることにより、自生的近代性の完成された形態を提示する

東学vs大巡思想比較

リミナリティと再活性化の観点から見た東学思想と大巡思想の相違点と共通点

比較項目	東学思想	大巡思想
登場背景	「西学」への直接的対応、反封建・反外勢運動	東学のリミナリティを持続させる新たなコミュニティの形成
リミナリティ様相	内面的変化、成長中心の通過儀礼的特性の強調	宗団へと発展し再活性化中心へ転換
名称の意味	「東」:東洋的認識論の方法論的対応	「真東学」:東学の完成と本質的価値の回復
伝統に対する態度	儒仏仙伝統の統合的受容	東洋伝統宗団の名称と教理体系の継承発展
再活性化の特性	伝統の再解釈と社会変革的ユートピア志向	「回」という特性を通じた東洋的近代性の具現
核心的価値観	人乃天(人乃天)の人間中心主義	母自欺(母自欺)を通じた自己省察と創造的受容

相関的思惟と自生的近代性

相関的思惟の概念

相関的思惟(Correlative Thinking):東洋伝統の認識論の核心思惟方式であり、事物間の連関性と全体的脈絡を重視する思考体系

西洋の分析的思惟

- ◆ 対立的要素の弁証法的調和
- ◆ 二項対立による分析 原子論
- ◆ 的世界観

VS

東洋の相関的思惟

- ◆ 相補的要素の境界の調和
- ◆ 全体論的アプローチ
- ◆ 天・地・人合一の世界観

自生的近代性とポストヒューマニズム

- 西欧近代性がルネサンスを通じたギリシア・ローマ文化の再活性化として始まったように、東洋もまた自己の伝統の再解釈を通じて自生的
- 近代性を構築過去には相関的思惟が東洋近代性を停滞させた要因と目されたが、韓国新宗教はこれを自生的近代性の土台として活用
- ポストヒューマニズム時代の到来:人間と機械の結合が問題となる現代において、韓国新宗教の人間中心主義は新たな価値を提供
- し得る 東学と大巡思想の相関的思惟は認知宗教学領域において脱近代性を越え、ポストヒューマニズム時代の代案的哲学として

「東学思想と大巡思想のリミナリティと再活性化は、相関的思惟の創造的受容を通じた自生的近代性の具現である」

結論および意義

研究要約

- ✓ 東学思想と大巡思想に現れる自生的近代性が、相関的思惟リミナリティ・再活性化理論を通じて体系的に説明される
- ✓ 非西欧社会の独自の近代化経路として、伝統の再解釈と創造的受容の過程を確認

韓国新宗教の普遍的価値

- 💡 相関的思惟を土台とする人間中心主義は、ポストヒューマニズム時代の代案的思想として再照明可能
- 💡 無自欺(毋自欺)の自己省察と創造的受容は、現代社会のアイデンティティ危機解決に寄与

自生的近代性の成果

- ✓ 西欧模倣ではなく伝統の連続と変化を通じた独自の近代性の構築
- ✓ 大巡思想の「回」という特性が東洋的近代性のコミュニタスとして機能

今後の研究方

向

- ➔ 人工知能時代の人間中心主義と韓国新宗教思想の接点の研究
- ➔ 東アジア他国家の自生的近代性との比較研究が必要

「相関的思惟のリミナリティと再活性化は、西欧近代性の限界を越える
代案的近代性の可能性を提示する」

Chapter III

東学思想の自生的近代性と作乱(作亂)の リミナリティ

Autogenous Modernity and Liminality of Disorder in Donghak

目次および研究概要

本研究は東学思想に現れる自生的近代性とリミナリティ(境界性)を、東西洋の天観・地観・人間観の比較を通じて体系的に分析する。

東学の侍天主(侍天主)、造化定(造化定)、永世不忘(永世不忘)思想に現れる東西洋思惟の創造的融合と自生的近代性を照明する。

1. 問題意識と研究背景
2. 理論的背景:リミナリティ概念
3. 東西天観の比較
4. 東学の天観とリミナリティ
5. 東西地観の比較
6. 東学の地観とリミナリティ
7. 東西人間観の比較
8. 東学の人間観と社会的意味
9. 結論および含意

問題意識と研究背景

- 東学思想は東西洋思想の衝突と融合が起きた19世紀朝鮮の時代的脈絡において 自生的近代性 を形成する
- 天観(天觀)・地観(地觀)・人間観(人間觀)は東西洋思惟体系を比較する核心概念
 - 西洋: 存在論的 思惟体系(実体論、本質/現象の二分法)
 - 東洋: 生成論的 思惟体系(属性論、変化/相関性の重視)
- リミナリティ (Liminality) は境界性、中間性、転換性を意味
 - 社会的・文化的秩序が解体・再構成される境界的空間
 - 東学思想において東西思惟の衝突と合成を通じた創造的転換を分析する概念
- 本研究の目的:東学の侍天主(侍天主)・造化定(造化定)・永世不忘(永世不忘)思想に現れるリミナリティを探究し、韓国近代性の自生的側面を再照明

理論的背景リミナリティ(Liminality)概念

- リミナリティ 境界性, 中間性, 転換性 を意味する概念は

リミナリティ (Liminality) の特性:

既存の秩序が解体され新たな秩序が形成される 境界的空間 として、変換と創造の可能性が開かれる場

- 東学思想研究におけるリミナリティの適用
 - 東西思维体系の 衝突と融合 を通じた創造的境界空間
 - 「系統発生が個体発生を反復する」関係性による天地人三才の新たな配置
- リミナリティの分析次元
 - 天観(天観): 形相的/同化的天観の境界と侍天主概念の出現
 - 地観(地観): 質料的/凝縮的地観の境界と造化定概念の出現
 - 人間観(人間観): 成長論的/接化的人間観の境界と永世不忘思想
- リミナリティから見た 自生的近代性: 東西洋近代性の単なる中間ではなく、創造的再構成と新たな可能性の空間
東学の

東西天觀の比較 - 西洋の形相的天觀

- 存在論的(実体論) 天觀の特徴
 - 変化を 実体 (substance) で説明
 - 本質と現象の二分法的区分
- プラトンとアリストテレスの宇宙觀
 - プラトン:イデア(形相)世界と現象世界
 - アリストテレス:形相(形相, form)と質料(質料, matter)
- 西洋の形相的天觀は 下から上へ 觀察する方式であり、現象を形相(本質)と質料(物質)に区分し、実体を通じて変化を説明する存在論的構造を形成
- 四原因説と四元素説(地水火風)
 - 四原因:形相因、質料因、作用因、目的因
 - 四元素:地(地)、水(水)、火(火)、風(風)
 - 第五元素としての神(神)またはイデア
- 西洋近代性と天觀の変化
 - 地動説とカルヴァンの予定説
 - マテオ・リッチの『天主実義』と西学の伝

東洋の同化的 (同化的) 天観

- 東洋の天(天)概念の二重性
 - 天外天(天外天): 天地を生んだ無極、太極の天(天の上の天)
 - 理法天(理法天): 天地に区分された天、理致としての天
- 同化的(同化的)天観の特性: 異質的要素を一つに統合する性質
 - 天円地方(天圓地方): 天は円く地は方 - 形態的区分
 - 天道地徳(天道地徳): 天は道(道)、地は徳(徳) - 機能的区分
- 陰陽五行(陰陽五行)を通じた生成論的宇宙観
 - 西洋 実体論的变化 (地水火風)と異なり 属性への変化 を説明の
 - 相関的思惟を通じた万物の有機的関係の説明: 陰陽→三才→四象→五行→八卦の発展
- 天観・地観・人間観の三重構造
 - 同化(同化): 天(天)の属性 - 異質な要素の統合(炭素同化作用のように)
 - 凝縮(凝縮): 地(地)の属性 - 圧縮と凝結(水蒸気の凝縮のように)
 - 接化(接化): 人(人)の属性 - 異なる要素の出会いと融合

東学思想の侍天主(侍天主)天觀とリミナリティ

- 侍天主(侍天主)は東学の核心的教理で、「天主を奉る」の意味
 - 崔水雲の天師問答体験から生じた宗教的覚醒の産物
 - 西洋の人格的天主と東洋の理法的天觀の創造的融合
- 「我が心すなわち汝の心なり。人が各々自らの心の中の天主を侍り奉戴すれば、それが即ち天道なり。」 - 『東經大全』より
- 東西天觀のリミナリティ (境界的融合)
 - 西洋:形相的(形相的)天觀 - 超越的神と人間の分離
 - 東洋:同化的(同化的)天觀 - 天人合一、天と人間の一体化
 - 東学:超越的/内在的天を同時に認める仲介的立場
- 自生的近代性 の表現
 - 天主の「内在性」を強調 内有神靈 外有氣化(内有神靈 外有氣化) 教理
 - 無極大道(無極大道)、造化(造化)、無為以化(無為以化)など東学独自の独創的天觀を形成
 - 単純な西学への対応ではなく、東西洋思想の創造的総合と新たな思想体系の構築

東西地観の比較 - 西洋の質料的地観

- 西洋の **質料的地観** :存在論的観点から地(地)を質料(matter, hyle)として概念化
- **地水火風地水火風の四元素説**
 - 地を構成する物質的実体としての四元素
 - アリストテレスの四原因説と連結された物質的世界観
- **原子論的世界観**
 - 分析的思惟全体から部分ではなく部分から全体へ
 - デモクリトス、エピクロスから近代科学まで続く伝統
- **三機能体としての地観**
 - インド・ヨーロッパ語族文化圏の共通した構造
 - 天(祭司) - 地(戦士) - 人(生産者)の社会的構造化
- 存在論的地観の近代的変容
 - 神を排除した近代科学の物質主義的パラダイム
 - 対象化・道具化された自然とし **機械論的世界観**としての地:

東洋の応縮的地観

- 東洋の地観は 応縮的 特性を持つ:異質な要素が絡み合って固まる現象
 - 地(地)は天(天)の影響を受け圧縮・収縮する力が作用
 - 天門地方(天圓地方) 天道地徳(天道地徳)の相互関係性の強調
- 土(土) 概念の重要性
 - 五行における中央の土(土)は陰陽の調和と変化の中心的役割
 - 時間の変化においても辰・戌・丑・未(辰戌丑未)の土(土)が変化を仲介
- 風水地理 と 明堂 思想
 - 地の気運を重視する風水地理の体系と三数分化(三數分化)理論
 - 九宮八卦(九宮八卦)と河図洛書(河圖洛書)へ発展した地の象徴体系
- 相関的思惟 に基づく地と人間の関係
 - 地は人間と天の仲介者:凝縮は同化と接化を連結する媒介体
 - 西洋の質料的地観と異なり、地そのものが生命力と神聖性を持つ有機体的存在

東学思想の造化定(造化定)地観とリミナリティ

- 造化定(造化定)の意味と地観(地観)
 - 「造化」は天地運行の結果、「定」は定着と具現を意味
 - 西洋の質料的地観と東洋の凝縮的地観のリミナリティ
- 東学にお 地の神聖化 と大衆性
いて
 - 地は単なる物質ではなく霊性と調和の空間として再解釈
 - 民衆の生活空間である地の地位を再設定する平等的観点
- 東学教理の 道教的要素 と性理学的融合
 - 呪文・符籙の自然な融合と思想的再解釈
 - 伝統儒学の理法天と西洋の形相的天観の融和
- 地観のリミナリティ と社会的意味
 - 空間の階層的区分が解体される社会的リミナリティ
 - 自生的近代性の土台としての地と民衆の連結
 - 東学農民運動当時「作乱」を通じた新たな社会空間の創出

西洋の成長論的人間観

- 存在論的人間観 :人間本質と成長中心
- キリスト教的起源
 - 原罪論:救済を通じた成長と変化
 - プロテスタント倫理:自己啓発、労働を通じた神聖化
- 近代的発展
 - デカルトの理性的主体:思惟する個人
 - 啓蒙主義:理性と合理性を通じた人間の完成

- 現代的展開
 - マズロー 自己実現:成長欲求の段階的完成の
 - 実存主義:自らを作り上げる主体としての人間
 - ポストヒューマニズム:技術と結合した超越的進化
- 西洋人間観の特徴
 - 垂直的成長 :部分から全体へ、下から上へ
 - 個人主義的 :集団より個人の成就と発展を強調
 - 進歩と発展:持続的な変化と成長を肯定的価値として評価

東洋の接化的人間観

- **接化(接化)** : 異質な存在が対等に出会い差異を保存しつつ統合する属性
 - 東西人間観の核心的相違点を示す概念
 - 天円(天圓)と地方(地方)、天道(天道)と地徳(地徳)の融合としての人間
- **天地と人間の相互化育** : 天地人三才の相互作用
 - 乾健坤順(乾健坤順): 天の健(健)と地の順(順)を統合する人間
 - フラクタル的(fractal)人間-宇宙観: 天(1)、地(2)、人(3)において、人は天地を包含する(1+2+3)
- **相関的思惟** と儒学心理学
 - 集団性と個別性の調和: 個人は社会と宇宙の有機的一部
 - 内面(理)と外面(気)の統合、心性(心性)と情感(情感)の均衡
- 東洋的接化人間観の社会的具現
 - 政治君子の道徳的模範と社会調和の理想
 - 学問: 経世致用(經世致用)と内聖外王(内聖外王)の統合

同化(同化)

中心志向統合
天(天)の属性

凝縮(凝縮)

完璧主義・収斂
地(地)の属性

接化(接化)

混合主義・融合
人(人)の属性

東学思想の永世不忘(永世不忘)の人間観とリミナリティ

- 永世不忘(永世不忘)の意味と背景
 - 天地人(天地人)三才(三才)における「人(人)」の位相と役割の高揚
 - 東学で人間は天地と対等な三才の一部として宇宙的位相を獲得

「内有神霊 外有気化」(内有神霊 外有
氣化)

内面には神霊があり、外面には気化がある

- 侍天主(侍天主)中心の人間観
 - 人間内面にある「神」の発見と奉り → 人間の神聖化
- 社会的意味とリミナリティ
 - 接主制(接主制)を通じた平等思想の制度化 → 階層の境界の解体
 - 東学農民運動と民衆の地位上昇 → 身分制の実質的崩壊
 - 自生的近代性 : 西欧的近代性と区分される内在的平等性と共同体的人間観

東学の自生的近代性と社会的意味

自生的近代性の特徴

- 構造的創発性 :東西思惟体系の創造的結合
- 脱境界的統合 :天・地・人 三才の統合的再構成
- 侍天主造化定・永世不忘として表現された自生的近代性
 - 西欧化されなかった韓国的近代性
 - 内在的超越性を通じた新たな宇宙観

社会的歴史的意味

- 身分制の解体と平等思想の実践的モデル
- 東学農民運動の歴史的意義
 - 社会変革運動の思想的基盤の提供
 - 民衆主体の歴史意識の形成
- 現代的含意
 - 韓国民主主義運動の思想的土台
 - ポスト近代性への転換可能性

結論および含意

東学思想のリミナリティと自生的近代性

- 東学思想は単なる宗教運動ではなく **東西思惟の統攝的再構造化** を通じた自生的近代性の出現
- 侍天主(侍天主)造化定(造化定)永世不忘(永世不忘)は、形相的/同化的天観、質料的/凝縮的地観、成長論的/接化的人間観の創造的融合

自生的近代性の意味

- 西欧的近代性と区分される **内在的平等性** と **霊性の社会的具現**
- 社会変革と精神的革命が同時に成し遂げられる韓国的近代性の特殊性

現代的示唆点と今後の研究方向

- 生態危機と近代性の危機の時代、東学思 **統合的宇宙観** が提示する代替的思惟体系
- ^{想の}身分・階級・性別など既存の境界の解体と再構成を通 **ポスト近代性** への可能性
- ^{いた}東学-天道教-宗教多元主義へと連なる韓国的近代性言説の系譜学的研究の必要性

1

侍天主（侍天主）天觀（天觀）の自生的近代性

Autogenous Modernity in the Sicheonju View of Heaven

目次

- ① 研究の背景および
目的
- ② 西洋の形相的天観
- ③ 東洋の同化的天観
- ④ 東西天観の比較

- ⑤ 東西洋地観の比較
- ⑥ 東西人間観の比較
- ⑦
- ⑧

研究の背景および目的

- 天観地観人間観は人間の実存と生存の基本的な土台
- 時代の画期をなす「近代」のような変化は、天観地観人間観の変化が尺度
- 東西天観地観人間観の根本的差異-存在論と生成論
- 侍天主天観を中心とした自生的近代性の価値の探究
- 東西文明の世界観の比較を通じた新たな人文学的洞察の追求

西洋の形相的天観

- アリストテレスの存在論:実体(本質)と現象を区分して変化を説明
- 四原因説:形相因・質料因・作用因・目的因を通じた変化の原因の説明
- 四元素説:地(地)、水(水)、火(火)、風(風)によって物質を構成
- プラトンのイデア論:目に見える世界はイデアの反映
- 形相(形相):質料を変化させる本質的原理としての天
- 近代性の基礎:存在論的思惟体系が西洋近代科学観に大きな影響

東洋の同化的天観

- 無極と太極の二重的天概念
 - 天地を生んだ無極太極(天外天)と天地に区分された後の天
- 陰陽五行の属性的思惟と相関的宇宙観
 - 実体ではなく属性で変化を説明する生成論的思惟体系
- 天円地方(天圓地方)、天道地徳(天道地徳)の関係
 - 異質なものが一つに統合される同化(同化)の天観
- 神(神)の多層的概念
 - 上帝、天地神明、祖上神の有機的統合構造

東西洋天觀比較

西洋の形相的 (形相的) 天	東洋の同化的 (同化的) 天
根本思惟体系 実体で変化を説明する存在論的思惟	根本思惟体系 属性で変化を説明する生成論的思惟
代表哲学 プラトンのイデア、アリストテレスの四原因説と四元素説	代表哲学 陰陽五行の相関的思惟体系、天地人三才観
天に対する認識 本質と現象の二分法的区分、境界が明確な実体	天に対する認識 天円地方、天道地徳として相互補完的關係、有機的統合
変化の観点 形相と質料の結合と分離、実体の作用	変化の観点 異質なものの同化と統合、相関的感応
神(神)の存在 唯一神、超越的・絶対的存在、第五元素としての 火	神(神)の存在 上帝と多様な神明、天外天の重層的概念、天 地方

東西地観人間観の比較

西洋の観点	東洋の観点
地観(地観)	
質料的(質料的)地観 形相(形相)を受け入れる質料としての地	凝縮的(凝縮的)地観 天円(天圓)に対する地方(地方)、内部へ向かって収縮する力
地水火風の四元素、明確な境界と実体を持つ物質世界	천도(天道)에 대한 지덕(地德), 음양오행 법칙이 내재된 유기체
人間観(人間観)	
成長論的(成長論的)人間観 機能的分化と個性性の強調、合理的理性の主体	接化的(接化的)人間観 異質な存在が出会い一つに調和する融合
천(形相)과 지(質料)의 중재자로서 자연을 대상화하고 지배하는 존재	天道(天道)と地德(地德)の融合を通じた調和と仲介の役割

結論および意義

- 西洋の形天的天観と東洋の同化的天観の根本的差異の究明
- 侍天主天観の自生的近代性は、西欧的近代性と差別化された独自の価値を持つ
- 存在論と生成論の相互補完的統合を通じた新たな世界観の可能性の提示
- 東西文明の相互理解と融合のための学問的土台の準備
- 現代社会の人文的省察と未来志向的思惟体系の構築に寄与



西洋の形相的（形相的）天観

The Western Formal View of Heaven

序論:天観・地観・人間観の重要性

西洋近代性の中心要素は天観・地観・人間観の変化にある。

- 近代西洋の世界観の転換:

地動説とカルヴァンの救済予定説いずれも、天観・地観・人間観に対する観点の変化を示す代表的事例

- 実存と生存の基本的土台:

天観・地観・人間観は、人間の実存と生存に直結する最も基本的な哲学的土台として作用

- 文明変化の尺度:

時代の画期をなす近代のような変化は、天観・地観・人間観の変化がその尺度となる

「天観・地観・人間観は人間の実存と生存に直結する最も基本的な土台であるため、時代の画期をなす近代のような変化は、天観・地観・人間観の変化が尺度となる。」

プラトンのイデア論と天地人三才

東西洋いずれにおいても天地人三才は宇宙認識の根本土台として作用してきた。

- プラトンのイデアと天地人の関係:

目に見えないイデア世界は東洋の「天」に、目に見える世界は「地」に、観察する存在は「人」に対応

- 西洋と東洋の宇宙観の関連性

プラトン哲学においても宇宙・神・人間という三つの次元の構造が天地人三才と類似した形で現れる

- イデア論の核心:

目に見える宇宙は目に見えないイデア世界の反映であるという観点－形相的天観の根幹



アリストテレスの形相-質料論

アリストテレスはプラトンのイデア論を現実的に再解釈した。

- プラトン理論の実用的変形:
イデアを形相(形相, *eidos*)、現実世界を質料(質料, *hyle*)として再解釈し、実践的な宇宙論を提示
- 形相と質料の結合:
形相的な天(天、本質)と質料的な地(地、現象)の結合により事物と変化を説明
- 人間の位置:
人間は天の形相を地に具現するのを助ける媒介体として、天地の間に位置する
- 存在論的世界観の始まり:
変化を実体として説明する存在論的思惟の基礎を確立し、西洋哲学の根幹を形成

「アリストテレスにおいて、形相的な天、質料的な地の形態で現れる宇宙は、天の形相が地を質料として変形させた世界として現れた。人間は天の形相を地に現れさせるのを助ける存在と見なされる。」

西洋の存在論的思惟体系

西洋思惟において変化と存在は「実体」を土台に説明される。

- 実体論的思考様式

変化の過程を論理的に説明するためには、必ず実体として説明されねばならないという存在論的理論

- 思惟の方向性:

東洋の全体から部分へ、上から下へと思惟する方式と異なり、西洋は部分から全体へ、下から上へと拡張される思惟体系を採

- 択

本質と現象の区分:

西洋存在論では本質(形相)と現象(質料)が明確に区分される 東洋の一元論的思考と異なり二分法的構造を形成

「存在論と生成論は、今日、東洋と西洋を区分する主要な思惟体系となる。西洋は実体を通じて変化を説明する存在論と言える。」

アリストテレスの四原因説と四元素説

四原因説(四原因説)

- 形相因(形相因):
事物の本質と形態を規定する原因
- 質料因(質料因):
事物を構成する物質的基盤
- 作用因(運動因(作用因):
事物に変化を起こす外部原因
- 目的因(目的因):
事物が志向する最終目標

四元素説(四元素説)

- 地(地):
大地、圧縮と爆発の元素
- 水(水):
水、収斂と下降の元素
- 火(火):
火、拡張と上昇の元素
- 風(風):
風、膨張と移動の元素

存在論的宇宙観の土台

アリストテレスの実体論は、変化の過程が論理的に説明されるためには必ず実体として説明されねばならないという存在論的理論である。四原因説と四元素説は西洋形相的天観の核心的土台となった。

形相と質料が結合する目的と作用が実体を形成する四原因であり、質料が区分されたものが地水火風の四大元素である。こうした理論は17世紀まで西洋において宇宙を説明する最も合理的な理論と見なされた。

東西思想の相違点

西洋の存在論的思惟	東洋の生成論的思惟
変化の原理 変化を実体として説明する存在論的体系 実体を仮定しない生成論的体系 実体としての形相(eidos, form)が質料に作用 陰陽五行のように属性の変化として説明	変化の原理
世界認識の方 向 下から上へ(部分から全体へ) 本質(形相)と現象(質料)の二分法的区分	世界認識の方 向 上から下へ(全体から部分へ) 現象と本質の一元論的統合
核心理論と応用 四原因説と四元素説(地水火風) 変化の原因を実体的に究明(解剖学の発達)	核心理論と応用 陰陽五行の相生相剋体系 感応とフラクタル的变化の説明(生体医学の発達)

「東洋が陰陽五行によって変化を属性として説明するとすれば、西洋の地水火風は実体として説明するという差異があり、この差異は東西洋の近代性と世界観に大きな影響を及ぼす。」

結論および意義

西洋の存在論的天観が持つ哲学的意味と現代的含意

- 実体論に基づく世界観

プラトンのイデアから、アリストテレスの形相-質料論へと連なる西洋哲学の根幹は、天観・地観・人間観の存在論的構造を形成する

- 東西思惟の構造的差異:

変化を実体として説明する西洋の存在論と、実体を前提としない東洋の生成論の対比は、文明発展の異なる経路を説明する

- 現代的意義

今日の科学パラダイムと世界観の形成に依然として影響を及ぼす存在論的天観の遺産を理解することは、東西洋文明の融合と相互理解のための哲学的土台となる

「要するに、西洋の存在論的天観はアリストテレスから始まる地水火風の世界観に代表される。下から上へ事物を観察する西洋の場合、本質と現象で実体は区分され、現象は本質である形相が現象である質料を実体として変化させるものである。」



東洋の同化的（同化的）天観

The Eastern Assimilative View of Heaven

目次

1. 天(天)概念の二重性
2. 神(神)概念の区分
3. 東洋の三才観: 同化的(同化的)天観
4. 応縮的(凝縮的)地観と接化的(接化的)人間観
5. 西洋思想との比較
6. 陰陽五行と相關的思惟
7. 東洋の神明体系
8. 天地之用(天地之用)と12運星
9. 儒仏仙と天地之用
10. 結論および意義

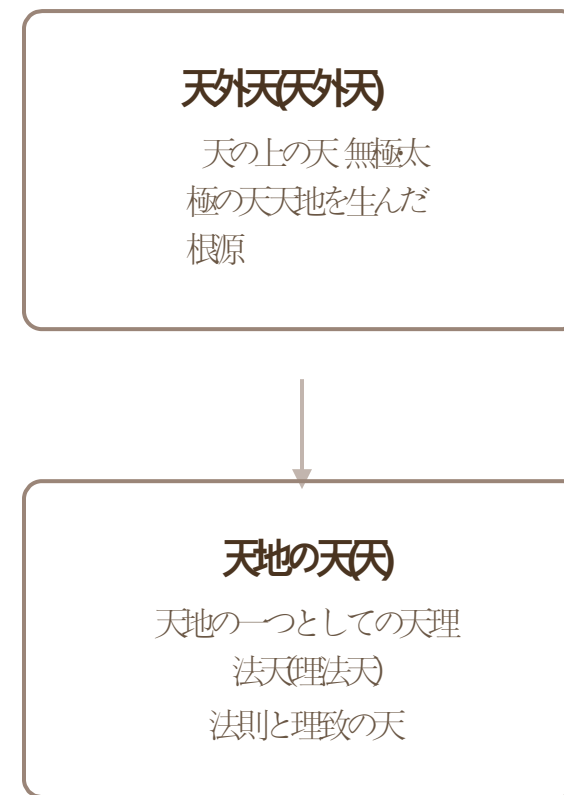
天(天)概念の二重性

東洋の天概念は二つの意味に区分して理解する必要がある。

第一に、「天地」に区分されたのちの天・天地のうち一つとしての天であり、性理学では理去天(理去天)と呼ばれ、理致と法則の側面が強調される。

第二に、「天外天」としての天:天地を生んだ無極・太極の天であり、天の上の天を意味し、万物の根源的存在である。東学思想では上帝あるいは天主と表現される。

こうした天概念の両義的使用は、東洋の天観・地観の議論を理解しがたくする原因ともなる。



神(神)概念の区分

東洋思想において神(神)概念もまた、天(天)と同様に両義的に使用される。

上帝(上帝):天外天に対応する神であり、天地を作った究極的存在を意味する。
東学思想では「天主(天主)」とも表現される。

神明神明:天外天が作った天地の中で天地を運行する主体としての神を意味する。陰陽五行の法則に従って各々固有の領域を持つ。

東西洋の差異西洋は統一的に神を天外天の上帝のみを主に強調したのに対し、東洋では神明を含む複合的概念として発展した。

東洋の神概念

最高神(上帝)+ 天地神明+ 祖上神

西洋の神概念

唯一神(絶対神)中心

上帝(上帝)

天外天に対応する新天地
を作った根源的存在 東
学思想の天主

神明神明

天地を運行する主体 陰陽五
行の法則に従う各々固有の
領域を保有

祖先神

東洋の三才観 同化的(同化的)天観

三才観(三才観)とは? 天(天)地(地)人(人)の関係を説明する東洋哲学の基本体系である。

同化的(同化的 assimilation)天観天円地方(天圓地方)、天道地徳(天道地徳)に代表される陰陽原理において、天観は異質的要素を一つに統合する同化の属性を持つ。

同化とは、自己を中心に外部へ向かって絶えず拡張する力を意味する。異質的なものを統合しつつも主従関係を形成して秩序を作り出す特徴がある。

東洋の精神文化である儒仏仙にも同化の性格が現れる:

- 道教-自然に同化
- 儒教-内面に同化
- 仏教-法に同化



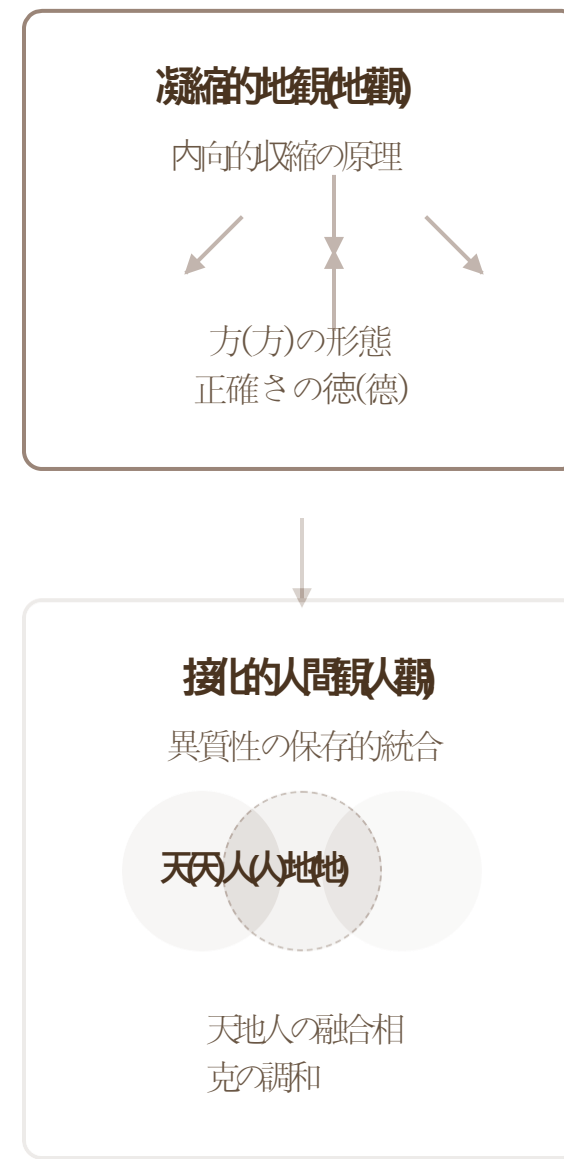
凝縮的(凝縮的)地観と接化的(接化的)人間観

凝縮(凝縮)は、天円に対する地方、天道に対する地徳に現れる特性であり、互いに異なる要素が一つに絡み合って固まる現象を意味する。

- 凝縮の特徴同化と異なり成分そのものは変わらず、異質的な存在を圧縮して一つの小さな統一体を成す。内部へ向かって収縮する力を持つ。

接化(接化)は、互いに対立的な存在が仕合って一つに融け合うことであり、二つの存在が対等に出会い異質性を保存する統合を意味する。

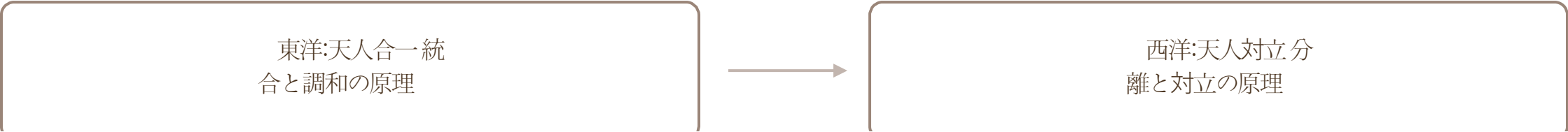
- 接化の特徴相対の融合として混合主義を志向する。天円と地方の融合、天道と地徳の融合により人間の属生を形成する。



西洋思想との比較

東洋と西洋の天観・地観・人間観は根本的な思惟方式の差異を示す。

	東洋思想	西洋思想
思惟方式	生成論的(生成論的)	存在論的(存在論的)
天観(天観)	同化的(同化的) 万物を一体として統合	形相的(形相的) アリストテレスの形相
地観(地観)	応縮的(應縮的) 異質的存在の圧縮	質料的(質料的) アリストテレスの質料
人間観(人間観)	接化的(接化的) 対立的存在の調和	成長論的(成長論的) 個体の成長と発展
特徴	属性中心の変化相 関的思惟、統合志向	実体中心の変化異 化(異化)、分化(分化)



陰陽五行と相関的思惟

相関的思惟は東洋天觀の核心的特徴である。陰陽五行の法則は物質のみならず神明(神明)にも適用される。

陰陽・三才・五行・八卦は起源は異なるが、同一の三才を見なす観点の差異であり統合的体系を形成する。

相関的思惟は実体的な西洋の思惟とは異なり、属性中心の天觀を形成し、万物と神明に一貫した法則として作用する。

邵康節の加一倍法(加一倍法)に従い、これらは三才を細部にわたって解釈する統合的原理となる。



東洋の神明体系

東洋の神概念は西洋の絶対神とは異なり、複合的体系から成り立っている。

- 東洋の神は最高神(上帝)、天地神明、祖先神に区分される。
- 西洋の天使とは異なり、宇宙万物に数多くの神明が存在し、これらはそれぞれの領域で陰陽五行の法則に従い宇宙を運行する。
- 上帝は神明の事に干渉せず、東洋では最高神が非人格化された法則に近く認識された。
- 人間が死んで成る祖先神は天地の運行には関与せず、人間の子孫が神明と結合することを管掌する。
- すべての神明は陰陽五行の秩序の中でそれぞれの役割を遂行する。

上帝(上帝)

最高神、天外天の神 天地を創造した根源的存在



天地神明(天地神明)

宇宙運行を管掌する神的存在 陰陽五行の法則に従う領域分担



祖先神(祖先神)

死後に人間となる神子孫の修道と神明の結合を管掌

天地之用(天地之用)と12運星

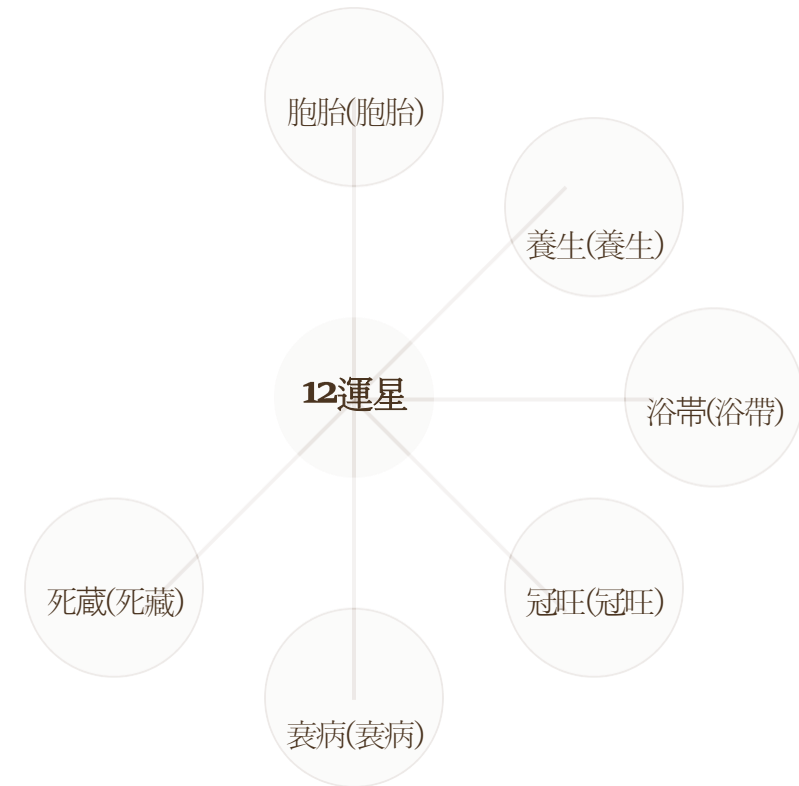
天地之用は天地の運行と作用を意味する。

天地に配置された十干(干)十二支(支)は、天地化育(天地化育)のために天地昇降(天地昇降)を通じて天地の用である十二運星(運星)の作用をなす。

十二運星は次のような生命循環の段階を表す:

- 胞胎(胞胎):生命の種が地に蒔かれる
- 養生(養生):地が生命の種を育てる
- 沐帶(浴帶):種が天の雨露(雨露)で沐浴する
- 冠旺(冠旺):旺盛に活動する時期
- 衰病(衰病):気運が弱まり病むこと
- 死蔵(死蔵):死と保存

これは生命の誕生と成長、消滅までの全過程を含んでおり、
キャンベルの原質神話十二段階や十牛図のような過程を示す



天地之用の意味

十干十二支が物理学の原子に相当するなら、天地の用である十二運星は原子が結合し新たな性質が現れる分子に相当する。天地の運行が単純な機械的作用ではなく、誠敬信(誠敬信)によるものであることを示す

儒仏仙と天地之用(天地之用)

東洋の思想体系である儒仏仙は、天地の用(天地の作用)を反映して形成された。

道教(仙道)天地の胞胎(胞胎)を反映した虚無の思想であり、自然に同化する特性を持つ。

仏教:天地の養生(養生)を反映した寂滅の思想であり、法に同化する特性を持つ。

儒教:天地の浴帯(浴帯)を反映した以詔(以詔)の思想であり、内面に同化する特性を持つ。

このように東洋の三思想は天地の用の異なる側面を反映しつつも、いずれも「同化」という共通の特性を持つ。



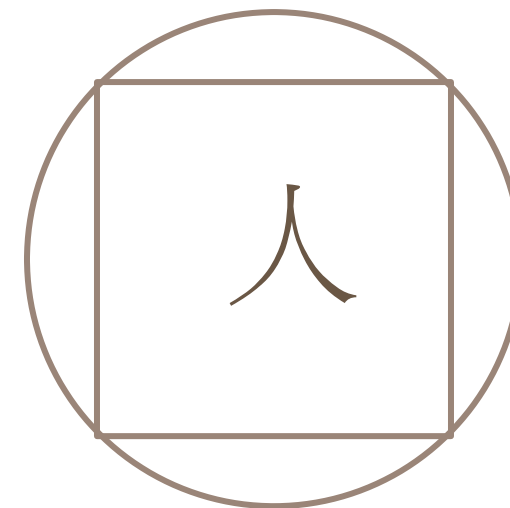
結論および意義

東洋の同化的(同化的)天観は次のような特徴と意義を持つ:

統合的世界観東洋の天観は万物を一体に統合する同化的特性を持ち、分析と支配よりも自然と人間の調和を追求する。

属性中心の思惟西洋の実体論的思惟とは異なり、東洋は陰陽五行の属性で変化を説明し、各単位内部で統一的構造を示す。

現代的意義東洋の同化的天観は、現代社会の機械論的世界観の限界を超え、有機体的自然観と和解の哲学を提示する。



天(天)地(地)人(人)和(和)

- 同化的(同化的)天観
- 凝縮的(凝縮的)地観
- 接合的(接合的)人間観



近代東西洋天観の衝突と相克化（相克化）

Clash of East-West Views of Heaven

目次

1

2 天観の基本概念: 地水火風vs陰陽五行

3 マテオ・リッチと東西天観の比較

補儒論と天観の衝突

5 太極の理(理)問題

6 天観の相克化と現代的意味

7 東学思想の造化的対応

8 結論および
議論

🔗🔗 東西天観の相互関係と現代的意味を探究する

問題提起および概要



東洋天観

陰陽五行(陰陽五行)

衝突



西洋天観

地水火風(地水火風)

- ① 近代期、東西洋の世界観(天観)が歴史的に初めて本格的に遭遇し衝突
- ② 東洋の陰陽五行: 相関的自然観、変化と循環の原理を重視
- ③ 西洋の地水火風: 人格神に基づく自然観、実体と属性の区分
- ④ 二つの天観の衝突は東アジア伝統思想と社会体系に根本的変化をもたらす
→ このような衝突は単なる文化交流ではなく文明パラダイムの衝突として展開

天觀の基本概念 地水火風 vs 陰陽五行



地水火風(地水火風)

西洋の四元素論

- 1 地(地)、水(水)、火(火)、風(風)の四つの基本要素
- 2 実体(substance)としての自然観－独立的存在として認識
- 3 アリストテレスの自然哲学に起源、中世まで継承
- 4 人格神によって創造された世界の基本構成要素



陰陽五行(陰陽五行)

東洋の相関的自然観

- 1 음양의 상보적 관계와 금(金), 목(木), 수(水), 화(火), 토(土)의 오행
- 2 相関性(相関性)に基づく自然観－関係と変化の重視
- 3 循環的(相生)関係と抑制的(相剋)関係の均衡
- 4 理法(理法)としての自然法則、内在的世界観

類似点と相違点

類似点

- 자연의 기본 구성요소를 설명하려는 시도
- 물질세계와 정신세계를 연결하는 매개 역할

相違点

- 서양: 실체 중심 vs 동양: 관계 중심
- 서양: 독립적 존재 vs 동양: 상호의존적 존재
- 서양: 인격신 중심 vs 동양: 이법(理法) 중심

マテオ・リッチと東西洋天観の比較



マテオ・リッチ(Matteo Ricci, 1552-1610)

イタリア出身のイエズス会宣教師で中国名「利瑪竇(利瑪竇)」
天主教を東アジアに伝播し東西洋思想の架け橋の役割著書:『
天主実義(天主實義)』-西洋天観を東洋に紹介

「性理学以前の儒教經典である『書経書経』に現れた東洋の天観が西洋の天観と類似しており、むしろ優れた点があることに感嘆する。」

- マテオ・リッ
チ

古代儒教天観

人格的上帝(上帝)観念人間
と疎通する超越的存在

変化

性理学的天観

理法的(理法的)天理(天理)観念
非人格的自然原理としての天

- ① リッチは儒教經典『書経』において西洋の人格神概念と類似する要素を発見し歓迎した
- ② 人格神(西洋・初期儒教)と理法神(性理学)の間の根本的差異と論争を触発
- ③ 『天主実義』を通じて西欧天観を紹介し、東アジア知識層に新鮮な衝撃を提供

補儒論と天観の衝突

補儒論(補儒論)

西洋天主教が儒教を
補完するという理
論

— 一時的協力 ▶

深刻な衝突

根本的世界観の差異
による葛藤の深化

補儒論の展開

- マテオ・リッチの戦略
儒教本来の思想が天主教と通じるという主張
- 朝鮮両班層の反応
儒教本来の趣旨を活かす点で一部受容
- 衝突発生
表面的類似性を越えた根本的世界観の差異を発見

核心的衝突点

- 1 人間観の差異
西洋:個体的・独立的人間
東洋:関係的・相関的人間
- 2 地観(地観)の差異
西洋:地球を客体的対象として東
洋:地を天(天)と相関的關係とし
て
- 3 文明的危機の深化
近代化過程における伝統哲学の存立の危機

太極の理(理)問題と天觀の相克化



西洋実体論 Substantialism

理(理)を実体(substance)と見る観点

- 独立的存在としての神(God)
- 外在的創造主
- 人間と自然の分離



対立



東洋理気論 Li-Qi Philosophy

理(理)を原理(principle)と見る観点

- 万物の内在的原理
- 気(氣)との不可分性
- 天人合一(天人合一)思想

天觀の相克化(相克化)現象

- ① 存在論的対立太極の理(理)が自立的存在であるかの論争は東西洋哲学の根本的衝突点
- ② 神觀(神觀)の葛藤人格神と理法神の間の対立、靈魂不滅説を巡る論争
- ③ 人間觀の変化神尊人卑(神尊人卑)と人尊神卑(人尊神卑)関係の錯乱
- ④ 社会的結果東洋では陰陽五行と天地神明が否定され、西洋では無神論的世界觀が形成

「相剋は相剋を生み、天地と人間は惨憺と錯乱し尽滅の境地へと轉換されるのが今日の現実である。」

東学思想の造化と結論



- ① 東学思想の造化的アプローチ 韓国の東学は侍天主(侍天主)を通じて
陰陽五行の自然哲学と地水火風の人格神概念との間の調和を試みる
- ② リミナリティ(境界性)の思想的価値
東西洋の極端な対立を超え、異なる世界観の間の「中間地帯」を開拓
- ③ 自生的近代性の模索
西欧化や伝統固守を超えた新たな哲学的思惟の可能性の提示

現代的示唆点



東西思想の対話的出会い



相克化を超えた相生の可能性



現代の地球的危機と世界観の回復



東学思想の侍天主天観に現れたリミナリティ

Liminality in Donghak Sicheonju View of Heaven

目次

- 1 研究背景
- 3 水雲の天師問答と宗教体験
- 5 リミナリティ概念と適用
- 7 無極大道と造化の概念
- 9 結論および意義
- 2 東学思想の侍天主(侍天主)天観概念
- 4 東学と西学の比較
- 6 東学の思想的背景
- 8 東学天観の自生的近代性
- 10 参考文献および質疑応答



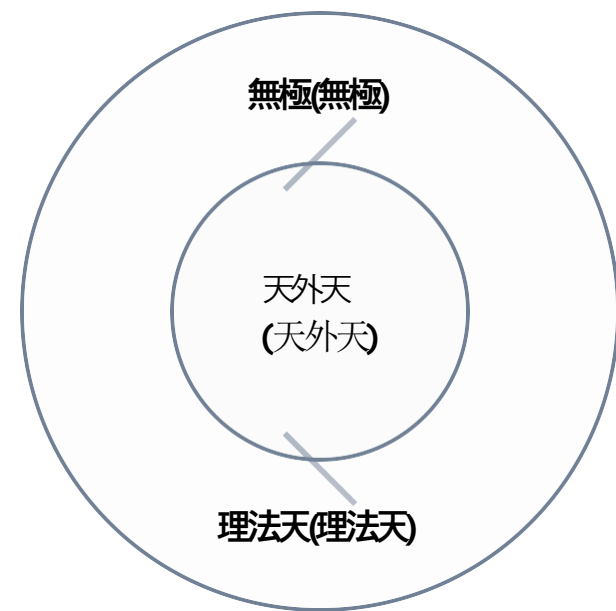
研究背景性理学の限界と東学の登場

性理学の理法天(理法天)は朝鮮後期社会において新たな時代の問題を解決できない段階に至った。

このような背景のもと、東学は天の上の天である天外天(天外天)、すなわち無極(無極)の天という新たな天観で時代的解法を提示した。

東学が提示した新たな天観は性理学の理法天とは異なり、天の上の天、すなわち天外天(天外天)との直接的疎通を強調した。

東学思想は既存の天観・地観・人間観において注目されなかった天外天の概念を強調し、天観・地観・人間観の自生的近代性を図る。



東学の天観理法天を超えた天外天との直接的疎通

東学思想の侍天主天観の概念

侍天主(侍天主)とは、性理学の「天」と異なる「天の上の天」との直接的疎通を意味する東学の核心概念である。

水雲は生涯にわたり「天の上の天」との直接疎通のために自身のすべての力量を投入し、四十年余の長年の努力の末に庚申年(1860)の天師問答(天師問答)に至る。

東学思想に現れた上帝の出現は、正統性理学の立場から見れば怪力乱神(怪力亂神)に属する異例的かつ異端的な姿であった。

- 独自の天観侍天主概念は性理学の理法天(理法天)、西学の天主(天主)と差別化される
- 『東経大全』と『龍潭遺詞』: 水雲の天師問答はこの二つの経典に詳細に記録されている
- 天外天(天外天)との疎通天の上の天と直接対話する宗教的体験を



→
侍天主 造化定 永世不忘 万事知
(侍天主 造化定 永世不忘萬事知)

- 『東経大全』

水雲の天師問答と宗教体験

天師問答(天師問答)水雲が1860年(庚申年)陰曆四月五日に上帝から受けた最初の啓示と、その後六ヶ月間持続した対話

東学思想が宗教史において最も特徴的な点は、創始者の宗教経験が非常に詳細かつ長い時間にわたって表現されたことである。

水雲は四十年に近い長い歳月努力してきた末に、ついに庚申年に至り天師問答に到達する。

「思ひかけず四月に心がぞくりとし身体が震えてある神仙の言葉があり、ふと耳に聞こえたので驚いて問うたところ、答えて曰く「**恐れ、恐れるな。世の人々は我を上帝と呼ぶが、汝は上帝を知らぬのか**」」

水雲の天師問答以後に著述された『龍潭遺詞』と『東経大全』にこの経験が詳述されている

最初の啓示
上帝との出会い
1860年4月5日

『龍潭遺詞』
『東経大全』著述
1年後

6ヶ月間

霊的対話

-水雲の天師問答の中から-

東学と西学の比較

運則一(運則一)、道則同(道則同)、理則非(理則非)

水雲は東学と西学の違いをこう表現する:「運数は一つで道は同じだが、理は異なる。」目標(運、道)は同じだが、方法と理は異なる。

東学は天の気運が身に凝縮される気化(氣化)を強調し、守心正氣(守心正氣)の修練を通じた自然な教化を重視する。

一方、西学は「自らの利益のための祈祷」に偏重し、形式はあるが実がないと東学は批判する。

我が受ける道は天主の意に従い自然に世を教化する
化する(吾道無爲而化矣)

区分	東学(東學)	西学(西學)
天観(天觀)	天外天(天外天)	天主(天主)
修練方法	呪文修練 守心正氣 (守心正氣)	祈祷中心 司祭と信徒の分離
特徴	気化之神 (氣化之神)	形式のみで 実質がない
教化方式	無爲而化 (無爲而化)	自己の利益のための 祈り

ケン・ウィルバー:「西洋思想の最大の弱点は修養論がないこと

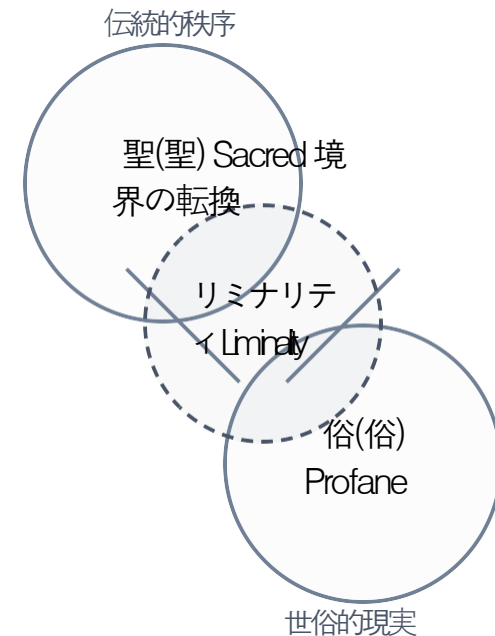
リミナリティ概念と適用

リミナリティ (Liminality) とは、境界の転換、聖-俗の再配置、既存秩序の解体と再構成が行われる境界的状态を意味する。

東学思想は次のようなリミナリティ特性を示す:

- 天外天との直接的疎通を通じて日常世俗において聖(聖)を経験する聖俗の順位再配置
- 守心正気(守心正氣)を通じて既存の重層化した問題を解決する境界越え
- 性理学の「理法天」と西学の「天主」を超えた新たな天観(天觀)の提示

多重近代性理論において、近代性は東学思想のように既存の天観・地観・人間観から疎外された部分を再活性化し、聖-俗の順位を変えて俗が聖を受容できるように転換する統攝とリミナリティにおいて発生する。



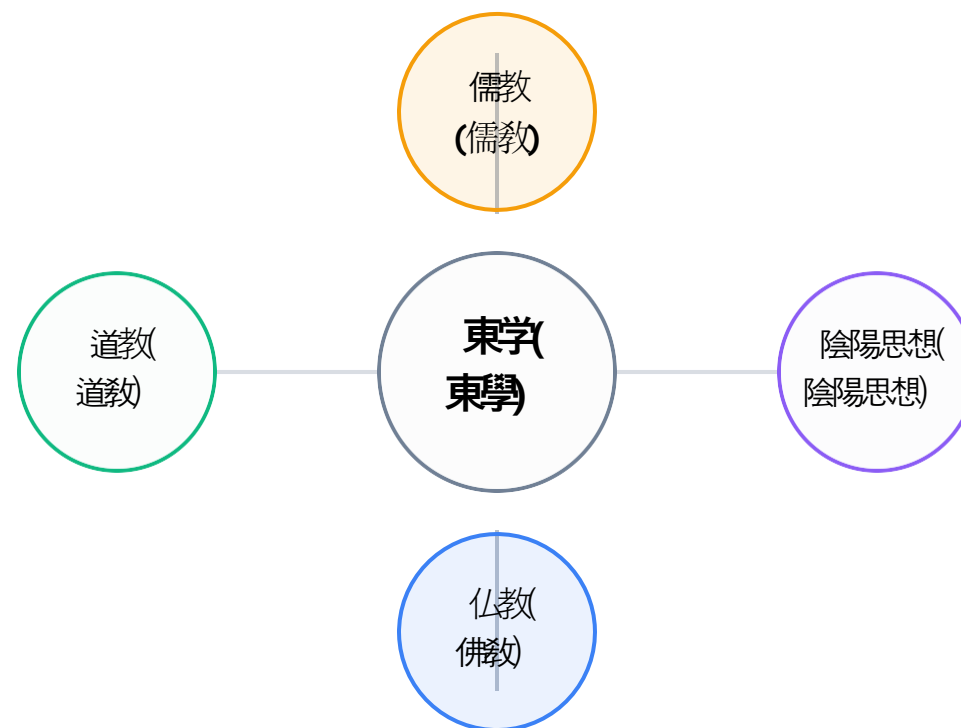
東学思想のリミナリティ:
聖-俗の境界を超えた新たな近代性の
創出

東学の思想的背景—儒仏仙道教の影響

東学は多様な東アジア伝統思想を基盤として独自の
天観を発展させた。

多様な宗教的背景の中で、東学は独自路線を確立しつつ
も既存伝統の長所を受容した。

- **儒教(儒教)**東学は性理学的天観を基盤とし、「気(氣)」
の役割を強調した。しかし性理学の理法天を超えた
新たな天観を提示した。
- **道教(道教)**朝鮮後期の鸞壇道教(鸞壇道教)の影響で呪文
修練と東学歌詞に道教伝統が反映された。水雲は甌山
により「後天仙道の宗長(宗長)」に任命されもした。



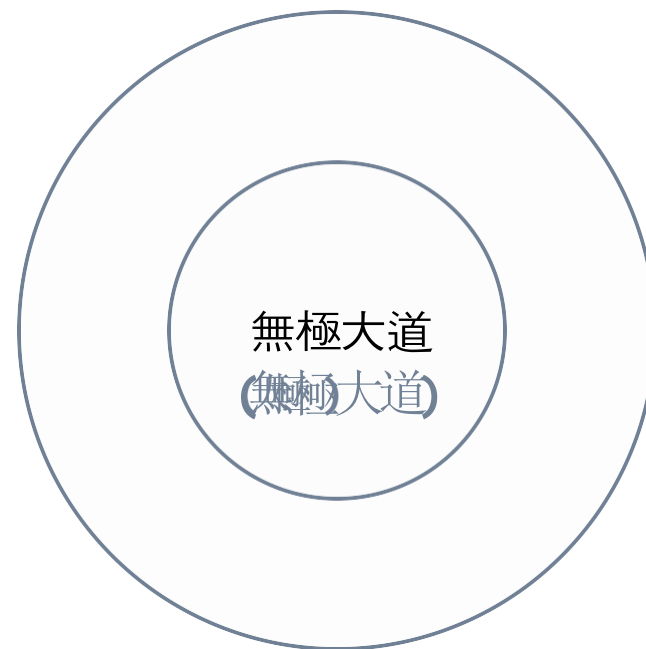
無極大道と造化の概念

無極大道(無極大道)は陰陽が区分される以前の状態である太極よりも前の状態を指す概念で、太初の宇宙と関連する。

これは天観の側面で天の外为天、すなわち天外天(天外天)に相当する。

「汝は無窮無窮の道に至ったので、修鍊鍛練し、書を著して人を教え、法を正しくして徳を敷けば、汝をして長生し天下に輝かせよう。」

造化(造化)と無為而化(無爲而化)水雲は呪文を解釈しつつ、「造化」とは「無為而化」を意味し、「定(定)」とは「合其徳(合其徳)、定其心(定其心)」を意味すると解いた。



造化(造化)

創造的变化

無為而化(無爲而化)

自然な変化

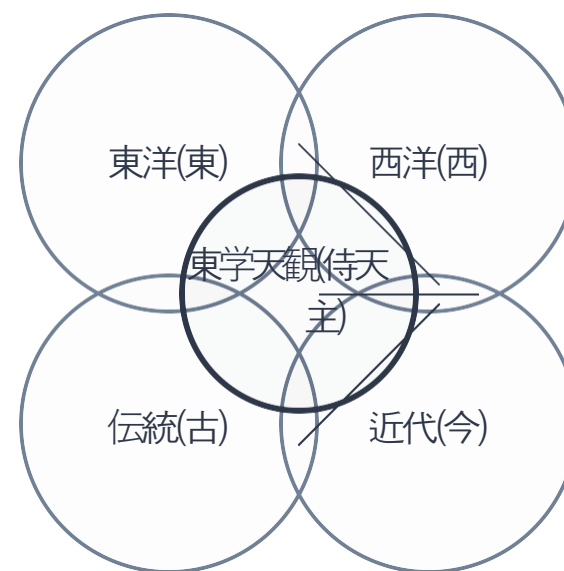
東学天観の自生的近代性

東学思想の天観は東西古今の天観を包括かつ超越する自生的近代性を示す。

東学の侍天主(侍天主)天観は性理学の理法天と西学の天主を統合しつつ、これを超える天外天との直接的疎通を強調する。

境界の解体と再編-東学思想は聖なるものと世俗 伝統と近代の境界を再構成し、日常において聖(聖)を経験できるようにする。

東学思想の天観が持つ自生的近代性は聖と俗を再編し、東西古今の天観を包括し超越する。東学思想の天観は東洋儒仏仙の長所を最大限受容し、西洋天観の優秀性も包容しようとする。



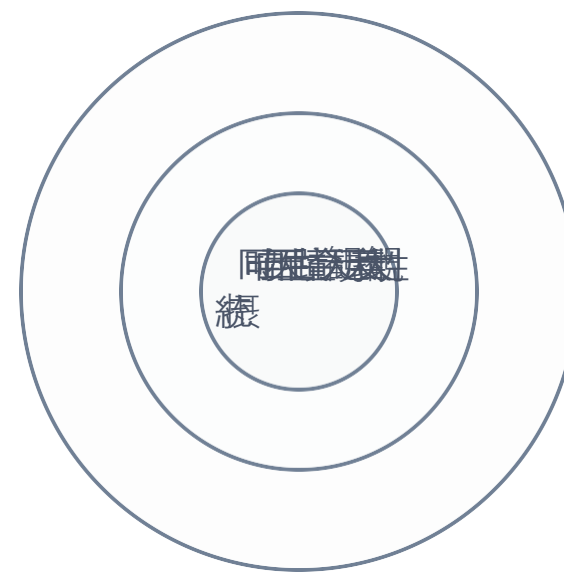
東西古今(東西古今)を統攝する
東学天観の自生的近代性

結論および意義

東学の侍天主天観は伝統と近代を包摂し、東西古今の天観を包括する超越的思惟体系を示す。

これは既存の天観で注目されなかった天外天概念を中心に、聖と俗の境界を再編するリミナリティを通じて自生的近代性を成就した。

- 現代的意義東学の天観は今日、伝統と現代、東洋と西洋、宗教と科学の境界を超える新たな思惟様式のモデルとなる。
- 自生的近代性西欧帝国主義への抵抗であり主体的な近代性の模索であるという側面から現代の危機の代替的観点を提供する。
- 守心正気と呪文修練実践的側面においても現代人の精神的危機に対する解法を提示する。



東学思想のリミナリティ:
境界を超えた統合的思惟

参考文献および質疑応答

主要参考文献

- 崔済愚、『東經大全(東經大全)』、「論学文(論學文)」
- 崔済愚、『龍潭遺詞(龍潭遺詞)』
- 裴榮淳、『東学に現れた侍天主の天地人思想研究』
- 金容沃、『東学とは何か』
- 黄玠、『梧下記文(梧下記文)』
- 崔時亨、『海月神師法説(海月神師法説)』
- 李敦化、『天道教創建史(天道教創建史)』
- 尹錫山、『東学教祖 水雲 崔済愚』
- 尹以欽、『韓国宗教研究』
- 安裕京、『退溪と東学の心性論比較研究』



質疑応答

東学思想の侍天主天観とリミナリティに
関する

質問を歓迎いたします。

ありがとうございます。

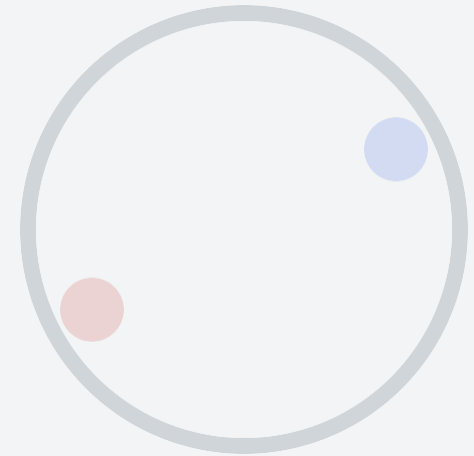
2

造化定地観の自生的近代性

Indigenous Modernity of the Johwajeong View of Earth

目次

- 1 研究の背景および目的
- 2 西洋の質料的地観
- 3 東洋の応縮的地観
- 4 東西洋地観の衝突
- 5 天地関係の相克化
- 6 東学思想の造化定の地観
- 7 結論および意義



| 研究の背景および目的

研究の必要性

- 東西の地観(地観)への比較哲学的アプローチの不在
- 西欧中心の近代性言説から脱した自生的近代性の模索が必要
- 東学思想の造化定地観が持つ現代的意義の再照明

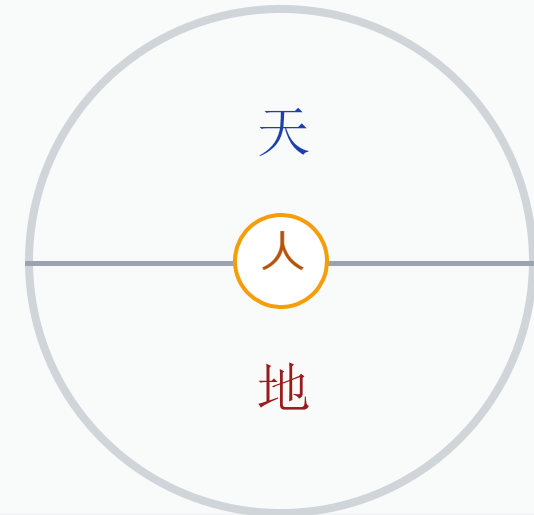
「地観(地観)概念の概要

- 西洋:質料的(質料的)地観－超越的形相が実現される質料としての
- 東洋:凝縮的(凝縮的)地観－天地の気を形体と器として実現する存在

研究目的

- 東西地観の哲学的構造と衝突様相の分析
- 核心的問い東西の地観がいかに衝突し、東学思想の造化定地観はこれをいかに克服して自生的近代性を形成したのか?
- 天地関係の相克化過程とその近代的意味の考察

東学思想の造化定の地観に現れたリミナリティと自生的近代性の解明



西洋の質料的地観

超越天(天外天)中心の西洋自然観

- 超越天に応じてイデア、唯一神、唯物論的理性へと地観が変
- 化地は形相が実現される質料的存在と見なされる

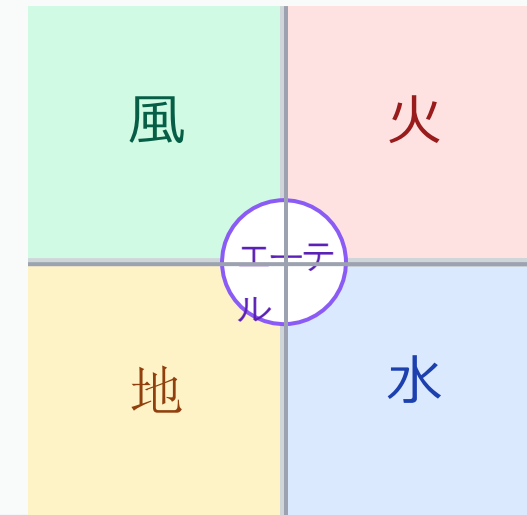
アリストテレスの四元素説(地水火風)

- タレスからエンペドクレスへと続く四元素説の発展
- 西洋の地水火風:「実体」からなる相関的思惟(東洋の陰陽五行との差異)
- 第五元素(エーテル)と四元素の均衡体系

実体論的、原子論的世界観

- 物質文明の発展に寄与したが、神明体系の崩壊と自然支配へと転落
- **核心:西洋の質料的地観は超越天に由来する形相が実現される場所として地を見る観点であり、近代物質文明の発展に寄与したが、人間-自然の関係を支配-被支配関係へと転落させた。**
- 近代原子論的世界観:自然を分析・支配の対象へ転換

インド・ヨーロッパの三機能体系と天観・地観・人間観の構造的連関



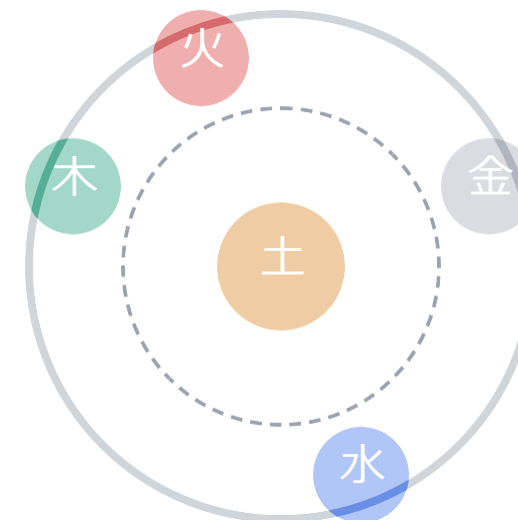
東洋の凝縮的地観

内在天および天地神月中心の地観

- 天(天)と地(地)が相互作用する内在的世界観
- 地は天地の気を「凝縮」して形体と器として実現
- 『易伝(易傳)』:「至れるかな坤元よ!万物は坤元に基づいて生ずる」

相関的属性的世界観

- 陰陽五行:西洋とは異なり「属性」を強調、「実体」より「関係」を重視
- 三才(天地人):天・地・人を独立的存在ではなく相互影響の構成体として理解
- 五行の相生(相生)作用を通じた調和的宇宙観の形成



陰陽五行の相生関係

空間の属性と意味

- 風水地理:地を崇拜と調和の対象と見なす
- 核心:東洋の地観は地を西洋のような質料的対象ではなく、天と相互作用しつつ万物を生成する凝縮的存在として把握する。
- 天円地方(天圓地方):天の時間性と地の空間性の調和
- 三数分化:万物を天地人という三つの構成物として見る複雑系的フラクタル構造

「東洋の凝縮的地観では地は道具や支配の対象ではない」

東西洋地観の衝突

マテオ・リッチの『天主実義』と世界観的衝突

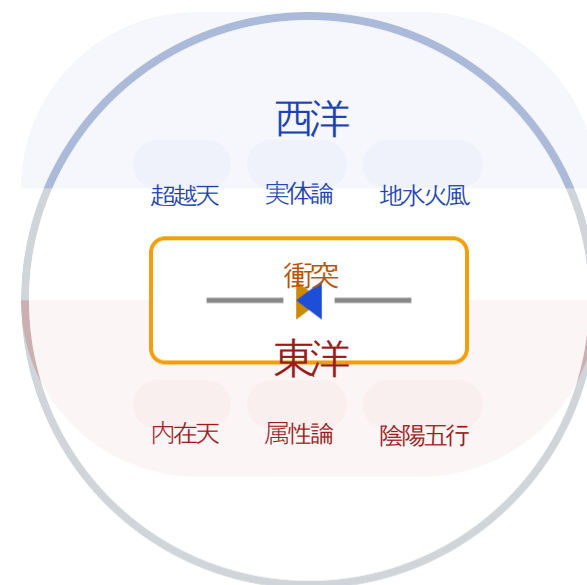
- 超越的天観と質料的地観が東洋の凝縮的地観に衝突陰陽
- 五行とアリストテレスの四元素説(地水火風)の論争
- 東洋理気論と西洋存在論の哲学的対立

帝国主義と物質的衝突

- 水雲の東学創道の頃、北京条約(1860)など西洋の侵略
- 魯迅の『阿Q正伝』に描かれた精神分裂的衝突
- 『龍潭遺詞』に記録された西欧列強の侵略と東洋人の危機意識

近代性の問題

- 西洋:東洋思想の受容以降、科学技術の発展、第五元素哲学の変質
- 重要時点マテオ・リッチの『天主実義』(17世紀初)→哲学的衝突→北京条約(1860)→物質的衝突→東学創道(1860)→自生的近代性の模索
- 東洋:超越天の排除、天地関係の固着化と相克的变化
- 自生的近代性の必要性の台頭(西欧模倣ではなく独自の発展)



Ⅰ 天地関係の相克化(相克化)

西洋天地関係の相克化

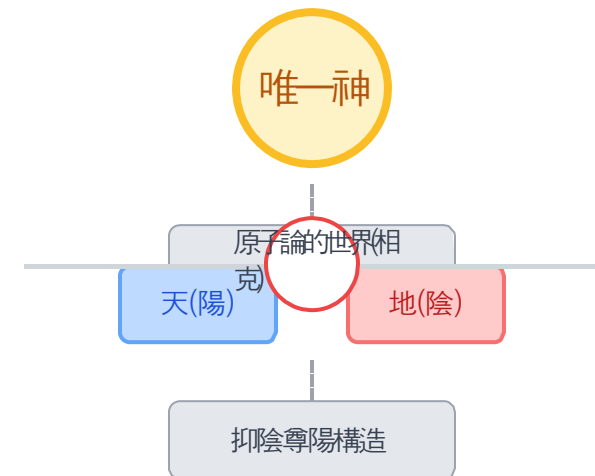
- 唯一神と万物の二元的対立構造の深化(地水火風の相)
- 関性の消滅、原子論的世界観への転換
- 第五元素の超越化(物質と財利(財利))に代替された理性

東洋天地関係の相克化

- 「天尊地卑(天尊地卑)」形式的均衡から階層的秩序へ
- 「抑陰尊陽(抑陰尊陽)」陰陽の不均衡的地位の固着化
- 土(土)の内在化:上帝概念の忘却と至尊の祈福化

天地関係の危機

- 絶地通天(絶地通天):天と地の関係の断絶
 - 核心・東西洋の相克化した天地関係は近代の危機の本質的背景となり、これはリミナリティの喪失と超越性・内在性の断絶に由来する。
 - 人間と自然の対立:支配と征服、生態的反撃
- 近代的地観の悲劇・調和の喪失と相生の危機



東学思想の造化定(造化定)の地観

思想的融合と自生性

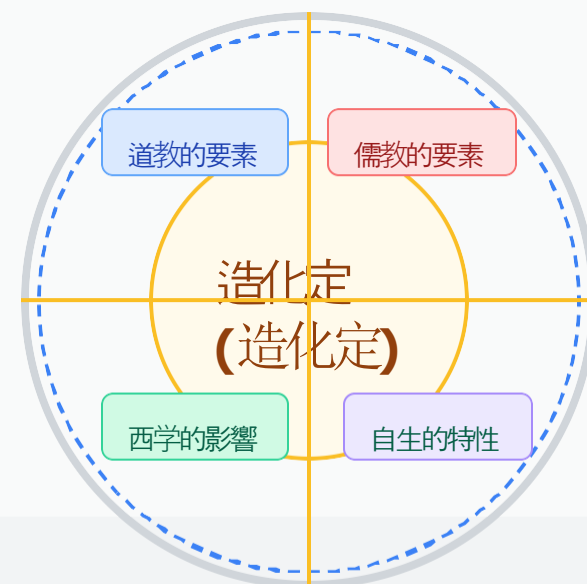
- 道教・儒教・西学の要素を批判的に受容しつつ独自の地観を
- 確立 水雲の天師問答と神秘体験を通じた地観の定立過程

リミナリティと境界の超

- 超越 超越内在の境界を超える「リミナリティ」の拡張
- 天地鬼神(天地鬼神)の霊的相互作用と全一的世界観
- 無為而化(無爲而化)を通じた造化(造化)の具現

自生的近代性の特徴

- 修行中心の実践的志向と民衆の平等な参与
- 核心概念東学の造化定地観は天地鬼神の二元的対立を超越するリミナリティを通じて相生的秩序を具現し、これは西欧と異なる自生的近代性の核心となる
- 明堂(明堂)の再解釈を通じた風水地理的伝統の継承 相生(相生)と解冤(解冤)に基づく造化定(造化定)の志向



結論および意義

東西地観の差異と衝突

- 西洋:質料的(実体論的)地観—支配と征服の対象
- 東洋:凝縮的(属性中心)地観—相生と調和の関係
- マテオ・リッチ以降、世界観的/物質的衝突と相克化の進行

東学思想の造化定の地観の近代的意義

- 超越的・内在の天地観を統合するリミナリティの具現
- 相生と調和中心の鬼神輪的天地関係の確立
- 修行・日常の統合と平等思想としての近代的地観の提示

研究の寄与と後続課題

- 研究の核心:東アジア自生的思想の再発見
- 地観を批判的に総合し天地鬼神の調和を追求することによって、自生的で代案的な近代性の思想的基盤を提示している。
生態環境の危機の時代の代替的天地関係の模索に寄与
- 今後、天地関係と近代性への学際的な後続研究が必要





西洋の質料的地観

The Western Material View of Earth

天観と地観の関係

西洋において天観(天の観)と地観(地の観)の区分は、超越天(超越的天)と内在天(内在的天)を基準として異なる。

- 超越天の観点

- ◆ 天地全体を包含(イデア、唯一神)

- 西洋の実体中心の存在論的宇宙観

- ◆ 天地、特に地は形相が実現される質料的存在と見

- ◆ なされる 内在天(天地を陰陽と見なす)と区分される

西洋の質料的地観の概念

西洋の質料的地観は時代と観点に応じて変遷してきており、哲学的背景に応じて多様に発展した。

- 質料的地観の哲学的背景
 - ◆ 超越天の性格に応じて地観が異なる(イデア、唯一神、理性)
 - ◆ 地は形相が実現される質料と見なされる
- 近代以降の変化
 - ◆ 超越天を唯物論的理性と見なす傾向原子論
 - ◆ 的世界観の登場により世界観再構成
- 形相と質料の関係
 - ◆ 天の外の天(超越天)の形相が地(質料)において実現される
 - ◆ 物質と形相の二元論的構造が西洋哲学の基本的枠組み

地水火風理論と歴史

地水火風:古代において四つの実体的要素(地、水、火、風)で世界を構成する理論



- タレスの理論
 - ◆ 「万物の根源は水(水)」という実体論的世界観
- 地水火風の発展
 - ◆ エンペドクレス:四元素説の確立と体系化
 - ◆ プラトン:イデア界と結びつけた
 - ◆ 四元素説
 - ◆ アリストテレス:形相論と第五元素(エーテル)の追加

世界的影響

- ◆ 西洋哲学全般に影響(マテオ・リッチまで)
- ◆ 仏教天界観にも地水火風輪の概念が登場

三機能体系と相關的思惟

デュメジル:印欧神話と西洋において三機能体系が反復的に現れる

- 三機能体系の構成

成

上層部: 宗教機能

中層部: 軍事・政治機能

下層部: 生産・美学機能

- 事例: ギリシャ・ローマ神話

◆

- ◆ トロイア戦争の三女神 (宗教)
- ◆ テナ (政治) ア
- ◆ フロディーテ (生産)

- 相關的原理と地水火風の連結

- ◆ 地水火風に内在する相關的原理
- ◆ 上昇と下降の原理で構成

- 類似した三界(三界)体系

- ◆ 仏教: 欲界・色界・無色界
- ◆ 東洋三才: 天地人
- ◆ インド神話: ミトラ・ヴァルナ・アリヤマン

東西世界観の比較

東西洋の世界観は本質的な観点の差異があり、同じ概念でも解釈と機能が異なって現れる。

東洋属性(陰陽五行)中心

- 関係と属性中心の世界観
- 陰陽五行:現象の属性と変化の重視
- 水(水)・火(火):属性としての意味

西洋実体(地水火風)中心

- 独立の実体中心の世界観
- 地水火風:物質の実体的構成要素
- 水(水)・火(火):実体としての物質

共通点と相違点

- ◆ 空間区分:天界・地界・人界の区分は類似する
- ◆ 核心原理同じ用語概念でも解釈と機能が異なって現れる
- ◆ マテオ・リッチ:「地水火風は実体からなる相関的思惟、陰陽五行は属性からなる相関的思惟」

近代原子論と物質文明

近代原子論は西洋の質料的・地観が極大化された形として現れる。



原子論的世界観の登場

- ◆あらゆる万物が原子と分子から構成されるという観点の確

立地水火風の実体論的属性を分析的方法で極大化



西洋物質文明と科学発展

- ◆近代物質文明発展の核心的基盤

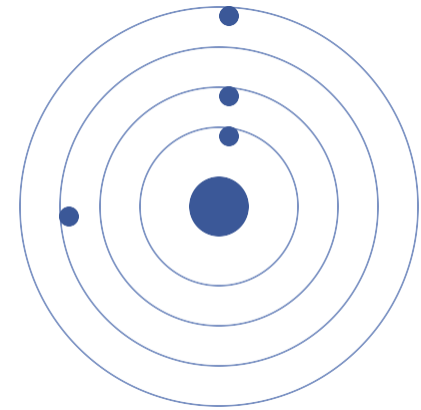
物質世界を分析的に理解し統制する方式の確立



形相と質料の区分の明確化

- ◆超越天の形相が質料的世界に実現される関係を強調質料

的世界観の完成であり極大化



結論および近代性の危機

西洋の質料的地観は近代文明の発展に大きく寄与したが、その限界点もまた明確に露呈した。

- 物質主義的世界観は科学技術発展の基盤となる
- 質料的地観は近代産業社会と物質文明の原動力

近代性の危機

- 物質に偏った世界観は神明体系の崩壊を招く
- 天下を尽滅の境地へ導く危険性を内包
- 近代性の危機の出発点となる

「物質に偏った西洋の質料的地観は神宇宙の神明体系を根こそぎ崩壊させ、天下をむしろ尽滅の境地へと導く契機となった。」

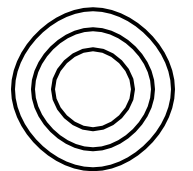


東洋の応縮的地観

The Eastern Condensational View of Earth

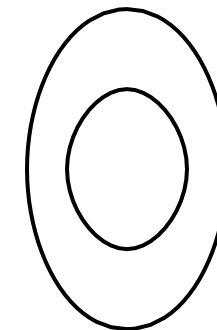
発表概要

- 1 西洋と東洋の地観の相違点
- 2 東洋の凝縮的地観の構成要素
- 3 天地人三才と陰陽五行
- 4 三数分化体系と現代的解釈
- 5 伝統思想における地の重要性
- 6 結論および示唆点



西洋と東洋の地観:根本的差異

- 西洋資料的地観
超越的天(イデア、唯一神、唯物論など)と形相質料二元論
- 東洋凝縮的地観:
超越天+内在天(天地)、天地神明、現実世界の関係性を重視
- 東洋は天と地、神明の役割分担に注目:
天(同化) — 地(凝縮) — 易学の乾坤として表現



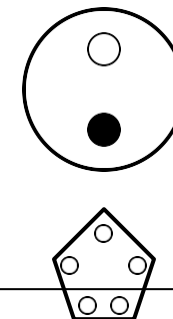
東洋の凝縮的地観構成要素

- 超越天、内在天、天地神明の三重構造
超越天(上帝)、内在天(天)、天地(地)に分かれる立体的構造
- 天=同化、地=凝縮(乾坤の原理)
天は同化(同化)する役割、地は天地の気を形体と器(器)として凝縮
- 神明の体系的区分:
天神(天神)、地示(地示)、人鬼(人鬼)の相互作用と役割分担
- 関係性と「属性」が実体より重視される
西洋の実体(實體)中心の思考とは異なり、事物の相互関係と作用を強調



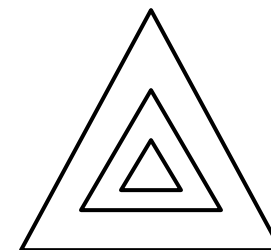
天地人三才と陰陽五行

- 天地人三才:
超越天、内在天、内在地の3元体系
- 陰陽五行との結合:
世界の属性と秩序を理解する枠組み
三才観が陰陽へ、陰陽が三才観へ拡大された概念
- 各思想の融合:
異なる出発点から相互関係の中での融合
「属性」という側面で結合し東洋哲学の基盤を形成



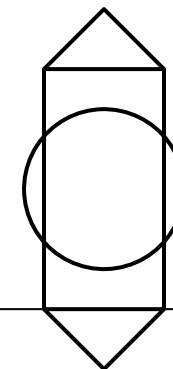
三数分化体系と現代的解釈

- 天地人、陰陽、五行の三数分化・二数分化構造
万物を天地人という三つの構成物の複雑系的拡大として見る体系
- フラクタル構造および深層心理学との関
連性: プス・コンプレックスと類似した構造、フラクタル美学の一つと
しての対称性
- 東西共通の三元構造:
西洋: カントの三元体系、聖父-聖子-聖神 / 東洋: 天地人
体系 人文-社会-自然科学を統合的に照明する構造



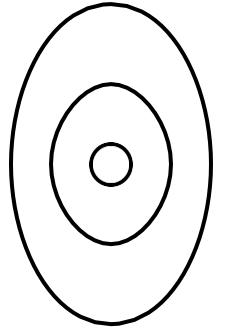
東洋伝統思想における地の重要性

- 思惟の中心に「地」の生命性と関係性を強調:
内在天の観点から見た地は超越天の観点よりも生命との関係が深い
- 風水地理、祭祀、土(土)中心の哲学的・実践的比重:
東アジアの自生的地理学である風水地理学は伝統文化のアイコン
陰陽五行における土(土)の重要性の強調 — 五行の中心
- 人間と自然の相互作用、相生理念の根源:
地の地位上昇(正陰正陽)は人間の解冤(解冤)と相生(相生)の核心 地は
天地人との相関関係において重要な一軸を担う



結論および示唆点

- 西洋と異なる東洋地観の独自性
質料的地観ではなく関係性に基つた凝縮的地観の固有な哲学的意義
- 現代の生態、神学、社会哲学における拡張可能性
大地人思想の現代的適用と「地」の生命性・相互作用重視の観点の再発見
- 相生関係性中心の世界観がもたらす統合的洞察
現代社会の危機克服と自然-人間の調和的共存パラダイムの提示





東西洋地観の衝突と相克化

Collision of East-West Views of Earth

目次

- 1 地観の定義と背景
- 2 世界観的衝突: マテオ・リッチと天主実義
- 3 物質的衝突: 北京条約と東学
- 4 天地関係の相克化-西洋の場合
- 5 天地関係の相克化-東洋の場合
- 6 結論および示唆点

地観地観の定義と背景

- 地観とは何か?
- 東洋と西洋の伝統的な地に対する観念
- 地: 崇拝的存在 vs. 質料的存在
- 東西地観の根底にある世界観

 東西地観の対比

世界観的衝突マテオ・リッチと天主実義

- マテオ・リッチの西洋質料的地観の導
- 入『天主実義』を通じたアリストテレス存在論的世界観と東洋の理気論陰陽五行の衝突
- 西元素(地水火風)と五元素(陰陽五行)の比較
- 当代の東洋知識人に及ぼした影響

物質的衝突北京条約と東学

- 北京条約など西洋に対する中国の敗北:「天が崩れる衝撃」
- 魯迅(魯迅)の『阿Q正伝』:精神分裂的状况に至った中国人の姿
- 水雲崔濟愚と東学の創道:西洋文物への自生的対応
- 東アジアの自生的近代性の模索とその切実さ

天地関係の相克化-西洋の場合

- 超越的天観、地観への内在的概念の導入
- 科学技術の発展とともに天地関係の相克化
- 第五元素から原子論への変化
- 人間と自然、神と自然の分離の拡大

西洋の科学と世界観の変化:

西洋の天地関係の変化

地水火風の相関的属性が消え、原子論的世界観により天地関係がさらに相克化。第五元素が唯一神へと固着し、自然は単純な物質へと転落。

天地関係の相克化—東洋の場合

- 伝統的の天門地方(天圓地方)・天文地理(天文地理)の固着化
- **天尊地卑(天尊地卑)、陽尊陰卑(陽尊陰卑)の公式化過程**
- **土(土)の実体化と天・地概念の分離**
- 陰陽五行における土(土)の位相の変化と
問題点



陰陽五行説において土(土)は天と地を連結する中心要素であったが、次第に地の実体としてのみ認識され、天地関係の均衡が喪失

結論および示唆点

- 東西地観の衝突の意味と現代的含意
- 天地関係の相克化の教訓
- 東西思惟の統合可能性および未来展望

「東西洋の地観の調和的統合は現代的な生態危機と環境問題解決の糸口となりうる」





東学思想の造化定地観に現れたリミナリティ

Liminality in Donghak Johwajeong View of Earth

研究目的および背景

東学思想の理論的探究と現代的意義

- 01** 東学思想の造化定(造化定)地境(地境)に現れたリミナリティ(Liminality)の分析目的
境界性概念を通じた東学地境の新たな解釈の試み
- 02** 東学の自生的近代思惟と東西思想の衝突および融合に関する理解
西洋近代性と東洋思想の内在的發展が交差する地点の研究
- 03** 韓国近代思想と民衆宗教運動における意義
道教思想の流入と中国近世の鸞壇道教の影響の分析

東学思想の造化定(造化定)の地観の概念

東学思想のリミナリティ研究

造化定の地観(造化定地観)とは?

超越天から存在する地(地)の特別な認識論であり、東学思想において天と地の関係を新たに定義した概念

東学は既存の地観とは異なり、地を超越天の造化対象、無為而化、気化の存在として新たに認識



天と地の新たな関係性

超越天と内在天の区分に従い、地(地)も超越天の造化作用として理解される。地はもはや単純な物質的世界ではなく造化論的对象となる



修行と実践の領域としての地

東学思想は地を修行の領域へと拡張させる。君主のみならずすべての民衆が侍天主修行を通じて超越天と疎通しうる空間



造化、無為而化、気化の概念

造化定地観は「造化」「無為而化」「気化」の概念を通じて、西洋近代性と区別される東学固有の生命中心的世界観を形成

東学思想の成立背景と道教の影響

東学の自生的近代性の確立に関する考察

東学の思想的背景

東学の成立は西洋近代性の流入と東洋思想の内在的發展が会う地点においてなされる

天師問答以後、水雲の熟考と経験が加わり東学の地観が形成される。道教思想の影響が特に強調される

⇒ 道教思想の流入と影響

朝鮮に入った道教は大きく内丹道教(内丹道教)と通神道教(通神道教)に区分。内丹道教は修練中心、通神道教は神との疎通を強調。東学はこのような道教思想を受容し発展

📖 西学との関係および差別性

東学は西学に対する対応としての側面を持つ。西洋近代性が招来した弊害を認識し、東洋を救済する次元で提示された思想。西学の超越天概念と差別化されたアプローチを提示

📖 思想の展開と段階的發展

東学思想は四段階で発展①天師問答段階②隱寂庵執筆段階③絨石(絨石)を避ける方法を教える段階④水雲死後、東学農民革命に至る段階。各段階ごとに地観概念が深化

造化定の地観のリミナリティ様相

境界で現れる東学思想の知的特性

リミナリティ (Liminality) とは?

境界の間に位置する状態を意味する概念であり、既存構造と新たな構造の間の曖昧かつ転移的な中間領域を指す

東学思想の地観は儒教的地観と西欧近代的地観の間のリミナリティを示し、究極的には新たなパラダイム転換を暗示



超越天と調和した地の位置的境界性

東学思想において地はもはや天に従属する対象ではなく、超越天の造化対象として新たな存在論的位置を持つ。これは伝統的な天尊地卑(天尊地卑観念と近代的地球説)の間の境界に位置する



修行主体の境界解体

君主のみが地の気運を受けた儒教的観念から脱し、すべての民が修練を通じて超越天と疎通できるという思想への転換。聖(聖)と俗(俗)の境界が再編される自生的近代性の端緒



地気(地氣)と明堂の再解釈

東学は地の中心を再設定し韓国が明堂であることを強調することにより、「小中華」と「大中華」観念を超越。地の可変性と力動性を強調するリミナル空間としての地観を形成

西洋近代性との比較

東学思想と西洋近代性の対比的理解

地観(地観)の基本的観
点

西洋近代地観

天動説から地動説への変化
内在天中心、超越天を排除する機械論的宇宙観

東学の造化定の地 観

超越天と内在天の統合的理解
地を超越天の造化と気化の領域として認識

自然と人間の関係

西洋近代観点

自然を人間の道具として認識 開
発と利用の対象、分離された客
体

東学の生命思想

侍天主(侍天主)の観点から自然も天主に照応
地と人間の有機的関係、相生の対象

近代性の特徴

西洋近代性

機械論的自然観
理性による自然征服と活用

東学の自生的近代性

造化と気化に基づく生命中心思想 民衆の
主体性と修行を通じたりミナリティ

東学思想の鬼神論的天地関係

リミナリティの様
相

天地鬼神の再概念化

東学思想は「天地亦是鬼神、鬼神亦是陰陽」という表現で、既存の天地・鬼神概念を超越天的観点から再定立する

天地と鬼神の同一性を強調することを通じて、天の上の天という超越天を含む新たな天地関係を構築

「知天地而無知鬼神、鬼神者吾也」(天地は知っても鬼神は知らず、鬼神というのも我なり)



超越天的鬼神論の独創性

東学は既存の内在天としてのみ用いられていた鬼神という概念を超越天に初めて適用することにより、西学と儒学の限界を超えた統合的観点を提示



天地鬼神の同一性とリミナリティ

「天地亦是鬼神、鬼神亦是陰陽なるを」-天地と鬼神、陰陽の境界において形成されるリミナリティを通じて、西学と東洋伝統思想の中間領域を形成



陰陽論の拡張と統合

東学思想は陰陽の無限な拡張性を包容しつつも、超越天の造化と可変性を強調することにより、伝統道教と性理学の地観を超えた新たな世界観を提示

研究結果および意義

東学思想のリミナリティ研究

研究の核心的発見

東学の地観(地観)は単なる地に対する認識ではなく、リミナリティ(境界性)を通じた聖と俗の境界再編の試み

東学は外部的圧力と内部的発展の混合から誕生した韓国固有の自生的近代思想であり、西洋近代性に対抗する代案的価値体系を提示

学術的貢献

既存の東学研究において看過されてきた地観の革新性とリミナルな特性の究明

田 境界の再設定と民衆の主体性

東学地観は天地鬼神の概念を通じてエリートと民衆、聖と俗、天と地間の伝統的境界を打ち崩し、新たな実践的修行の場を開いた

↻ 韓国的自生近代性の知識論的土台

東学の造化定地観は西欧近代性の機械論的世界観とは異なる、有機体的世界認識と生命中心思维の根拠となり、独自の近代化の可能性を提示

🌿 現代的再照明と適用可能性

生態・環境危機の現代社会において、東学の造化定地観は自然と人間の調和的共存のための思想的土台として再評価されうる。特に有機農法と生命尊重思想へと繋がる

結論および今後の課題

東学思想研究の現代的拡張

研究の核心的結論

東学思想の造化定地観はリミナリティ(境界性)を通じて一般民衆に主体性回復の思想的根拠を提供する

超越天と内在天の新たな関係定立を通じて、西洋近代性と差別化された自生的近代性の道を提示する



東学地観の現代的適用可能性

生態学的観点から東学の地観は環境危機時代における人間と自然の共存的关系のための哲学的基盤を提供しうる



リミナリティを通じた民衆の主体性の回復

超越天・内在天の調和と気化概念を通じて、天尊地卑(天尊地卑)の二分法的世界観を超えた民衆の実践的主体性の確立



今後の研究方向

大巡思想との比較研究を通じた東学造化定地観の拡張性の探究、東アジア思想史における東学地観の位相を確立するための比較思想的アプローチが必要

3

永世不忘(永世不忘)人間観(人間観)の自生的近代性

Indigenous Modernity of the Yeongsebulmang View of Humanity

目次

- 1 研究の背景および目的
- 2 西洋の成長論的人間観
- 3 マズローの理論およびポストヒューマニズム
- 4 東洋の接化的人間観
- 5 相関的思惟とフラクタル構造
- 6 東西人間観の衝突
- 7 東西人間観の相克化
- 8 東学思想の人間観
- 9 リミナリティと自生的近代性
- 10 結論および示唆点

研究の背景および目的

本研究は東西洋の人間観の主要な伝統を比較・分析し、衝突と接点、そして東学思想における変換様相を考察することにより自生的近代性の意味を探ろうとする。

- 東西「人間観」の哲学的理解
- 思想的变化と現代的示唆点の導出

西洋の成長論的人間観-概念と特徴

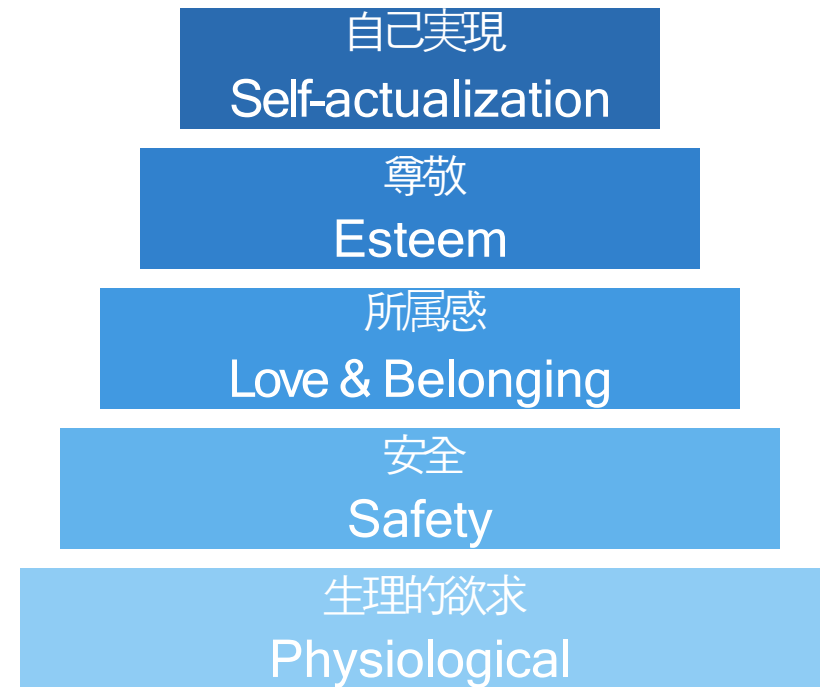
西洋の成長論的人間観は人間を自己実現と進化的発展を追求する存在として規定し、近代以降の技術発展と個人成長の基盤となった

- 人間を成長と自己実現を追求する存在として把握
- プラトンのイデア、プロメテウス神話、キリスト教原罪論から実存主義
- まて継承人間の欲望の肯定、個別性と自律性の重視
- 肯定的世界観と技術志向的近代性の追求

永世不忘の人間観の自生的近代性

西洋の成長論的人間観- マズローの理論とポストヒューマニズム

- マズローの欲求段階理論: 生理的欲求→安全→所属感→尊敬→自己実現
- 欲望の肯定: 欠乏動機(下位欲求)から成長動機(自己実現)へ
- ポストヒューマニズム: 第4次産業革命と連携した人間能力の拡張
- 人間と機械の共進化: 成長知能と自己実現の強調



東洋の接化的人間観-概念と特徴

- 東洋の接化的人間観は人間を天地との関係の中で把握し、相関的思惟に基づいて人間の役割と責任を強調する
 -
- 人間は天地と密接に連結された存在
- 陰陽五行、天地化育(化育)など宇宙
- の調和と循環を重視「誠(誠)」で
- 天地に応答、道徳的責務を強調

人間の位置:天地間の媒介者・参与者

東洋の接化的人間観-相関的思惟とフラクタル構造

- 相関的思惟(関係中心の思考)とフラクタル構造(部分=全体)
- 陰陽五行に基づく世界観-同一の構造が宇宙から人間まで反復される
- 伝統社会における全人的中庸(中庸)および全体性の強調
- 学問、芸術、日常生活全般に現れる人間観

主な研究者沈光鉉(フラクタル理論)、崔仁哲(認知心理学)、趙兢鎬(東洋心理学)、朴載柱(相関的思惟)などの現代的解釈の提示 永世不忘人間観の自生的近代性



陰陽五行基盤のフラクタル構造-部分と全体が同一のパターンを示す

近代東西人間観の衝突-共通の起源と相違点

- 三機能体系(reigion-military-economic)など両文化の共通の起源

西洋時間的(垂直的)世界観 東洋空間的(水平的)世界観 超越的唯一神中心 内在的天地関係

＞ 中心

＞

＞ 神の持続的介入と救済

＞ 隠れた神(Deus absconditus)

- 天地人(天地人)の解釈・構成の差異、超越と内在の対比

- 人間-神-自然関係の設定の根本的差異

近代東西人間観の相克化

西洋

- 唯一神思想、超越的実体論
- 階級構造の確立と宗教-政治-経済的分化
- 東西交流以降の各思想の弱点の深化および変容
- 創造主概念の差異: 持続的介入(西洋) vs 隠れた神(Deus absconditus、東洋)
- 三機能体系(宗教-軍事-経済)の東西共通の起源と差別化

東洋

- 相関的觀念の硬直化
- 階級の固着化(両班-常民)

東学思想の永世不忘の人間観-侍天主と人 乃天

東学思想は自生的近代性を含んだ永世不忘人間観を提示し、伝統的人間観の限界を超える新たなパラダイムを提示する

- 侍天主(侍天主):天主を奉ずる、吾心即汝心(吾心即汝心):内的神性の強調、人乃天(人乃天):人間そのもの
- が天 司祭-信徒の位階の撤廃、平等主義的人間観の実現の追求
- 内的省察的倫理と小宇宙的人間観の確立
- 近代的社会改革と平等革命の思想的基盤の提供

リミナリティと自生的近代性

リミナリティ (Liminality)

境界または転換状況における存在状態－以前の状態から脱し新たな状態へ進入する過程

- リミナリティ概念を通じた人間観変化の解釈－天地人関係の再構成
- 東学を中心とした近代的転換の促進－侍天主と人乃天の実践社会的
 - ・思想的革新、新たな人間像の誕生－平等思想と共同体意識
- 聖－俗関係の再構成と未来志向性－地上天国と自生的近代化の模索

結論および示唆点

- 西洋-東洋人間観の比較を通じた近代性の再検討と、東学思想における自生的近代的人間観の意義を考察した。
- 西洋-東洋人間観の比較を通じた近代性の再検討
- 討 東学思想における自生的近代的人間観の意義
- 義 現代社会への適用可能性と限界

後続研究および討論課題の
提示



西洋の成長論的人間観

The Western Developmental View of Humanity

西洋の伝統的人間観概観

西洋人間観の特徴

- 天地と分離された独立的存在としての
- 人間実体性を志向する西洋の伝統

古代-中

- 世
○ プロメテウス的人間観:イデアの理想を地上の質料に実現するために孤軍奮闘する人間
- 原罪思想:失樂園し再び天へ昇るために救済に集中する人間

近代以降

- 実存的人間:神が消えた世界で天地から分離された単独的存在
- 現象学的成長論:分化された世界で独り成功を追求する人間

「西洋は天地と関連する憂患意識よりも、天の上の天と直接関連する実存意識が優先した。」

成長論的人間観の登場背景

時代的転換

- パラダイムの変化: 神中心から人間中心へと世界観が転換
- 近代の独立性: 天地と分離された自律的人間概念の登場

場

否定的人間観に対する反発

精神分析学: 人間のすべての欲望を性的欲求の変換として
解釈 行動主義: 人間の欲望を単純に物質的欲求へと還元 問
題点: 否定的、技術志向的人間観の限界

哲学的・心理学的背景

実存主義: 人間の主体性と自己決定の強調 現象
学: 人間経験の総体性と意味の重視 人本主義: 人
間の潜在力と自己実現可能性の肯定

成長論的人間観の核心的特徴

成長論的人間観は人間の本性と発展可能性を肯定的に見る観点であり、次の三つの核心的特徴を持つ:

① 欲望の肯定

- 人間の欲望を否定的なものではなく多様な欲求の発現として解釈
- マズロー:「自己実現欲求は自己向上のための個人の渴望であり、潜在力として持つすべてを実現しようとする欲望」

② 成長の肯定

- 下位欲求(欠乏動機)と高次欲求(成長動機)の段階的発展
- 「存在動機」(being motives):「経験を広げるにより人生を豊かにし、人生の喜びを増加させる」

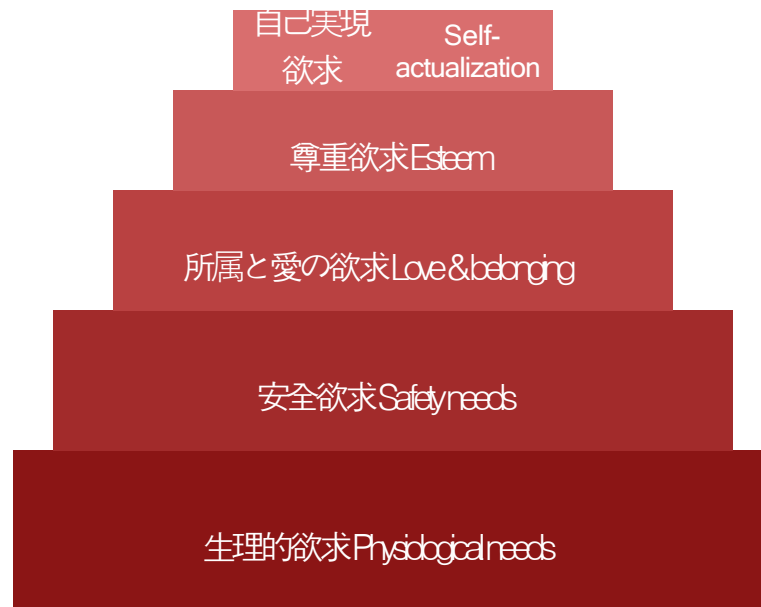
③世界に対する肯定

- 精神分析や行動主義の否定的、機械的世界観の代わりに統一的存在としての人間を強調
- 人間の潜在的可能性と主体性を尊重する肯定的世界観

マズローの欲求段階理論と主要な学者たち

マズロー(A.H. Maslow)の欲求段階理論 成長論的人間観の主な学者たち

1940年代半ばに登場した成長理論の基盤



- 下位4段階: 欠乏動機(deficiency motive)
- 最上位段階: 成長動機・存在動機(growth/being motive)

- 🎓 マグレガー(D. McGregor)
X理論(統制的人間観) Y理論(自律的・創造的人間観)
- 🎓 ハーズバーグ(F. Herzberg)
二要因理論-衛生要因(不満の除去)と動機要因(満足増進)
- 🎓 オルポート(G. W. Allport)
特質主義理論-人格形成の個人的特質の強調
- 🎓 アーギリス(C. Argyris)
未成熟・成熟理論-人間の発達を成熟過程として解釈

“ 成長論的人間観は性善説に基づく自己実現的問題解決を志向する人間観であり、人間の欲求が段階的に潜在しており、下級から上級へと発展的に現れるという成長的側面を強調 ”

ポストヒューマニズムとの関連性

ポストヒューマニズムと成長論的観点

- 第四次産業革命:成長論的人間観の説く自己実現段階の産業革命として解釈
- 実存主義の進化:ポストヒューマン時代に実存主義的人間観が新たに具現

成長論的人間観
自己実現、潜在力、人間欲望の肯定



ポストヒューマニズム
技術と人間の融合、新たなアイデンティティ

技術と人間の新たな関係

- 人間固有の知能と機械の知能の区分
- 人間と技術の共進化可能性の模索

人間アイデンティティ

自己実現の再構成

- 自己実現:技術発展の中での新たな人間価値の創出
- 汎用人工知能:人間だけの均衡ある発展能力と成長可能性

「ポストヒューマニズムは人間の独自の成長論が現代技術と出会い、新たな可能性を模索する地点に位置する。」

モラヴェックのパラドックスと成長知能

モラヴェックのパラドックス

- 「人間が得意なことは人工知能が不得意で、人間が不得意なことは人工知能が得意である」計算能力のような道具的理性はAIが優秀だが、人間固有の知能領域が存在

人工知能の優秀領域

- 🧠 計算能力
- 💾 大容量データ処理
- 🔧 特定領域に特化した作業
- ⚙️ 反復的精密作業

VS

人間の優秀領域

- 👥 共同体形成能力
- 💡 象徴体系の創造と理解
- 🔗 汎用的問題解決
- 🌱 自己発展能力

人間の成長知能

- ポストヒューマン時代:人間は機械と異なる成長知能に集中し共進化を
- 追求成長知能の核心象徴体系の創造、共同体形成、自己発展
- 人間は特化された弱人工知能ではなく、多様な領域にバランスよく発展した汎人工知能的属性を保有

「人間は実存主義的存在努力を数万年にわたって行なっており、その過程で人工知能が真似できない数多くの象徴を通じて知能を開発し、自

結論および限界

成長論的人間観の貢献

- 近代科学技術の発展を牽引 自己実現
- と個人の成長可能性の発見 多様な社会
- 会的発展と進歩を成就

限界点

- 天地との断絶:天地を排除した独断的人間発展
- 生態的危機:逆説的に天地の裏切りによる人類生存の脅威
- 統制の喪失:欲望の手綱を再び締める方法の不在

未来展望

- 代替的近代性:人間と自然の調和ある関係の再定立
- 東西統合:成長論的人間観と憂患意識の均衡
- ポストヒューマン倫理:技術発展と人間性の調和

「欲望の手綱は解かれたが、手綱を再び結ぶ方法がない西洋の人間観は新たな代案的近代性を必要とするに至った。」



東洋の接化的人間観

The Eastern Transformative Contact View of Humanity

東洋と西洋の
人間観の比較

2025.06.21

西洋の人間観

- 天の上の天を強調(超越的存在)
- 人間と神/自然の分離および対立
- 自然への征服と支配の観点
- 個人の成長と成就を重視する実存意識

東洋の人間観

- 天の中の天を強調(内在的存在)
- 天地(天地)と人間の仲介者的役割の強調
- 自然との調和と相互作用の追求
- 天地の化育に参与する憂患意識の重視

根本的差異

東洋の接化的人間観は相関的思惟を基盤とする。西洋は人間の能力で天地を活用すべき対象と見るのに対し、東洋は天地が人間に能力を与えたのであり、人間は天地に恩恵を返さねばならない存在と見る。

人間と宇宙の関係に対する根本的な認識の差異

東洋の接化的人間観

相関的思惟と フラクタル理 論

東洋の相関的思惟とは？

部分と全体が互いに繋がっており、宇宙のすべての要素が相互関係を結んでいるという思惟方式である。天、地、人間が互いに分離された個体ではなく、相互に連結された体系として見る。

- 部分と全体の有機的連結性の強調
- 人間を天地(天地)と分離せず相関的關係として把握
- 西洋の分析的還元的思惟と対比される総合的思惟方式



沈光鉉のフラクタル 理論

- 部分から全体構造が反復される自己相似性
- 「フラクタル(fractal)」とは複雑でも同一構造の反復
- 韓国の文化の特性をフラクタル構造とし、

陰陽五行とフラクタル 構造

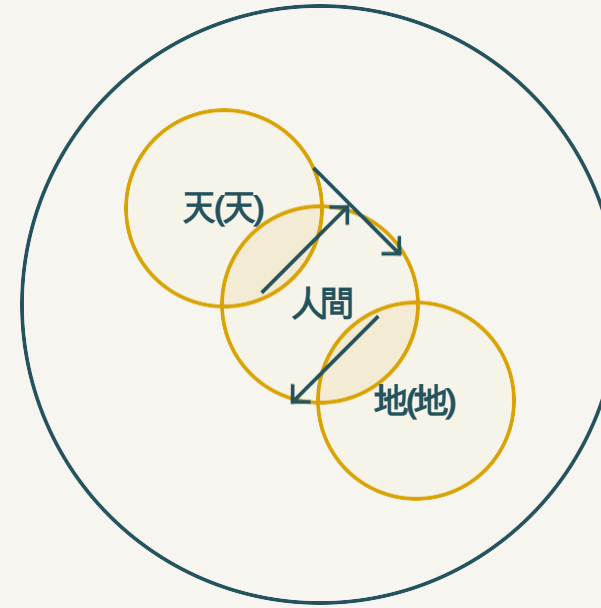
- 天の陰陽五行構造が地と人間にも同一に存在
- 宇宙が0と1の反復のように陰陽の反復
- 人間の誕生を知れば天と地の両方とも把握可能

東洋の接化的人間観

接化的人間観の概念

接化(接化)とは？

接化とは天地(宇宙)と人間が互いに繋がり相互作用することを意味する。東洋思想では人間を天地と分離された存在ではなく、天地とともに宇宙の一部として存在する統合的観点から見る。



天地の気運が凝集した存在

- 人間は天地の秀でた気を賦与された存在
- 陰陽五行の気が流れ込み最も精髓となったのが人間
- 人間は天地の属性を全て持つ仲介者

天地化育に参与する義務

- 人間の義務は天地の化育(化育)に参与すること
- 天地は誠敬信(誠敬信)によって人間を化育
- 人間は誠敬信で天地に報いる存在

東洋の接化的人間観

天地化育と誠(誠)の意味

天地化育(天地化育)と誠(誠)の意味

- 陰陽五行の気(氣)が天地の中に流れ入り、優れたものは人となり滓は事物となる
- 天地の気運を受けた人間は性(性)を持つに至り、この性を尽くして天地に報いなければならない
- 天地は誠敬信(誠敬信)で人間を化育し、人間は誠敬信で報いる関係

惟天下至誠、爲能盡其性、能盡其性、則能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參。

(ただ天下に至誠を行なう者のみが自身の性を尽くしうる... 天地の化育を助けうるのであり、天地とともに参与するに至るのである。)

- 『中庸』 22章

東洋の誠(誠)概念

- 天地と人間の創造的相互作用
- 天地の化育に人間が参与する根拠
- 天地と人間を連結する根本原理

ホワイトヘッドの創造性(Creativity)

- 有機体哲学における究極的範疇
- 西洋一元論哲学の「絶対者」と対比される
- 西アジアより東洋哲学とより近い概念



東洋の接化的人間観

現代的再評価と研究動向

東西交流と現代的再発見

西洋の近代化過程において前近代的啓蒙対象と見なされていた東洋の接化的人間観が、東西洋交流に伴い多様な側面から再評価されている。特に相関的思惟を現代学問の観点から再解釈する研究が活発に進行している。

主要な研究者および研究成果

崔仁哲

- ニスベットと共同研究
- 東洋の相関的認識を認知心理学的観点から証明
- 集団性/個人性の差異 心理学的実験で立証

曹兢鎬

- 東洋心理学体系の研究
- 全体から部分を把握する儒学心理学の樹立
- 全人的中庸概念の心理学的解釈

趙玉九

- 言語教育学観の研究
- 千字文と現代教育の比較
- 東洋の相関的思惟が代替的科学となる可能性の提示

朴在圭

- ホワイトヘッド思想中心の総合研究
- 相関的思惟体系の総合的説明の提示
- 東西世界観と倫理の出会いの研究

東洋思想の現代的意味

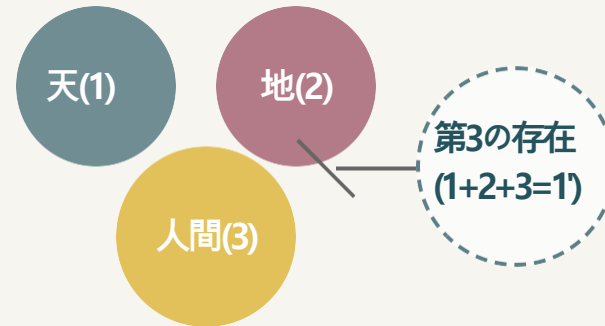
- 認知科学と心理学の発展により東洋の相関的思惟が科学的に立証される段階

東洋の接化的人間観

リミナリティ理論と 自生的近代性

リミナリティ (Liminality) とは？

李寧蘭のリミナリティ理論において人間は境界と転換の存在であり、一つの状態から他の状態へ変化する可能性を持つ存在である。



人間の接化的特性と変化可能性

- 天(1)、地(2)、人間(3)の数学的連結性(李寧蘭の解釈)
- 人間は天地が付与した陰陽魂と魄を通じて自己変化が可能である
- 人間は宇宙の天地化育の公演を理解する「知人(知人)」の役割
- さらに人間は宇宙で共演する存在として発展すべきである

西洋の衝撃と自生的近代性

西洋近代化の衝撃により東洋思想が挑戦を受けたが、これを通じてむしろ東洋は自生的近代性を模索するに至る。リミナリティ理論はこのような脈絡において理想的人間観の実現を準備する理論的基盤となる。

東洋の接化的人間観

結論および示唆点

2025.06.21

東洋の接化的人間観の現代的意味

- 現代社会の分節された人間観を統合的関係的観点で再構成
- 生態的危機の時代において人間と自然の調和的關係を再定立する哲学的基盤
- 技術中心社会における人間疎外問題解決のための代案的思惟体系

接化的人間観の現代的応用と示唆点

環

環境および生態分野

天地と人間の相互互惠的關係認識を通じた持続可能な環境倫理の形成。人間中心ではなく天地と人間の共存的關係回復を通じた生態危機の克服

教

教育および人格発達

相關的思惟を通じた統合的教育方法論の開発。個人の成就より共同体と自然との調和的關係を重視する人性教育

気

技術および科学哲学

フラクタル理論と相關的思惟を通じた新たな科学パラダイムの模索。技術発展が天地化育に寄与しうる倫理的方向性の提示

最終的示唆

東洋の接化的人間観は単に過去思想の再現ではなく、現代文明の危機を克服するための代案的人間・世界観として人間と自然、人間と宇宙の新たな關係定立の土台となりうる



近代東西人間観の衝突と相克化

Clash of East-West Views of Humanity

目次

1. 人間観の衝突－東西交流以前の問題点
2. 東西洋交流と変化の契機
3. 共通起源: 三機能体系と天観・地観・人間観
4. 天人・地人関係の相克化過程
5. 西洋と東洋の天人関係比較
6. 結論および意義

人間観の衝突交流以前の問題点

東西洋は交流以前にも人間観が独自の発展したが、それぞれ限界と問題を内包していた。

- 西洋地水火風の第五元素が唯一神化することにより神明体系が消滅→人間は唯一神の前で罪人へと転落し、悔悛と救済
- のみが唯一の道 東洋相關的思惟が硬直することにより両班と常民の差別が深化→社会的階層構造の硬直化
- 悪貨が良貨を駆逐するという経済学法規則のごとく、東西洋交流時に人間観の短所がより際立つことになる

東西洋交流と変化の契機

近代期に東西洋が本格的に交流することにより、各思想体系の限界と変化の契機が用意される。

- 西洋マテオ・リッチを通じて超越的神なしでも可能な倫理的社会を発見 → 超越志向から内在志向へと
- 転換 世界観の変化神の位置を物質が代替し人間中心の世界観が強化
- 衝突の深化帝国主義期から天(天)が内在神から超越神へと変化 → 地と東洋は征服対象として認識東西洋交
- 流は自生的近代性の人間観を形成する契機となる

共通起源三機能体系と天観・地観・人間観

東西洋人間観は表面的な差異にもかかわらず、古代に遡れば共通の起源を持つ。

- 三機能体系(trifunctionalism):印欧広域にわたる社会組織原理構成:宗教階級(バラモン)-戦士階級(クシャトリア)-生産階級(バイシャ・シュードラ)
- 共通事例:仏教の二十八天、道教の三十六天の天観、ギリシア・ローマ神話のトロイア戦争

西洋の特徴

- 時間的垂直構造の強調
- 創造主の持続的干渉
- 個人の業と輪廻の重視

東洋の特徴

- 空間的水平配置の強調
- 「隠れた神」としての創造主
- 祖先と子孫の勝負(勝負)の重視

天人・地人関係の相克化過程

交流と近代の衝撃により天人・地人関係が精緻化されると同時に相克化する様相が現れる。

- 東洋陰陽五行の世界観において人格的天人関係が理法的天人関係へと変化→三界(天界、地界、人界)の分離と神明体系の弱体化
- 西洋第五元素が超越神へと格上げされ内在的属性を喪失→地と人間は単純な支配および操作対象へと転落

相生的であった天人・地人関係が相克化することにより人間界を通じた天上界の発展が中断→天地の化育の中断、宇宙の混乱の加速

西洋と東洋の天人関係比較

東西洋の天人関係は人間と神(天)の関係設定において明確な差異を示す。

西洋の天人関係

- 超越的**唯一神**森羅万象を主宰する**絶対者**であり、法則なしに任意にすべてを決定
- 権威的構造人間は神の前で罪人であり、神の命令への服従が最高の価値
- 天使の役割**唯一神**の事を特別な場合にのみ遂行、特定領域別の固有業務なし
- 進化様相近代以後、超越的権威が弱体化し物質が神の位置を代替

東洋の天人関係

- 内在的**天観**上帝は法則(理法)に従い主宰する隠れた神 (Deus absconditus)の属性
- 相生的関係**天命(天命)**と**徳(徳)**を中心とした調和的關係を志向
- 神明体系自然を運行する多様な神明が存在し、各領域別に分化された構造
- 進化様相**時空間的三才観(天地人)**が強調され、祖先-子孫間の勝負(勝負)を重視

結論および意義

東西洋人間観の衝突と相剋化は各文明の近代性形成とアイデンティティに大きな影響を及ぼした。

- 歴史的意義東西洋交流はそれぞれの限界を克服する契機であり、同時に短所が拡大する過程であった
- 天人関係西洋の超越神観と東洋の内在神観が衝突し相剋化したが、同時に再定立の機会を提供地人関係西洋の地に対する支配・征服の観点と東洋の相生的観点が相剋化し、現代の環境問題の起源となる

近代性のリミナリティ様相として、聖俗の再配置が天人・地人関係において要請され、これは現代的人間観の探究と文明間の対話に重要な示唆点を提供する。



Ⅰ

東学思想の永世不忘(永世不忘)の人間観に現れたリミナリティ

Liminality in Donghak Yeongsebulmang View of Humanity

研究の概要および目的

本研究は東学思想の人間観に内在する永世不忘思想と、これに伴うリミナリティ様相を検討する。

主要研究の問い

- 東学人間観の変貌過程とリミナリティの哲学的意味
- 超越天概念の介入がもたらした天観・地観・人間観の
- 変化聖一俗関係の再編と自生的近代性の発現様相

研究方法論

- 思想史的文献分析および東学関連の主要な史料の考察
- 『東経大全』、『龍潭遺詞』など主要原典の分析 宗
- 教人類学的リミナリティ概念の適用を通じた解釈学的
アプローチ

この研究は東学思想の人間観が持つ現代的意義と韓国思想史における位置を再照明するのに寄与しようとする。

2/8

東学思想の背景と展開

19世紀韓国の社会宗教的状況

- 性理学中心の支配体制の硬直化
- 西欧列強の侵略と危機意識の高揚
- 西学(西學)の影響と新たな思想的変化
- 民衆の苦痛と貪官汚吏の収奪の深化

東学の形成背景

- 崔濟愚の宗教的体験と「侍天主」思想
- 西洋宗教に対応する「東学(東學)」を提唱
- 儒仏仙三教と差別化された自生的思想体系
- 民衆救済と社会変革の志向

東学教祖の活動

- ♀ 1860 崔水雲 天師問答(天師問答)、東学創道
- ♀ 1864 崔水雲 殉道(殉道)、布徳活動
- ♀ 中断
- ♀ 1860年代後半、崔時亨の『龍潭遺詞』、『東經大全』の復刊
- ♀ 1880年代 教勢の拡張、全国的な布教活動の展開

東学農民運動とその後の展開

- 1894年 東学農民運動:「輔国安民」の旗印
- 日本の介入で失敗、しかし思想的拡散
- 天道教への発展および新宗教運動への影響
- 韓国近代性の自生的経路の提供

永世不忘の人間観の特徴

超越天と吾心即汝心

- 超越天の介入により人間の地位の上昇
- 吾心即汝心(吾心即汝心)人間と上帝の心が通じる
- 天と地の間の人間→天地と同等の存在へ格上げ
- 侍天主(侍天主)を通じて上帝を奉ることのできる地位の確保

不然其然(不然其然)の認識論

理解しがたい超越的世界(不然)と理解可能な経験的世界(其然)の連結を通じた人間の地位の再定立

人間観の変化過程

- 天師問答→布徳活動→殉道(殉道)の過程での変化
- 初期:超越天による地位上昇の強調
- 後期:人乃天(人乃天)概念へと拡張
- 内有神靈(内有神靈)概念による人間内面の神聖化

司祭-信徒区分の撤廃

- 西学の平等思想は認めるが、司祭-信徒間の階級的差異を批判
- 接主制(接主制):司祭と信徒の境界の解消
- 無教会主義的特性:すべての信徒が直接天主と疎通
- 聖-俗の境界の再配置と宗教的平等主義の具現

各自為心vs各知不移

西学の各自為心(各自為心)	東学の各知不移(各知不移)
・天主は外部に存在(表層宗教)	・天主は内部に存在(深層宗教)
・救済の証明 = 俗世の成功	・救済の証明 = 内面の省察的倫理
・西洋近代性の基盤を用意	・自生的近代性の土台を提供

永世不忘(永世不忘)の人間観

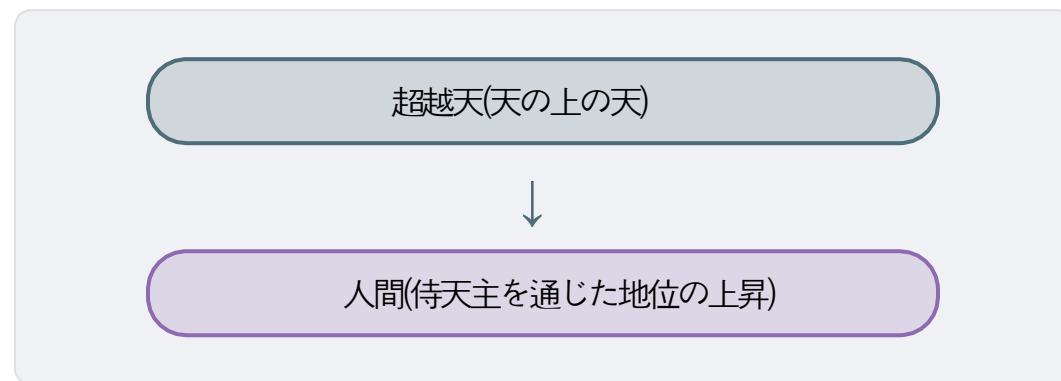
人間が天地化育に参与する存在として、超越的価値を永遠に忘れず実践すべき責任を

内有神靈(内有神靈)天人関係のリミナリティ

侍天主と調和の概念

- 侍天主の「造化」は内有神靈として表現
- 西学の唯一神的天人関係(神尊人卑)の克服
- 「吾心即汝心」を通じた天人合一の境地の復活
- 天の上の天と心で直接連結される人間

天人関係の変化



- 超越天の介入による人間の地位の格上げ、天地
- 化育に参与しうる存在への人間観の変化

身分体系の再編

- 司祭と信徒間の階層の撤廃
- 両班-常民の区別なく天に直接連結
- 接主制(接主制)を通じた宗教的平等の具現
- 「全国民が両班となる」と表現された平等志向

聖(聖)-俗(俗)の再配置

- 既存の聖-俗境界の解体と新たな再配置
- 性理学:両班(聖)と常民(俗)の区別 → 東学:すべての人間の内面に神靈(聖)
- 自生的近代性のリミナリティ(境界性)の発現
- 宗教的地位の上昇が社会変革の原動力へ

外有気化(外有氣化)地人関係のリミナリティ

開闢と調和を通じた地位の変化

- 侍天主思想を通じた地の位相の格上げ再開闢を通じた地上天国実現の構想
- 天地の位階秩序(天尊地卑)から平等な関係(天尊地尊)への変化地上神仙侍天主を悟った人間の新たな位相地の属性の変化拘束抑圧から創造生命の源泉へ
- 下元甲乙を過ぎた好時節の循環思想
- 東学の「造化」概念相反する要素のリミナルな境界統合東方の力:西学を超える新たな世界観の提示

社会的階級的境界の解消

- 「全国民が両班となる」身分制解体の宗教的正当化
- 全明淑の東学理念「常民を両班に、賤人を貴くする」
- 王侯将相の欲望東学農民運動参加者たちの内的動機

「本来東学が輔国安民(輔國安民)を主張したのは後天のことを唱えたに過ぎなかったが、心は各自王侯将相(王侯將相)を望みつつ願いを成就できず……」(『典経』)

地上天国と地上神仙の概念

外有気化のリミナリティ様相

リミナリティの社会的発現

反構造性: 伝統的階層秩序から逸脱した空間の形成

コミュニタス: 共同体的实践に基づく社会変革運動

境界超越聖(聖)と俗(俗)の再配置による自生的近代性創造性朝鮮

時代に抑圧された創造的「造化」要素の解放

東学思想と自生的近代性

聖一俗(聖俗)境界の再構成

- 超越天の介入による聖俗秩序の再編侍天主概
- 念を通じた大衆の宗教的主体化司祭-信徒の位
- 階撤廃による宗教的民主化王侯将相となりう
- る宗教的正当性の獲得

リミナリティの变革的特性

- 伝統秩序と新たな秩序の間の境界的位置調和調
- 和を通じた矛盾の融合と克服内有神靈外有気化
- の相互補完的リミナリティ

「東学思想は天の上の天が介入したが、西教とは異なり天の内の天である天地の概念も含んでいたため、一般信徒も天の上の天と心で連結されえた。」

自生的近代性の特徴

- 西欧的近代と異なり宗教的土台に基づく近代化
- 平等思想に基づく身分制の克服と社会変革
- 内的省察と外的実践の均衡の模索
- 侍天主を通じた自生的啓蒙と主体性の確立

東学以降の社会的景響

- 天道教、円仏教など新宗教運動への影響
- 31運動の思想的土台を提供
- 調和と相生の価値の拡散
- 現代韓国社会運動の精神的源流

自生的近代性のリミナリティの意義

東学思想は西欧的近代性と伝統の間に独特なリミナリティ領域を創出し、既存の聖一俗秩序を解体再構成する創造的変革の契機を提供した。これは宗教的平等の価値が社会的平等へと拡張される自生的近代化の道を開いた。

結論および意義

東学思想リミナリティの本質

- 超越天の介入による身分秩序の亀裂と再編
- 侍天主概念を通じた天人合一思想の再活性化
- 内有神霊外有気化の調和を通じた聖-俗境界の再配置
- 地上天国、地上神仙概念を通じた現世変革の志向

永世不忘の人間観の現代的意味

- 人間の尊厳の哲学的・宗教的基盤の提供
- 司祭-信徒区分の撤廃を通じた平等思想の実現
- 内的省察と霊的自覚を通じた現代社会批判
- 自生的近代性の韓国的モデルの提示

東学思想の永世不忘の人間観は単なる歴史的遺物ではなく、現代韓国社会においても依然として作動する思想的・実践的資源として、人間存在の根源的価値と相互関係性への省察を要求する。

研究の示唆点

- 韓国伝統思想と近代性の連続性の再解釈
- 近代化過程における東学的霊性と倫理観の照明
- 人間観を中心とした東学-儒教-西学の思想的関係の再考
- 東学以降の新宗教運動の系譜学的理解の深化

今後の研究方向

- 初期東学と後期東学の人間観の変化の比較研究
- 東学-大巡思想の人間観比較および相補的解釈
- 現代韓国社会運動に現れた東学的要素の探究
- グローバルな文脈における東学人間観の現代的再解釈

Chapter IV

大巡思想の自生的近代性と治乱(治亂)の再活性化

Autogenous Modernity and Revitalization of Order in Daesoon

研究の概要および目的

本研究は大巡思想を通じて韓国近代思想史の自生的近代性と治乱(治亂)問題の宗教的解法を考察する。

主要な研究意義は、韓国宗教思想における大巡思想の位相の再照明および三界観を中心とした思惟構造の分析にある。

1. 序論および研究目的

大巡思想研究の背景と学術的意義

2. 大巡思想/東学思想 の比較

天觀の相違点と関連性

3. 人身降世の概 念

4. 天界觀(三界)の 特徴

大巡思想の核心的神
論

5. 自生的近代性の意 味

三界構造と神明界

西欧近代性との差別化

6. 治乱(治亂)体 系

7. 再活性化の過 程

解冤・報恩・相生の原理

8. 思想統合

天地公事と三界公事

儒仏仙と西洋思想の融合

9. 現代的意義

大巡思想の現在的価値

10. 結論

研究成果と今後の課題

大巡思想と東学思想の比較

東学思想

大巡思想

- 超越天の出現のみを提示(象徴的)・上帝の人身降世(実体的介入)
- 鬼神(神明)概念が部分的にのみ反映・神明界を具体的システムとして体系化
- 現世的救済(輔国安民)中心・解冤報恩を中心とする三界の怨恨の解消
- 聖-俗境界の可能性の提示段階・人身降世と神明界による境界統合の完成

人身降世(人身降世)概念

九天上帝(九天上帝)が人間の身で直接世に降臨した現象

- ・ 超越的存在の実体化-天(九天)が人間として生まれ、人間の立場から天と地の姿を見て改造する
- ・ 東学との差別性-東学は啓示と出現に留まったが、大巡は直接的な人身降臨へと拡張
- ・ 天地万物改造の道-天と地を作り変え、後天開闢の基盤を築く

「上帝が九天におられたとき、神聖仏菩薩などが、上帝でなければ
混乱に陥った天地を正すことができないと訴えたため.....自ら世に降
ることを定められた。」

- 『典經』

- 三界(三界):天界、地界、人界から成る有機的な神明界システム
- 「天の上の天」構造-9重以上の重層的天界の階層
- 天界は神明(仏・菩薩・神聖など)の会散(會散)と聴令(聽令)の過程
- 古き天と新しき天-天界の可変性と再活性化
- 神明界と人間界の相互作用構造の体系化

『典 経』の一節

「古き天は人を殺す公事のみを見ていた。今後、日用百物がすべて欠乏

天界(天界)

九天上帝、神聖・仏・菩薩などが会散・聴令する世

地界(地界)

地の神明たちが主宰し地気(地氣)が運行する世界

人界(人界)

人間と神明が相互作用する現実的生活世界

自生的近代性の意味

西欧近代性との差別化

- 物質中心の西欧近代性から、天地三界・神明造化中心の存在論的拡張へ
- 西洋の「神は死んだ」という全面的否定の代わりに、継承・発展の加宗(加宗)方式
- マテオ・リッチによって招来された近代文明の弊害の克服を目標

独自の発展様相

- 民族主義的限界と西欧模倣を超越した自生的変革の思惟
- 聖-俗の境界の再配置およびリミナリティ(境界状態)の完成形
- 実体を持つ人身降世による形而上学的近代性と脱近代的システムの確立
- 天地神明の実体化を通じた西洋東洋二元論の克服

自生的近代性と西欧近代性の比較

区分	西欧近代性	大巡思想の自生的近代性
----	-------	-------------

三界の怨恨と治乱の循環

- 先天における相克により、三界(天界・地界・人界)に怨恨が累積
- 乱(亂)の発生:天地人三界の秩序の攪乱と怨恨の持続的増加
- 天地公事と三界公事を通じた乱(亂)から治(治)への転換過程

治乱の核心原理

- 解冤(解冤):万古の怨恨と隻(隻)を解消する根本原理
- 報恩(報恩):恩に報い相生の土台を築く実践
- 相生(相生):相互共存と調和を通じた後天仙境の建設



治の再活性化過程

天地公事(天地公事)

- 古き天と地の作り変え - 宇宙構造の再整備
- 上帝の人身降世を通じた直接的介入と改造
- 神明界と人間界の秩序の同時再定立
- 後天開闢(後天開闢)を通じた新たな天地秩序の構築

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいたので、各自の限度に従い到達するにつれ、新たな基盤が開かれるだろう。」

- 『典經』

三界公事(三界公事)の実現

- 1 冥府公事(冥府公事):天界と地界の相互関係の調整
- 2 解冤(解冤)と報恩(報恩):三界の怨恨解消と新秩序の確立
- 3 神人調和(神人調和):神明界と人間界の有機的結合
- 4 仙境仙境建設地上天国の現実化および治台の完成

儒仏仙(儒佛仙)の統合と西洋思想の受容

- 伝統儒仏仙三教の形而上学的原理を実体化して統合
- 陰陽五行、元亨利貞、十二運星などの東洋宇宙論を体系的に再活性化
- 西洋近代思想の物質主義、超越性の概念を独自の観点から再解釈
- 西欧的近代性と異なる自生的近代性および脱近代性体系の確立



現代社会における価値

- 多元社会の葛藤解消と社会統合のための解冤・相生の実践的原理を提供
- 物質中心の西欧近代性を超えた、人間・自然・神明界の調和ある共存モデルを提示
- 現代人の精神的危機と疎外に対する代案的世界観および修行体系の確立

未来展望と含意

- 生態・環境危機に対応する天地人三界の統合的生命観の活用可能性
- 科学技術の発展と調和をなす新たな霊性(靈性)言説の基盤形成

市田田相レ宗教の統合とトナリ生手のための特異的パラダイムの構築

結論および今後の課題

研究成果

- 大巡思想の人身降世の天界観が持つ自生的近代性の特徴の究明
- 東学思想との比較を通じた天観・地観・人間観の独自の発展様相の導出
- 三界観(天界・地界・人界)の体系的再構成と神明界の実体の体系化

治乱の再活性化の意義

- 解冤・報恩・相生の原理を通じた乱(亂)から治(治)への大転換モデルの提示
- 西欧近代性と差別化された韓国的近代・脱近代の思惟システムの確立

今後の課題

1

人身降世(人身降世)天界觀(天界觀)の自生的近代性

Indigenous Modernity of the Cheon'gye-gwan based on Insin-gangse

研究目的と問題意識

東学思想から大巡思想への変化過程の探究

天観(天觀)の変化と人身降世

- 東学思想の超越天(超越天)から大巡思想の人身降世(人身降世)への転換
- 既存の天観(天觀)の限界と、人間中心の新たな世界観成立の必要性
- 西洋近代性の限界を克服する東アジアの自生的近代性の模索
- 聖(聖)と俗(俗)の再配置による新たなリミナリティ(境界性)の形成
- 「古き天」を「作り変える」天地公事(天地公事)の意味の探究

研究方法論および主要概念の定義

人身降世、天界観、三界の核心概念の探究

研究方法論

- 文献研究:『典経』、『大巡真理会要覧』など大巡思想原典の分析
- 比較思想分析:東学思想、儒仏仙の天観、西洋宗教との比較
- 概念史的アプローチ:天観・地観・人間観の歴史的変遷の考察

人身降世(人身降世)

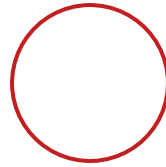
九天の最高神(九天上帝)が人間の身体で直接降臨し天地を改造する現象。東学の超越天の出現より積極的な介入形態

天界観(天界観)

大巡思想における天の体系的構造。9つ以上の重層的な天界の層位と神明(神明)のシステムを含む

三界(三界)

天界・地界・人間界から成る宇宙構造。仏教の欲界・色界・無色界とは異なり、神明の聴令(聴令)と会散(會散)によって運行される



東学思想の超越天と天観

超越天(超越天)の出現

東学思想では、初めて人世に超越天が出現したが、出現のみでは人間がその意を完全に理解しえなかった。水雲・崔濟愚の天師問答(天師問答)から始まった超越天の概念は、東学の核心思想として定着した。

「天地が鬼神であり鬼神が陰陽である」

天観・地観・人間観の変化

東学の超越天は既存の天(天)の概念を超える新たな超越的存在として、天と地、人間を根本的に再定立した。

東学天観の特徴と限界

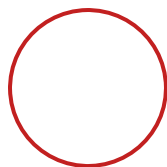
- 超越天が人世に出現はしたが人身降世へは至らない
- 天地人(天地人)間の階層解体の試みが不完全
- 儒教的伝統と限界を克服することは困難であった
- 超越天の実体化の未完成

東学思想の成果

儒教(伝統)の内在神観(内在神観)から離れ、超越神観(超越神観)への転換を試み、聖(聖)と俗(俗)の境界を再設定するリミナリティ(Liminality、境界性)の基盤を築いた

東学から大巡思想へ

東学思想において始まった超越天の概念は、大巡思想における人身降世へとさらに発展し、自生的近代性の重要な土台となった。



大巡思想の人身降世概念

人身降世(人身降世)の意味

人身降世とは、超越的存在(九天上帝)が人間の身体で直接世に生まれることを意味する。これは東学思想の超越天が人世に出現するに留まったのとは異なり、大巡思想においては直接人間として降臨し天地公事を行うという概念である。

「上帝が九天におられたとき、神聖仏菩薩などが、上帝でなければ混乱に陥った天地を正すことができないと訴えたため....辛未年に自ら世に降ることを定められた。」

人身降世の背景

マテオ・リッチから招来された西欧的近代性が病弊を生じたため、神聖仏菩薩は九天上帝に人身降世を訴えた。これは物質中心の西洋近代性が招いた天下尽滅の危機に対する対応と見なしうる。

超越天から人身降世への 転換

東学思想	大巡思想
超越天の出現	九天上帝の人身降世
啓示の形にとどまる	実体を備えた人間として顕現
部分的な聖-俗の再配置	完全な聖-俗リミナリティの完成

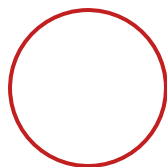
人身降世の思想的意味

- 天と地を作り変える天地公事が可能
- 神明が人間の心に往来し介入
- 天観・地観・人間観の総体的変化
- 人間と超越天が心のみならず身体まで通じる存在へと昇格
- 東西天観の実体論的統合の実現

天地改造の必要性

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいたので、各自の限度に従い到達するにつれ、新たな基盤が開かれるだろう。」

超越天が実体を持つことは人身降世によってのみ可能となる。これに



大巡思想 三界(三界)構造

三界(三界)の概念

大巡思想の三界は天界(天界)、地界(地界)、人間界(人間界)から成る総体的宇宙構造を意味する。これは既存の天地人三才(三才)とは異なり、各領域の内部システムと神明界を強調した概念である。

「その三界公事とは、すなわち天地人の三界を開闢することであり、この開闢は他人の作ったものに従うのではなく、新たに作られるものであるゆえ……」

既存宗教の三界との相違点

仏教の三界(欲界・色界・無色界)は天界のみを意味するが、大巡思想の三界は天界・地界・人間界のすべてを包摂する全体宇宙構造を示す。

宗教	三界概念
仏教	欲界(欲界)、色界(色界)、無色界(無色界)
大巡思想	天界(天界)、地界(地界)、人間界(人間界)

三界の構造とシステム

- 天 天界(天界)九天(九天)と天地神明が存在する天。9つ以上の重層的な階層構造を持つ
- 地 地界(地界)地の世界。冥界(冥界)と地界の神明が存在し、天界と人間界を連結する
- 人 人間界(人間界)人の住む世界。九天上帝が人身降世した場所であり、天地公事が行われる舞台

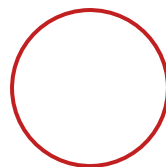
神明(神明)の導入

大巡思想は東学思想とは異なり、神明(神明)の概念を積極的に導入して三界の運行を説明する。神明は三界を往来し、天地の運行と人間の吉凶禍福に関与する。

三界システムの特徴

- 天・地・人が力動的かつ現在的な変化を同時に経験
- 天地の運行が神明によって体系的に管理される
- 上帝の人身降世によって三界の秩序が再編
- 「作り変える」天地公事を通じた三界の開闢の追求

神明界と天地公事



神明神明の役割

大巡思想において神明は、天地の運行を担う実体的存在であり、上帝の命令に従って活動する。神明は人間の心にも出入りし、体質と性格を変化させる役割を担う。

「神明をして人の腹中に出入させ、その体質と性格を作り変えて用いよう。これは、たとえ杭であっても気運を付ければ用となるためである。」

天界と神明の会散(會散)

天界の神明たちは会散(會散)を通じて上帝の命令(聽令、聽令)を受け、天地の運行を主宰する。風雨(風雨)を起こすにも無限の功力を要する複雑な体系から成る。

天地公事(天地公事)の意味

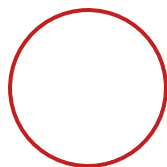
- 作り変える天地公事:古き天と地を新たに改造
- 先天の相克(相克)秩序から後天の相生(相生)秩序へ転換
- 天地の度数(度数)を整理し神明を調和させる作業
- 冥府(冥府)から始まる宇宙的整備作業

三界公事(三界公事)の意味

「三界大権を主宰し、造化をもって天地を開闢し、後天仙境(後天仙境)を開き、苦海に沈んだ衆生を広く救おうとするのだ。」

天地運行の原理

大巡思想では、天地のあらゆる運行が神明によって決定され、人間の吉凶禍福までもが定められる。天地公庭(天地公庭)において神明たちが会散と聽令を通じて万物を主宰する。



東西天観の比較

東洋伝統宗教の天観

- 儒教: 内在的天(理)、道德原理中心の天観
- 仏教: 三界(欲界、色界、無色界)中心の天界観
- 道教: 天地人三才(三才)の天観、道と気(氣)中心

西洋宗教の天観

- 超越的実体論創造主としての神中心
- 物質中心: マテオ・リッチ以降の西欧近代性の拡散
- 二元論的世界観: 天国(天上)と地獄(地下)の区分

「西洋人マテオリッチ(利瑪竇)が東洋に来て地上天国を建てようとしたが.....その文明は物質に偏り、かえって人類の傲慢を助長し、ついに天理を揺るがし自然を征服しようとするところから、あらゆる罪惡を絶えず犯し.....」

大巡思想の天界観の差別性

- 九天(九天): 9つ以上の重層的天界構造
- 人身降世(人身降世): 超越天の人間の身への降臨
- 神明界(神明界): 天地人すべてを包括する神明システム
- 三界公事(三界公事): 天界・地界・人間界の統合的開闢

区分	既存の天観	大巡思想天観
実体性	抽象的・観念的	実体的・現実的
層位構造	単純・階層的	複合的・システムの
運行原理	自然法則・超越的摂理	神明の聴令(聴令)と会散(會散)

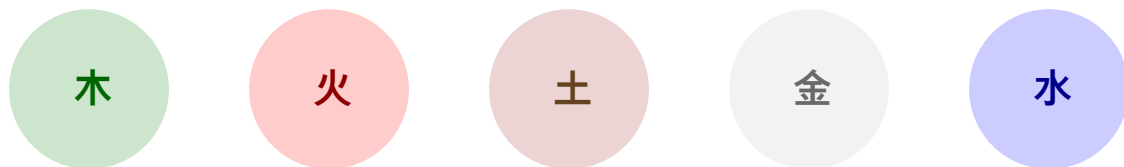
東西天観の統合

大巡思想は東洋の属性論的天観と西洋の実体論的天観を統合し、さらに神明の会散と聴令という実体を通じて九天・天命・天界の間の位階と役割を新たに定立することにより、新たな聖・俗の再配置を完成させる。

五行思想と土克水

五行思想(五行思想)の核心

五行思想は、宇宙万物が木(木)、火(火)、土(土)、金(金)、水(水)の五要素から成り、これらの相生(相生)と相克(相剋)の関係によって世界の変化がなされるという東洋宇宙論である。



土剋水(土克水)の意味

大巡思想において特に強調される土克水は、地(土)が水(水)を制御する原理であり、上帝の人身降世と関連する。『典経』に現れる「左の掌に壬(壬)字、右の掌に戊(戊)字」は、土(戊)が水(壬)を治める原理を象徴する。

金火交易(金火交易)と宇宙循環

五行における金火交易は、金(金)と火(火)が互いに位置を交換して五行を循環させる原理である。直線的循環を作り出すこの原理は河図洛書の核心であり、大巡思想において天地の変化と開闢の根本原理として再解釈される。

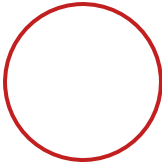
河図洛書(河圖洛書)宇宙観

- 河図(河圖):超越天の宇宙創造の原理、相生(相生)中心
- 洛書(洛書):宇宙変化の原理、相剋(相剋)中心
- 東洋思想で宇宙万物の理致(理)を説明する根本原理

大巡思想の再解釈

大巡思想は五行のうち土(土)を第五元素として注目し、土克水の原理を通じて人身降世の実体性と宇宙の均衡的变化を説明する。河図の相生と洛書の相克が調和をなし、後天開闢の新たな世界が開かれるという創造的統合の原理を提示する。

自生的近代性の特徴



自生的近代性の意味

大巡思想の自生的近代性は、西欧的近代性とは異なり東アジアにおいて内部的に発生した近代的思惟方式を意味する。これは「神は死んだ」と宣言した西洋の近代性ではなく、既存の伝統を継承しつつも新たに变化させる方式の近代性である。

大巡思想の近代性の特徴

- 加宗(加宗)の概念 – 既存の天を認めつつ新しい天へ交替
- 西洋の超越天と東洋の神明が実体として融和する新たな世界観
- 西欧式近代性の物質中心主義の限界の克服
- 人間の地位と役割の再定立

「今や、天をも地をも作り変えて、水が漏れる隙もなく度数を編み上げたので、各自の限度に達した時、新たな基業が開かれるであろう。」

聖(聖)と俗(俗)の再配置

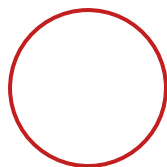
東学思想において提起された聖-俗の再配置は、人身降世を通じて完全に実現される。超越的な神聖が人間の日常に入り込み、超越天が実体を持った九天上帝として人間世界に直接降臨することにより、聖と俗の境界が根本的に再構成される。

リミナリティ (Liminality、境界性)の完成

リミナリティは既存の範疇と秩序の間の境界的状态を意味する。大巡思想では天地人三界が神明界へと融合し、人間と神明が互いに疎通協力する新たな境界的システムが完成される。

区分	東学思想	大巡思想
天観の特徴	超越天の出現	九天上帝の人身降世
聖-俗関係	再配置の試み	完全な再構成
リミナリティ	基盤の整備	システムの完成

大巡思想における聖-俗の再配置とリミナリティの完成は、自生的近代性の核心であり、これを通じて自生的近代性へと展開される。



ポストモダンの含意

大巡思想の天界観の脱近代性

大巡思想の天界観は近代を超える脱近代特性を示す。西洋の近代性が物質中心主義と理性中心のパラダイムによって招いた限界を克服し、精神と物質の調和、超越と内在の統合を志向する。

「今や、天をも地をも作り変えて、水が漏れる隙もなく度数を編み上げたので、各自の限度に達した時、新たな基業が開かれるであろう。」

多元主義との関連性

大巡思想の天界観は多様な宗教と思想を包摂する多元主義的特性を持ち、これは現代のポストモダン時代における多様性の尊重、相互共存のパラダイムと文脈を共にする。

脱近代性の特徴

- 大他者の消滅ではなく新たな形態への変形と再活性化
- 近代的二分法(神/人間、聖/俗、超越/内在)を解体し統合
- 超越天の人身降世を通じた聖と俗の完全な統合
- 東西思想の融合を通じた新たな世界観の提示

近代性	大巡思想の脱近代性
理性中心	理性と超越の調和
物質的進歩	精神的物質的調和
人間中心	天・地・人 三界の均衡
「神の死」	「神の人間化」(人身降世)

現代社会における意味

大巡思想の天界観は、1980年代以降のポストモダン時代の多様な危機環境、社会、価値観に対する代案的世界観を提示し、局地的思想を超えて普遍的価値と実践の方向性を提示する現代的意義を持つ。

結論および研究意義

大巡思想の天界観の統合的意味と現代的価値

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいたので、各自の限度に従い到達するにつれ、新たな基盤が開かれるだろう。」

東西天観の統合および再解釈

西洋の超越的実体論的天観と東洋の内在的属性論

的天観の統合 五行思想と土克水(土克水)、金火交

易(金火交易)の再解釈

河図(河圖)・洛書(洛書)宇宙観の創造的再構成

現代的・ポストモダンの意義

大巡思想の天界観は西次近代性の限界を克服し、東アジアの自生的近代性を完成させ、さらに東西洋思想の統合を通じてポストモダン時代の新たな宇宙観を提示する。物質中心の西次近代

大巡思想の天界観の特徴

- 人身降世(人身降世)を通じた天界観の実体化および完成
- 天界・地界・人間界の三界(三界)システム構築
- 神明(神明)を通じた天地運行のシステムの理解
- 聖(聖)―俗(俗)の再配置とリミナリティ(境界性)の完成



天界観(天界観)としての天観(天観)

View of Heavenly Realm as View of Heaven

研究の概要および目的

- **研究背景**

天観(天觀)概念の歴史的展開とその変化様相を探究し、韓国宗教思想の独特な特性を理解

- **比較対象**

東学思想に現れた超越天(超越天)の概念と、大巡思想における九天(九天)および天界観(天界觀)

- **核心的研究の問い:**

- 超越天の介入方式と、上帝人身降世現象の意味論的差異は何か?
- 両思想に現れた天観地観人間観の変化様相は何であり、その意義はいか
- なるものか? 三界観(三界觀)としての天界観が持つ独特な特徴と現代的含意は?

-

研究方法

原典文献分析を通じた概念比較、思想史的文脈内における位置の考察、近代性批判の観点からの解釈学的アプローチ

東学思想の超越天(超越天)概念

- 超越天の人世への初出現

東学思想において超越天は初めて人世に出現し、天観地観人間観に総体的な変化を引き起こした。これは天と人間の関係における根本的なパラダイムの転換を意味する。

- 人間と超越天の関係の変化

人間は今や超越天と直接意思疎通する存在として地位が格上げされる。これは儒教的な天人合一(天人合一)の概念とは区別される疎通方式であり、人間が天命(天命)の単なる受容者から対話者へと転換されることを意味する。

- 限界点意思疎通理解の不足

しかし超越天の出現のみでは、人間がその意を完全に理解することは困難であった。人間の身体で直接降臨しない超越天の限界が、大巡思想の人身降世によって克服される契機となる。

「天主をわが心に奉れば造化はその中に在り。」

- 東経大全 -

東学天観の主要な特徴

- 天地が鬼神であり鬼神が陰陽で疎通
- 上帝を鬼神と表現する実体性の付与
- 人間と超越天が霊的に連結された関係の設定
- 超越天の出現が近代的天観への転換の始点

大巡思想の九天(九天)人身降世

- 九天の意味と上帝の人身降世

大巡思想において超越天は九天(九天)と称される。東学思想では超越天が人世に出現するに留まったのに対し、大巡思想では人間の身体で直接降臨する。これは単なる靈的出現ではなく、肉体的顕現を通じて天地改造の直接的役割を遂行する。

- 天と地の改造

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいた.....」上帝は人間として生まれてこそ人間の立場から天地の姿を見ることができたゆえ、自ら作った天と地を作り変える存在へと転換する。これは「後天開闢」を通じた全面的変化を志向する。

- 人身降世の哲学的背景

人身降世の背景は、マテオリッチによって始まった物質中心の西洋近代性が招いた天下尽滅の状況である。大巡思想は西洋的近代性が引き起こした人類絶滅の危機を警告し、これに対する根本的解決のために上帝の直接的降臨が必要であったことを説明する。

「上帝が九天におられたとき、神聖仏菩薩などが 上帝でなければ混乱に陥った天地を正すことができないと訴えたため....自ら世に降ることを定められた。」

- 『典経』 「豫示」
1-

東学思想との差別性

- 実体性九天の人身降世により超越天が実体を持つ
- 変革方式開闢(更新)ではなく改造(再構成)
- 三界の拡張天界地界人間界の力動的相互作用
- 神明の作用神明界の積極的介入と体系化

天地公事と三界観の再構成

- 天地公事(天地公事)の意味

九天上帝の人身降世以降に遂行された天地公事は、天と地を作り変える改造作業である。これは単なる更新ではなく、水も漏れぬよう度数を組み、天と地の根本原理を再定立する過程である。

- 三界(三界)の構造的特性

大巡思想の三界は天界(天界)、地界(地界)、人間界(人間界)に区分され、各界は独自でありながらも相互に密接に連結された有機的世界を形成する。この三界は神明という媒介を通じて互いに疎通し影響を及ぼし合う。

- 才(才)と界(界)の差異

伝統思想の「三才(三才)」が天地人の三つの大きな要素または才能を意味するのに対し、大巡思想の「三界(三界)」はより複雑で多様な内部世界を持つシステム的概念である。界(界)は神明界のような複雑な構造を含む。

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいたので、各自の限度に従い到達するにつれ、新たな基盤が開かれるだろう。」

- 『典経』「教法」3-4 -

仏教道教との比較

仏教の三界

欲界(欲界)、色界(色界)、無色界(無色界)で構成

→ 天界のみを細分化した概念

道教の三界概念

天(天)、地(地)、水(水)の三元(三元)、または上界(上界)、中界(中界)、下界(下界)の区分

→ 具体的体系化の不備

大巡思想の三界

天界(天界)、地界(地界)、人間界(人間界)を明確に区分

→ 神明システム基盤の相互作用の強調

神明界の導入と天界観の特徴

- **大巡思想における神明(神明)の積極的導入**

大巡思想は東学思想とは異なり、神明を天地公事の核心概念として導入し、三界の運行と変化に積極的に参与する存在として規定する。これは上帝の人身降世を通じて神明が人間の心に介入する契機が設けられたためである。

- **構造化された神明システムと三界の関係**

大巡思想の天界観は「界(界)」というシステムを通じて非常に詳細な神明の構造を提示する。これは天地・人三才(三才)の概念を超え、三界(三界)の内部に神明たちの力動的システムが作用することを意味する。

- **神明観の再活性化**

東洋思想において天地(天地)と神明(神明)を共に論じることは、宋明以降の儒学者たちが回避してきたアプローチであった。大巡思想は『郭店竹簡』に現れた古代の神明観を再活性化し、近代的再解釈を試みる。

「今、天も作り変え地も作り変え、水も漏れぬよう度数を組んでおいたので、各自の限度に従い到達するにつれ、新たな基盤が開かれるだろう。また神明をして人の腹中に出入させ、その体質と性格を作り変えて用いよう.....」

- 『典経』「教法」3-4 -

神明概念の変化

東学「天地が鬼神であり鬼神が陰陽である」- 概念的抽象的表現

大巡神明が具体的な実体として人間と相互作用し、宇宙的变化を主導

大巡思想の天界観の特徴

- 仏教の三界(欲界、色界、無色界)とは異なり、天界・地界・人間界を包括天界、地界、人間界が同時に力動的に変化
- マテオ・リッチから招来された近代文明の危機を克服する方策としての天界観の提示

東学思想と大巡思想の天観の比較

比較項目	東学思想の天観	大巡思想の天観
超越天の表現	人世に出現し呪文と儀礼を通じて疎通	人身降世を通じた直接的顕現と天地公事
天-人関係	人間が超越天と意思疎通する存在として地位上昇	九天が人間として降世することにより天-人境界の実質的消滅
神明(神明)概念	「天地が鬼神であり鬼神が陰陽」という概念的表現	構造化された神明界システムへ拡張、実体的神明の作用の強調
天観の変化方向	「再開闢」を通じた更新志向	「後天開闢」を通じた天地の根本的改造の追求

主要な差別

大巡思想は、東学思想に始まった天観の変化を、上帝の人身降世を通じてより実体的体系的な形で完成させ、三界(天界、地界、人間界)の構造的関係を再定立する。

近代性への対応

東学思想の伝統を受け、大巡思想はマテオ・リッチに始まった西洋近代性が招いた物質中心の病弊に対する批判的天観を通じて、東西洋文明の葛藤に対する解法を提示する。

結論および意義

思想史的意味

- ◆ 東学思想と大巡思想は東西洋文明の衝突の中で近代性に対する独特な対応方式を提示
- ◆ 西洋近代性が招いた物質中心文明の危機を、天観の再構成を通じて克服しようとする
- ◆ 既存の儒教的天人合一思想から離れ、超越天と人間の新たな関係の定立

現代的含意

- ◆ 物質万能主義が招いた現代文明の危機に対する代案的思惟の提供
- ◆ 人間と自然、超越的存在間の相生的関係モデルの提示
- ◆ 近代以降、東アジアにおいて発生した思想の中で民族主義を超えて人類普遍の問題を認識

韓国宗教史における意

義

- ◆ 韓国的状況における聖・俗の再配置とリミニリティを通じた独創的宗教思想の形成
- ◆ 東学思想に始まり大巡思想において完成された「神明界」を通じた新たな宇宙論の提示
- ◆ 「三界観」により仏教・道教と差別化された韓国的天観・地観・人間観の体系化・人間中心の宇宙論(anthropocentricity)として独特

な位置を確立

質疑応答(Q&A)

本日の発表に対する質問とご意見を歓迎します。

- 連絡先: example@religion-studies.org
- 追加資料: 本研究の全体論文は『韓国宗教学研究』2025年夏号に掲載予定である。



人身降世(人身降世)の天界観(天界観)

Incarnational View of the Heavenly Realm

研究概要

本研究では大巡思想の天界観、すなわち上帝の人身降世とそれに伴う天(天界)の細分化的特徴を考察する。

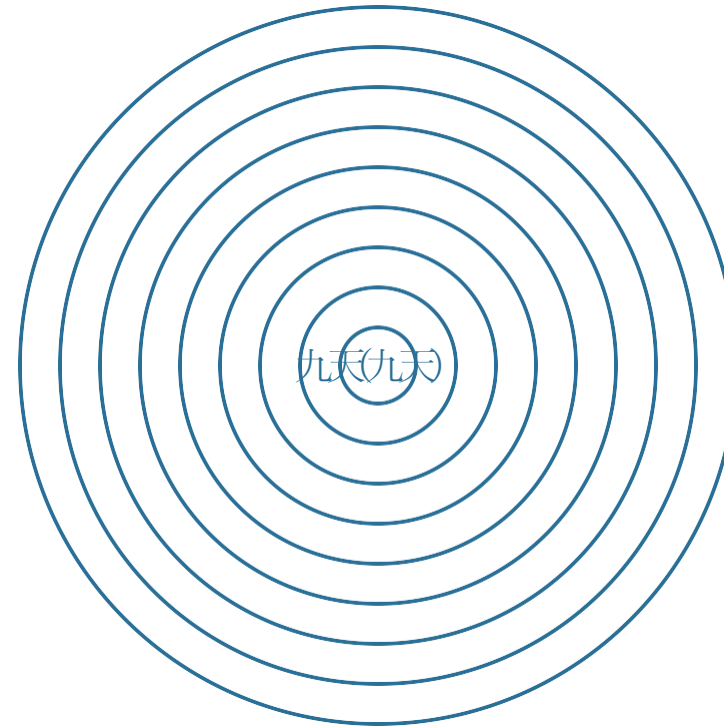
- 天界の重層的構造
9つ以上の重層的な天の構造と上帝の人身降世
- 上帝と天地神明の役割
雷声の意味と天地創造、会散と聴令の体系
- 伝統的天観との差異
東洋の内在天、西洋の超越天、そして天外天への概念の拡張
- 古い天と新しい天
天の変化および改革、自生的近代性/脱近代性の実現

金松煥(金松煥)が上帝に「天の上にまた天がありますか」と伺った。

上帝は「ある」とお答えになった。また彼が「その上にまたありますか」と伺った。

上帝は「またある」とお答えになった。このように九度お答えになり、「そこまで知っておくがよい」とおっしゃった。

- 大巡思想では9つ以上の天が重層的に存在することを示唆
天の外(九天)と、天地人に区分された天 各天
- 界の独立性と連結性を同時に内包 究極的には上帝
- によって統率される秩序体系
-



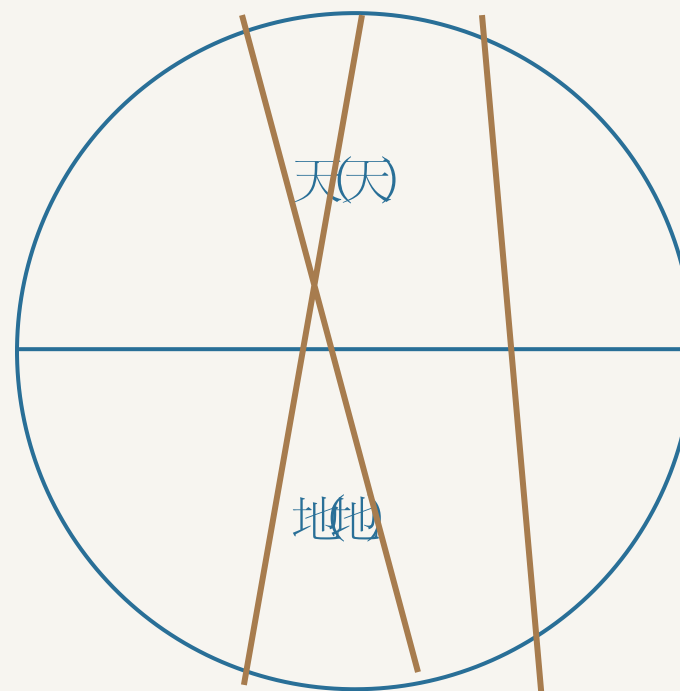
九天応元雷声普化天尊姜聖上帝雷声の意味と天地

創造

雷声(雷聲)とは天令(天令)であり仁声(仁聲)である。雷(雷)は陰陽二氣(陰陽二氣)の結合(結合)によって成雷(成雷)となる。

雷(雷)は声(聲)の体(體)であり、声(聲)は雷(雷)の用(用)として、天地(天地)を分かち、動静進退(動静進退)の変化(變化)によって天氣(天氣)と地氣(地氣)を昇降(昇降)させ、万物(萬物)を生長(生長)させ、生成變化(生成變化)・支配滋養(支配滋養)することを意味する

- 「天地を分かち」-天地が上帝によって雷声で分かたれ作られる
- 「天氣(天氣)と地氣(地氣)を昇降(昇降)させ」-天界と地界の相互作用
- 「万物(萬物)を生長(生長)させ」-天地の化育と万物の生成



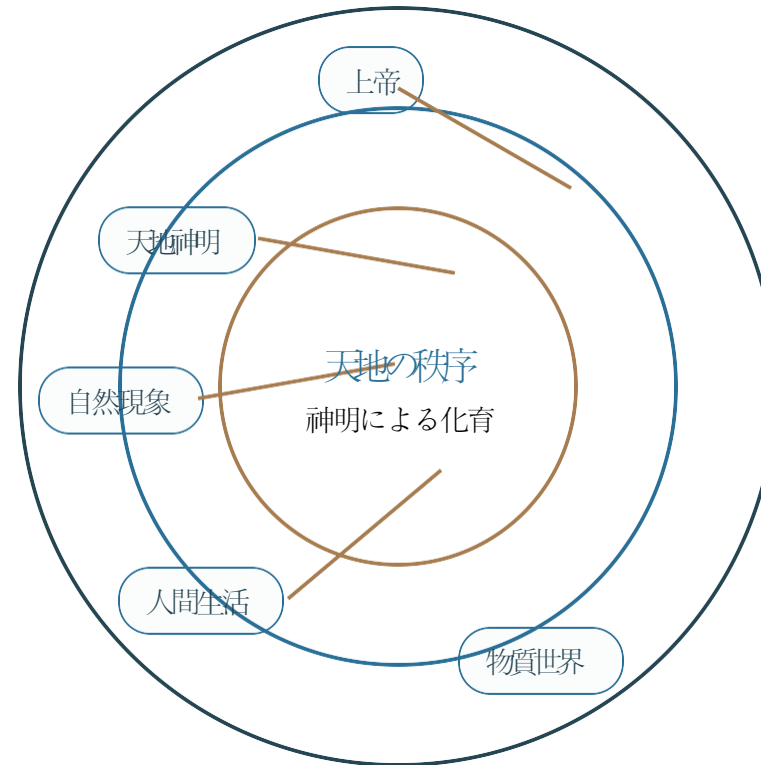
陰陽二氣(陰陽二氣)の結合(結合)によって
雷声(雷聲)が天地を創造し造化する

天地 運行の体系神明の役割

上帝が従道たちが集まっているところで仰せられた

「七山(七山)の海で捕れる石持(いしもち)も、食べる人を定めておいて綱にかかり、農事もまたそのように、食べる人を定めておいて実を結ぶのだ。飢えて死ぬことはない。」

- 人間の吉凶禍福を含む天地の運行が神明によって決定される
- 天地神明が宇宙秩序を維持し、万物の生成と分配を主宰
- 自然界の小さな現象(石持の漁獲)までもが神明の秩序体系の中でなされる
- このような天地体系が上帝によって調和統制される

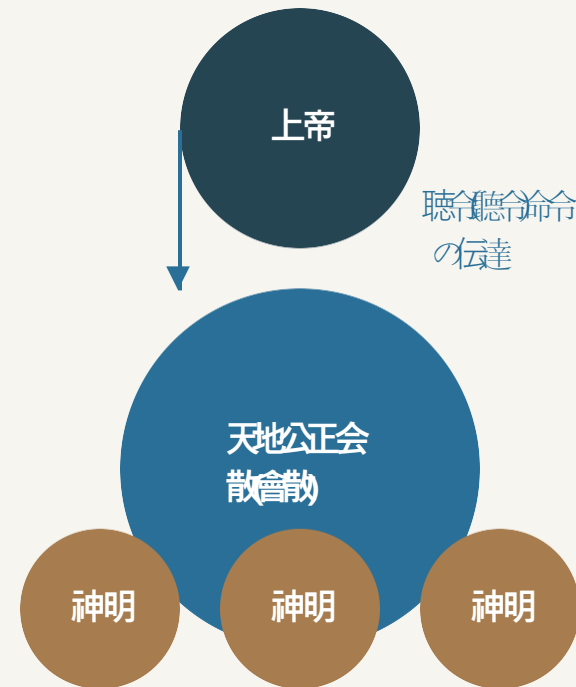


天地神明の会散と聴令

上帝はある日、金亨烈(金亨烈)に「三界大権を主宰し、造化をもって天地を開闢し、後天仙境(後天仙境)を開き、苦海に沈んだ衆生を広く救おうとするのだ」とおっしゃった

「今、末世を迎え、これより無極大運(無極大運)が興るゆえ[.....]清らかな心で天地公庭(天地公庭)に.....」と仰せられ、彼に神眼を開いてやり、神明の会散と聴令(聴令)を参観させられた。16)

- 会散(會散):天地神明が集まっては散じる集会であり、上帝の意を伝達される体系
- 聴令(聴令):天地神明が上帝の命令を聞き遂行する過程
- 「天地の造化により風雨を起こそうとすれば無限の功力を要する。あらゆることは修めずして知る法などないのだ。

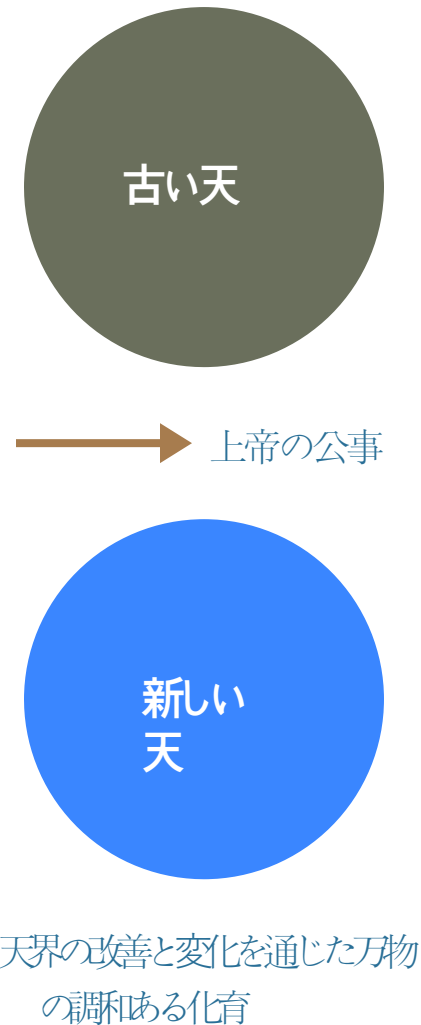


古い天と新しい天

上帝はある日、宗徒たちが集まった席で「古き天は人を殺す公事のみを見ていた。今後、日用百物がすべて欠乏し生きていけなくなるゆえ、今作り変えなければならぬ。」とおっしゃった

上帝は公事を終えられ「かろうじて延命はできるようにしたが、壮丁は腹を満たせず、腹が減ったという声が九天に達するだろう」とおっしゃった

- 天も時間が経つにつれて古き天となりうる
- 古き天は人を殺す公事のみを見ており、改革が必要な状態
- 上帝が三日間の公事を通じて天を作り変える
- 天の変化と改革は上帝の意図に従って進行する



結解既存の天観との相違点および意義

東洋の天観

- 内在天宇宙内部に存在する天
- 性理学以降の天外天概念の隠蔽

西洋の天観

- 超越天宇宙を超越した天
- 近代に至り「神は死んだ」という表現で否定

大巡思想の天観天外天(天外天)の概念

- 既存の天を認めつつも古き天(古き天)と見て、東洋の内在天と西洋の超越天を総合的に融和し、新しき天へと交替
- 加宗(加宗)の概念で天観を提示 – 既存の天観を包越(包越)
- 神明の聴令と会散という既存の天の概念を継承・発展

大巡思想の天観が持つ意義

- 聖俗の関係の再配置: 日常の中に聖性が入る
- 自生的脱近代性への展開



人身降世(人身降世)天界観(天界観)に現れた東西洋天観(天観)の再活性化

Revitalization of East-West Views in Insin-gangse

- 
- 1 序論
 - 2 大巡思想と人身降世の天界観概要
 - 3 儒仏仙の天観の解釈と陰陽五行の原理
 - 4 土剋水と金火交易:東洋天観の核心
 - 5 大巡思想と西洋天観の統合および差異
 - 6 九天大元造化主神概念の再照明
 - 7 現代的意義:ポストモダニズムの観点
 - 8 結論および示唆点

大巡思想と天観の統合的理解

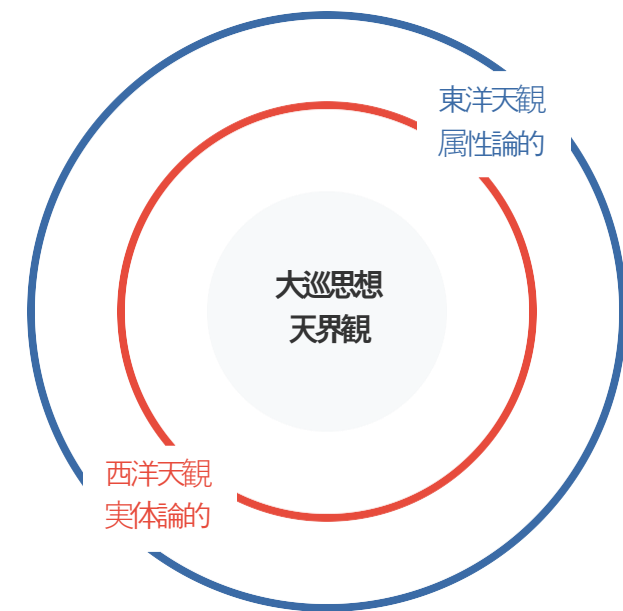
1

2

3

を克服し再活性化する

4



人身降世(人身降世)の概念と意義

人身降世の定義

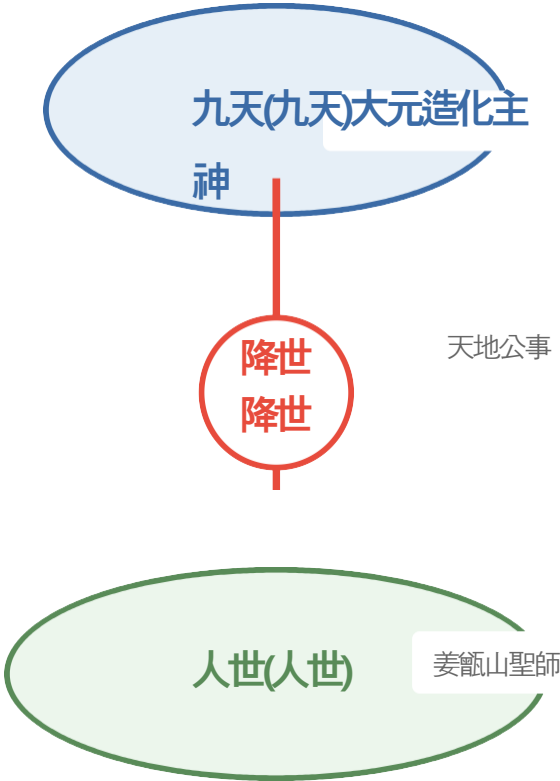
神的存在が人間の身体で降臨し、天界の秩序が人間世界に実現される現象として、天界と人間界の直接的連結を意味

1

2

3

4



儒仏仙の天観と陰陽五行の原理

陰陽五行と「土(土)」の特殊性

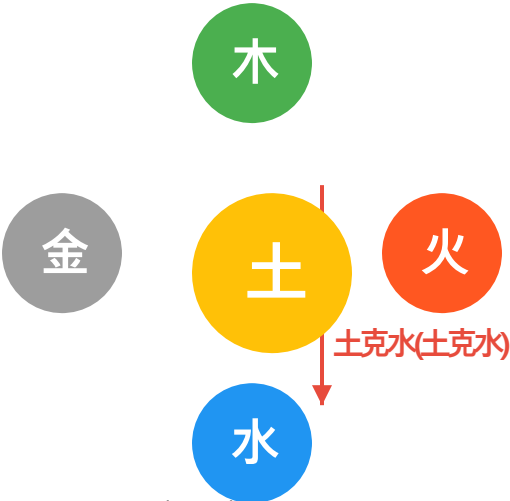
1.

2.

3.

4.

「五行之義 土克水也」(五行の大義は土克水にあり) - 『抱朴子』



河図:相生(相生)→木→火→土→金→水
洛書:相克(相克)→水→火→金→木→土

土剋水と金火交易の原理

五行の核心原理

■ 土剋水(土克水)の意味

陰陽五行において土(土)は、木火金水(木火金水)とは異なり陰陽をともに持つ特別な存在であり、五行の循環と変化に中心的役割を担う

「五行之義 土克水也」(五行の大義は土克水にあり) - 『抱朴子(抱朴子)』

■ 金火交易(金火交易)の原理

河図(河圖)と洛書(洛書)の転換において、金(金)と火(火)が位置を交換し、相生(相生)と相克(相克)関係を変換させる核心メカニズム

■ 天地運用の原理

「わたしが天地を回転させたことをどうして知りえよう」という大巡思想の表現は、八卦(八卦)の順序変更を通じた宇宙運行の変化を意味

「天地大八門(天地大八門) 日月大御命(日月大御命) 禽獸大道術(禽獸大道術) 人間大積善(人間大積善)」



大巡思想と西洋天観の統合

東西天観の統合的再構成

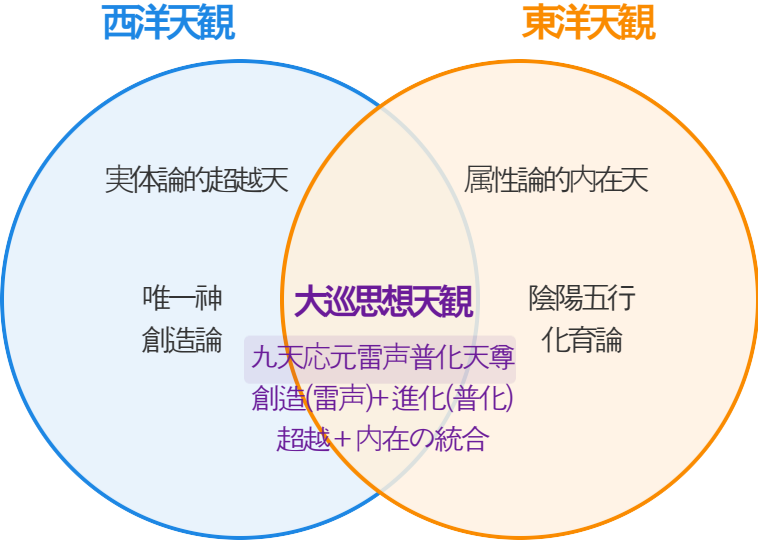
1

2

3

4

5



九天大元造化主神の意義と現代的示唆点

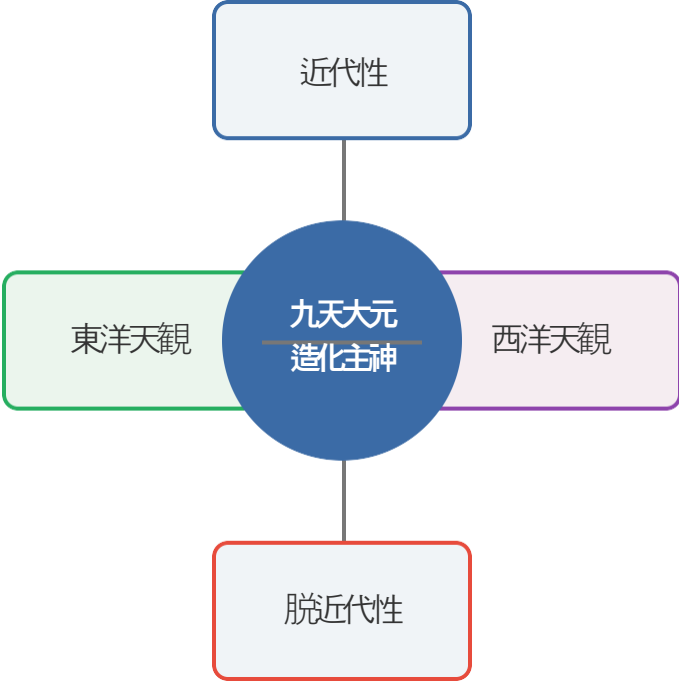
リミナリティとポストモダニズム的 解釈

1

2

3

4



2

天地誠敬信(天地誠敬信)地界觀(地界觀)の自生的近代性

Autogenous Modernity of the Cheonji-Seonggyeongsin View of Earthly Realm

序論:研究背景と問題意識

- 東学思想および韓国宗教哲学の地観(地觀)
伝統的な天地人(天地人)三才思想と東学の地観概念の発展
- 大巡思想が提起した自生的近代性の問題意識
西欧中心の近代性を超えた東洋的近代性の可能性の模索
- 地界観の意味と研究の必要性
天地神明(天地神明)の三界システムにおいて、地界が持つ特別な位相と、解冤(解冤)の場としての役割
- 研究方法およびアプローチ
『典経』を中心とした文献研究と、天地誠敬信概念の現代的解釈

地観(地觀)と人身降世

- 人身降世(人身降世)の概念と意味

九天上帝が人間の姿で降臨することにより、属性と実体の二つの性格を同時に持つに至る。多重的地観(地觀)の成立背景となる。

「わたしは西洋(西洋)大法国(大法國)天啓塔(天啓塔)に降り、天下を大巡した後、三界の大権を持って三界を開闢し仙境を開き、死滅に陥った世界の蒼生を救おうとしてお前たち東方に巡回する途中、この地に留まったのは....」

- 朝鮮における人身降世の理由

無名の弱小民族を助け、万古に積もった怨を解くためである。特に朝鮮が神明を最もよく待遇する国であったゆえに選ばれた。

- 三神山と地の性格

井邑(井邑)の三神山(蓬萊山、瀛洲山、方丈山)は地の中心として人身降世の地理的背景。天地陰陽合徳の観点からの地の中心的役割。

- 解冤と地の関係

「今や解冤時代を迎えたゆえ、名もなかった人も氣勢を得、捨てられていた地にも氣運が戻ってこよう」地の解冤は天地公事の核心要素。

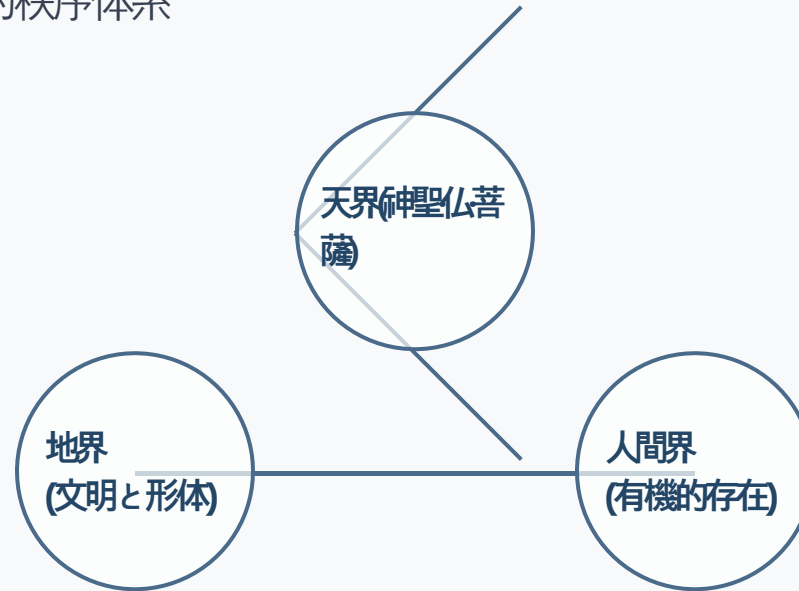
地界觀の近代性解冤と原始返本

「今や解冤時代を迎えたゆえ、名もなかった人も氣勢を得、捨てられていた地にも氣運が戻ってこよう。」

- 原始返本(原始返本)の原理
姜(姜)姓の再出現のように、本来の根本に立ち返る天地公事のコア原理
- 解冤(解冤)の地界的意味
無名の弱小民族と、三神山のような地理的聖地(聖地)を通じた解冤公事の実現
- リミナリティ(liminality)と解冤の方法論
日本解冤と朝鮮報恩の歴史的空間においてなされる、相克から相生への転換
- 自生的近代性の展開
物質に偏らない代案的近代性の発展、および韓国において現れた政治的民主化、経済的産業化、文化的先進化

天地誠敬信(天地誠敬信)と三界システム

- 天地神明(天地神明)概念
天地を運行する神明の至極な誠敬信(誠敬信)によって世界が運行される
- 三界(三界)システム構造
天界、地界、人間界からなる宇宙的秩序体系



"天地誠敬信"

天地の運行は天地神明の至極な誠敬信を通じて成される

儒仏仙と東西地観の再活性化

- 儒仏仙の地界観の主要な原
環 胞胎(胞胎)－礼(禮)と秩序の形成方式 養生(
佛 養生)－精神的修行と心身浄化の空間
仙 浴胎(浴胎)－自然との合一と神仙思想の地形的土台
- 三神山・父母山など聖地と明堂の概念
蓬萊山(蓬萊山)・瀛洲山(瀛洲山)・方丈山(方丈山)の三神山と、地気(地氣)の統一、地脈(地脈)を通じたエネルギーの流れと、聖地の風水地理的特性
- 風水地理と伝統現代の融合
東洋の風水原理と西洋の空間地理学の融合、天地人三才の調和ある配置を通じた解冤の空間の創出、正陰正陽(正陰正陽)を通じた地界秩序の再編
- 再活性化の現代的意味
地域性と普遍性の調和、自然と人間の共存モデルの提示、人間と神明が調和をなす地界観の新たなパラダイム

西洋近代性との比較

- 西洋実体論的地観(地観)

物質的・機械的観点から見た地の理解 — 西洋の地観は主に所有と開発の対象として地を理解

西欧の近代性



過去を~~廃棄~~し未来のみを志向物質
的發展と機械的効率性の追求人間
と自然の分離、搾取的関係

大巡思想の自生的近代性



解冤(解冤)を通じた過去との和解
物質と精神の調和ある発展 天地人
(天地人)三才の相生的関係

- 西欧近代性に対する大巡思想の評価

「解冤なき西欧の近代性は、過去の怨をさらに増幅させ、人類を戻ることのできぬ尽滅の境地に至らしめた。」

- 神明(神明)と機械文明

西洋の機械文明は神明を薄待(薄待)し物質的成就のみに集中したが、大巡思想は神明を優待(優待)する朝鮮において天地公事が始まったと認識

- 東西文明の均衡と統合

マテオ・リッチ(利瑪竇)に始まった東西文明交流を、天地公事を通じて再調整し、新たな統合的世界観を提示

結論東西融合と地上天国論

大巡思想の地界観は東西洋の思想を包摂する、自生的近代性の重要な理論的土台を提供する

- 地上天国(地上天國)の思想的意味
解冤と報恩を通じた相生の原理、天地の怨恨解消を通じた後天仙境の実現
- 後天秩序と人間・神明の役割
天地誠敬信を通じた神人依導(神人依導)、神明と人間の相互補完的関係の構築
- 東西儒仏仙の統合的展望
西洋の実体論と東洋の気化論を包摂する統合的思惟体系の提示、物質文明を超えた精神文明発展の方向の模索

今後の研究方向

大巡思想の地界観を基盤に、現代社会の環境空間土地問題に対する具体的解決策の模索





地界觀としての地觀

View of Earth as the Earthly Realm

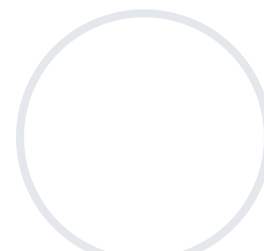
研究の概要および 目的

■ 研究背景

大巡思想の天観(天観)と地観(地観)に対する現代的意義の考察地
に対する観点としての地界観が持つ思想的哲学的重要性

■ 研究目的

大巡思想の地界観の分析および東学思想などとの比較研究近代性
・解冤相生など主要議題を通じた地界観の現代的意義の導出人身
降世と天地公事の地界観的側面の考察



大巡思想と東学思想の地観(地観)の比較

大巡思想の地観

- 具体的神明界(神明界)を包含
- 実体的地界(地界)として表現
- 九天の下の天地概念の包括
- 地は神明で構成された形体を持つ代表的存在

東学思想の地観

- 無為而化(無爲而化)の強調
- 気化(氣化)、造化など見えない実体として表現
- 九天の下の天地概念の包括
- 抽象的原理で地観を説明

両思想の地界包括性と相違点

両思想はいずれも多重的地観を持つが、大巡思想は神明界を含む地界として具体化して表現し、東学思想は目に見えぬ実体と原理として地観を説明する。大巡思想の地観は人身降世を通じて属性と実体の二つの性格を同時に持つに至った特徴を有する。

*『典経』「公事」3-5、「行録」4-17など関連根拠を参照

人身降世と朝鮮選択の背景

人神降世(人神降世)の概念

- 九天(九天)の上帝が人間の身体で世に降臨する現象属
- 性と実体の二つの性格を同時に持つに至る
- 天地の度数を調整し、万古の神明を調和するための降臨人
- 間世界において天地公事を行うための必須の前提条件

朝鮮が選ばれた理由

無名の弱小民族の解冤

「惨禍の中に埋もれた無名の弱小民族をまず助け、万古に積もった怨を解いてやろうとするためである。」

「無自欺」概念と大巡思想の相生が結びつく地点についても、すでに西洋哲学の観点から研究されたことがある。金泰洙, 「大巡思想の無自欺(無自欺)に現れた相生倫理-カントとミルの倫理観との対比を中心に」『大巡思想論叢』27, 2016.

人身降世に始まる大巡思想の地界観は、地を神明から成る実体とみなし、朝鮮の選択は歴史的背景とともに、天地公事を通じた世界秩序再編の出発点となる。

神明憂侍の伝統

「朝鮮のように神明を厚くもてなす所はこの世にない」

『典経』「教法」3-22

三神山の聖地(聖地)

「蓬莱山・瀛洲山・方丈山の三山が、三神山と呼ばれてきた所である。」

『典経』「行録」1-2

天地公事と地界観の成立

天地公事と

- は
- 世界秩序再編のための神祕的公事
- 解冤によって万古の神明を調和
- 天地の度数を調整して仙境を樹立
- 神明を通じた地の変化の始まり

地界観の成立過程

- 九天の人身降世から始まる
- 九天が東土に至り朝鮮に降世
- 三神山(蓬萊山・瀛洲山・方丈山)の聖地的意味
- 天界と地界の陰陽合徳の具現

原始返本(原始返本)の原理

天地公事において地界観成立の核心原理であり、世界の根源に立ち返ることを意味する。姜(姜)姓がその務めを担うことになった根拠であり、朝鮮において人身降世がなされた原理的背景である。原始返本の原理により、地の中心である三神山のある朝鮮が天地公事の舞台となり、地界観は天地公事を通じて実質的な形を持つに至る。

「この世に姓としては風(風)姓が先にあったが伝わってこず.....その次は姜(姜)姓が出たのであり、すなわち姓の元始となる。ゆえに開闢の時代を迎え原始返本となるため、姜(姜)姓が務めを担うこととなった。」

- 『典経』 「行録」 4-17

*『典経』「公事」3-5、「予示」29、「行録」1-2など関連根拠を

解冤思想と地界観の関係

● 解冤(解冤)の意味

怨と恨(恨)を解いて根本的問題を解消する、大巡思想の核心原理

「今や解冤時代を迎えたゆえ、名もなかった人も氣勢を得、捨てられていた地にも気運が戻ってこよう。」(『典経』「教法」1-67) 天地の度数を調整し、万古の神明を調和する過程において、解冤は必須の過程

東学の失敗の原

因

- 解冤思想の不在
- 国際情勢への理解の不足
- ガトリング銃(Gatling Gun)など西欧兵器に対する
- 認識の欠如 全国的規模の蜂起であったが戦略的準備の不十分

地界観と解冤の連携

地の解冤は天地公事のうち解冤公事の主要な趣旨であり、人身降世が朝鮮でなされた理由と深く関連する。大巡思想は地界観を通じて過去の解冤なき西欧の近代性を克服し、真の自生的近代性の原理を提示する。地界観は天界観に比して相対的に怨(冤)が多い領域であり、人身降世を通じて解冤の場(場)として作用する。

*『典経』「公事」3-5、「教法」1-67、「権之」1-11など関連箇所を

大巡思想の真東学化

- 「わたしに従う者は永遠の福祿を得て不老不死し、永遠の仙境の楽を享受するだろう。これこそが参東学である。」(『典経』「権之」1-11)
- 解冤思想の導入で東学の限界を克服
- 天地公事を通じた実質的変化の追求

大巡思想の地界観の近代性

代替的近代性解冤と相生の原理

- 西欧近代性過去の廃棄、未来志向的展望中心 大巡思想
- の近代性過去の解冤を通じた相生的未来の構築 地界観
- から出発する自生的近代性の模索

韓国近代化との関連性

- 天地公事の開始時期GNP世界最下位水準であった韓国
- 植民地経験国のうち唯一達成した三重近代化:

政治的
民主化

経済的
産業化

文化的
先進化

「真の近代性は解冤から始まるというのが大巡思想に現れた自生的近代性の原理であり、これは天界観に比して相対的に怨が多い地界観から始まり、人身降世以降にのみ可能なものであった。」

*『典経』の関連箇所を参照した

結論および示唆点

▲ 大巡思想の地界観の学術的・社会的意義

人身降世を通じた形而上学的地界と形而下学的地界の統合的理解 原始返

本の原理が適用された地界観の特殊性と現代的再解釈

韓国近代化過程に現れた地界観の実質的影響力の考察

-
-

▲ 東アジア思想の地平の拡大

- 天地公事を通じた東アジア地界観の新たな解釈の提示
- 東学と大巡思想の地観の比較を通じた韓国宗教思想の特殊性の再発
- 見 西欧近代性に対する代案的思惟体系としての可能性の模索

▲ 解冤・相生の現代的価値の提言

地界観に込められた解冤・相生の原理は、現代社会の葛藤解消と共存方策として再照明される必要があり、過去の怨に対する解決なく未来へのみ進む西欧近代性の限界を克服する代案的パラダイムとして作用しうる。

*『典経』の関連箇所を中心に整理された解釈である



天地誠敬信の地界觀

View of Earthly Realm based on Cheonji-Seonggyeongsin

研究概要および背景

- 東学と大巡真理会など東洋思想における地[地]の意味
- 天地敬信および三界論が登場した学術的背景
- 本研究の目的と意義

石井

東学思想の地観(地観)概念

- 東学における地:造化(造化)、無為而化(無爲而化)、気化(氣化)
 - 地に対する理解は抽象的で理法的な概念として提示される
- 理法的抽象的な地概念
 - 超越天が東洋思想に再び出現する契機でありながらも、人格的神明よりも抽象的な形で現れる
- 東学の天地鬼神と大巡思想の天地神明の比較
 - 東学:天地鬼神の**概念**で抽象的に理解 大巡:天
 - 地神明の**概念**で人格的神明が出現

地観

大巡思想の神明体系と三界論

- 大巡思想における地・天地神明概念

- 九天の出現により地は人格的神明の姿で人間に出現

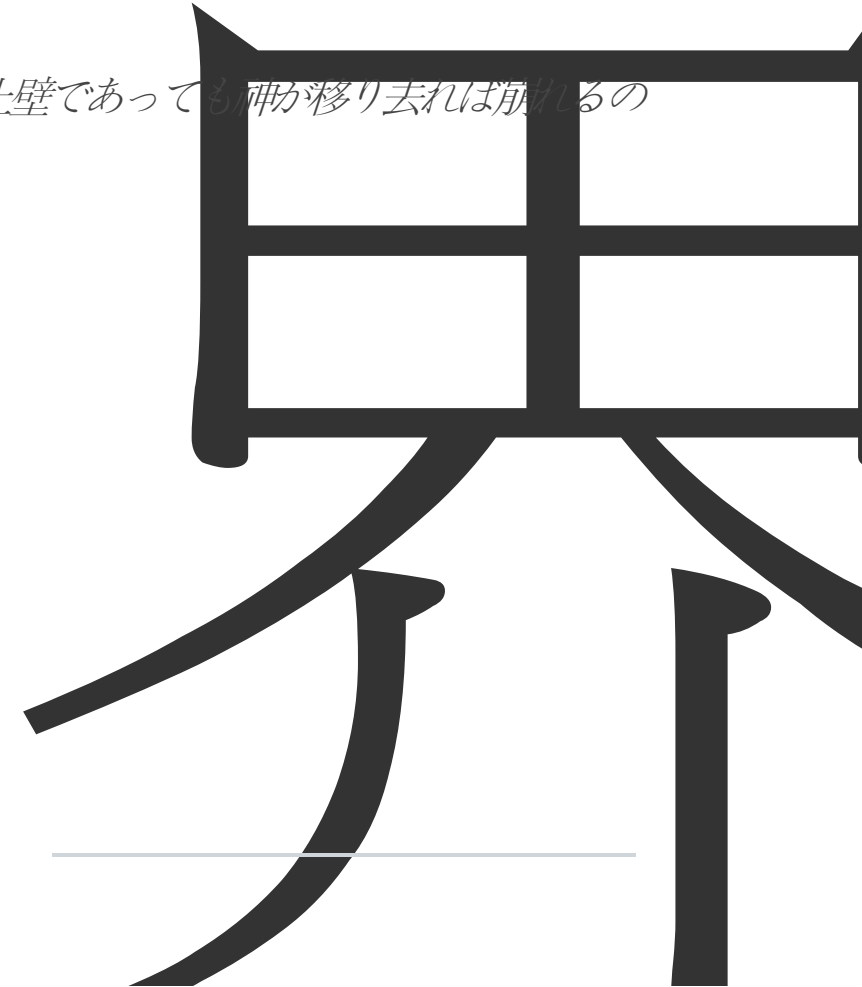
「天地に神明が満ち満ちているゆえ、たとえ草葉一枚であっても神が去れば枯れ、土壁であっても神が移り去れば崩れるの
な。」
り

- 三界(三界)と神明システム

- 天界神聖仏菩薩が集まり上帝に訴える天上公正の場
- 地界文明と形体の世界 地下文明神天上で学び人世に施す場人間界人間のシステム、神明
- と相互作用する世界

- 神明の特殊性と人間との対比

- 神明:「真理に至極」な機械的専門家、特定分野に特化した存在
- 人間:多様な分野に広く通じる有機的存在、神明間の調和を可能にする



天地誠敬信(天地誠敬信)の意味と特徴

- 誠(誠)・敬(敬)・信(信)の統合的概念
 - 事を成就するための努力の総体を意味 自
 - 然の原理であり、人間修道の原理として
作用
- 神明と人間の解冤・報恩関係
 - 人間と神明が誠敬信を共有し相互作用 誠敬
 - 信を通じた神人依導(神人依導)の実現
- 天地化育の原理としての誠敬信
 - 大巡思想で神明の至極な誠敬信として表現
 - 「天地誠敬信」 - 天地の運行は誠敬信によって成される

誠敬

神人(神人)依導(依導)関係

- 神明と人間の相互依存的補完関係

「神人以陰陽成造化...(中略)神無人後無托而所依 人無神前無導而所依」により陰陽の造化を成す。神は人がなければ依託するものがなく、人は神なくば導き依託するものがない。

- 陰陽的調和と依託(依、引導(導)

- 神明:一分野に特化した機械的神明(真理に至極)
- 人間:複数の分野に通じる有機的存在(責任者の性格)

- 解冤と報恩の神人(神人)システム

- 神明と人間は誠敬信(誠敬信)を共有し、解冤と報恩を成す天地
- 運行における核心的な神人依導(神人依導)の相補的關係

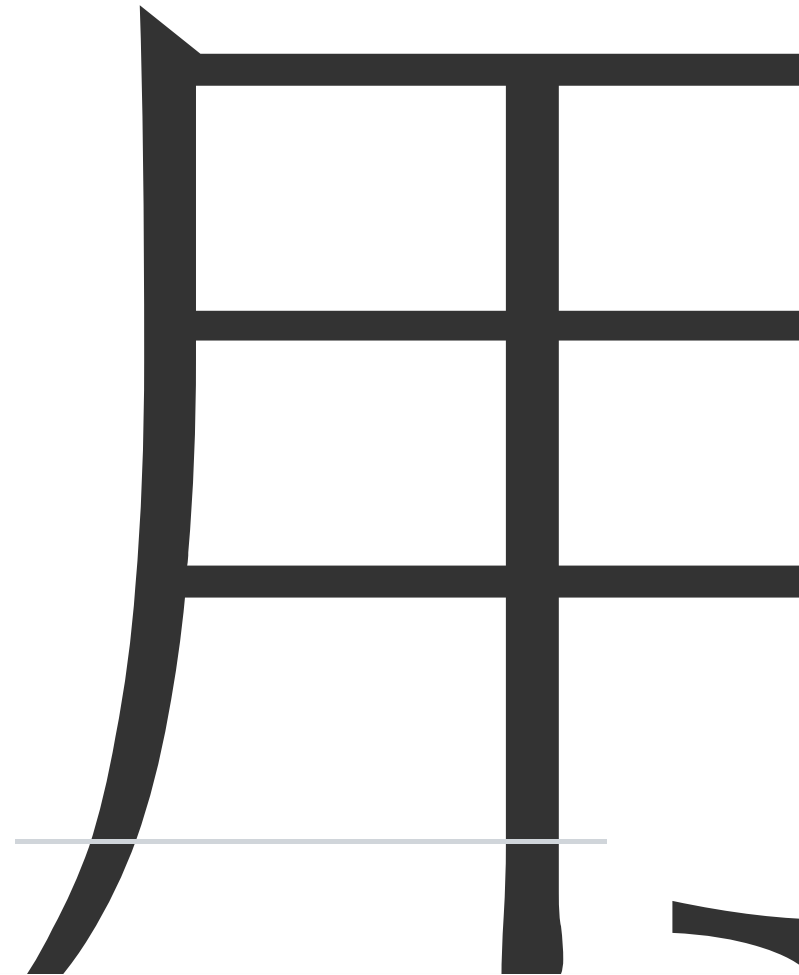
神

正陰正陽と地上天国

- 先天vs後天:正陰正陽(正陰正陽)の概念
 - 先天:天地が多重的対応関係であった時代
 - 後天:天地が1対1で対応する正陰正陽の時代
- 相生の天地関係と地上天国
 - 先天の相克関係:陽尊陰卑(陽尊陰卑)、抑陰尊陽(抑陰尊陽)、天尊地卑(天尊地卑)後
 - 天の相生関係:天国が地において成り、地が天国となる
- 大巡思想の天地関係相生化の意味
 - 「お前は正陰正陽の度数ゆえ、その気運をよく耐え受け、正心で修練せよ」(『典経』公事2-16)
 - 天地尊陽の調和を通じた天人合一(天人合一)の実現

十二運星と天地之用(天地之用)

- 十二運星(運星)の体系 - 胞胎(胞胎)、養生(養生)、浴帶(浴帶)、冠旺(冠旺)、衰病(衰病)、死葬(死葬)
| 「天地之用 胞胎養生浴帶冠旺衰病死葬而已」 - 『典經』 「濟生」 43
- 元亨利貞(元亨利貞)と体用(體用)の関係
 - 元亨利貞は天地之道(天地之道)であり、十二運星は天地之用(天地之用)
 - 体(體)である五運が現実的には六氣(氣)という用(用)として現れる
- 天地化育(天地化育)と三徳(三徳)の関係
 - 十二運星が六用(用)に分かれ、胞胎・養生・浴帶は天地人の三徳に該当
| 「六用三徳 三徳則天徳地徳人徳也 統合謂之大徳也」 - 『典經』 「濟生」 43



結論および意義

- 大巡思想の地界観の哲学的・近代的意味の定立
 - └ 神明システムとしての地界を通じた天地之用(天地之用)の地界観の定立
 - └ 立聖一俗の再配置を通じた近代性と脱近代性への転換
- 東西思惟の統合的意義
 - └ 東洋の凝縮的地観、西洋の質料的地観、東学の造化定の地観を統合した新たな地界観
 - └ 正陰正陽正陰正陽を通じた天地関係の相性化
- 現代的意義と後続研究の提言
 - └ リミナリティ(liminality)方式の解冤と相生概念の現代的適用
 - └ 十二運星の体用(體用)原理と現代宇宙観の哲学的連携性の研究





天地誠敬信(天地誠敬信)の地界觀(地界觀)に現れた東西洋 地觀(地觀)の再活性化

Revitalization of East-West Views in Cheonji-Seonggyeongsin

目次

- 1 天地誠敬信および地観の概念
天・地・人・神の相互作用の世界観とその哲学的意味
- 2 東洋地観の特徴と事例
天地誠敬信に基づく統合的アプローチと歴史的実践事例
- 3 西洋地観の特徴と事例
デカルト、ライプニッツなどの哲学的空間観と都市計画
- 4 東西洋地観の比較
全体論的観点と個体論的観点の差異と影響
- 5 現代的再活性化の論点
都市計画、環境政策における伝統的地観概念の融合と復元
- 6 結論および示唆点
気候危機および複合社会における地観の未来的意義

天地誠敬信および地観の概念



天地誠敬信(天地聖敬神)

- 天(天)と地(地)、人間(聖)、神(神)の有機的相互作用を強調する東アジア特有の自然観・宗教・哲学・政治・行政が結合した統合的世界観として実践的具現を重視
- 人間と自然、神明(神明)が相互に連結され調和をなす全体論的体系



地観(地観)

- 単なる物理的空間ではなく、世界の秩序・共同体文化に影響を及ぼす場所概念・天・自然・人間・神が出会う接点としての地に対する認識体系
- 国家行政、祭儀、宗教、生活世界において統合的に作動する社会文化的実体

東洋地観の特徴および事例

○ 天地誠敬信に基づく統合的アプローチ

- 自然(天地)・人間・神(神)の調和を中心とする全体論的世界観
- 場所と空間に内在する神性(神性)と気(氣)の流れを重視

⌌ 統治/祭儀/行政に反映された地観

- 国家儀礼、都城および宮闕の配置に反映された天地観
- 念帝王の統治行為と民間儀礼における地観の実践的具現

🕒 古代中国三皇五帝

禹任公(禹任公)の治水事業と土地区画は、天地誠敬信の地観が反映された古代統治の代表的事例

⌌ 朝鮮半島王朝の事例

三国時代から朝鮮まで続いた風水地理と明堂論に基づく都市計画および王室儀礼

🔄 現代的復元の試み

韓国伝統空間の現代的再解釈と地観概念を接木した都市計画および文化遺産復元事業

西洋地観の特徴および事例



哲学的基盤と世界観

- デカルトの二元論(Cogito ergo sum)ー精神と物質の分離に基づく主体-客体中心の空間観
- ライプニッツのモナド論(單子論)ー個体の独立性と自足性に基づく実体論的世界認識
- 神論(pantheism)とアリストテレスの四元素説ー神/自然と物質の関係設定



事例と現代的影響

- 古代ギリシャ・ローマの神殿と都市設計ー神聖性と幾何学的秩序の結合
- 近代以降の都市計画ー機能性と効率性中心の空間構成と自然の道真的活用現代
- 環境哲学と都市計画における変化ー持続可能性と場所性の回復のための努力

比較、再活性化の論点および結論



東西洋地観の比較

区分	東洋地観	西洋地観
哲学的基盤	天地誠敬信、陰陽五行、全体論的世界観	デカルトの二元論、ライプニッツの個体論
空間認識	内在的・凝縮的地観、関係的场所	質料的地観、物質対象としての空間



現代的再活性化

- 都市計画:生態的都市空間、共同体活性化を志向する空間設計に伝統地観
 - を接木 環境政策:自然と人間の共存、相互作用を強調する生態的観点の導
 - 入
- 東西洋地観の融合:西欧的効率性と東洋的調和を結合した新しい空間文化の模索



未来的意義と示唆点

- 気候危機対応:天地誠敬信の全体論的世界観を通じた気候変動危機意識の涵養
- 超連結社会:物理的・デジタル空間の融合に東西洋地観の統合パラダイム提示
- 持続可能な発展:人間・自然・空間の相生的関係を追求する新しい価値観の必要性

3

成事在人(成事在人) 人界觀(人界觀)の自生的近代性

Indigenous Modernity of the View of Human Realm as Seongsajaein

目次

- 1
- 2 九天(九天)人身降世と関係変動
- 3 成事在人(成事在人)思想:権威の移動
- 4 心(心)の哲学的意味
- 5 儒仏仙(儒佛仙)思想との比較
- 6 西洋近代性との差異
- 7 天地報恩(天地報恩)と人間倫理
- 8 三界(天・地・人)構造の可変性
- 9 結論および自生的近代性の意義
- 10 参考文献および文献出典

序論:人界観(人界観)とは？

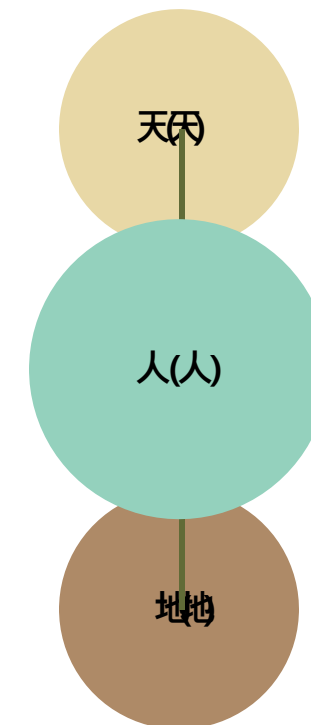
人界観の定義と意味

- 人界観は大巡思想における人間世界に対する観点であり、人間が天地と神明の間で仲介役を担う
- **成事在人(成事在人):**すべての事の成功は人間にかかっているという核心理念
- 九天上帝の人身降世により宇宙秩序が再編成され人間の地位が上昇
- 伝統的天尊地卑人輕から人尊時代へのパラダイム転換

問題意識

- 人間-神明-天地の関係変動がもたらした新たな宇宙論的秩序
- 人間中心世界観が東洋伝統および西洋近代性とどのように差別化されるか？

人界観の三次元的構造



『大巡真理会要覧』抜粋:

「神人調化(神人調化)・解冤相生(解冤相生)・道通真境(道通真境)の三大要諦で治天下(治天下)する。」

九天(九天)人身降世と関係変動

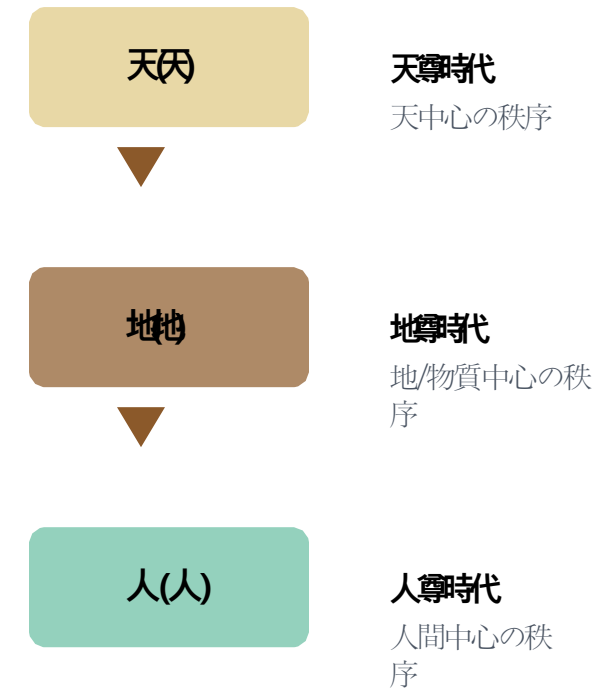
九天の人身降世とは

- 九天(九天)の上帝が人間の身(人身)で下降(降世)して天地公事を行う
- 「九天大元造化主神が人間世界に降臨して三界(天・地・人)を救う九天上帝の大役事」
- 人界と天界の疎通神的權威が人間世界に直接介入

神明-人間-天地の関係の変動

- 伝統的天尊地卑人輕の構図から人間中心へ権力が移動
- 「天地は日月であり日月は即ち一陰一陽である。陰陽が合徳すれば万物化生の道があるようになる。」
- 三界開闢天界、地界、人界の構造的変化を通じた新秩序形成神明
- 神明の位相変化—上帝の人間への権能付与

權威の移動図式



『典經』抜粋:

「天尊と地尊より人尊が大きいので今は人尊時代である。心を勤勉にせよ。」

成事在人(成事在人)思想権威の移動人尊時代

人間中心的世界観の登場

- ◆ 成事在人:「今は神も人間を通さずには天地経営の造化に参与することが難しくなった」
- ◆ 伝統的天尊地卑人輕の構図から人尊時代への決定的転換
- ◆ 「天地の理法を用いるのは人であり、天地の造化を成すのも人である」

権限の移譲過程

- ◆ 人間主体性の確立:天地経営と神道(神道)が人事(人事)の意に合わされる
- ◆ 人間は受動的な存在から宇宙の管理者・経営者へ位相が変化

「天下を主宰するのは天尊でも地尊でもなく人尊である...今から人尊の時代が来た」

- 『典経』

権威の移動の流れ



過去の時代

天が主宰する世界



中間の時代

地が主宰する世界



現在の時代

人間が主宰する世界

人尊時代の意味

人間が天地万物の主宰者として責任と義務を尽くす時代

心(心)と靈台の哲学的意味

大巡思想の心の理解

- 「心は神の存在形態であり、人間の本体であり、天地の中心である」
- 靈台(靈臺):神明が出入りする通路であり人間と神明の交流空間
- 『典経』:「天地の中心が心であり心也は一身(一身)の主宰(主宰)である」

人間の自己変革の可能性

- 心を通じた自己修行と自己完成の可能性
- 『典経』:「心を欺かず一心(一心)で修道すれば天地神明がすべて動く」
- 人間は心の修養を通じて神と人間が一つになる境地(神人一體)に到達可能



東西人間観の比較

東洋哲学	西洋近代哲学
心(心)中心	理性(理性)中心
精神と身体 の 統合	靈魂と肉体の二元論
天人合一(天人合一)	人間と自然の分離
内面修養を通じた変化	理性を通じた外部世界の征服
感性と理性の調和	理性の優位性
神人調化(神人調化)	人間中心主義(人間中心主義)

大巡思想の差別性

人間の内的修養と外的実践の均衡、自

儒仏仙(儒佛仙)思想との統合、再解釈

伝統思想と大巡思想の人間観

- 儒教(儒教):五常(五常)と義理(義理)を通じた人格完成 → 大巡思想では「人間管理権限委任」として再解釈
- 仏教(佛教):寂滅(寂滅)と虚無(虚無)の境地追求 → 大巡思想では「人間主体性強化」へと拡張
- 道教(道教):離調(離調)と自然合一の志向 → 大巡思想では「人間と神明の調和」として再構成

大巡思想の統合的アプローチ

- 『典経』教法3章29節:「儒仏仙(儒佛仙)の道通神(道通神)を受け継ぎ道数を整理し神政(神政)を正して」
- 儒仏仙修行法の内面化(心境(心境)構造を個人修養から「公共善(公共善)」へと拡張
- 伝統思想の限界(超越性、退行性)を能動的な「自生的近代性」で克服

主要概念の比較および統合

概念	儒教	仏教	道教	大巡思想
人間の本質	性善説 (性善説)	無我 (無我)	自然人 (自然人)	神人調化 (神人調化)
修行方法	存養省察 (存養省察)	禪定 (禪定)	養生 (養生)	修道 (修道)
究極目標	聖人 (聖人)	解脱 (解脱)	神仙 (神仙)	道通真境 (道通真境)
人-神明関係	敬畏 (敬畏)	超越 (超越)	疎通 (疏通)	相互作用 (相互作用)
人世救援観	修己治人 (修己治人)	菩薩行 (菩薩行)	濟世 (濟世)	解冤相生 (解冤相生)

大巡思想は儒仏仙の核心的価値を総合しつつ「人尊(人尊)」中心の統合的世界観を構築

西洋近代性批判と大巡の人界観

西洋近代的観点の限界

- 西洋啓蒙主義の人神分離:神の位置が縮小され人間理性が中心に位置
- 西欧的構成主義の限界:人間主体と客体を徹底的に分離する二分法的思考
- 理性中心の合理性追求は精神と物質、主観と客観の分裂を招く

大巡の人界観の独創的観点

- 調理(條理)理致と論理が単純な人間思考の産物ではなく宇宙的原理として作動
- 気は氣は物質と精神の区分なく氣を通じた変化と疎通の原理
- 三界相互關係西欧の人間中心主義と異なり天・地・人の有機的關係の中で人間の位相を定立

西洋近代性と大巡思想の比較

区分	西洋近代性	大巡人界観
神と人間	神の位相の減少、二分法的分離	神人調化(神人調化)
人間の役割 価値の源泉	自然征服、対象化 人間理性、合理性	天地公事の参与、調停者 天地人の相生的理致
認識論的特徴	主体/客体分離	主客合一、身-心の統合
変化の属性	直線的進歩、発展	循環的、相生的変化

「大巡思想は西欧近代性の人間中心主義と本質的に異なる人間自然の有機的關係性と人間神明の調和を通じた新たな人界観を示す。」

天地報恩(天地報恩) 解冤相生の倫理

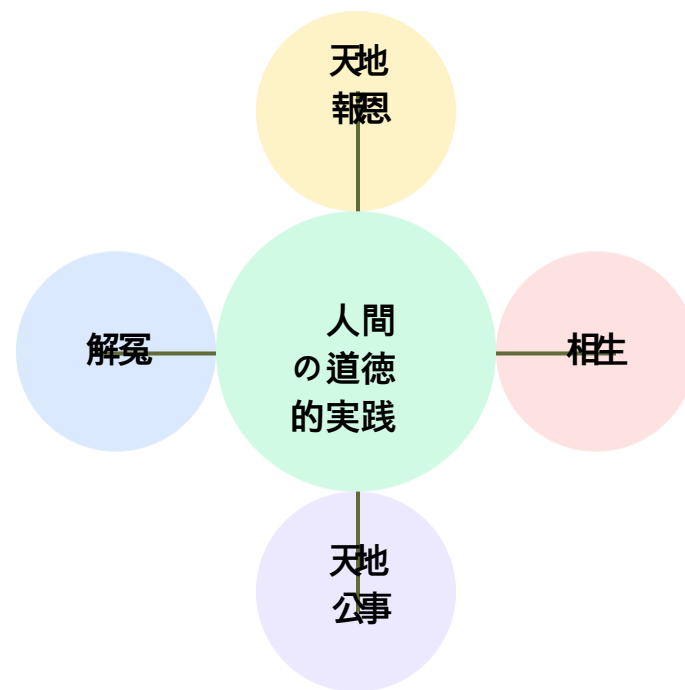
天地報恩と人間の倫理的責任

- 天地報恩天地の恩恵に報いることで、人間が天地を奉じ管理すべき責任意識
- 『典經』教法2章55節:「天地は万物の父母である。故に人事は天地の徳に倣うべきである。」
- 解冤相生(解冤相生)怨恨を解いて互いに生かす相生的倫理体系

人界観と倫理的実践

- 人間が天地公事の参与者として世の開闢に共に参加する実践倫理
- 人間の道德が天地自然の変化をもたらす人尊時代の倫理的責任
- 相生の道德的実践:他人をよくすることが自分をよくする原理

解冤相生の倫理体系



「解冤相生・報恩相生は相生の原理である。すなわち他人をよくする公事は自分もよくすることである。」

- 『大巡真理会要覧』 -

三界(天地人)の可変性、地位上昇、互換性

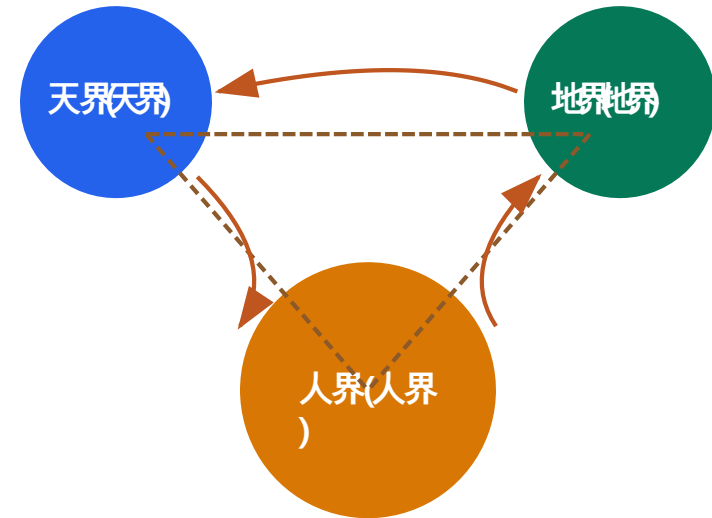
三界構造の特性

- 可変性:既存の固定された位階を脱し天界・地界・人界の流動的關係の形成
- 地位上昇:人間の位階が神明とともに天地變化に主体的に参与する位置へと格上げ
- 相互互換性:人間の修行を通じて神明の地位獲得可能、三界が相互作用する關係へと変化

現代的意味と示唆点

- 既存の東洋伝統の位階秩序を超える新たな人間中心の自生的近代性の確立
- 神人調化(神人調化)を通じた三界の統合的調和と相生の具現
人間の主体性強化と同時に天地との共存を強調 — 生態的意義
- 義

三界相互互換構造図



『典經』抜粹

「天尊と地尊より人尊が大きいのでは今は人尊時代である。弥勒を今後誰もが俦わなければならない。」

-大巡典經 3編 41章-

結論および自生的近代性の意義

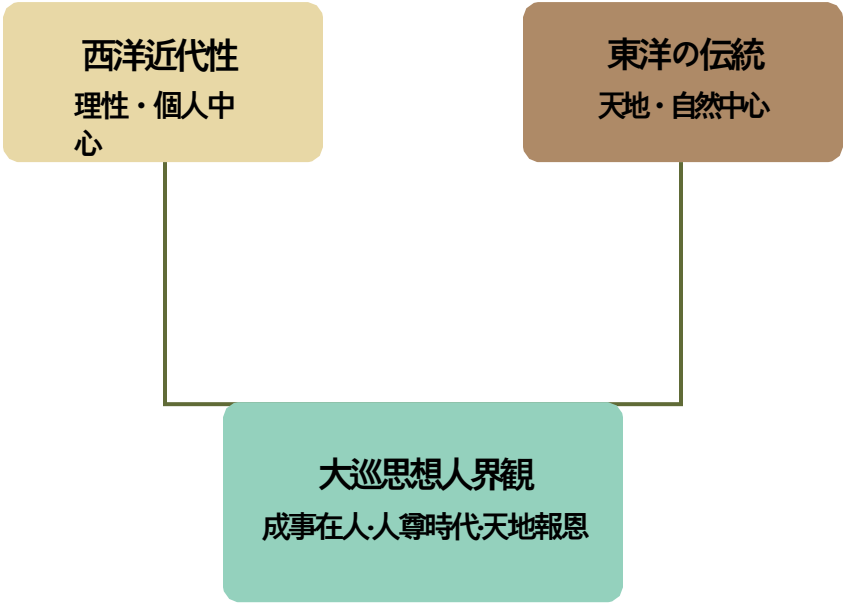
大巡思想の人界観の思想史的意味

- 人間中心性(人中心性)の新たなパラダイム:天地神明を仲介する主体としての人間の位相定立
- 東洋伝統の人間観(天尊地卑人輕)の逆転と再構成:人尊時代の哲学的根拠の提供
- 西洋近代性の分節的な人間-自然の二分法と異なり、統合的で調和ある関係性を確保

自生的近代性の可能性と展望

- 西欧式近代性モデルではなく韓国的脈絡から発生した人間中心的世界観の現代的意味
- 人界観の三界相互互換可能性が提示する未来志向的な人間-神明-自然の共存モデル
- 現代の環境・社会危機克服のための相生・調和・報恩(報恩)の実践的価値

自生的近代性の位置



核心的参考文献

『大巡真理会要覧』、大巡真理会教務部、1969.
『典経』、大巡真理会教務部、1974.
車先根、「大巡真理会の開闢と地上仙境」、『新宗教研究』29、



人界觀(人界觀)としての人間觀(人間觀)

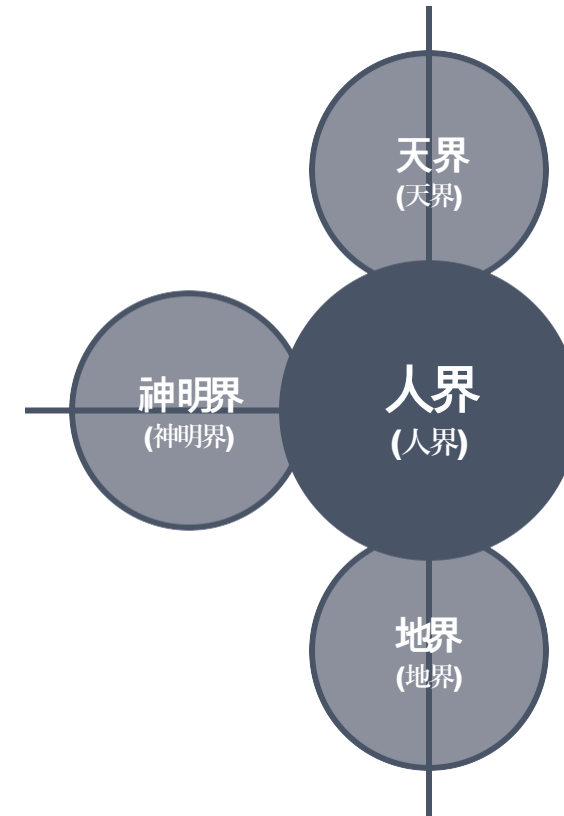
View of Humanity as View of Human Realm

目次

- 1. 人界観の概念
- 2. 九天の人身降世と意味
- 3. 神明と人間の関係
- 4. 修道と精魂の意味
- 5. 神・人陰陽論と役割
- 6. 三界システムと人界観
- 7. 近代東西文明と人界観
- 8. 結論および現代的意義

1. 人界観(人界観)の概念

- 人界観は人間世界を一つの有機的システムとみなす大巡思想の核心的観点である。
- 人間界は神明界、天界、地界と共に連結され宇宙の調和を成す。
- 大巡思想において人界は単なる空間ではなく、神明で満たされたシステムとみなされる。
- 「天地に神明が満ちているので、たとえ草葉一つでも神が去れば枯れ、土壁でも神が移れば崩れる。」(『典経』「教法」**32**)
- 人界観と人間観の違いは「界(界)」のシステムの性格にあり、事件が論理的に連結される方式に表れる。



2. 九天の人身降世と人間観

- 大巡思想の人間観は九天の人身降世から始まる。
- 姜聖上帝(姜聖上帝)という用語は人間界の姓(姜)を神位に加えることで九天が人間の身で降世したことを示す。
- 九天の人身降世により神明と人間の関係が逆転した。以前は人間が神明を探したが、以降は神明が人間を探すようになった。

「今、天地神明が運数の座を探して各人と各家庭を出入りしながら器局を試す。」(『典經』「教法」142)

- これにより人間は受動的な存在から能動的な存在へと位相が格上げされ、人間界は神界とともに天地公事の主体として浮上することになる。

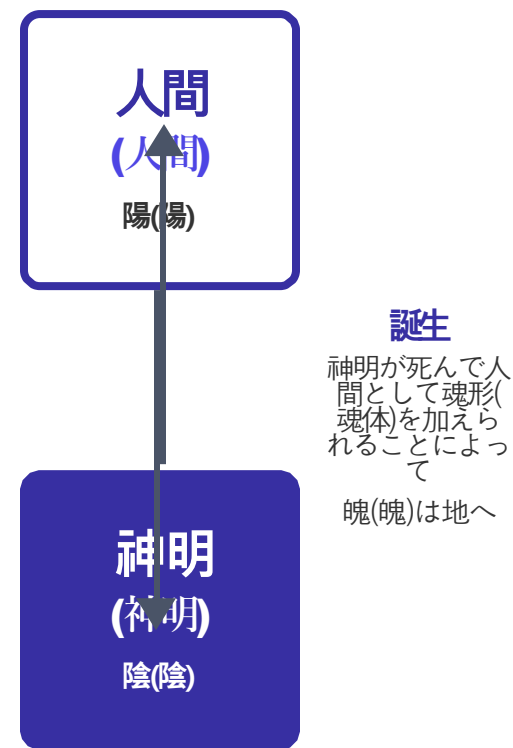


3. 神明(神明)と人間の関係

- 神明と人間は生と死の境界で区分され、相互循環的关系を形成する。
- 人間は死ぬと神明(神明)となり、神明が生まれると人間となる循環構造である。
- 魂(魂)と魄(魄)の概念を通じて死後の世界と現世を連結する体系を説明する。
- 人身降世以前は人間が神明を探したが、以降は神明が人間を探す関係の転換が起こった。

「人には魂と魄があり、人が死ぬば魂は天に上って神となり子孫の祭祀を受けるが、四代(四代)を超えた後は霊にも仙にもなる。魄は地に帰って四代が過ぎれば鬼になる」

- 『典経』 「教法」 1-50



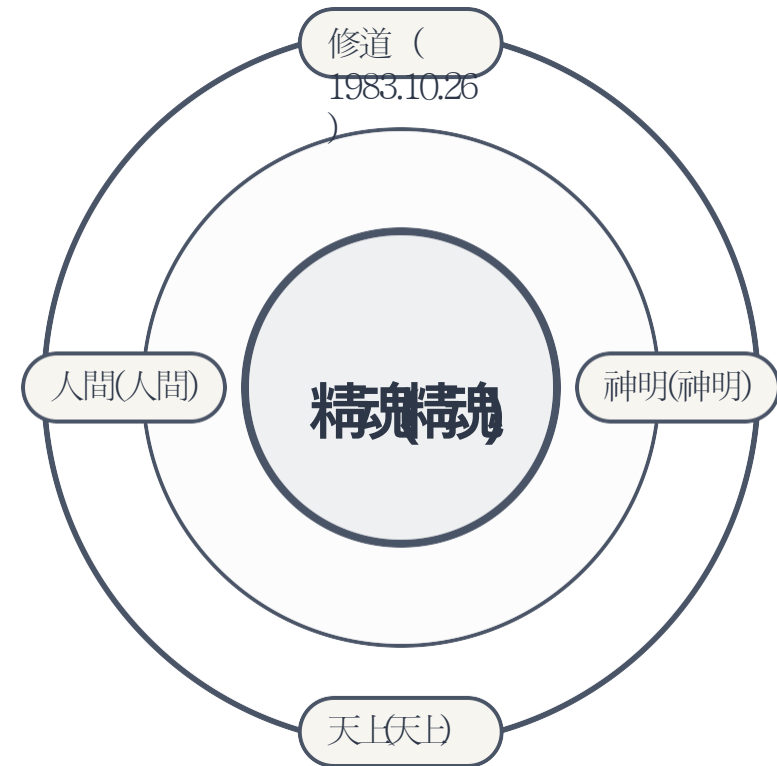
4. 修道(修道)と精魂(精魂)の意味

- 修道とは人間が精神修練を通じて精魂を固くする過程を意味する。
- 精魂は身体の精気神(精気神)のうち物質である精(精)と精神である魂(魂)が結合したもので、生きている時のみ持つことができる。

「道を修めた者はその精魂が固く凝集するので死んでも散ぜず天上に昇るが、そうでない者はその精魂が微弱で煙や水泡が消えるようになる。」(『典経』

「教法」2-22)

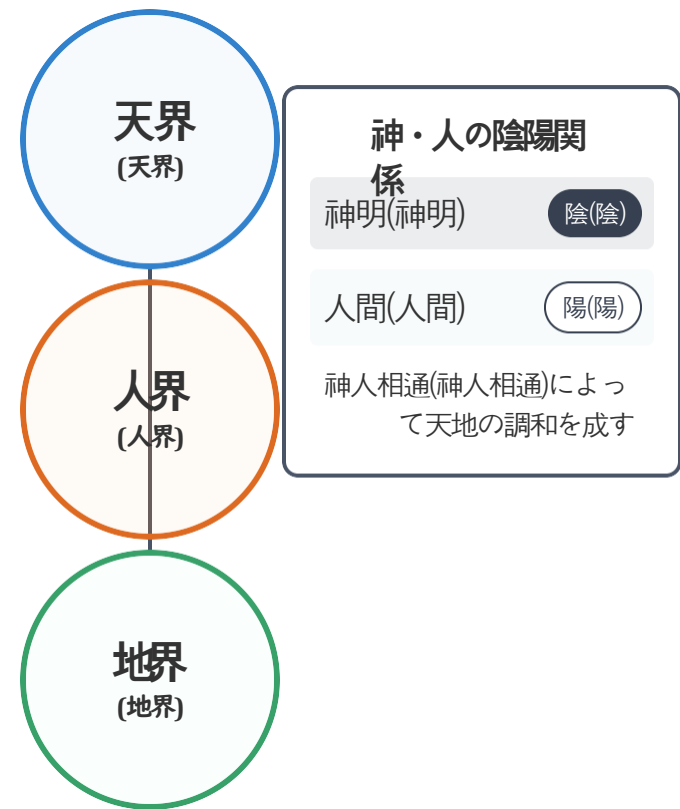
- 修道を通じて精魂が固く凝集した人間は死後も魂が散ぜず天上に昇ることができる。
- 反面、修道しない人間は死後精魂が微弱で煙や水泡のように消える。
- 大巡思想において修道は霊的生命の完成であり、修練を通じた精魂の強化が核心である。



5. 三界システム(三界)と神・人の陰陽論

- 三界は天界(天界)、地界(地界)、人界(人界)で構成される大巡思想の宇宙論的体系である。
 - 大巡思想では神(神)は陰(陰)に、人間(人)は陽(陽)に属する陰陽関係を形成する。
 - 神明は見えない次元を見ることができるが地上に変化を起こすことができず、人間は地上に変化を与えるが見えない次元を見ることができない。
- “神有人神陰人陽... 神人以陰陽成造化... 神人和而萬事成 神人合而百工成”

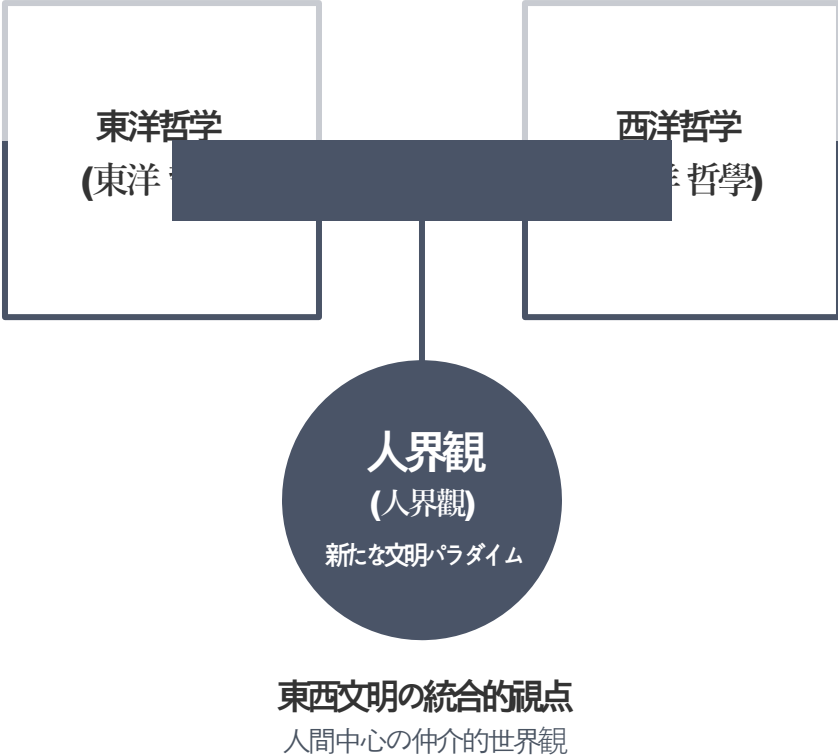
「神と人が陰陽の造化によって万事が成り、神と人が協力してこそ百の功が成る。」
- 神人依導(神人依導)の理法により神明と人間が互いに依り疎通して天地の道が完成される。



6. 人界観の現代的意義と結論

- 東洋と西洋はオリエンタリズムとオクシデンタリズムという両面的感情を通じて互いを認識してきた。
- 西洋の近代文明が東洋起源であることを忘却した100年余りの歴史の中で、危機状況の新たなパラダイムが必要となった。
- 大巡思想の人界観は人間の仲介的・接化的機能を組織的に強調する。
- 神人依導(神人依導)の理法(理法)は神明と人間が互いに助け世を変化させる代案的パラダイムを提示する。

「神人依導(神人依導)の理法(理法)で解冤(解冤)を主(爲主)として天地公事(天地公事)を報恩(報恩)で終結(終結)されるので」『大巡真理会要覧』、「趣旨」。





成事在人(成事在人) 人界觀(人界觀)

View of Human Realm as Seongsajaein

目次

- 1 成事在人(成事在人)とは?
- 2 人界観(人界観)の概念
- 3 成事在人と人間の役割
- 4 東洋哲学における人界観
- 5 西洋哲学における人間観
- 6 事例および根拠
- 7 現代的適用
- 8 結論および示唆点



<

>

成事在人(成事在人)とは?

成事在人(成事在人)は「事が成るのは人にかかっている」という意味で、天(天)と対比される人間中心思想である。

- 古典的起源中国古典から由来した概念で、人間の積極的役割と責任を強調
- 哲学的意味外部環境や運命よりも個人の努力と意志が成否を左右するという思想
- く ● 現実的適用自然の産物というよりは人間の主体的努力で世界を変化させることができる
- 相互関連性個人の努力が集団的成果へとつながる社会的責任意識の強調

「およそ世の事は人が行えば成り、行わなければ成らない。これは人の意志と努力にかかっていることを意味する。」

成
事
在
人

成事在人(成事在人)の漢字表現
-成功と失敗は人間の努力にかかっている-

>

3 / 8

人界観(人界觀)の概念

人界(人界)とは人間が生きながら互いに関係を結び社会を成す世界を意味する。天界(天界)、地界(地界)と共に三界(三界)を構成し人間活動の領域を指す。

- 関係中心性人間が互いに結ぶ関係が世界の基本単位となる観点
- ◀ 主体的参与自然を受動的に受け入れるより積極的に介入し変化させる存在
- 社会的構成人間の共同体意識と相互作用が世界を構成する核心要素
- 価値創出人間の努力が基となり自然から文化と文明へと発展する過程

「人間が道道を成すのであって、道が人間を成すのではない。人界は人間が主体的に構成し発展させる世界である。」



三界(三界)における人界(人界)の位置と役割 人間活動と関係が中心となる世界

成事在人と人間の役割

- 成就の原理人間の意志と努力がなければいかなる事も成し得ないという信念
- 人間の努力と主導的判斷が社会と世界の方向を決定づける根本原理として、単なる運命論ではなく積極的実践と参与の重要性を強調する。
- 人間中心世界観「天(天)ではなく人(人)」に重点を置く人間主導的な思考方式主体的行為者
人間は受動的觀察者ではなく世界の積極的行為者としての役割社会的責任個人の努力が集まり共同体の成否を左右する集団的責任意識

「名が正しくなければ言が調でなく、言が調でなければ事が成らない。事が成らなければ礼樂が起こらず、礼樂が起こらなければ刑罰が公正でなくなる。」



社会的連帯



実践的行動



主導的判斷



人間中心の社会発展モデル
-人間の主体的活動が社会と世界を形成する-

東洋哲学における人界観(人界観)

東洋哲学では人間関係と社会的連帯を重視し、人間が天(天)と地(地)の間で調和ある役割を遂行しなければならないと見た。

- 儒教的観点人間の倫理的実践と礼(禮)を通じた社会秩序の樹立を強調。仁(仁)と義(義)の実践で理想的な人間関係を構築
- 道家的観点自然との調和を通じた人間の生の方向性を提示。無為自然(無爲自然)の原理で人間本性の自由な発現を追求
- 仏教的観点人間内面の悟りと縁起(縁起)を通じた相互依存的世界観の形成。慈悲(慈悲)と智慧(智慧)を通じた人間完成を志向
- 三才論(三才論)天(天)・地(地)・人(人)の三つの力が宇宙を構成し、人間は天地の理致を悟り主体的に実践する存在

「天が人間に能力を与えたので、その能力で天地の理致に参与し万物の化育に共に参加する。これが人間が持つ天命(天命)である。」



三才論(三才論)

天(天)・地(地)・人(人)が互いに調和を成し人間は天地の意を知り実践する主体的存在として自然と社会の秩序を維持する中心的役割を担う

西洋哲学における人間観

西洋哲学は古代ギリシャから現代まで人間の本質と自由意志、社会的責任に関する多様な観点を発展させてきた。

- 古代ギリシャ:ソクラテスの「汝自身を知れ」、プラトンのイデア論、アリストテレスの目的論的人間観-人間を理性的存在として規定
- 中世神中心世界観の中で人間は神の被造物として原罪を持つ存在であるが、同時に神の形象を持つ高貴な存在
- 近代啓蒙主義カントの「自律的理性」、ルソーの「社会契約論」-人間の主体性と自由意志の強調、理性に基づく社会構成
- 現代実存主義サルトルの「実存は本質に先立つ」、カミュの不条理哲学-人間自身の選択と責任を強調

「人間は自由に生まれたが、どこでも鎖で縛られている。ある人は他人の主人だと思うが、むしろ彼らより奴隷となっている。」-ジャン=ジャック・ルソー

西洋哲学の人間観の変遷史

古代ギリシャ(BC5世紀~)

理性的存在としての人間、徳の実現を通じた幸福の追求

中世キリスト教哲学(5~15世紀)

信仰と理性の調和、神の被造物としての人間

ルネサンス(14~17世紀)

人間中心思想、個人の価値と尊厳の発見

啓蒙主義(17~18世紀)

理性の勝利、自由と平等の価値の確立

現代哲学(19~21世紀)

実存主義、ポストモダニズム-主体性と自由意志の強調

現代的適用および結論

成事在人(成事在人)思想は現代社会の各領域で依然として有効であり、人間主導的思考方式の重要性がより一層強調されている。

- 組織文化自発的参与と主導的責任感が企業革新と持続可能な成長の核心要素
- 社会発展市民の自発的参与と責任意識が社会問題解決の原動力として作用
- 個人的次元自己主導的な生の重要性和能動的態度が人生の成否を左右
- 教育パラダイム他人依存型から自己主導型学習への転換が現代教育の中心軸

結論

「成事在人の人界観は人間の意志と責任を重視する哲学的伝統を現代に継承し、絶えず変化する世界の中で人間中心的価値観の重要性を呼び覚ます。」

成事在人の現代的実現領域



組織
革新文化と主導性



社会
共同体の責任と参与



個人
自己啓発と成就



国際関係
協力と相互尊重

成事在人(成事在人)は東西洋を包括する
普遍的人間哲学として価値を持つ



成事在人(成事在人) 人界観(人界観)に現れた東西洋の人間観(人間観)の再活性化

Revitalization of East-West Views in Seongsajaein

研究の背景および目的

- **なぜ東西人間観の再解釈が必要なのか?**
 - 西洋の構成主義的人間観と東洋伝統人間観の限界への直面
 - 現代文明の危機と新たな統合的人間観の要求
- **大巡思想の人界観の現代的意義**
 - 実体と属性を統合する人間観の提示
 - 天地人三界の力動的再構成と人間の役割の再定立
- **主要な研究質問および方法論**
 - 儒仏仙と西欧構成主義的人間観の体系的比較分析
 - 大巡思想内の調理(調理)・気化(氣化)概念を通じた東西統合可能性の探索

大巡思想の人界観概念の紹介

1

人界観は人間世界に対する観点で、大巡思想では儒仏仙思想との連携を通じて人間の本質と価値を規定する。「典教」に現れる儒仏仙は人間教育過程の一環として理解される。

2

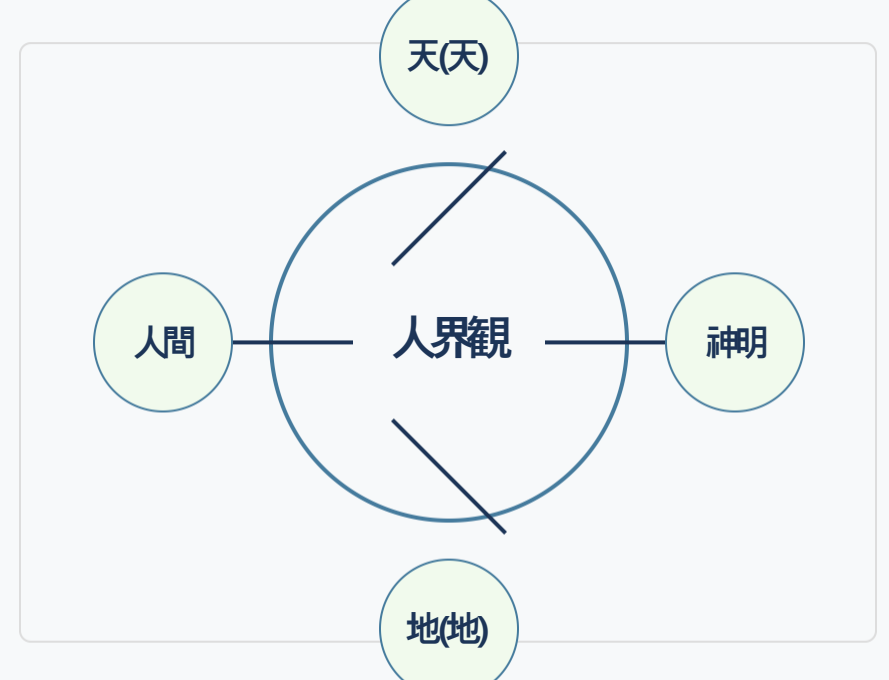
人間と天地(天地)の関係

大巡思想では人間は天地の最霊者であり、天地との相互作用を通じて存在する。このような関係は天地報恩(天地報恩)という核心概念で表現され、人間は天地に報恩することで道通を成すことができる。

3

大巡思想は既存の儒仏仙と異なり神明の「実体性」を強調する。神(神)が持つ属性のみならず実質的存在としての神明を重視し、人間と神明の調和ある関係を通じた解冤相生を追求する。

人界観の関係図



大巡思想で人界は天地・神明と有機的相互作用を通じて構成される

東洋人間観－儒仏仙思想の分析



二重肯定の論理: 「XはXであり?Xは-X」 友(X)は友(X)で、仇(-X)は仇(-X) 内部的超越と範節(範節)の強調、**道德体系の確立**

沐帶(浴帶) 以詔(以詔)



二重否定の論理: 「XはXでも-Xでもない」 友も仇もない一切の空(空)を追求
一切の対立の超越、**中道(中道)**と知覚(知覚)の強調
養生(養生) 寂滅(寂滅)



逆説的論理: 「Xは-Xであり、-XはX」 仇(-X)は友(X)、友(X)は仇(-X)
対立関係の対称性、**虚霊(虚霊)**と調和(調和)の強調
胞胎(胞胎) 虚無(虚無)

12運星と儒仏仙の関連性

区分	仙(仙)	仏(佛)	儒(儒)
12運星	胞胎(胞胎)	養生(養生)	浴帶(浴帶)
特性	調和(調和)	形体(形體)	範節(範節)
論理構造	XはX -XはX	XはXでも-Xでもない	XはX -Xは-X
代表人物	老子	釈迦	孔子
心の作用	虚霊(虚霊)	知覚(知覚)	神明(神明)

大巡思想では儒仏仙それぞれの属性とともに実体的な神明概念を強調し、儒仏仙の虚無・寂滅・離垢は十二運星で胞胎・養生・浴帶の次の段階である冠旺(冠旺)へと統合される。大巡思想は冠旺の道(道)として三教の統合的理解を提示する。

12運星と儒仏仙の関連性

● 十二運星と儒仏仙思想の対応構造

大巡思想に現れる十二運星は儒(儒)・仏(佛)・仙(仙)三教と密接な関連性を持ち、特に胞胎、養生、浴帶は仙、仏、儒の虚無、寂滅、離調と対応する。

● 虚霊(虚霊)知覚(知覚)神明(神明)構造

性理学の心の構造である虚霊-知覚-神明はそれぞれ天地人に対応し、仙仏儒の虚無-寂滅-離調と平行関係を成す。これは本体-作用-主体の機能的分化として理解できる。

● 属性中心から実体中心へ

既存の東洋思想が属性的要素を強調した反面、大巡思想は実体性を強調して東西洋人間観の新たな統合を提示する。

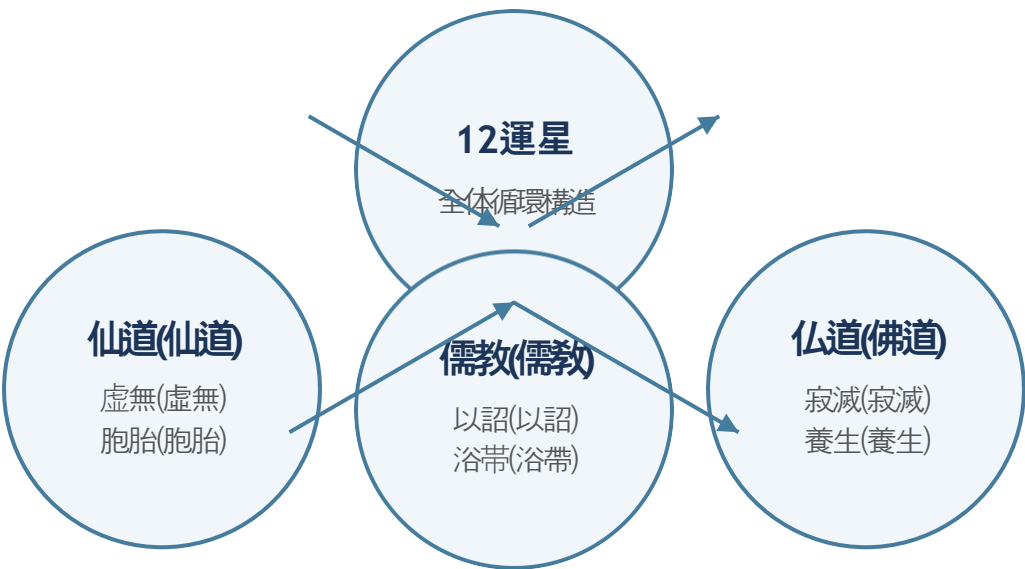
区分	仙(仙)	仏(佛)	儒(儒)
12運星	胞胎	養生	浴帶
特性	虚無	寂滅	以詔
心の構造	虚霊	知覚	神明

● 天地の気運と儒仏仙の関係

仙道の虚無、仏教の寂滅、儒教の離調はそれぞれ天地の胞胎、養生、浴帶という気運を受けて形成され、十二運星のうち冠旺段階で統合される。

● 『典経』の核心的一節

“受天地之虚無仙之胞胎
受天地之寂滅佛之養生
受天地之以詔儒之浴帶”



十巡田相に七ナス一巡星と儒仏仙田相の相関関係

西洋近代人間観—構成主義の展開

1

近代西洋の構成主義は神中心から人間中心へと世界観の転換を成した。デカルトの「我思う、故に我あり」に始まり、カントの「人間の五感を通じて世界を構成する」という思想へと発展した。

2

「神は死んだ」という表現に代表される西洋近代は唯一神が消えた場所に人間の五感という実体を代替した。世界は各自自ら構成するものであるという構成主義的世界観は自然を支配・操作する実体的世界観へと発展した。

1637年

デカルト(René Descartes)

「我思う、故に我在り」-認識論的転換の始まり

1710年

バークリー(George Berkeley)

「存在するとは知覚されることである」-観念論の展開

1791年

西洋人間観のパラダイム転換



西洋的構成主義の特徴

- 世界を計量化、道具化する実践的観点
- 感覚と理性に基づく知識の構成
- 自然を人間の認識対象として客体化
- 実体中心の存在論(v.s. 東洋の属性中心)

東西人間観の比較分析

比較項目	東洋人間観	西洋人間観	大巡思想人間観
人間の本質	属性的、関係的 (虚無・寂滅・以詔)	実体的、独立的 (自我中心)	属性と実体の統合(神人調和)
神(神)との関係	内在的、気化(氣化) (陰陽五行の原理)	超越的、対立的 (「神は死んだ」)	実体的神明との共存(天地報恩)
思维方式	相関的思惟 条理(調理)	構成主義的思惟 デカルト・カント	解冤(解冤)中心 の実践的修行
世界観	十二運星、天地人(均衡と調和)	自然の計量化 (道具化、支配)	三界の再定立 (可変性、互換性)

東西人間観の根本的差異

- 東洋:内在的・関係的アプローチ、人間-自然-神明の調和を強調
- 西洋:実体的・道具的アプローチ、人間中心の世界認識
- 東洋は属性偏重、西洋は実体偏重の偏重性の限界

大巡思想の融合的人間観

- 天地人の相関性と実体的神明概念の結合
- 条理・気化と、実体・属性の統合的理
- 天地報恩と解冤相生を通じた宇宙的調和の実現

大巡思想の人間観の差別性

大巡思想は東洋の属性論的観点と西洋の実体論的観点を統合し、人間が天地との関係の中で報恩と解冤を通じて神人調化を成す主体的存在として定立する。このような観点は現代文明の危機を克服できる新たな人間観の可能性を提示する。

条理(調理)と気化(氣化)概念の解説

調

調理は中心から乾坤を統制する方法で、人間が土(土)の位置で周辺事物を仲介することを意味する。人間が理(理)を持つ存在として正義と共感で世界秩序を調節する力動的役割を強調する。

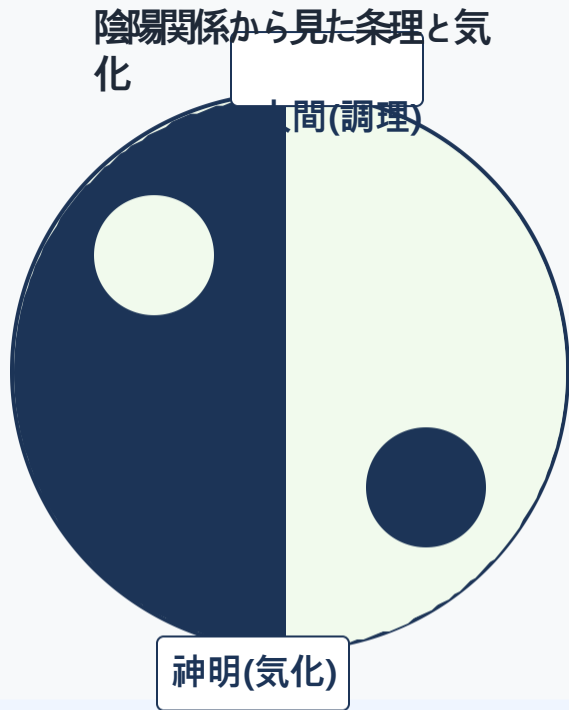
氣

気化(氣化) - 神明の作用原理

気化は神明(神明)が気(氣)を通じて作用する原理で、陰陽論的合理性に基づく相対的思惟を示す。東洋では神明は人間と対立的存在ではなく陰陽関係で人間と結合可能な存在として理解される。

東西人間・神関係の比較

区分	東洋条理気化の観点	西洋構成主義の観点
人間と世界の関係	内在的関係的(人間が中心で世界を仲介)	客観的道具的(人間が世界の外部から構成)



邵康節の神人関係の説明

邵康節は東洋の調理(調理)・気化(氣化)関係を中(中)と土(土)としての人間と四象(四象)と周辺としての神の配置で説明した。これは西洋の「我思う、故に我あり」というデカルト的構成主義と根本的に異なる世界観を示す。

天地報恩の天人関係

1

大巡思想において人間と天との関係は「天地報恩」に集約される。人間が地上天国を実現できる根本的理由は心を通じて天地の恩恵に報いることができる存在であるからである。

「道通天地報恩」(道は天地に報恩することである)

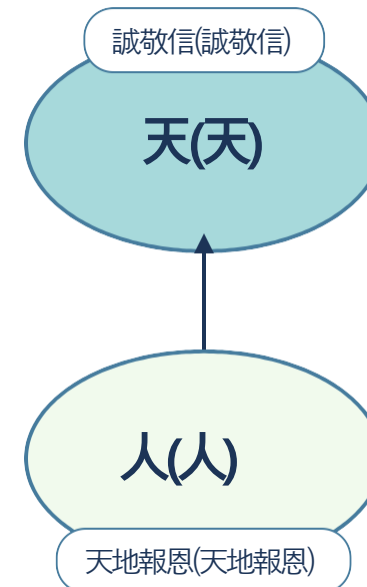
2 天地誠敬信(誠敬信)と人間の報恩

人間の生命と寿命、福祿は天地神明の誠敬信(誠敬信)によるものである。人間はこれに対する報恩を通じて道通を成すことができ、これが人間の倫理的・宇宙的課業となる。

「生(生)と寿命(壽命)と福祿(福祿)は天地(天地)の恩恵(恩恵)であるので誠(誠)・敬(敬)・信(信)によって天地(天地)報恩(報恩)の大義(大義)を立てて人道(人道)を尽くし...」

3

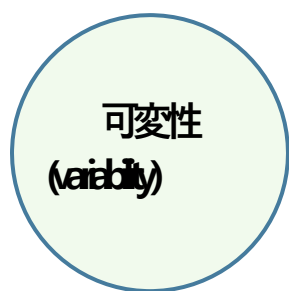
天地報恩を通じた人間と天の関係の再定立



「至寶即吾之心靈也 心靈通則鬼神可與酬酢 萬物可與俱序」(至極の宝はすなわち我が心靈であり、心靈が通ずれば鬼神と応酬でき、万物と共に順序を成しうる)

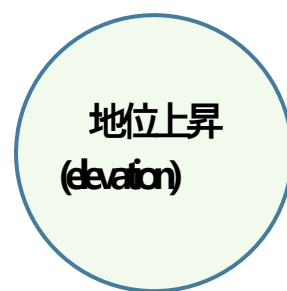
三界観再定立の自生的近代性

大巡思想における三界観(天・地・人)の再定立は韓国思惟に基づく自生的近代性を示し、これは既存の東西洋世界観の限界を越える新たなパラダイムを提示する。



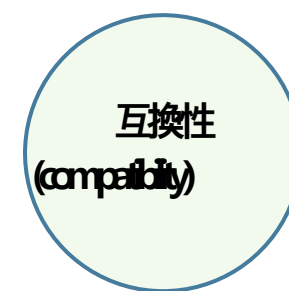
天界の可変性

- 固定不変の天(天)ではなく「老いた天」という変化可能な天界概念
- 九天上帝の人身降世を通じた天地公事によって天界が再定立される
- 西洋の「神は死んだ」と異なり「天が老いた」という代替的観点



地界の地位上昇

- 伝統的に低い地位であった地界(地界)が天界と同等の位置へと格上げ
- 天尊地卑(天尊地卑)の垂直的構造から天地公事による水平的関係へと転換
- 地上神仙(地上神仙)の実現と地界の積極的価値の再発見



三界の互換性

- 天・地・人三界が相互疎通し交流する開かれた体系
- 人間の条理(調理)と神明の気化(氣化)を通じた階層間の媒介
- 天地人三界の共通構造と原理が解冤相生によって疎通回復

研究結論および現代的示唆点

1

大巡思想は東洋の属性論的人間観(虚無・寂滅・離隔)と西洋の実体的人間観(構成主義)それぞれの限界を克服し、人間・神明・天地の調和ある関係を志向する統合的人間観を提示する。

現代的意味

- 技術発展と人間アイデンティティの拡張に対する哲学
- 東洋文化の建設的対話と融合のための接点の提示

2 **ポストヒューマン時代の人間位相の再定立**

大巡思想の三界観の再定立を通じて人間は単なる被害物ではなく天地と互換可能な宇宙的存在として生まれ変わる。これは構成主義的人間観の限界と環境危機を招いた機械論的世界観を克服できる新たな観点である。

現代的意味

- 人間中心主義を越えた生態学的思考の拡張人工
- 知能と人間の共存のための倫理的基盤の提供

大巡思想が提供する未来的価値

三界観の再定立の自生的近代性の側面



天界・地界・人界の流動的変化可能性



人間と地界の宇宙的役割の拡張



天地人三界の相互作用と疎通

最終結論

大巡思想の人間観は儒仏仙と西洋近代人間観の限界を克服し、東洋哲学の自生的近代性を通じて実体と属性を統合した新たな人間・宇宙関係のパラダイムを提示する。

参考文献および質疑応答

国内文献

- 大巡真理会教務部(2010)、『典経』、驪州:大巡真理会出版部。
- 金鐸(2006)、『甌山姜一淳韓国新宗教の成立と発展』、ソウル:民俗苑。
- 車先根(2018)、『大巡思想の神観と人間観』、大巡思想論叢、30輯、1-34。

国外文献

- Taylor, C. (1989), *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Cambridge: Harvard University Press.
- Spengler, O. (1918), *Der Untergang des Abendlandes*, Wien: Braumüller.
- Habermas, J. (1981), *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt: Suhrkamp.

古典文献

- 『黄帝内经(黄帝内經)』
- 『易经(周易)』

質疑応答



論文についてのご質問やご意見がございましたらいつでもお申し付けください。
メール: researcher@university.ac.kr 連絡先
:010-1234-5678

Chapter V

東学思想と大巡思想の自生的近代性比較

A Comparison of Autogenous Modernity in Donghak and Daesoon

目次

1. 研究背景および

目的
2. 比較方法論

3. 天観(天観)の比較①:三才 vs

三界
4. 天観(天観)の比較②:先天 vs

後天
5. 地観(地観)の比較①:気化 vs

条理
6. 地観(地観)の比較②:地の意味と土(

土)
7. 人間観(人観)の比較①:人乃天 vs 神人
調和

8. 人間観(人観)比較②:解冤・相生および人

間の役割
9. 概念対照:神道/人道、道器長存/

相生
10. 陰陽五行と世界観の再

解釈
11. 各思想の社会的・宗教的实践

12. 総合的特徴と差異の

要約
13. 結論および

示唆点
14. 参考文献および質
疑応答

研究の背景および目的

- 東学思想と大巡思想の自生的近代性の特徴比較
 - 東アジア近代性言説における重要性
 - 思想的社会的受容と変容の文脈
- リミナリティ (Liminality) の原理: 個体発生が系統発生を反復
- 東西近代性言説の接点と韓国的近代性の特徴
- 世界観構造の比較を通じた思想的特徴の研究



- 核心概念の比較分析
 - 天観(天観)、地観(地観)、人間観(人観)別の主要用語対照
 - 三才(三才)と三界(三界)、先天と後天、気化と条理など
- リミナリティ(Liminality)の原理を通じた思想発展の理解
 - 個体発生が系統発生を反復する原理で両思想を連携
- 教理的、社会的実践の様相の並列比較

東学思想

天外天・人乃天
の開闢・革命性

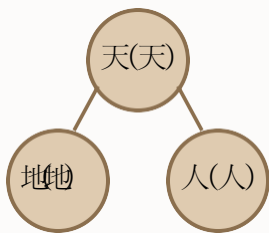
大巡思想

三界・神人調和
後天開闢・統合性

天観比較①三才(三才)vs三界(三界)

東学思想

三才(三才):天・地・人



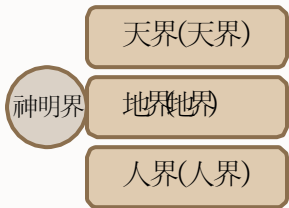
- 天外天概念の強調
- 属性的観点中心
- 三才の中で天・地・人の調和を強調
- 革命的平等思想の基礎

VS



大巡思想

三界(三界):天界・地界・人界



- 神明界の導入および強調
- 実体的・システムの世界的観の提示
- 属性と実体の統合的観点
- 九天(九天)の統察(統察)と調整

太極紋様

天觀比較②先天(先天)vs後天(後天)

東学思想

道路先天(道路先天)



- 先天・後天の区分が不
明確
- 道路先天-原点回帰的時間觀
- 「再開闢」は堯舜時代への回帰を意
味
- 儒教的世界觀中心の時代認識

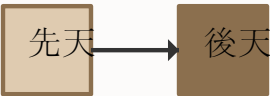
VS



大巡思想

後天開闢(後天開闢)

九天の人身降世



- 人身降世を基準とする明確な先後天の区
分 太極紋様
- 後天開闢-総体的世界觀轉換の契機
- 神明界と人間界の地位変化を招来
- 東西天觀の合徳と未来志向的近代性

地観比較①気化氣化条理調理

東学思想

気化氣化氣運の変化



- 気運(氣)の自然な流れの強調
- 地の本質的属性と変化の重視
- 有機的世界観に基づく自然変化
- 勞而無功(勞而無功):努力と修行

VS



大巡思想

条理(調理):理致と法則

神明界	法則(規則)	理(理)
調和(調和)	秩序(秩序)	均衡(均衡)

秩序と均衡の調整

- 理(理)中心の法則と秩序の強調
- 神明界と連結された構造的 세계 観
- 天地(天地)の調律と均衡の追求
- 天地成功(天地成功)成果中心

太極紋様

地観地観の比較②地の意味と土(土)

- 陰陽五行(陰陽五行)における土(土)の位相
 - 伝統的に土(土)は五行の中心であり安定性を象徴
 - 東学と大巡の両方で重要に扱われるがアプローチが異なる

東学思想



- 有機的世界観における土の役割
- 東学思想では土が循環の一部として認識

大巡思想



- 土(土)中心の世界論の深化発展
- 五行具備(五行具備)の基準としての土の重・太・深・極・盛・文・剛・陽・調

- 大巡思想の土(土)中心主義と世界観の拡張
 - 土(土)を通じた天地人(天地人)連結の具体化
 - 陰陽合徳(陰陽合徳)と五行の相生(相生)の原理を強

人間観比較①:人乃天(人乃天)vs 神人調和(神人調和)

東学思想

人乃天(人乃天):人が即ち天である



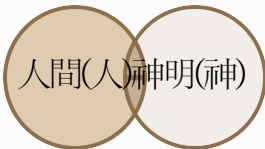
- 平等思想の根幹
- すべての人間内面にハヌルニム(天主)が存在
- 人間主体性と革命性の強調
- 輔国安民(輔國安民)志向

VS



大巡思想

神人調和(神人調和):神と人間の調和



- 解冤相生の實踐原理
- 天地人三界の調和の強調
- 人間と神明の相互作用
- 成事在人(成事在人):決定は人間に

太極紋様

人間観の比較②解冤相生および人間の役割

- 人間の役割の社会的実践の比較

東学思想		大巡思想
輔国安民(輔國安民):国と民を助け安全にする	含	解冤相生(解冤相生):怨みを解き共に生きる調和
平等思想:すべての人間の根本的平等性の強調		公事(公事)中心:天地公事を通じた人間の役割の格上げ
集約的革命的実践:東学農民運動として表出		個人と現実問題の解決:実践を通じた後天世界の建設

- 人間の主体性の近代的表現方式の差異
 - 東学:不然其然(不然其然、そうでないがそうである) - 神秘性
 - 大巡:成事在人(成事在人、事の成功は人にかかる) - 主体性、実践性の強調
- 自生的近代性の実現形態



概念対照神道/人道、道器長存/相生

東学思想

人道(人道)中心、道器長存(道器長存)



- 人道中心の観点の強調
- 神秘性の代わりに人間平等に注目
- 道器長存道は器にとどまる
- 道(道)の保存と永続性の強調

VS



大巡思想

神道・人道の調和、相生(相生)志向



- 神道と人道の調和の強調
- 神明界と人間界の統合的役割
- 相生(相生)互いに生かす原理
- 共存と調和を通じた問題解決方式

太極紋様

陰陽五行と世界観の再解釈

- 陰陽五行に基づく世界観の再構成

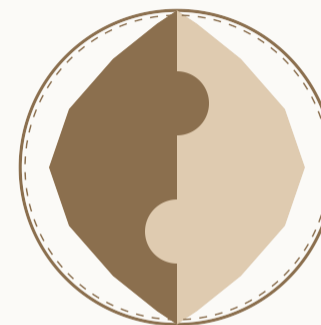
- 東学と大巡において共に陰陽五行の伝統的解釈を現代的に再活性化

東学思想



- 天外天概念を通じた陰陽論の拡張
- 五行要素の相互作用より陰陽中心の解釈

大巡思想



- 神明界を含む陰陽合徳・五行具備の強調
- 陰陽均衡と五行の総体的調和の重視

太極紋様

- 五行(五行)の相生(相生)と相剋(相剋)を通じた世界観の解

各思想の社会的宗教的实践

東学思想

- 社会革命志向 - 甲午農民戦争と直接的な社会変革運動
- 修練と呪文中心の宗教的实践 - 靈符、21字呪文
- 道人(道人)中心の共同体運動 - 身分制の打破
- 民族・民衆中心の平等思想の実行
- 神秘性と啓示を通じた宗教的權威の確立

大巡思想

- 解冤相生の实践 - 天地公事を通じた根本的世界の改造
- 儒仏仙の統合的修行体系 - 時限的な公事(時限付公事)
- 神明界と人間界の統合的實踐 天地人合一
- 布徳(布徳)・教化(教化)・修道(修道)方式の实践
- 後天仙境建設のための道通真境の志向

太極紋様

総合的特徴および結論

比較観点	東学思想	大巡思想
天観(天観)	革命的平等思想、天外天中心の 道路先天(道路先天)志向	三界(三界)の構築、神明界の 導入 後天開闢(後天開闢)志向
地観(地観)	気化(氣化)中心、有機的世界観 勞而無功(勞而無功)	条理(調理)中心、法則的世界観 天地成功(天地成功)
人間観(人観)	人乃天(人乃天)思想 集团的・革命的実践	神人調和(神人調和)解冤 相生(解冤相生)の實踐
近代性の特徴	超越天思想、社会革命的近代性 儒教の世界内改革志向	統合・具体的世界観の構築 調 和と相生の創造的近代性



東学思想と大巡思想は共に東アジアの伝統思想を基盤に西洋の近代性に対応して自生的近代性を具現した思想であるが、東学が超越的天観と平等思想を通じた革命的・社会的近代性を追求した一方、大巡思想は三界・神

参考文献および質疑応答

参考文献

- 金洪喆(1999)。「東学の宗教思想」。ソウル:ソウルアカデミー。
- 朴正圭(2003)。「大巡思想の理解」。抱川:大巡真理会出版部。
- 李慶原(2010)。「大巡宗学原論」。ソウル:文史哲。
- 李敦化(1934)。「天道教創建史」。ソウル:天道教中央総部出版部。
- 崔俊植(2007)。「東学の精神世界と現代的意義」。ソウル:モシヌンサラム
ソウル。
韓国精神文化研究院(1995)。「韓国宗教思想史」。城南:韓国精神文化研究院。

原典資料

- 「東經大全」
- 「天道教經典
+ 大巡典經
+ 典經」
- 「大巡指針
」

 太極紋様

「東学思想と大巡思想の自生的近代性比較」について
の質問と討論を歓迎します

研究者メール: whchoi7@naver.com

1

天觀(天觀)の自生的近代性比較

Comparison of Autogenous Modernity in Views of Heaven

目次

- 1 研究の背景および目的
- 2 三才(三才)と三界(三界)概念の比較
- 3 大巡思想における三界の特徴および意義
- 4 東学と大巡思想の世界観の比較
- 5 先天(先天)と後天(後天)概念の差異
- 6 経典および主要な引用句
- 7 思想的意義および近代性の比較
- 8 結論および示唆点

研究の背景および目的

東アジア思想伝統において「天観(天觀)」は天・地・人の関係を説明する核心軸である。これは宇宙論的世界観と人間存在の意味を規定する根本的観点である。

研究背景

- 東学と大巡思想は19世紀末~20世紀初に自生的に発生した韓国思想
- 両思想とも伝統思想を継承しつつ独自の天観体系を構築
- 西洋近代性と異なる方式で自生的近代性の土台を準備
- 既存の研究における天観中心の総合的比較研究の不足

研究目的

- 三才(三才)と三界(三界)概念の相違点と発展様相の照明
- 先天(先天)と後天(後天)概念の思想的淵源と意味の比較
- 両思想の自生的近代性が持つ現代的意義の再評価
- 韓国思想史における天観研究の学術的意味の拡張

区分	東学思想	大巡思想
主要な経典	東経大全 龍潭遺詞	典経 大巡真理会要覽
天観(天觀)中心の概念	侍天主(侍天主)、天主	三界(三界)、神明界(神明界)
世界観の方向性	道路先天(復帰的)	後天開闢(進歩的)

三才(三才)と三界(三界)概念の比較

東アジア思想において「三才」は基本的な宇宙論的原理であったが、大巡思想では「三界」というより体系的でシステムの世界観へと発展した。

三才(三才)概念

- 天(天)・地(地)・人(人)の三つの存
- 在 東アジア伝統哲学の基本枠組み
- 主に宇宙の構成要素として言及 東学で
- は超越的天(天)の役割を強調 属性中心
- の概念、関係性を重視

三界(三界)概念

- 天界(天界)・地界(地界)・人界(人界)の世
- 界 大巡思想で定立された概念体系
- システムの・実体的世界観へと発展
- 神明界(神明界)との連結性を強調
- 界(界)としての独立性と相互作用性の強調

区分	三才(三才)中心の世界観	三界(三界)中心の世界観
主要思想的源泉	周易(周易)、東洋伝統思想	大巡真理、道教・仏教の影響
世界構成の特徴	相互関係と属性の強調	独立的世界観とシステムの実体の強調
主要原理	陰陽の調和、変化の原理	神明との相互作用、天地公事
自生的近代性	人間中心、平等思想	神人協力(神人協力)、三界の調和

大巡思想における三界の特徴および

概要

大巡思想において三界(三界)は単なる概念的分類を越えて神明界(神明界)と緊密に連結され神聖の実体性とシステムの持続性を備えた独自の世界観を構築する。

三界の特徴

- 天界・地界・人界の有機的統合体系
- 各界(界)は独立的でありつつ相互連結された実体的システム
- 神明(神明)が活動する場所であり媒介
- 東洋属性論と西洋実体論の統合的特性
- 三界公事(三界公事)を通じた変革可能性

『典経』内の三界の

用例

- 三界公事(三界公事)天地人三界を開闢する公事
- 三界至尊(三界之尊)三界を主宰する至高存在
- 三界大権(三界大權)三界を主宰する最高権限
- 三界伏魔(三界伏魔)三界の無秩序を正す作用
- 三界開闢(三界開闢)三界の総体的変革

「三界が開闢されないのは先天で相克が人間の事を支配したので怨恨が世に積もり積もって三界を満たしたので天地が常道(常道)を失い様々な災禍が起こり世は惨憺たるものとなった。」

神明界の連

結

天地・人界が神明の活動によって有機的に連結

システムの持続性

各界(界)は独立的実体であり相互関係的総体

東西思想の融合

属性論的観点と実体論的観点の統合

東学和大巡思想の世界観の比較

東学の世界観

- 超越的天観-天外天(天外天)、天主(天主)概念を重視地上
- 天国概念-理想的地上世界の具現
- 輔国安民(輔國安民)を通じた人間解放の追求
- 侍天主(侍天主)思想-人の中に天主を侍する
- 道路先天(道路先天)-原始返本の世界観

大巡思想の世界観

- 三界(天界・地界・人界)の体系化され
- た世界構造神明界(神明界)の実存的位
- 相の確立
- 後天開闢(後天開闢)-新たな世界秩序の主唱神
- 人調化(神人調化)-神と人間の調和ある関係解

区分	東学思想	大巡思想
天観 (天観)	• 天主(天主)と天外天(天外天)の強調 • 超越的絶対者としての天 • 「天が即ち心であり、心が即ち天である」	• 天界(天界)と神明界(神明界) • 九天上帝(九天上帝)概念 • 体系的天地公事(天地公事)
地観 (地観)	• 地上天国の實現 • 現世中心の社会改革 • 農民運動的实践性	• 地界(地界)の独立的存在性 • 冥府公事(冥府公事) • 地上仙境(地上仙境)の建設
人間観 (人間観)	• 人乃天(人乃天)-人が即ち天 • 万民平等と人間の尊厳 • 道德的実践主体	• 人界(人界)と人尊(人尊) • 神人調化(神人調化) • 道通真境(道通真境)の主体

東学が超越的天観と人間中心の世界観を強調した一方、大巡思想は三界の有機的統合と神明界の実存的価値を基盤とした新たな宇宙論を提示した

先天(先天)と後天(後天)概念の差異

区分	東学	大巡思想
核心概念	道路先天(道路先天) :原始返本、過去志向的	後天開闢(後天開闢) :新たな秩序の創造、未来志向的
神観(神観)	天主(天主)、上帝(上帝) 侍天主(侍天主)中心	무극신(無極神), 태을천상원군(太乙天上元君) 신명계(神明界) 체계화
世界観	西学(西學)の影響を受けた天主概念と伝統思想の結合	三界(三界)と神明界の統合、東西理致(理致)の融合

東学の先天概念

東学は先天への回帰を通じた社会変革を追求

- 「侍天主造化定永世不忘萬事知 至氣今至願爲大降侍天主造化定」
- 『東経大全』呪文
 - ・ 天主が我が心の中にあるという侍天主思想
 - ・ 「兜率天主弥勒」のような仏教的概念と接
 - ・ 木
 - 西洋宗教の「神(God)」概念と類似する「天主」用語の使用

大巡思想の後天概念

大巡思想は後天開闢を通じた新天地(新天地)創造の志向

- 「先天では人間事物がすべて相克に支配され世に怨恨が積もり...後天では天下が相生(相生)に戻り...平和な世となる」
- 『典経』豫示81節
 - ・ 天界(天界)の再整備、天文(天文)・冥府(冥府)公事の開闢 陰
 - ・ 陽合徳(陰陽合徳)・三才確立(三才確立)・五行具備(五行具備)
 - ・ 東西洋理致の融合と新たな宇宙的秩序の確立

思想的意義および近代性の比較/結論

二つの思想は19世紀後半~20世紀初、西欧文物の流入と伝統秩序の変動の中で自生的近代性を構築する互いに異なる方式を示す。

区分	東学	大巡思想
近代性の特徴	超越的価値の強調 民衆救済志向	三界の柔軟性と統合性 神明界の体系化
歴史的方向性	道路先天(道路先天) 過去回帰的側面	後天開闢(後天開闢) 未来志向的世界観
東・西思想関係	東洋的超越性と西学(天主教概念)の混用	東西価値の融合 独自の三界体系の構築

主要な思想的意義

- 大巡思想は三界(三界)の実体性とシステム的特性を強調
- 神明界の導入で東西洋の実体・属性統合体系を具現
 - 東学は民(民)中心の革命的救援論、大巡は誠・敬・信(誠敬信)中心の天地公
 - 事二つの思想は共に西洋近代性と区別される独自のな経路を提示

主要引用経典

- 東学:『東經大全』、『龍潭遺詞』 - 侍天主、天主概念
大巡:『典經』 - 「天・地・人の三界が互いに通ぜず」
大巡:『大巡真理会要覧』 - 三界公事、三界至尊概念 大
巡:『布徳教化基本原理』 - 神明界概念の体系化

結論

東学と大巡思想はそれぞれ異なる天観(天観)を通じて自生的近代性を構築した。東学は超越的天主と輔国安民の実践で、大巡思想は三界と神明界を通じた新たな世界秩序構築で、韓国近代思想史に独自のな流れを形成した。このような天観の違いと発展は現代東アジア思想研究において重要な比較地点を提供する。



三才(三才)と三界(三界)

Samjae and Samgye

目次



- 1 三才(三才)と三界(三界)とは？
- 2 東学思想の三才(三才)概念
- 3 大巡思想の三界(三界)概念
- 4 三界システム構造(天界・地界・人界)
- 5 三界公事と三界至尊の役割
- 6 神明界との連結意味
- 7 三才と三界の比較
- 8 結論および示唆点

三才(三才)と三界(三界)の定義

三才(三才)

東アジア伝統思想の核心軸で、宇宙を構成する三つの根本要素を意味する。

- 天(天):天、宇宙の原理と秩序
 - 地(地):地、物質世界の根
 - 人(人):人間、天地の気運を受けて生まれた存在
- 主に抽象的・属性的概念であり、相互関係と調和を強調する。

三界(三界)

大巡思想で強調する世界構造で、実体的でシステムの宇宙構成を意味する。

- 天界(天界):天の世界、神的存在と原理の領域
- 地界(地界):地の世界、物質的基盤の領域
- 人界(人界):人間の世界、現実世界の領域

実体的・システムの構造で、神明界と連結され具体的な作動原理を持つ。



核心的相違点三才が世界の構成原理と調和に焦点を合わせる一方、三界はさらに進んで実体的世界システムと神明界を含む具体的な宇宙構造を説明する。

東学思想の三才(三才)概念

「天も我が心であり、地も我が心であり、人も我が心である。」

- 東学思想の核心的教え

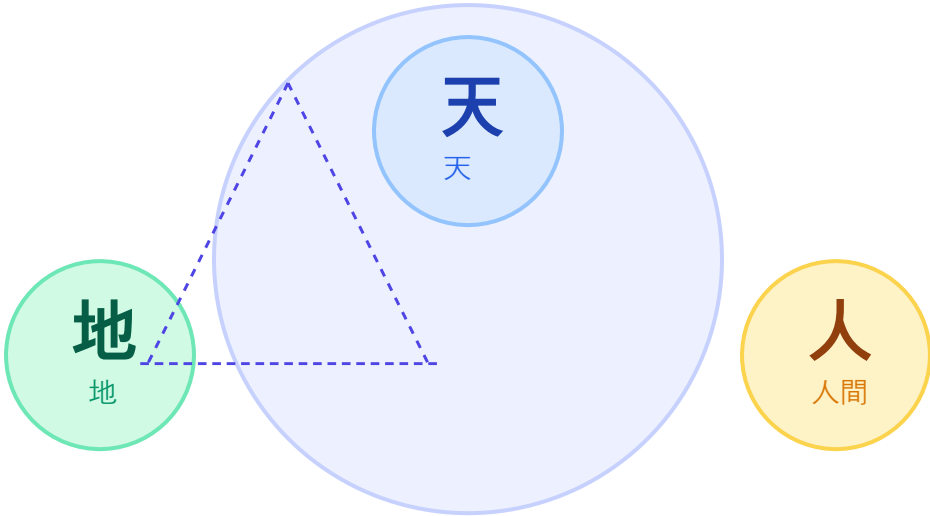
東学の三才理解

- 天・地・人の調和 - 天と地と人が本質的に一つの気運で連結される
- 内在的神観 - 天(神)が人間の中に内在するという思想的革新
- 実践的思惟 - 世界秩序と均衡のための人間の役割の強調

東洋思惟の普遍的枠組み

東学の三才概念は東アジア伝統思想の脈絡を受け継ぎつつも、人間中心の実践的次元を強調して西学(西學)に対応する新たな思想的流れを形成した。

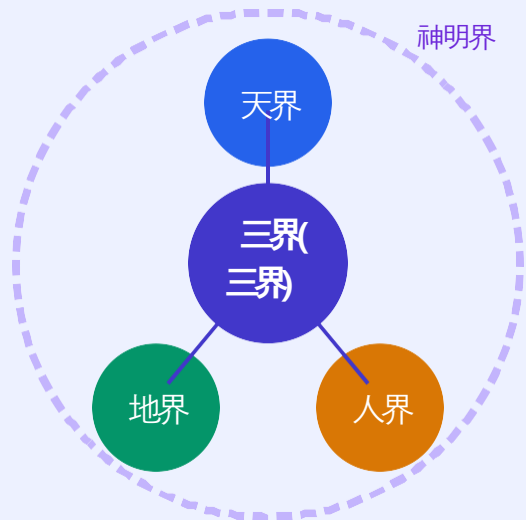
核心的意義東学の三才概念は既存の儒教的世界観から一步進んで人間内面に天(天)が内在するという革新的思想であり、以降の大巡思想の三界概念発展の思想的基盤となった。



東学の三才(三才)世界観

天・地・人の統合的調和を通じて世界秩序の基本構造を形成し、特に人間の主体的実践を通じた世界変革を志向する。

大巡思想の三界(三界)概念と特徴



大巡思想の三界は神明界と連結された実体的システム

大巡思想における三界の核心的特徴

実体的世界システム

単なる象徴的概念ではなく具体的な構造と実在性を持つ世界体系

神明界(神明界)との連結性

三界は神明(神明)たちの世界と密接に連結され相互作用する

開闢(開闢)の対象

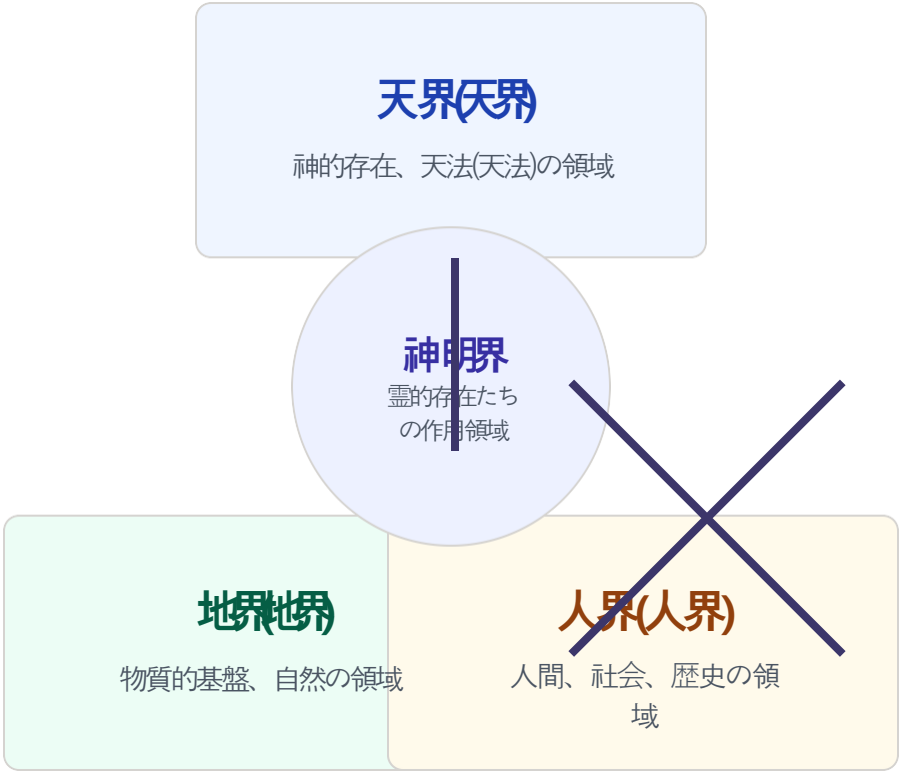
三界は「三界公事」を通じて新たに変革・革新される対象

「三界は大巡思想の特徴を露わにする教理の核心語として現れる。三界は天界・地界・人間界を通じて言い、九天大元造化主神は三界至尊(三界至尊)として三界を統察し三界役事をする。」

三界の宇宙論的構造と発展過程



三界システム構造天界地界人界



三界の構造と相互作用

- 1 有機的連結性:三界は個別的領域でありながらも互いに緊密に連結されている。各界は独立的体系であるが同時に全体システムの一部として作動する。
- 2 神明界との相互作用:三界は神明界と相互作用し、神明(神明)は三界の各領域に影響を与え調和と秩序を維持する。
- 3 システム的作動原理:天界の法理(法理)、地界の物質界法則、人界の社会的秩序が互いに呼応して作動する実体的体系を成す。

大巡思想において三界は単なる区分ではなく、実際の作動体系を備えており神明界との相互作用を通じて宇宙の秩序と調和を維持する。これは伝統的三才概念より具体的でシステム的な世界観を提示する。

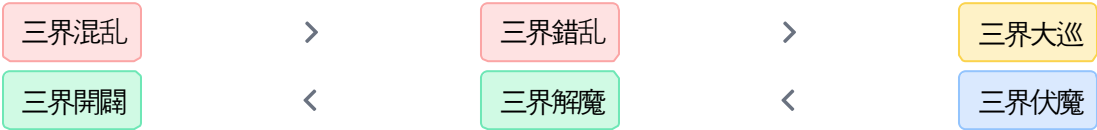
三界公事・三界至尊と神明界

三界公事(三界公事)

大巡思想の核心教理で、天・地・人三界を開闢(革新)する神聖な事業を意味する。

- ◆ 新たな世界秩序の創造作業相
- ◆ 克から相生への転換
- ◆ 「この開闢は他人が作ったものに従うことなく新たに作られる」

三界公事の進行過程



三界至尊(三界至尊)

九天大元造化主神(九天大元造化主神)として、三界を総括し調整する最高存在である。

- ◆ 三界を統察(統察)する権能 三界で
- ◆ 役事(役事)する主体 三界の問題の診
- ◆ 断と解決を担当

神明界との連結

- ◆ 神明(神明)界と三界の有機的關係
- ◆ 神明の調和と秩序の回復 天地公
- ◆ 事を通じた神明界の再編成

核心三界公事は単なる教理ではなく宇宙的次元の實在的作用で、三界至尊の主宰の下に神明界と三界が相互作用して後天開闢へと向かう総体的プロセスである。

三才と三界の比較および結論

区分	三才(三才)	三界(三界)
概念特性	属性的抽象的概念	実体的・システムの体系
構造的特徴	天地人の属性と調和の強調	天界・地界・人界のシステム構造
神明関係	神明への言及が相対的に微弱	神明界との直接的融合と作用
世界観特性	東洋伝統思惟体系	東西思惟体系の統合

大巡思想の三界論的世界観

- 天界・地界・人界を有機的・システムの的に連結
- 神明界を統合的に包含する拡張された宇宙観の提
- 示 西洋の実体性と東洋の属性的世界観の統合
- 三界公事を通じた世界変革と開闢の強調

示唆点および意義

- 東アジア伝統思想の創意的継承と発展
- 三界の世界観と神明界の有機的結合
- 現代社会の問題解決のための新たなパラダイムの提
- 示 東西統合的視点で包括的世界理解が可能

「大巡田相は二界論を涵括して霊性・物質・南洋・西洋・に於て相俟たざる也」



先天(先天)と後天(後天)

Seoncheon and Hucheon

目次

- 1 先天と後天の概念
- 2 東学思想の先天/後天認識
- 3 大巡思想の先天/後天認識
- 4 二つの思想の比較
- 5 結論および示唆点

先天と後天の概念

先 先天(先天)

- ◆ 邵康節によって易学に初めて導入された概念
- ◆ 万物が相克的に運する以前の原理 伏羲八卦
- ◆ 図と河図洛書の宇宙原理と関連 物質が生成される前、太初の秩序を意味

後 後天(後天)

- ◆ 上帝の人身降世を起点とする新たな時代
- ◆ 神明(神明)の役割が再規定される質的転換
- ◆ 点 東学では「天主(天主)」概念と連結
- ◆ 新しい天と新しい地の秩序確立の意味

先天と後天は単なる時間的区分ではなく、人間-宇宙関係の根本的変化を象徴する概念である。東学思想と大巡思想はこの概念を通じて宇宙と人間社会の秩序の再編を説明し、新たな近代性の方向を提示しようとした。

東学思想が見る先天と後天

開 「再開闢(道路先天)」の意味

東学思想において開闢は「道路先天(回到先天)」という意味を持つ「再開闢」として解釈される。

表面的意味

- ◆ しばしば「後天開闢」と解釈されて
- ◆ ^{きた}新たな世界の到来を意味するものとして理
- ◆ ^解東学教の近代的改革思想と見なされる

実際の意味

- ◆ 東学関連宗団の記録は「道路先天」を示唆
- ◆ 儒教的理想社会(堯舜時代)への回帰志向
- ◆ 原点回帰的思想が強く内在

「当時の問題を儒教的観点からのみ見るなら当時の問題に対する最善の解決策は再び堯舜時代に戻る『再開闢』となり得る。」

東学の現実的志向点

- ◆ 「国中皆両班になる」- 身分制度の平等ではなく上層身分へ
- ◆ の同化「王侯将相の夢」- 新たな体制よりは既存体制内で
- ◆ の地位上昇の希望 後天を標榜したが実際には先天秩序の

大巡思想が見る先天と後天

大巡思想は先天を止揚すべき否定的概念ではなく、生長斂蔵の原則に従い後天へ向かうための必須的過程と見る。先天の怨恨は後天の解冤動力となる。

後天の特徴

東西古今の理致の融合

系統発生を反復する個体発生のように東西古今の理致のうち長所のみを集めて構成された世界

三界(三界)の確立

天・地・人三界が可変性、恒常性、互換性を持つ新たな宇宙秩序の形成

上帝概念の実体化

無極神、太乙天上元君を通じた無極と太極の実体化

天界観の再構成

- 上帝としての天と天地神明の二つの概念の確立
- 古き天と新しき天の交替
- 天地公事を通じた冥府公事の実現
- 天象分野列次之図の天文再配列
- 陰陽合徳、三才確立、五行具備の秩序

「後天は東西古今の時空間に現れたすべての理致の融合を意味する。したがって東学思想の造化に現れた東西洋天観・地観・人間観の連結は大巡思想において三界公事を通じた融合にまで発展する。」

両思想の比較と結論

東学

東学思想の後天観

- ◆ 後天を志向するが実際には「道路先天(先天回帰)」を
- ◆ 追求「再開闢」を堯舜時代への回帰と解釈
- ◆ 儒教的観点の理想世界の追求
- ◆ 「全国民が両班となる」→「王侯将相」志向

大巡

大巡思想の後天観

- ◆ 先天は否定ではなく後天へ向かう過程として認識
- ◆ 「新しい天と新しい地」の創造的開闢を追求
- ◆ 東西古今の理致の融合を通じた新たな世界
- ◆ 観陰陽合徳、三界確立、神明再配置

結論および示唆点

1. 近代性へのアプローチの違い東学は過去志向的近代性を、大巡は融合的・創造的近代性を提示した。
2. 世界観の特徴大巡思想は可変性・恒常性・互換性を通じて宇宙と人間の新たな関係を提示する。
3. 現代的意義大巡思想は伝統天観で近代文明の問題を解釈しようとする独自のアプローチで100年余り後の現在まで有意義な解釈を提供する。
4. 東西洋の融合東洋の属性的天観と西洋の実体的天観の合徳を通じて新たな方向性を提示する。

2

地観(地観)の自生的近代性比較

Comparison of Autogenous Modernity in Views of Earth

研究目的および概要

本研究は東学思想と大巡思想の地観(地観、地に対する観点)を比較分析することにより韓国的自生近代性の特徴を糾明することを目的とする。

主要研究の問い:

- それぞれの思想において地はどのように
- 解釈されるか?自生的近代性にどのような意味を持つか?

核心概念定義

地觀(地觀)

地に対する哲学的・宗教的観点で、天地(天地)構造において地が持つ位相と役割に対する思惟体系

自生的近代性

外来近代と区分される、内部思想体系から出発した近代性で、物質文明に対する批判と代案的未來展望を含む

東学思想/大巡思想

- 東学思想:崔濟愚が創始した19世紀新宗教思想、「気化(氣化)」概念中心
- 大巡思想:姜甌山が創始した新宗教思想、「調理(調理)」概念と神明思想中心

東学思想の気化(氣化)概念

東学は地を天地に属する一部ではなく超越天と対比される天地概念として気化(氣化)で表現する。

気化(氣化)の意味:宇宙を構成する深遠なエネルギーであり、万物の変化原理

「内有神靈外有気化内有神靈外有氣化」-内に神靈があり外に気化がある

東学思想における気化は:

- 人間と自然の外部的連結原理として作
- 用東西洋を連結する概念として活用
- 天人関係で気化として現れる物質的近代性の土台

大巡思想の調理(調理)概念

- ・ 大巡思想は「気化」に調理(調理、調和の理致)を加え、地が宇宙秩序の中心的調律者であることを強調

| “天用地用人用之調理(調理)統緒乾坤此之謂造化手段也”

- ・ 理(理)概念の強調 – 地は理致の中心となる存在
- ・ 理(理)範疇の特徴: 包容性・多様性・動態性

大巡思想の理(理)は陰陽五行の「土(土)」概念から出発 – 東学思想の「気化」中心思想と差別化される地点

勞而無功と天地成功の比較

● 勞而無功(勞而無功)

東学思想に現れる概念で、「努力したが成功しなかった」ことを意味

天外天が神明としてのみ出現した東学思想において自身の業績を説明した用語

成功の事例がなかったことを含意

● 天地成功(天地成功)

大巡思想に現れる概念で、地と天の完全な調和と成就を意味

天地が役割を分担して事を成す概念 地と天が陰陽合徳される地上天国の具現

自生的近代性における意味:

- 東学思想:不安な未来と限界を認める自己省察的近代性
- 大巡思想:「地徳(地徳)」を強調することで安心安身の生活が可能な完成的近代性
- 性二つの用語の対比を通じて韓国的近代性の発展方向を提示

自生的近代性の意味

韓国の新宗教思想が提示する近代性は西欧の外来近代と区別される自生的特性を示す。

東学思想	大巡思想
気化(氣化)中心の内在的・批判的思惟論	調理(調理)と神明、陰陽五行中心の統攝的・包容的發展
物質的近代文明に対する批判と代案的未來展望	天地成功(天地成功)を通じた陰陽合徳の地上天国の実現
短期的、外部的、社会的開闢志向	長期的、宗教的、神明による開闢志向

両思想はいずれも韓国的アイデンティティを基盤に、西欧中心の近代言説とは異なる方向を提示し、生命尊重と調和の価値を根幹とする新たなパラダイムを示す。

結論および示唆点

- ・ 東学と大巡の地観比較を通じた韓国的近代性の多元的意味の導出
- ・ 既存の西欧中心の近代言説を補完しうる新たなパラダイムの提案
- ・ アイデンティティ言説、生態および宗教哲学など多様な分野に示唆を提供

本研究は気化(氣化)と調理(調理)という概念を中心に、韓国新宗教思想が提示する自生的近代性の価値を再照明した。

これを通じて東アジア思想の現代的適用可能性とグローバル文明言説における独自の位置を確認できた。



氣化(氣化)と調理(調理)

Gihwa and Jori

目次

1. 気化(氣化)と条理(調理)とは何か

2. 東学思想の気化(氣化)概念

3. 大巡思想の調理(調理)概念

4. 理(理)概念の比較

5. 東西神人関係の統合

6. 結論および意義

気化(氣化)と条理(調理)概念の紹介

東学思想と大巡思想では、宇宙万物の生成と変化、秩序と調和を説明する核心概念として気化と調理を提示する。この二概念は各思想の特徴と世界観を理解する核心要素である。

気化(氣化)

- ◆ 宇宙万物の生成と変化の原理
- ◆ 東学思想において天地の生命力を象徴
- ◆ 「内有神靈外有気化(内有神靈外有氣化)」
-内面には神靈が、外部には気化が力動的エネルギーと創造的原理を強調する
- ◆ 万物の生成と循環を可能にする根源的生命力

条理(調理)

- ◆ 宇宙の秩序と調和をなす原理
- ◆ 大巡思想において重要な統制と仲裁の原理
- ◆ 「天用地用人用之調理綱紀」(天用地用人用之調理綱紀)
-天と地と人が調和して作用する
- ◆ 理致(理)と法則が強調され秩序を付与
- ◆ 陰陽五行における「土(土)」の仲介役割と関連

気化と調理は、それぞれ力動性と創造性を象徴する気(氣)と、秩序と調和を象徴する理(理)に重点を置いており、これは東学思想と大巡思想の世界観の相違を示す。

東学思想の気化(氣化)概念

水雲・崔濟愚が創始した東学思想は、気化(氣化)を通じて天地および宇宙の流れを説明し、これを生命力の根源的エネルギーとして重視する。東学は伝統的な理気論(理氣論)から脱し、気(氣)の力動性と実践性を強調した。

気化の核心概念

- 天地の流れと生命力の根源的エネルギー
- 伝統的理気論より気(氣)を中心に思惟
- 実質的生命力と力動性の重視
- 「道氣長存邪不入(道氣長存邪不入)」
- 道の氣運が長く存在すれば邪悪は入って来ない
- 男性的な「至氣(至氣)」の概念として表現

内有神靈外有氣化

- 内には神靈(神靈)があり、外には氣化(氣化)がある
- 人格的でありつつ非人格的、外在的でありつつ内在的な天主の二重的姿
- 内的靈性と外的エネルギーの結合を強調
- 人と人、我と汝を媒介する共有されたエネルギー
- 西洋宗教と異なり氣化の神靈を強調した東洋的特性

「西教には氣化の神靈がなく、学問には天主の教えがない」

- 『論学文』に現れた水雲の西教批判

東学思想は気化(氣化)概念を通じて物質的近代文明への批判と代案的未來展望を提示した。初期東学は短期的・外部的・社会的な開闢を志向し、これはその後の韓国新宗教思想の基盤となった。

大巡思想の調理(調理)概念

大巡思想において調理(調理)は宇宙運行の核心的原理であり、超越天による仲裁と秩序、調和を意味する。これは東学思想の気化(氣化)と対比される概念である。

天用地用 人用之 調理綱紀 統制乾坤 此之謂造化手段也

天用(天用)と地用(地用)と人用(人用)は綱紀(綱紀)を等しくすることであり、天と地を統制する。これを造化(造化)の手段(手段)という。

神明界との調和

- 人身降世した超越天による条理(調理)の役割の強調
- 神明界によって調和される地界觀(地界觀)の形成
- 日月無私治萬物(日月無私治萬物) – 日と月が偏りなく万物を治める
- 天地の津液(津液)としての五呪(五呪)の意味
- 神明を通じた実質的世界秩序の付与

土(土)の仲介役割

- 陰陽五行で土(土)は中央に位置する仲介者
- 地は理致の中心となる存在として強調
- 「地の理致」は天門地方(天圓地方)の原理を反映
- 理(理)が日用事物(日用事物)に適用される実質性
- 理(理)範疇の包容性・多様性・動態性を土(土)の特性と連結

大巡思想は東学の男性的「気(氣)」概念とは異なり、女性的な心と理致に従う解冤を強調する。「真心堅守福先來」を通じて「道氣長存」より心の役割を重視する相違を示す。

理(理)概念の比較

東学思想と大巡思想は「理(理)」概念に対する理解と強調点において明確な相違を示す。この相違は両思想の世界観と根本的な接近方式をよく示す。

東学思想の理(理)

既存の理気論から脱し気(氣)の優先性を強調

- ◆
- ◆ 「道氣長存邪不入(道氣長存邪不入)」
「道と気が共に存在することを重視」
- ◆ 「理(理)」の実体性より力動性と生命力を重視
- ◆ 物質的近代文明への批判と代案の提示に焦点
- ◆ 短期的、外部的、社会的開闢を志向

「西教には気化の神靈がなく、学問には天主の教えがない」

大巡思想の理(理)

無極太極(無極太極)に根拠する理(理)の実体性を強調

- ◆
- ◆ 「真心堅守福先来(真心堅守福先來)」
-女性的な心と理致を重視
- ◆ 理(理)は日用事物に適用される実質的な法度
- ◆ 「元亨利貞大經大法道正天地數定千法而理定心法」
-土(土)と心の関係の説明
- ◆ 長期的、宗教的、神明による開闢志向

「理雖高出於太極无極之表不離乎日用事物之間」(理は高いといえども無極太極から出現したものである)

大巡思想は理(理)概念を陰陽五行の「土(土)」概念と結び付けて再活性化することで、「気化(氣化)」概念に偏った東学思想よりも具体的な自生的近代性を提示することができた。東学が男性的「至氣」を強調するのに対し、大巡は女性的な心と理致に従う解冤を強調する。

東西神人関係の統合

東学和大巡思想は東洋の伝統的神観と西洋の神観を統合する観点を提示する。特に解冤相生を通じて東西洋の神人関係が融合されう
ることを強調する。

東洋の神明(神明)

- ◆ 陰陽五行の原理として理解される多様な神的存在
- ◆ 祖先神と自然神の区分と共存
- ◆ 無極・太極など非人格的・理法的原理の強調
- ◆ 人間と神明の相互作用的關係
- ◆ 「祖先が4代(代)を過ぎれば零となり仙となる」
-祖先と神明の連結性

西洋の天使(天使)と神

- ◆ 神明が天使概念へと位相が縮小
- ◆ 人間と天使の分離された存在論的位階
- ◆ 絶対者の人格化(イエスの「父」表現)
- ◆ 地下神との親近性(西洋伝統の特徴)
- ◆ 先霊神の位相の弱体化と復帰可能性

統合的観点

- ◆ 大巡思想の解冤相生を通じた東西洋の神人関係の統合可能性
- ◆ 西洋の天使概念が東洋の神明の地位へと復帰する過程
- ◆ 無極神(無極神)など理法的原理の人格的表現を通じた東西融合
- ◆ 人間と神明の關係が西洋でも復元され新たな調和を創出

結論および意義

東学思想と大巡思想の比較は、韓国固有思想の流れと自生的近代性の形成過程を理解する重要な鍵である。気化と調理という二概念の比較を通じて見ることのできる核心的結論と意義は以下の通りである。

研究結論

- 概念的相違東学の「気化」は力動的生命力を強調するのに対し、大巡の「調理」は秩序と統制を強調
- 理(理)概念の再解釈大巡思想が土(土)概念としての理(理)を再活性化し神明概念と接続
- 神明と気化大巡思想は東学の「外有気化」概念を拡張し神明界との調和として具体化
- 解冤(解冤)と相生(相生):「調理」を通じた理致的解冤と和解の実現方式を提示

学術的意義

- 自生的近代性西洋近代化とは異なる、韓国固有の近代性形成過程の照明
- 宗教的アイデンティティ東学以降の思想が民族的アイデンティティ維持に寄与した役割の確認
- 代案的価値観物質的近代文明への批判と代案的未來展望の提示
- 東西洋思想の融合理法(理法)と人格神概念の統合的理解可能性の拡張

現代的意味

学術的側面

東学と大巡思想の比較は韓国思想史研究に新たな観点を提供し、東アジア伝統思想の現代的再解釈と活用可能性を示す。

実践的側面

気化と調理概念の均衡は、現代社会の急激な変化と力動性(気化)の中でも秩序と調和(調理)を維持する知恵を提示する。



勞而無功(勞而無功)と天地成功(天地成功)

Noimugong and Cheonji-Seonggong

目次

- 1 研究背景と目的
- 2 核心概念の紹介
- 3 東学思想の勞而無功
- 4 大巡思想の天地成功
- 5 伝統的鬼神概念と勞而無功
- 6 東学と大巡の地界観の差異
- 7 日本観の対比
- 8 結論および示唆点

研究背景と目的

- 東学思想と大巡思想は韓国近代思想の土台をなす代表的思想であり、その「地」に対する観点(地観)は重要な相違点を示す
勞而無功(勞而無功)と天地成功(天地成功)は東学思想と大巡思想の地観(地観)において、その相違を鮮明に示す核心用語
- 二概念の比較を通じて韓国近代思想の地観の変化とその哲学的・歴史的意味を考察し、現代的意義を探索
-

「東学思想と大巡思想の地観(地観)においてその相違を鮮明に示す用語が勞而無功(勞而無功)と天地成功(天地成功)である。」

核心概念紹介 勞而無功と天地成功

- 東学思想と大巡思想の地觀(地觀)の差異を示す核心的用語

勞而無功(勞而無功)

- 「努力したが成功しなかった」という意味
- 天が神明としてのみ出現した東学思想で使
- 成功の事例がなかったことを
- 伝統的陰陽五行概念と対比される

天地成功(天地成功)

- 九天の人身降世以降の天地に対する表
- 天地が役割を分担して事を成す
- 地と天の陰陽合徳によって地上天国を実現
- 天主の成功を意味

「伝統的陰陽五行において天地成功と対比される用語は天地化育である。天門地方、天道地徳のような理想的三才概念において、天地は家門の成功のために子を育てる父母のように、人間を化育し天地を成功させようとする。」

東学思想の勞而無功(勞而無功)

- 勞而無功(勞而無功):努力したが成功しなかったという意味で、天外天が神明としてのみ出現した東学思想において自らの業績を説明した用語
- 東学では天主(天主)を鬼神(神明)として認識し、このような天主の努力はあったが成果はなかったという意味伝
- 統的陰陽五行における天地化育(天地化育)や天円地方(天圓地方)のような理想的概念と対比される
- 東学思想の勞而無功は大巡思想の天地成功を理解する関門となり、天地成功は地と天が陰陽合徳する地上天国を意味する

「東洋思想において「天円地方」のような天地に関する多くの用語があるにもかかわらず、天地成功に対する概念の端緒が現れる場は東学思想が唯一である。」

大巡思想の天地成功

- 天地成功(天地成功)九天の人身降世以降、天地の役割を分担し事を成す概念
- 大巡思想は抑陰尊陽(抑陰尊陽)を正陰正陽(正陰正陽)に変える天地公事を通じて伝統的な地観を実体化三神山
- から出発し、父母山である回文山と母岳山の整備、山王と海王の穴の整列
- 陰陽五行の中心である「土(土)」の重要性の強調－九天の役割が天地成功に重要

「天地陰陽合徳の結果である地上天国は、三界が相関的に作用する大巡思想の地界観を代表する。」

伝統的鬼神概念と勞而無功の意味

朱子学的鬼神概念

- 朱子:「鬼神に関わる事はもとより第二義的なものである。形もなく影もない鬼神は理解しがたい」
- 宋明理学において本体論的に「理(理)の体(體)」が無(無)であり虚(虚)として認識
- 鬼神論は日常的「事(事)」を習う小学段階ではなく、心をもって「理(理)」を窮究する大学段階の言説

東学の天外天と勞而無功

- 東学思想において鬼神は天外天(天外天)を意味し、天地を天主すなわち鬼神として悟る過程で勞而無功概念が登場
- 天外天が神明としてのみ出現した東学思想において、自らの業績を「勞而無功(勞而無功)」と説明
- 勞而無功は成功の事例がなかったという意味であり、これは後に大巡思想の天地成功を理解する関門となる

「東学思想において勞而無功は天地を天主、すなわち鬼神として悟る場面において現れるため、勞而無功を理解するには既存の東洋の鬼神概念を理解する必要がある。」

地界観および日本観の対比

地界観の比較

東学思想

- 地の生命思想を強調する形で理解
- 韓国有機農法との関連性
- 天中心の思想であり、地への強調は相対的に微弱

大巡思想

- 三神山と父母山(回文山、母岳山)の再整備
- 地界公事を通じた地気調整
- 地上天国の実現のための地気統一公事

日本観(日本観)比較

崔水雲(東学)

- 壬辰倭乱の時に侵略した仇とし
- 「天のような倭賊め」と表現するほど敵
- 祖先・震立の抗日武功に対する自負

甌山(大巡思想)

- 日本に対抗せず順従することを主張
- 朝鮮を日本に任せる公事を行う
- 日本の敗亡と「賃金も受け取れず帰るであろう」との予言

東学と大巡思想の地界観および日本観は、各思想の時代的背景と哲学的基盤に応じた相違を示しており、これは実践的側面における異なる接近として現れる

結論および示唆点

- 勞而無功と天地成功は、東学と大巡思想の世界観および実践の相違を最も鮮明に示す核心概念である
- 東学は人間の努力にもかかわらず成果がない「勞而無功」として、大巡は九天の人身降世以降、天地が共に成し遂げる「天地成功」として地観を表現
- 天地成功は既存の東洋思想の天門地方、天道地徳を超え、陰陽合徳と三界開闢を通じて地上天国を実現する概念として発展
- 現代の生態学的危機と物質文明の限界を前に、地界(地界)の再発見と調和的地上天国の意味を再照明する哲学的基盤を提供

研究の意義
勞而無功と天地成功の比較を通じて韓国近代宗教思想の地観(地観)変化を追跡し、現代韓国思想において地界(地界)の重要性を再確認する契機を用意

3

人間観の自生的近代性の比較

Comparison of Autogenous Modernity in Views of Humanity

研究概要および問題提起

- 東学思想と大巡思想は韓国近代宗教哲学において重要な位置を占める
- 両思想の人間観は平等、神観、近代性などで相違する
- 本発表では人乃天、神人調化、不然其然、成事在人など主要概念を通じて人間-宇宙-神の関係と近代性の相違を考察

東学思想の人乃天概念

- **人乃天(人乃天):「人が即ち天である」という意味で、東学思想の核心**
- 破格的な平等思想—白丁と女性、子どもまでも天になりうるという主張
- 前近代社会において「天子(天子)」のみが天になりえた状況の中で、人間世界の平等を主張
- **変革的近代性を追求-西欧的近代性に符合する概念として評価される**

「人乃天(人乃天)は、内有神霊・外有気化という東学思想の天人・地人関係のうち超越的側面を排除し、内在的側面を極大化して西欧的近代性に符合するようにした概念」

大巡思想の神人調和の概念

- 神人調化(神人調化)神(上帝、神明)と人間の調和および相生の強調
- 人乃天への批判:人間は天と同等でありえず、天地の恩恵を忘却した人間の傲慢を戒める
- 解冤(解冤)と報恩(報恩):怨恨の解消と天地への恩恵報いの重要性
- 三界観(三界觀):天界・地界・人界が神明によって運行し、相互作用する
- 人間の地位は変革ではなく神明との調和を通じて漸進的に上昇

東学vs大巡人間観の比較

区分	東学思想	大巡思想
核心概念	人乃天(人乃天) 人が即ち天	神人調化(神人調化) 神と人間の調和
平等の実現	即時的、革命的変革の追求	解冤と相生を通じた漸進的実現
人-神関係	人間中心、神明概念が弱い	神明との相互作用を重視、神道(神道)を強調
宇宙観	三界(三界)概念の不足	三界(天・地・人)構造が明確
近代性の特徴	変革的、西欧的近代性に符合	自生的近代性、神人関係の再活性化

不然其然と成事在人の意味

不然其然(不然其然)

東学思想において理解できないもの(不然)も、修行を通じていずれは理解(其然)できるという意味

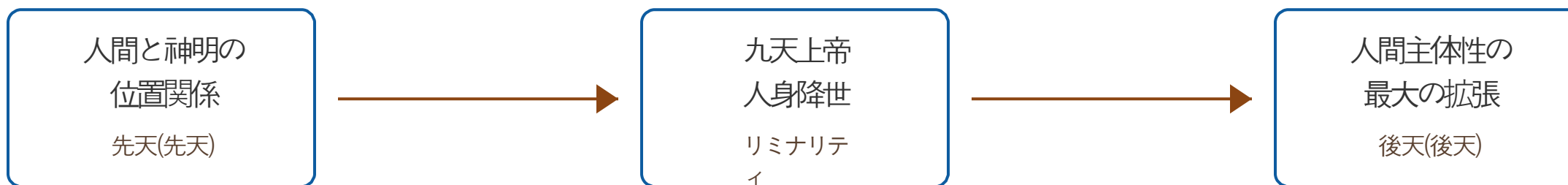
人間の理解力と道通を通じた悟りの可能性を提示

成事在人(成事在人)

大巡思想において成功は人間にかかっているという意味

先天:「謀事在人(謀事在人), 成事在天(成事在天)」→後天:「謀事在天(謀事在天), 成事在人(成事在人)」

九天上帝の人身降世以後、人間主体性の画期的変化を示唆



三界観と神明論

- 大巡思想は三界(三界)を中心に宇宙と人間 relationships を説明
- 神明(神明)は「真理に至極な」存在として天地の運行を担う
- 東学思想と異なり神明界と人間界の相互作用を強調

天界(天界)

天上界、冥府を
含む天上文明の
企画

人界(人界)

人間世界の成事
在人の主体

地界(地界)

地下界を含む科
学文明の起源

自生的近代性の相違点

東学思想の近代性

- 即時的・革命的平等実現の追求
- 変革的近代性:既存の秩序の急進的改革志向
- 人間中心の思想として西欧的近代性と接点

大巡思想の近代性

- 漸進的相生と解冤中心の変化
- 神人調和:神明と人間の相互作用の強調
- 成事在人(成事在人):人間主体性の拡張

韓国的近代性の多様性

両思想はいずれも西欧中心の近代性とは異なる韓国的自生近代性の経路を提示し、人間主体と世界観の再構成という共通点を持つが、実現方式と宇宙論的フレームにおいて差別性を示す

結論および意義

- 東学思想と大巡思想はともに韓国的自生的近代性の重要な思惟の流れを提示する
- 東学は平等と即時的変革を、大巡は解冤と漸進的相生の道を提示
- 両思想の人間観は西欧的近代性とは差別化された東西思想の接合点を示す

人乃天と神人調化は単なる宗教的概念ではなく、現代韓国社会において人間主体性と神-人関係に対する新たな思惟方式を提供する哲学的土台となる



人乃天(人乃天)と神人調化(神人調化)

Innaecheon and Sinin-johwa

目次

- 1 人乃天(人乃天)思想とその意義
東学思想の核心概念と歴史的文脈
- 2 大巡思想の神人調化(神人調化)
神と人間の関係に対する大巡思想の観点
- 3 両思想の哲学的比較
人乃天と神人調和の思想的差異と共通点
- 4 三界観と人間観
天地人(天地人)への観点と人間の位置
- 5 結論および示唆
両思想の現代的意味と含意



人乃天(人乃天)思想とその意義

人が即ち天である

初期東学に発源した概念であり、人間の内在的価値と神聖性を強調する思想である。天道教において水雲の思想を解釈し、東学近代性を代表する概念として発展した。

水雲が直接表現したのではないが、内有神霊(内有神霊)、外有気化(外有氣化)という東学思想の天人・地人関係のうち内在的側面を極大化した概念である。

歴史的脈絡

伝統社会においては「天子(天子)」のみが天と繋がる存在であったが、人乃天思想は、あらゆる人が天と同等の尊厳性を持ちうるという革命的観点を提示した。

平等思想の先駆的表現

- 身分超越の平等白丁(白丁)のような賤民も天と同等の存在になりうるという観点で、伝統的身分制度に挑戦した。
- 性別平等女性も天として尊重されうるという思想は、家父長社会において進歩的観点であった。
- 年齢平等子どもも天として尊重されるという概念は、伝統的な年齢位階秩序に挑戦した。
- 近代的含意西歐的近代性に符合する概念として、あらゆる人間の平等な尊厳性を強調する。

限界および大巡思想の

観点
大巡思想では、人乃天思想のみでは平等な世を成し遂げがたいと見た。真の平等は変革よりも天地への報恩と解冤(解冤)を通じて漸進的に実現されるという観点を提示する。

「天子(天子)のみが天になりえた前近代社会において、神明世界を除いた人間世界における平等を主張することのできる思想としては極めて先進的な思想であった。」

大巡思想の神人調化(神人調化)

神と人間の調和

神人調化(神人調化)は調和(調和)の「調」と造化(造化)の「化」を結合した大巡思想固有の概念で、神明と人間の調和的關係を重視する。

大巡思想において人間は天と同等の存在にはなりえず、天地の恩恵を認識しそれと調和をなさなければならない。「事之當旺在於天地必不在人」(事の成功は天地にあり必然的に人にはない)

神人依導(神人依導)

人間が天になるのではなく、神と人間が互いに依り引導する關係を通じて調和的世界を実現する思想である。これは人乃天とは異なる大巡思想の人間觀である。

神と人間の關係

- 天地の恩恵大巡思想は天地の恩恵を忘却した人間と近代性を問題の原因として指摘し、天地を尊重すべきことを強調する。
- 三界觀天界・地界・人界で構成される三界(三界)において、神明と人間の調和的關係を通じて新たな天地運行がなされる。
- 解冤と相生平等な世は変革ではなく解冤(解冤)と相生(相生)を通じて漸進的に実現されると見る。
- 神明の役割大巡思想において神明は「真理に至極な」存在として、天地公事(天地公事)に共に参与する。

東学思想との差異

東学が人間の内在的側面を極大化したのに対し、大巡思想は人間と神明との相互作用と調和を強調する。人間が天になるのではなく、天・地・人間がそれぞれの役割の中で調和をなすべきであると主張する。

「神人調化は天地の恩恵を知り神明と調和をなす生を通じて、真の平等と調和的世界を実現する道である。」

人乃天vs神人調和哲学的比較

人乃天(人乃天)

東学思想の核心-人が即ち天

- 人間の尊厳と平等の強調
- 内在的側面の極大化(内有神靈概念)
- 人間中心的世界観
- 変革的アプローチ

神人調化(神人調化)

大巡思想の核心-神と人間の調和

- 神明と人間の調和ある関係の強調
- 天地の恩恵に対する報恩と解冤
- 三界(天・地・人)の統合的視野
- 漸進的成長と調和の方式

哲学的観点の比較

天と人間の関係

人間が天と対等な存在となりうる

人間は天地と異なり、相互に調和を成さなければならない

平等実現の方式

革命的変化を通じた即時的実現の志向

解冤と相生を通じた漸進的实现

三界観

神明界への言及が少ない、人間界中心

天界・地界・人界の相互作用の強調

現代の意義

イ 不然其然(不然其然)と成事在人(成事在人)

Buryeon-giyeon and Seongsa-jaein

研究の概要および目的

- 研究背景

東学思想と大巡思想は韓国近代宗教思想発展の主要な軸であり、両思想の人間観比較研究は韓国思想史理解に必須である。

- 研究目的

本研究の目的は、東学と大巡真理会思想の核心である人間観を比較・分析することにより、各思想の現代的意味を再照明することにある。

- 研究方法

不然其然(不然其然)と成事在人(成事在人)概念を中心に、文献研究と比較分析を通じて両思想の人間観の特性と相違点を考察する。

核心的問い

東学思想と大巡思想において人間の主体性と自律性はどのように異なって表現され、これが現代社会に与える含意は何か。

核心概念紹介:不然其然成事在人

○ 不然其然(不然其然)

現在理解されていない不然(不然)が修道や経験を通じて其然(其然)に転換されることを意味

- 東学思想において人間としては理解が困難な部分も、いずれ修道を通じて理解できるようになるという概念
- 神明界を導入し得なかった東学思想における神人調和の表現方式

👏 成事在人(成事在人)

事の成敗の決定権が天(天)から人間(人)へ移譲された大巡思想の中心概念

- 先天:「謀事(謀事)が在人(在人)し、成事(成事)は在天(在天)」
- 後天:「謀事は在天し、成事は在人」－九天の人身降世以降の決定権の位置変化

💡 核心的差異点

東学思想と大巡思想の人間観の決定的相違は成事在人にあり、これは人間中心の世界観の確立を意味する。

東学思想の人間観

▲ 天外天(天外天)概念

人間を宇宙の中心であり天(天)と直接的に連結された存在と見なす

- 天の外にもう一つの天があるという意味で、人間の変化と可能性を強調
- 人間内部に天性(天性)があり自らが天であることを強調

⇒ 気(氣)中心の思想体系

神明概念より気(氣)と気運を中心とした人間観の展開

- 東学思想では「戦いを決定するのは気運」であることを強調
- 神明概念が現れない独特な人間中心の世界観の形成

“ 不然其然(不然其然)
「人間として理解が困難な不然不然の部分も、いつかは修道を通じて理解できる其然其然となる」

-神明界を導入し得なかった東学思想における神人調和の表現方式

大巡思想の人間観

人間中心の世界観

九天の人身降世以降、天地神明の役割が弱体化され、人間の自律性と主体性が強化される

- 人間を陰陽五行の中心・土(土)として位置づけ、神人調化体系の核心的役割を遂行
- 身内に閉じ込められた神であるため内なる神を覚まし外の神と疎通可能

九天人神降世(九天人神降世)

最高神の人間の身への降臨が人間と神明の位置を変える

- 「神明は否劫(否劫)に陥り人類は災劫(災劫)に陥ったため」、人間中心の世界観を確立
- 人間は神明より身体という実体を持つ点で不完全ではあるが、変化に伸縮的に適応できる長所を持つ

成事在人(成事在人)

事の成否の決定が今や人間によって成される

- 「謀事在天 成事在人」-典経、教法3-35
- 人間を通じて天地が成功する開闢の原理としての神人調和の確立

“「天上の争いが終わった後に人間の争いが決定される」(『典経』教法1-54)から、「今や謀事は在天し成事は在人」へとパラダイム転換

東学思想と大巡思想の比較分析

✿ 東学思想

神明概念

神明概念が微弱で、気(氣)と気運中心の思想体系

陰陽五行運用

陰陽五行の運用において土(土)が神明の役割を果たす
核心表現

不然其然(不然其然) - 理解しがたいものも修道を通じて理解可能

人間観

天外天(天外天)概念を通じて人間の変化と可能性を強調

● 大巡思想

神明概念

神明と人間の位相の変化を明確に提示

運用構造

人間中心の財貨運用構造の確立、神人調和体系の強化
核心表現

成事在人(成事在人) - 事の成否の決定権が人間にある

人間観

九天の人身降世後の人間の主体性と自律性を強調

核心的差異点

東学思想と大巡思想の人間観の決定的相違は成事在人にあり、これは人身降世以降、天地神明ではなく人間が天下事の主体となったことを意味する。

神人調和と陰陽五行の原理



神人調化の原理

大巡思想で人間(陽)と神明(陰)は陰陽合徳の原理で調和される

- 人間は身体を持つ実体として変化に柔軟に適用可能である
- 神明は真理に至極だが一方向のみを持つ



陰陽五行の作用

金火交易(金火交易):相反する気運(金と火)の交換を通じた調和

- 土剋水(土克水):人間(土)が神明界(水)を制御する原理
- 人間は陰陽五行において中心である土(土)として、神明の気化(氣化)を調理(調理)する



神人調和と成事在人の関係

大巡思想において開闢は天地が成功することであり、これは道通君子の輩出以降に可能となる人尊の道通真境の世界である。神人調化は人間を通じて天地が成功する開闢の原理となる。

人間(土)の条理(調理)と神明の気化(氣化)の相互作用

人間(土)



神明

結論および意義

■ 研究結果の要約

- 東学思想と大巡思想の人間観は不然其然から成事在人へ発展
- 大巡思想は東学思想に比べ、相関的思惟の拡大とフラクタル思惟が強化される
- 人間と神明の位置の変化は九天の人身降世を通じて成される

皿 学術的意義

- 韓国宗教思想の人間観の変化過程の照明
- 神人調化(神人調化)の哲学的意味の拡張
- 近代韓国宗教思想の自生的特性の発見

💡 現代的含意

- 人間の主体性と責任意識の強化に寄与
- 現代社会におけるリミナリティ回復の方案
- 東洋伝統思想の現代的再解釈の可能性

▶▶ 今後の研究提案

成事在人(成事在人)の現代的適用方案と神人調和(神人調和)の実践的意味について、より深層的な研究が必要である。特に韓国宗教思想が持つ東西洋文化の統合可能性に注目する必要がある。

V-4. 東学思想と大巡思想の天地関係の自生的近代性の比較

天地鬼神(天地鬼神)と天地誠敬信(天地誠敬信)
道氣長存(道氣長存)と相生(相生)

研究者:[発表者名]
所属機関]

発表日:2025年6月21日

研究概要および目次

本研究は東学思想と大巡思想の天地関係を中心に、韓国思想史に現れた自生的近代性の特徴を比較・分析する研究である。特に天地鬼神と天地誠敬信、道気長存と相生という核心概念の比較を通じて、両思想の自生的近代性の特徴と意義を考察する。

主要内容

1. 天地鬼神と天地誠敬信概念の比較
2. 東学思想の天地鬼神論
3. 大巡思想の天地誠敬信論
4. 道気長存と相生概念の分析
5. 西洋に対する認識の差異
6. 日本に対する観点の比較
7. 結論および自生的近代性の意義

4

東学思想と大巡思想の天地関係の自生的近代性の比較

Comparison of Heaven-Earth Relationships

東学思想の天地鬼神論

鬼神(鬼神)の再解釈

東学思想において「鬼神」は神明(神明)ではなく超越天(天外天)を意味

- 性理学における陰陽作用としての鬼神概念
- を超越鬼神を超越天の気化作用として再解
- 釈天地が鬼神=天地は超越天の気化作用

「天地亦是(天地亦是)鬼神(鬼神)であり鬼神亦是(鬼神亦是)陰陽(陰陽)であることをかくも知らなかったなら、經典(經典)を調べても何になろうか、道(道)と徳(徳)を知らなかったならば、賢人君子(賢人君子)がいかに知り得ようか」
龍潭遺詞、道徳歌

超越天と気化作用

- 気化作用(氣化作用):超越天の至気(至氣)が天地を作る原理
- 性理学との相違:性理学は陰陽作用の実体的説明としての鬼神を論じたが、東学は超越天を強調
- 近代性の試み:超越天を通じて性理学を超える近代性の追求
- 限界点:神明概念の未受容により儒教の前献を超えられない

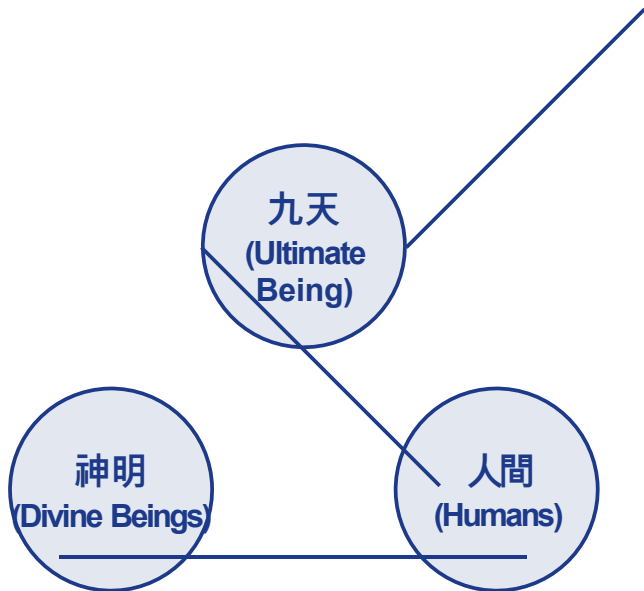
誠(誠)思想の強調

東学思想は「誠敬信思想」を強調したが、儒教とは異なり、天地の天ではなく天地を作った超越天への誠(誠)を強調

“吾道尊而約不用多言義別無他道豈豈敬信三字”

東学思想は超越天を通じた近代性を追求したが、神明概念を受容できず、完全な自生的近代性には到達できなかった

大巡思想の天地誠敬信論



三角構図の意義

- ◆ 九天-神明-人間の疎通の強調
- ◆ 東学思想と異なり神明概念を積極的に受容
- ◆ 神明を媒介とした天地間の調和と秩序の確立

誠敬信(誠敬信)の意味

誠 (1983.10.26)

創造性、天と人間をつなぐ通路

敬 (1983.10.26)

恭敬と尊重、天地に対する礼

儀

信 (1983.10.26)

信頼と信、天地運行の基盤

「生(生)と寿命(壽命)と福祿(福祿)は天地(天地)の恩恵(恩恵)である

がゆえに、誠(誠)・敬(敬)・信(信)をもって天地(天地)報恩(報恩)の大義

(大義を立てて、道(道)を日(日)に)

誠敬信の差別性

儒教思想	天-人間関係における誠(誠)の強調
東学思想	超越天への誠(誠)の強調
大巡思想	九天-神明-人間の三角構図における誠敬信

道氣長存と相生概念の分析

東学思想道器長存(道氣長存)

- 意味: 道の氣運が永く保存される(邪なるものは入り得ない)
- 特性: 力に対して力で対抗する意味を強調
- 強調点: 相克(相克)の力、斥倭(斥倭)の重視
- 限界: 真心堅守(真心堅守)の価値が不足
「道氣長存邪不入、世間衆人不同歸」(立春詩)

大巡思想相生(相生)

- 意味: 解冤相生(解怨相生)、万物の調和ある生成
- 特性: 九天の陰陽五行運行原理としての調和の追求
- 強調点: 真心堅守(真心堅守)「福先来」の原理
- 発展: 「悪を悪で報いるな」という相生原理の具現
「真心堅守福先来 真心堅守福先來」

相生

陰陽五行の原理
九天(九天)による五行の条理(調理)

相克

東学思想相克の力を追求、氣化(氣化)と斥倭を強調 vs 大巡思想解冤相生の調和、陰陽五行の均衡を追求

西洋に対する認識の差異

東学思想西学に対する対立的態度

- 名称:「東学」という名称自体が「西学」
に對抗
- 性格:西学に反対する自生的近代性の追
求
- 影響:西洋近代性の東洋的起源を主張
- 特徴:性理学を超えようとする自生的近
代化

東学は西学とともに東洋に再輸入され、中国近世の道教と性理学が総
合され、「天使問答」という上帝の啓示形態として成立

大巡思想包容的東西世界観

- 名称:「大巡」という用語における包容の意
味を強調
- 性格:東西相生関係の追求
- 影響:西洋近代性の東洋的受容と発展
- 特徴:陰陽合徳の観点から東西の調和を模
索

「東有大聖人曰東學西有大聖人曰西學」(東に大聖人ありて曰く東学
西に大聖人ありて曰く西学という)

東学思想西洋に対する警戒と対立中心 → 大巡思想東西洋の陰陽合徳的相生を追求

実学と西学の関係にも現れるように、朝晩後期の西洋文明への認識は複合的であったが、大巡思想
はマテオ・リッチのような西洋人物を「天上の文明を地に伝えた人物」と評価するなど、より包容的観点を提
示

日本に対する観点の比較および結論

東学思想の日本観

- ◆ 敵対的認識: 「犬のような倭賊」
- ◆ 態度: 西洋と日本に対する警戒
- ◆ 特徴: 斥倭(斥倭)を強調する相克の力の追求
- ◆ 道器長存(道氣長存): 力に対して力で対抗する意味

「道氣長存邪不入(道氣長存邪不入)」

大巡思想の日本観

- ◆ 解冤(解怨): 壬辰の乱以降、道術神明間の隻(感)を解く観点
- ◆ 相生観点: 「日本は日本人だから言葉遣いだけでも厚くせよ」
- ◆ 特徴: 日本解冤(日本解冤)は甌山化天後、最初に実現された天
- ◆ 地公事(眞心堅守): 相克を相生で解かねばならないこ

とを強調
「眞心堅守福先來(眞心堅守福先來)」

結論: 自生的近代性の意義

概念的意義

- ◆ 超越天と天地神明の関係の再定立 自
- ◆ 生的近代性の多様な経路の提示 朝鮮
- ◆ 後期思想との連続性と断絶

実践的意義

- ◆ 東学: 斥倭・斥洋中心の抵抗的近代性
- ◆ 大巡: 解冤相生中心の包容的近代性 相
- ◆ 克と相生の均衡と調和の模索

現代的示唆点

- ◆ 東アジア思想史の独自の近代化可能性伝
- ◆ 統思想の現代的再解釈の方向性 東西洋文
- ◆ 明交流の新たなパラダイム提案

両思想は韓国の自生的近代性を構築する過程で異なる接近方式を提示し、韓国思想史の独創的發展経路を示す重要な事例である

ア 天地鬼神(天地鬼神)と天地誠敬信(天地誠敬信)

Cheonji-Gwisin and Cheonji-Seonggyeongsin

~~目次~~

- ① 序論
- ② 東学思想の天地鬼神
- ③ 大巡思想の天地誠敬信
- ④ 二つの思想の比較分析
- ⑤ 誠敬信概念の差異
- ⑥ 結論

序論

本発表では、天地鬼神(天地鬼神)と天地誠敬信(天地誠敬信)概念を中心に、東学思想と大巡思想の比較研究を進める。

- 両概念は、それぞれ東学思想と大巡思想において最初に出現する天地関係を代表する用語であり、各思想の核心的相違を反映する
- ○

天地鬼神-東学思想において天外天の出現を

強調天地誠敬信-大巡思想において九天の人

身降世を強調

両思想はともに伝統的な東洋思想の陰陽・天地概念を超え、超越天の存在を重視し、このような観点が韓国宗教思想の独特な特性を形成する。

東学思想の天地鬼神

東学思想において天地鬼神(天地鬼神)は、超越天(超越天)の陰陽理致によって作られた天地を意味する。

天外天(天外天)と鬼神の意味

東学思想において「鬼神」は神明を意味せず、天地を作った超越的存在である天外天を指す

気化作用(氣化作用)

天地鬼神は、超越天の至気(至氣)が変化して現実世界を形成する
気化作用を強調

「天地亦是(天地亦是)鬼神(鬼神)であり、鬼神亦是(鬼神亦是)陰陽(陰陽)であることをかくも知らなかったなら、經典(経典) 經傳(経伝)を調べても何にならうか、道(道)と徳(徳)を知らざれば賢人君子(賢人君子)いかに知らん」

- 『龍潭遺詞』、「道德歌」

東学思想は性理学の天地概念を超え、超越天を強調することで近代的轉機を用意したが、神明概念の不在により成功的な近代性には到達しなかった。

性理学:天地が鬼神であるとは陰陽作用の実体的説明 東

学思想:天地が鬼神であるとは超越天の気化作用を意味

由神戶会が神戸会へ、と登屏できたか、一歩阻田が友方

大巡思想の天地誠敬信

大巡思想では、九天の人身降世と神明の誠敬信によって天地が運行されると見る。

「生(生)と寿命(壽命)と福祿(福祿)は天地(天地)の恩恵(恩恵)であるがゆえに、誠(誠)・敬(敬)・信(信)をもって天地(天地)報恩(報恩)の大義(大義)を立て人道(人道)を尽くし」

-大巡真理会要覧「訓誨」

大巡思想の特徴天地を鬼神と表現した東学思想に対し、大巡思想は天地を誠敬信として表現する。

大巡思想において人間の生と寿命と福祿は、天地を運行する諸神明の誠敬信(誠敬信)によって施される恩恵であるため、人間もまた天地に倣い誠敬信をもって報恩しなければならない。

概念	意味	大巡思想的特徴
三要体	誠(誠)・敬(敬)・信(信)	大巡真理会の信条の核心
三角構図	九天-神明-人間	誠(誠)概念の実践的意味

両思想の天地関係の比較分析

東学思想と大巡思想はいずれも超越天を強調するが、その解釈と適用において明確な相違を示す

比較項目	東学思想	大巡思想
核心概念	天地鬼神(天地鬼神) 超越天の出現の強調	天地誠敬信(天地誠敬信) 九天の人身降世の強調
鬼神概念	「鬼神」は超越天(天外天)を意味 神明概念の欠如	天地神明とその誠敬信を強調 神明概念を積極的に受容
西洋に対する認識	「東学」という名称に見るように西学と対立、西洋への対抗的性格	"대순"이란 용어에서 보듯 포용적 입장 서양 근대성의 동양적 기원 제시
天地解釈	천지는 초월천의 기화작용(氣化作用) 성리학의 음양 작용을 넘어선 해석	天地は神明の誠敬信によって運行 される九天、神明、人間の三角 構図
限界点	神明概念の不在により完全な近代性の達成に失敗	神明概念を受容し体系を補完発展

* 両思想はともに既存の性理学を超える近代的思惟を志向したが、その方式と強調点において相違を示す



道氣長存(道氣長存)と相生(相生)

Dogi-jangjon and Sangsaeng

結論

天地鬼神と天地誠敬信概念の意義

両概念は東学と大巡思想の異なる天地解釈方式を示し、超越天から神明へと繋がる韓国近代宗教思想の発展過程を反映する。

韓国近代宗教思想史における位置

東学思想超越天の気化作用を強調、性理学を超えた近代的転換の試み 大

- 巡思想神明概念の受容により東学が成し遂げられなかった宗教的近代性
- を完成 両思想はともに自生的近代性を追求し、韓国固有の近代宗教思想
- を形成

今後の研究方向

- 誠敬信概念の実践的意味の探究と現代的適用可能性 西洋
- 近代性の東洋的起源と自生的近代性の比較研究
- 天地関係と超越天概念の東アジア宗教思想史的発展の考察

V-42 道器長存(道氣長存)と相生(相生)

大巡思想と東学思想に現れる道氣長存(道氣長存)と相生(相生)概念の比較分析

目次

- 1 相生概念の定義と特徴
- 2 陰陽五行と相生の関係
- 3 道気長存の意味と背景
- 4 大巡思想と東学思想の相克-相生観点の差異
- 5 西洋と日本に対する二つの思想の観点比較
- 6 結論および示唆点

相生概念の定義と特徴

- 相生(相生)は大巡思想と東学思想で核心的に論じられる概念
- 大巡思想における解冤相生の抽象的概念の登場—調理と気化、土(土)による仲裁的役割
- 東学思想では相生が相対的に浮上しない

道気長存と相生—大巡思想と東学思想の比較

陰陽五行と相生の関係

- 陰陽五行(陰陽五行)は東洋思想の核心的原理
- 大巡思想:陰陽合徳、三才確立など五行理論の発展、相生・相克原理に注目
- 伝統的解釈:陰陽五行は土(土)を中心に変わらない理(理)、外的変化は気(氣)で説明

道気長存と相生—大巡思想と東学思想の比較

道気長存の意味と背景

- 道気長存(道氣長存)は東学の水雲・崔濟愚の立春詩の一節に由来
- 原文:「道氣長存邪不入、世間衆人不同歸」

「道の氣運が長く保たれれば邪惡は入り込めず、世間の多くの人と同じくは巡らないであろう。」

- 『典經』では水雲の「道気長存」を甌山の「真心堅守(眞心堅守)」と対比
- 力(相克)に対して力で対抗する意味が強調された概念

大巡思想と東学思想の相克相生観点の差異

- 大巡思想:相克(相克)と相生(相生)を森羅万象の核心原理として格上げ
- 東学思想:斥倭(斥倭)のような相克(相克)の力を強調するが、究極的には相生をもって解決方を提示
- 相克と相生の均衡と調和が重要であると明示
- 『典経』において「悪を悪で報いることは血をもって血を洗うのと同じである」

道気長存と相生—大巡思想と東学思想の比較

西洋と日本に対する二つの思想の観点比較

- 大巡思想:東洋と西洋を相生関係として理解し、西学・東学のいずれも大聖人として評価
「東有大聖人曰東學 西有大聖人曰西學」(東有大聖人曰東學 西有大聖人曰西學)
- 東学思想:西洋への警戒心が強く、日本に対しても相克的態度を強調
「犬のような倭賊」などの表現に現れる相克的観点
- 日本解冤大巡思想は壬辰乱以降に結ばれた恨(隻)を解き、日本との歴史的解冤を通じて相生の方向を提示
言葉遣いを厚德にせよー相生に至る道

道気長存と相生ー大巡思想と東学思想の比較

結論および示唆点

- 道気長存(道氣長存)と相生(相生)概念を通じて見た東学と大巡の思想的発展過程
- 大巡思想の相生哲学は対立よりも調和と和解を通じた問題解決方式を提示
- 東学思想の道気長存は外勢に対する民族的抵抗意識を反映するが、大巡思想は相生的世界観へと発展
- 両思想の比較を通じて見た韓国伝統思想の解冤相生(解冤相生)哲学の現代的意味と価値

5

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

Comparison of Heaven-Human and Earth-Human Relationships

思想の天人・地人関係の自生的近代性比較



目次

発表内容概要



1

問題提起および研究意義

2

人道と神道の天人関係

3

三界観の深化と再定立

4

5

6

比較表:東学と大巡の近代性

7

結論:自生的近代性の含意

問題提起および研究意義



研究背景と学術的重要性

天人・地人関係の自生的近代性比較

研究目的と意義

- 自生的近代性の観点からの比較
西洋とは異なる経路で発展した東アジア固有の近代性を、東学と大巡思想を通じて照明する。
- 天人・地人関係の哲学的深さ:
天-人間、地-人間関係に対する東学と大巡の相違点を分析し、韓国宗教・哲学思想の独特な世界観を把握する。
- 社会変革思想としての意義
両思想が近代韓国社会の形成過程に及ぼした影響と変革的特性を比較分析する。
- 思想的連続性と発展:
大巡思想が東学の「参東学」として継承・発展させた部分と差別化された地点を明確にする。

「東学と大巡の天人・地人関係比較は、韓国固有の哲学的・宗教的伝統が近代化過程においていかに自生的発展を成し遂げたかを示す重要な研究である。」

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

人道と神道の 天人関係



人道(人道)



神道(神道)

東学思想

- 「天外天(天外天)」概念の導入
既存の儒教的天概念を超えた超越的存在の強調
- 人道(人道)中心の実践思想
人間ができる最善の実践を通じて天外天と疎通
- 神明への言及の不足
神道(神道)への十分な理解の不足

「東学思想は、人間として成しうる最善を尽くすことにより天外天と疎通する人道人道の道を選択した。」

大巡思想

- 神明(神明)の実質的役割の強調
天地神明を通じた神道(神道)の疎通と構造的変化
- 天地構造の開闢的变化
神道を通じた宇宙的秩序と構造の変革
- 解冤(解冤)と天地構造の変化
怨恨解消を通じた天地人三界の原理の再定立

「大巡思想は、東学思想が「天命」と「神教」という神道を十分に理解せず、神明にほとんど言及せず人道から大きく外れなかったことを惜しむ。」

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

三界観(三界観)の 深化と再定立



天(天)・地(地)・人(人)
三界の調和と関係

大巡思想の三界観

- 天地人(天地人)三界を明確に区分し調和を強調
- 人間を天地の媒介者として重視—神人調化(神人調化)
- 人間が神明の調和において仲介者の役割
- 天地の成功の可否は人間にかかる—人間中心的な構図

東学思想の三界観

- 三界観の体系が相対的に弱化
- 天外天(天外天)概念に集中、神明の役割への言及が不足
- 人間中心の実践倫理に集中
- 人道(人道)から大きく外れない体系

「大巡思想は、人間が天地と互換されうるがゆえに人間があつてこそ天地が成功するという天地媒介の人間中心性を、神人調化として明確に言及する。」



大巡思想:三界の調和と人間の媒介

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

社会的実践と 道通君子



地人関係の
社会的実現

「地人関係(地人関係)は社会的実践を通じて具現され、理想社会の実現方式において両思想の相違点が現れる。」

🔥 東学思想

- 沁及道儒(心急道儒):心の急ぐ儒学者として現実的变化を追求
- 全国民を両班にする:民衆も両班と平等の実現
- 実践中心:現実における能動的実践と社会変革

「東学は人間実践中心の社会的改革のために平等と均分の価値を強調した。」

▲ 大巡思想

- 道通君子(道通君子):道に通達した聖人の輩出を重視
- 金剛山開闢神仙世界への転換過程
- 地上神仙(地上神仙):現世で天国を実現

「大巡は神道(神道)と人道(人道)の統合を通じて道通君子が主導する後天仙境を志向した。」

地人関係の実践の核心的相違

東学:社会的平等の外的実現中心

大巡:道通を通じた内外的統合の志向

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

陰陽五行と 相生調和



木

火

土

金

水

陰陽五行と相生・調和の近代的意義

大巡思想

- 陰陽五行の原理を天地公事と連結し宇宙変化の法則へと昇華
- 相克から相生への転換を通じた後天開闢の実現
- 調和と均衡を通じた天地人三界の変化の促進

東学思想

- 陰陽五行のような自然法則への言及が不十分
- 神明と自然法則よりも人間の実践(人道)に重点
- 社会的変化は強調したが、宇宙的次元の変革の拡張は制限的

「大巡思想は陰陽五行の調和的循環原理を導入し、人間と自然・宇宙を統合する相生の世界観を提示した。」

東学思想と大巡思想の天人・地人関係の自生的近代性比較

東学と大巡の自生的近代性の比較および結論

両思想の比較と含意

現代的意義

区分	東学思想	大巡思想
中心思想	人間中心、人道(人道)	神人調和、神道(神道)
天人関係	天外天、侍天主	神明との相生調和、三界観
社会的実践	沁及道儒、全国両班	道通君子、地上神仙
近代性の特徴	平等運動の原型	弁証法的構造、真東学

総合的結論

- ✓ 自生的近代性の二つの経路:東学は人間中心の平等思想として、大巡は包括的三界観と変革的神道理解を通じて独自の近代性を具現
- ✓ 補完的發展:大巡思想は東学が不完全に扱った神明・神道・陰陽五行を体系化し、「参東学」として発展
- ✓ 現代的意義:西欧中心の近代化とは異なる、東アジア的世界観に基づく自生近代性の代案的モデルを提示

「東学と大巡思想は、西欧中心の近代性とは異なる経路で、韓国の固有な文化的・宗教的土壌において発生した自生的近代性の二つのモデルを提示することにより、現代社会に多元的發展方向を示唆する。」



人道(人道)と神道(神道)の天人関係

Heaven-Human Relationship of Indo and Sindo

大巡思想の天命と神教

- 大巡思想では「天命」と「神教」を通じて人道(人道)と神道(神道)を区分
- 上帝が天命と神教を下し大道を立てさせられたが、甲子年に天命と神教を撤回された
- 辛未年に自ら世に降ることを定めた人身降世の意義

『典經』「豫示」1.参照

神道と人道の核心的差異

- 人道(人道)は人間中心の人為的道、神道(神道)は神明による自然法則的道
- 神明は天地を構成する要素であるため神道は構造的変化を伴う
- 天地公事と並行する神道は天人関係の再定立の形で現れる

「神道(神道)をもって大小の事を治めれば、玄妙不測の功が成就される...運数の巡り着くまま新たな基が開かれる」

『典經』 「豫示」 乃参照

東学思想との比較

東学思想

- 天外天(天外天)の出現を強調するが、人道(人道)の範囲を脱しない
- 神明の存在と役割に対する説明が不足している
- 人間として最善を尽くすことにより、天外天と疎通する人道(人道)の道を選択
- フランス大革命よりも真の元祖の近代思想運動として評価される

大巡思想

- 九天の人身降世(人神降世)を強調し神道(神道)を重視
- 天地神明との疎通を通じた天人関係の再定立の追求
- 人間と神明の調和: 「人爲陽神爲陰」(人爲陽神爲陰)
- 東学思想の限界を超え神道(神道)と人道(人道)の並行を強調

天人関係の再定立

- 大巡思想:天地公事と神道の調和で天人関係を再定立
 - 天地を構成する神明との疎通を通じた構造的変化の追求
- 人道(人道)から離れ神明との疎通を強調
 - 天人合一の新たな方式で人間と神明の調和を追求
- 儒教との差別性
 - 儒教:敬而遠之(敬而遠之)－神明を認めるが(敬)、近づけない(遠之)
 - 大巡思想:神明との積極的疎通と調和を通じた変化の追求

「およそ大小の事を問わず、神道より冤を解かねばならない。まず度数を確固たるものとし調和すれば、それが基となって人事は自ずと成就するであろう。」

『典経』「公事」1-3. 参照

陰陽和と神明の役割

- 人間は陽(陽)、神明は陰(陰)という関係の設定
人爲陽神爲陰(『典經』「濟生」43)
- 陰陽を使いこなしてこそ人間とすることができる
人可用陰陽然後方可謂人生也
- 神明と疎通(感通)してこそ変化の道を開くことができる

「陰陽が互いに和合した後にこそ変化の道がある」(陰陽相合然後有變化之道也)



三界公事と解冤相生

- 上帝の三界公事:相克から相生へ、神明を調和させ万古の怨恨を解消

「我は天地の度数を整理し神明を調和させ万古の怨恨を解き、相生(相生)の道をもって後天の仙境を立てて世界の民生を救おうとする。」

- 神道を通じた解冤の強調- 「およそ大小の事を問わず、神道より冤を解かねばならない」
- 東学思想と西欧的近代性の限界:神明と怨恨という部分を理解できず、結局成功不可
- 天人関係と神人関係の再定立を通じた社会変革の可能性

『典經』 「公事」 1-3. 参照

結論および現代的意義

天人関係再定立の意義

- 大巡思想は人間中心の人道(人道)を超え、神明との調和を強調する神道(神道)を通じて天人関係を再定立
- 相克から相生への転換を通じた社会的変革可能性の提示
- 天地神明との疎通を通じた人間存在の根本的再解釈

伝統思想の継承と拡張

- 儒教仏教道教の伝統を受容しつつ新たなパラダイムを提示
- 東学思想の限界を克服し神道(神道)を通じた根本的解冤を強調
- 現代社会において人間と自然、神明間の調和的關係の模索の可能性



心急道儒(心急道儒)と道通君子(道通君子)の地人関係

Earth-Human Relationship of Simgeub-doyu and Dotong-gunja

研究の背景および目的

本研究は韓国伝統哲学における心急道儒(心急道儒)と道通君子(道通君子)の思想およびその地人関係を考察し、その時代別・思想別の意義を分析することを目的とする。

- 心急道儒(心急道儒)とは道学(道学)に邁進しつつ心の急い悟りを求める儒学者を意味する
- 道通君子(道通君子)は道通(道通)、すなわち真理を通達し体化して具現する君子を意味する。道学の伝統と学問的系譜を受け継ぎ実践する人物である。
- これらの関係性研究を通じて、儒学と道学が韓国思想史においていかに相互作用しつつ発展してきたかを理解できる。
- 伝統儒学の関係網と知識伝授体系を考察することにより、韓国伝統思想の特徴と現代的意味を再照明しようとする。

『我もまた大いなる師に出会えず、学び習うにおいて尺度が定まらなかった。しかし書を読みつつ義理のある所を分別し、自ら悟り得たものが多い。』

道通君子(道統君子)の意味

道通君子(道統君子)は道通(道通)、すなわち真理を通達し体化して具現する君子を意味する。

- 道通君子は道統(道統)、すなわち道学の伝統と学問的系譜を受け継ぎ実践する人物である。
- 心急道需とは異なり、焦燥さより道を体じし調和的に実践することを志向する。
- 学問と修養の完成を通じて真理を悟り実践する理想的人格を意味する。

『道統(道統)について致知(致知)と涵養(涵養)は互いに離れることのできないものである。離れることができないのは、聖学(聖學)が手足のように互いに補完しているからである。』

心急道需と道通君子の相違は修行方式と価値志向において現れ、本質的には相互補完的関係を形成する。道通君子は儒家(儒教)の核心的な道徳的・学問的価値を具現する理想的人間像であるといえる。

- 道学においては道通君子の役割を、学問の継承と伝播において重要に見る。
- 歴史的には儒教の道統系譜を継ぐ重要人物を指してきた。
- 個人的修養のみならず社会と国家への責任を重視する。



Chapter VI

結論

Conclusion

研究概要

研究概要

- 研究目的:「東学(東學)」概念を中心に、両思想が天観・地観・人間観の再構成を通じて東アジアの自生的近代性を構築したことを立証
- 研究背景:東学農民運動はフランス大革命に匹敵する近代的運動として再評価されており、大巡思想は東洋の伝統的思惟体系として近代以降の世界変化を説明しうる思想として注目される
- 研究の問い:
 - 1) 両思想はいかに東アジアの自生的近代性を構築したか?
 - 2) 天観・地観・人間観は両思想でどのように再構成されたか?
 - 3) 相関的思惟とリミナリティの観点から見た両思想の特性とは何か?

核心論議要約

核心論議要約

- 東学農民運動の再評価: フランス大革命に匹敵する近代的運動としての価値
 - 東学思想と大巡思想が構築した東アジアの自生的近代性の歴史的意義
- 危機に瀕した西洋近代性の代案: 東学思想と大巡思想の天観・地観・人間観
 - 万物の変化を実体として見る西洋の内在性vs. 属性として説明する東洋の相関的思惟
- 相関的思惟のリミナリティ: 両思想の核心的特性
 - リミナリティ(境界性): 対立する二要素を包含して調和する東洋思惟のカオスの動的性
 - 相関的思惟: 万物が相互連結されたフラクタル的静態性
- 天地人三界観: 東西近代性を統合する自生的近代性の構築
 - 東学思想と大巡思想の天観・地観・人間観を通じた相関的思惟の再活性化

相関的思惟とリミナリティ

相関的思惟とリミナ
リティ

- 相関的思惟 (Correlative Thinking): フラクタル的 (Fractal) 静態的特性
 - 万物が相互に連結されているという関係性中心の思惟体系
 - 西洋の実体 (substance) 中心思惟とは異なり、属性 (attribute) 中心の説明
 - 天地人 (天地人) の有機的連結性と相互影響関係の強調
- リミナリティ (Liminality): カオス的 (Chaos) 動態的特性
 - 敷居、境界の意で通過儀礼における境界を通過する過程
 - 相互に対立する二つの要素をすべて包含し対立を調和させる特性
 - 陰陽の調和を追求する東洋思惟の変化と生成に焦点
- 東西思惟の差異と統合
 - 西洋: 分析的・二分法的思惟 → 主体-客体、精神-物質の分離
 - 東洋: 総合的・循環的思惟 → 天地人の相互関係性の強調
 - 相関的思惟のリミナリティを通じて東西天地人思惟の統合が可能
- 両思想の核心的方法論: 相関的思惟の再活性化
 - 東学思想: 作乱 (作亂) と胞胎 (胞胎) のリミナリティにより自生的近代性へ進入
 - 大巡思想: 治乱 (治亂) と冠旺 (冠旺) のリミナリティによる自生的近代性の再活性化

東学思想の特性

東学思想の特性

- 天使問答(天使問答)と天外天(天外天):超越的天(天)の概念導入
 - 天地人三界に相関的思惟のリミナリティを再活性化する契機
 - 西洋の人格神と東洋の理法天を統合する新たな天観(天観)を提示
- 三界観の再構成:新たな天観・地観・人間観の提示
 - 侍天主(侍天主):天を奉る人格的天観
 - 造化定(造化定):調和のとれた地の秩序の確立
 - 永世不忘(永世不忘):永遠に忘れない人間の道理
- 自生的近代性の限界:儒教の前献(前獻)を超えられない
 - 鬼神論的天地関係、気化論的(氣化論的)天人関係、王侯将相の地人関係
 - 現実変革の論理として限界を露呈し農民運動へ帰結
- リミナリティの特性:作乱(作亂)と胞胎(胞胎)
 - 作乱(作亂):既存秩序に対する抵抗と混乱のリミナリティ
 - 胞胎(胞胎):新たな時代を胎むる胎動期的特性
 - 自生的近代性進入段階としての相関的思惟の再活性化の試み

大巡思想の特性

大巡思想の特性

- 九天の人身降世:大巡思想の天界観の確立
 - 東学思想の限界を克服するための神人依導的(神人依導的)三界観の構築
 - 無極太極を樹立し理法天(理法天)と人格天の陰陽合徳を実現
- 神明と怨恨概念の導入:相關的思惟の拡張
 - 神明界を通じた天地人三界の有機的連結
 - 解冤相生報恩相生の宗教的法理の確立
- 三界観の再構成:天地人界の統合的観点
 - 人身降世の天界観、天地誠敬信の地界観、成事在人の人界観
 - 与天地同(與天地同)の原理で三界の相互交流を実現
 - 地上天国の天地関係、天地報恩の天人関係、地上神仙の地人関係の構築
- 治乱(治亂)と冠旺(官旺)の再活性化:自生的近代性の実現
 - 東学思想の作乱(作亂)と胞胎(胞胎)のリミナリティを克服
 - 天地公事と修道を通じた自生的近代性の実践的具現
 - 真東学の提示:東学思想を再活性化した長期的リミナリティの実現

二つの思想の比較分析

二つの思想の比較分析

- 相関的思惟の再活性化過程
 - 東学思想:短期的リミナリティに偏重、再活性化への進入に寄与
 - 大巡思想:東学思想を再活性化して真東学を提示、再活性化の完成

- 天観・地観・人間観の具体的比較

区分	東学思想	大巡思想
天観(天観)	侍天主(侍天主)の天観	人身降世(人身降世)の天界観
地観(地観)	造化定(造化定)の地観	天地誠敬信(天地誠敬信)の地界観
人間観(人間観)	永世不忘(永世不忘)の人間観	成事在人(成事在人)の人界観

- 自生的近代性の具現方式の相違点
 - 東学思想:作乱(作亂)と胞胎(胞胎)のリミナリティ、儒教の典範を完全には超えず
 - 大巡思想:治乱(治亂)と冠旺(冠旺)のリミナリティ、神明と怨恨概念の導入
 - 大巡思想は陰陽合徳、三才確立、五行具備の相関的思惟により東西洋の近代性を統合

研究の意義と価値

研究の意義と価値

- 西欧近代性の危機に対する代案の提示
 - 東学思想と大巡思想の自生的近代性少数言説ながらも東アジアの相関的思惟の唯一の近代性言説
 - 気候危機、核脅威など近代性の総体的危機に対応する代案的近代性の提示
 - 東西古今の天観・地観・人間観の長所を相関的思惟のリミナリティで統合
- 東アジア近代性の成長解決案の提示
 - 韓・中・日の三国のうち唯一、相関的思惟に基づく自生的近代性モデルを提供
 - 新たな成長のためのモデルとして失われた東アジア近代性の回復
 - 個人と共同体の次元で適用可能な新たな生存戦略の提示
- 比較思想的理解の増進に寄与
 - 天観・地観・人間観を中心とした比較を通じて両思想の意義と価値を容易に理解
 - 東西思想および現代科学思想との比較を通じた特性の把握
 - 学問的価値を超えた実践的適用可能性の提示

研究の限界および今後の課題

研究の限界および今後の課題

- 既存の近代性研究の受容の限界
 - 相関的思惟の天観・地観・人間観にのみ集中し、既存の近代性研究を十分に反映できず
 - 今後の課題生態学など多様な分野の近代性研究成果の反映の必要性
- 詳細な議論の不足
 - 天観・地観・人間観という広範な研究領域による細密な議論の限界
 - 今後の課題学際的研究を通じたより深度ある比較分析が必要
- 具体的事例提示の不足
 - 相関的思惟の自生的近代性が成功的に具現された具体的事例の紹介の不足
 - 今後の課題多様な適用事例と具体的研究モデルの開発をもって代案的近代性の実現方案を提示
- 今後の研究方向
 - 東学思想と大巡思想の現代的適用可能性の模索
 - 気候危機、核脅威など近代性の総体的危機に対応する代案的近代性モデルとしての実践方案研究